

# 教会への勧告

エレン・G・ホワイトの著書より精選訳

福音社

COUNSELS  
for the  
CHURCH

Selected from the Writings of  
Ellen G. White

Printed and Published by  
Japan Publishing House  
1966 Kamikawai-cho, Asahi-ku  
Yokohama, Japan

## まえがき

セブンスデー・アドベンチスト教会の働きが広く世界に拡張されるにつれて、諸外国の人々から証の書九巻およびその他多くの預言の霊の著書に対する要望がよせられた。実際問題として、特に経済的理由から、これは不可能なことである。しかし、この教会への勧告という二巻は、あらゆるエレン・G・ホワイト著書の中からの優れた抜粋であって、神の教会に大いなる実際の助けを与えるものと信ずる。

選ばれた資料は、便宜上、六十六章に分類されている。この分類は、預言の霊の著書の管理とその奨励の責任を負っているエレン・G・ホワイト著書刊行会によって行われた。

紙面が限られているために、教会生活とその活動に関する重要な点だけが取りあげられている。ある場合には、その資料が諸種の原書から、二、三パラグラフしか取り上げられていないことがある。そこで、各章の終わりに、抜粋が行われた書物名を略号で載せた。略字表を参照して、たやすく原書名をみつけることができる。

序文はエレン・G・ホワイト著書刊行委員会が書いたものである。ホワイト夫人が書かれたのは第一章からであって、この点混同のないようにしていただきたい。

本書をセブンスデー・アドベンチストの教会員に送り出すことに満足と喜びを感じている。本書の尊い勧告と教えが、読者のキリスト者経験をさらに深くし、間もなくおいでになる主、イエス・キリストを迎える準備の助けになることを心から祈っている。

セブンスデー・アドベンチスト世界総会

エレン・G・ホワイト著書刊行会



教会への勧告 上巻 目次

序・残りの教会と預言の霊の働き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

キリストに会うために準備する／キリストとサタンの大争闘の幻／光はどのようにして預言者に与えられたか／ホワイト夫人の生涯と働き／他の人々の知ったホワイト夫人／人々の生涯を変えたメッセージ／話すことができなかった幻／あかしと読者／真の預言者の実際的なテスト

第一編 信 仰

第一章 忠実な者の受ける報いの幻（わたしの最初の幻）・・・・・・・・・・・・・61

第二章 終わりの時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71

第三章 主に会う準備をしなさい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79

第四章 神の聖安息日の遵守・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85

「安息日を覚えよ」／日没礼拝／家族の最も神聖な時間／「さあ、われらは主を拝もう」／安息日

学校／「安息日に善を行うのは良い」／安息日に登校すること／世俗の仕事を休む日／安息日遵守

の祝福

第五章 神はあなたのなすべき働きを用意しておられる．．．．． 111

キリストの真の信者は彼のためにあかしする／家族一人一人のための場所／新しい地方に移転することによるあかし／宗教の実際的な表示

第六章 ここにわたしがあります。わたしをおつかわしてください．．．．． 127

あなたの才能が必要にこたえる／神は聖霊の賜物を授けたいと望まれる／遅らせることの危険／役者は教会員を訓練する

第七章 教会の出版物．．．．． 145

第八章 管理者の務めについての勧告．．．．． 151

「すべて、心から喜んでする（与える）者から」／十分の一献金は神によって制定された／神の同労者である特権／神は与える産物の十分の一を求められる／神は犠牲をささげる動機となった愛によってささげ物を評価される／財産の正しい処分／「富の増し加わるとき、これに心をかけてはならない」／神に対する契約は拘束力を持ち、神聖である／感謝献金は貧しい人々のために取って置く／われわれの財産と神の働きの支持／克己と犠牲の精神

第九章 キリストとの結合と兄弟愛．．．．． 179

キリストと結合し、互いに一致することがわれわれの唯一の安全である／調和と一致がわれわれの最も強い証言である／協力

第十章	われわれの義であるキリスト・・・・・・・・・・・・・・・・	189
第十一章	きよめられた生活・・・・・・・・・・・・・・・・	197
	きよめの真の証拠／ダニエル——きよめられた人生の模範／神は価値があると思う人々を試される／神に受け入れられたことの確証を求めている人々に対する勧告／感じだけでは、きよめのしるしではない	

## 第二編 教会

第一章	地上の教会・・・・・・・・・・・・・・・・	231
	天の教会と一致結合する／教会に授けられた権威／パウロは指導を受けるために教会へ導かれた／誤謬を流布する者への勧告	
第二章	教会組織・・・・・・・・・・・・・・・・	245
	預言者たちによって組織された教会／教会内の紛争に対処する／個人の判断を最高のものとする／危険／地方教会の役員選出と按手礼／教会の所有地／キャンプ・ミーティング／牧師は自分の説教を実行すべきである	
第三章	神の家・・・・・・・・・・・・・・・・	245
	神の家における祈りの態度／目に見える神のみ前にあるように行動する／子供たちが敬けんでなけ	

ればならないこと／神が思考の中心となっている服装

第四章	誤りに陥った者の取り扱い・・・・・・・・・・・・・・・・	257
-----	------------------------------	-----

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」／キリストの方法による教会での懲戒／教会の勧告を拒む人々に対する教会の義務／だれに告白をすべきか／キリストだけが人聞を裁くことができる

第五章	貧困や苦難に対するクリスチャンの態度・・・・・・・・	273
-----	----------------------------	-----

教会内の貧しい人々に対するわれわれの義務／貧しい人々を助ける方法／孤児の世話

第六章	全世界のクリスチャンはキリストにあつて一つとなる・・・・・・・・	283
-----	----------------------------------	-----

国籍に対するキリストの関係／一致をもたらす実例／一致結合には力がある

第七章	人格をそなえた神に対する信仰・・・・・・・・	295
-----	------------------------	-----

キリストの内に表された父なる神／神の子となる力を与えたもうキリスト／ご自分の子たちに対する神の個人的な関心

第八章	クリスチャンは神を代表すべきである・・・・・・・・	305
-----	---------------------------	-----

キリストのような品性の形成／今日を勇敢に生きる／私心のない生活によって神を表す／ゆるされない罪

第九章	教会へのあかし・・・・・・・・	316
-----	-----------------	-----



人々の注意を聖書に向ける／実によるあかしの評価／サタンのねらいは疑惑を起こさせることである／口実にはならないあかしに関する無知／あかしの間違った使い方／あかしを非難することの危険／譴責の受け方

第十章 聖書	333
--------	-----

勤勉にかつ組織的に学ぶ／読者に約束されている神からの光／聖書研究に対する愛好心は生来のものでない／聖書研究は知性を強める／全聖書中に示されているキリスト

第十一章 世にいるが世のものではない	345
--------------------	-----

クリスチャンの正直／信徒——実業におけるより誠実な人間／世と結ぶ実業の同盟

第十二章 聖霊	352
---------	-----

聖霊降下の前に一致がなければならない／聖霊に対する服従が人の有用性を定める／聖霊は終わるまでおられる

第十三章 祈禱会	360
----------	-----

公衆の場でする祈りは長くしてはならない／祈りの中でもっと賛美を／小さい事柄に神は関心を持たれる

第十四章 バプテスマ	368
------------	-----

志願者は十分に準備しなければならない／バプテスマのための子供たちの準備

第十五章 聖さん式	375
-----------	-----

しもべの中のしもべ／準備の儀式／キリストの再臨を思い出させるもの



## 〔序〕

# 残りの教会と預言の霊の働き

エレン・G・ホワイト著書刊行委員会

キリストに会うために準備する

すべてのセブンスデー・アドベンチストは、イエスが彼らのために用意しに行かれた美しい家郷へ、彼らを連れて行くために来られる時を切に待ち望んでいる。天にある、その家郷には、もはや罪も失望も、飢えも、貧しさも、病気も死もない。使徒ヨハネは、忠実な人々のために備えられている特権を瞑想した時、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか……わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうな

るのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている」（ヨハネ第一・三ノ一、二）と叫ばずにはいらなかった。

品性においてイエスのようになることが、彼の民に対する神の目的である。神にかたどって創造された人類が神のような品性を発育させるということを神は最初から計画されたのである。これを成就するために、エデンに居たわれわれの最初の両親は、キリストや天使たちと直接に顔を合わせて語り、彼らから教えを受けることになっていた。しかし、人間が罪を犯してから、も早このようにして天の实在者たちと自由に語ることができなくなった。

人間が指導を受けないで放置されることがないように、神はご自分の意志をご自分の民に示すための他の手段を選ばれたが、その中で顕著なものが預言者の仲介を通す方法である。すなわち、神が伝えることを望まれるそのメッセージを、神の民に伝える男女を通して、意志を示されるのである。イスラエル人に神は説明して「あなたがたのうちに、もし、預言者があるならば、主なるわたしは幻をもつて、これにわたしを知らせ、また夢をもつて、これと語るであろう」（民数記一一ノ六）と言われた。

神の民が、自分たちの生存している時代だけでなく、来たるべき時代についても知識を得て啓発され、良く知って理解することが神の目的である。「まことに主なる神はそのしもべであ

る預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」(アモス書三ノ七)。これが「光の子」(テサロニケ第一・五ノ五)である神の子たちと、この世の人びととの相違を生じさせるのである。

預言者の働きは、単に未来の預言をするよりも非常に多くの事を含む。聖書の中の六つの書を書いた神の預言者モーセは、未来に起こる事についてはまことにわずかしき書いていない。彼の働きをホセアは、更に広い意味で描写して「主はひとりの預言者によって、イスラエルをエジプトから導き出し、ひとりの預言者によってこれを守られた」(ホセア書一二ノ一三)と言っている。

預言者は他の人間によつて任命される者でもなく、又自分で定めてなる者でもない。預言者になる人間の選択は、人の心を見て知ることのできる唯一の神の手中にだけあるのである。神の民の歴史において、神のために語るよう男女いずれも神によつて折々に選ばれていたということは意義深い。

これらの預言者、すなわち伝達の通路として神に選ばれた、これらの男女は、神が神聖な幻によつて彼らに示されたことを語りまた書きしめたのである。神の尊い聖書は彼らのメッセージで構成されている。人間の魂を得るために戦われている争闘、すなわち、キリストと彼の

天使たちがサタンとその天使たちに対して戦っている争闘について理解するよう、これらの預言者たちを通して人類は教えられて来たのである。われわれは、終末時代におけるこの戦いについて、そして、みわざを保護し、主にお会いする日を待っている男女の品性を完成するため、に神が備えておられる方法について、理解するよう導かれている。

最後の聖書記者であった使徒たちは、終末時代の事件について明らかな描写をしている。パウロは「苦難の時代」について書き、ペテロは、自分の欲情のままに生活して「主の来臨の約束はどうなったのか」と言う、あざける者たちについて警告している。ヨハネはサタンが「残りの子らに対して戦いをいどむために出て行った」のを見た。この時代の教会は戦いの中にあるのである。

イエスの来臨に先立って、彼の民に特別な光と助けを与えようと神が計画しておられるのを、これらの聖書記者たちは見た。

パウロは、キリストの現れるのを期待して待っている教会    アドベント教会    は恵みの賜物にいささかも欠けることがないと述べている（コリント第一・一ノ七、八参照）。その教会には使徒があり、預言者があり、伝道者、牧師、教師たちがあるので、それは一致団結し、円熟し、良き指導と預言の霊の賜物をもって祝福される（エペソ四ノ一一参照）。

使徒ヨハネは終末時代の教会、すなわち「残りの教会」の教会員を「神の戒めを守る」人々（黙示録一二ノ一七）と見、従って、戒めを守る教会としている。この残りの教会はまたイエスのあかし、すなわち預言の霊（黙示録一九ノ一〇）を所有するのである。

ゆえに神の計画によって、セブンスデー・アドベンチスト教会 預言の教会 が、存在するようになった時、その中に預言の霊を持っていることは明らかである。幾世紀も昔、特に必要な場合に神がご自分の民に語られたのと同様に、世界の終末時代、戦いが激しくなり危険な時代に神がご自分の民に語られるということは、いかにも理に合ったことである。

ところで、この預言の教会 セブンスデー・アドベンチスト教会 が、預言によって指定されたその時期、すなわち、百有余年前に生まれた時、われわれの間に「神は神聖な幻によって私に示された」と言う声を聞いたのである。

それは高ぶったことばではなく、神のために語るように召された十七才の少女のことばであった。七十年間の忠実な奉仕を通して、その声が、われわれの間で指導し、矯正し、教育するのをわれわれは聞いた。そしてその声は、神に選ばれたメッセンジャー、E・G・ホワイト夫人の倦むことを知らない執筆によってわれわれに与えられた幾万ページにのぼる記事を通して、今日もなお聞こえているのである。

## キリストとサタンの大争闘の幻

一八五八年三月中旬のある日曜の午後、米国東部の村にあった小さい校舎が、集会に集まつて来た男女で満員になった。ジェームズ・ホワイト長老が一青年の葬儀を行い、告別の説教をしていた。説教が終わった時、ホワイト夫人は、悲しんでいた人々に一言語るべきだと感じた。彼女は立ち上がった。一、二分話して口をつぐんだ。人々は彼女の口から出る次のことばを聞き取ろうと見上げた。彼らは「栄光神にあれ」「栄光神にあれ」と次々に語勢を強めて三回くり返す叫びによって、いささか驚かされた。ホワイト夫人は幻を見ておられたのである。

ホワイト長老は、夫人に与えられた幻について人々に語り、彼女が十七才の若い女性の時から幻が与えられたことを説明した。彼女は目を開いて遠方の何かを見つめているかのように見えるが、周囲の状態については全然意識がなく、周囲に起こっている事について何も知らない。と彼は人々に言った。そして「神の言葉を聞く者、いと高き者の知識をもつ者、全能者の幻を見、倒れ伏して、目の開かれた」者について記されている民数記二四章四節と一六節を引用した。



彼は、彼女が幻の中にいる間は呼吸をしないことを説明し、ダニエル書一〇章一七節を開いて、幻の中にいる間のダニエルの経験を読んだ。「わたしは全く力を失い、息も止まるばかりです」と彼は言っている。それから、ホワイト長老は、希望者に前へ出て来て、夫人が幻を見ている間に、彼女を調べるよう招いた。彼は、いつでも、人々がどのように調べる自由を与え、また喜んで幻の中にいる彼女を調べるために医者を呼ぶこともゆるしたのである。

人々は、近くに寄って来た時、ホワイト夫人が呼吸をしていないのに心臓が正常に鼓動し続けており、頬も自然の色をしているのを見ることができた。鏡を持って来て彼女の顔の前に置いても、鏡に湿気がかからなかった。次にローソクを持って来て火をともし、鼻と口の近くに持っていたが、炎は垂直に立っていて少しもゆらがなかった。人々は彼女が呼吸をしていないことを知った。彼女は室内を歩き回り、彼女に示されている事柄について短かい感嘆詞を発しながら、しなやかに腕を動かした。ダニエルのように最初は自然の力を失い、次に超自然的な力が授けられた(ダニエル書一〇ノ七、八、一八、一九参照)。

二時間にわたって、ホワイト夫人は幻の中にあつた。二時間のあいだ一度も呼吸をしなかった。幻が終わると彼女は深く息を吸い、一分ほど待って再び呼吸をし、間もなく自然の呼吸にもどった。同時に周囲の状態に気付き始め、自分の周りに起こっている事を意識するようになる

った。

幻の中にいるホワイト夫人を何度も見たマーサ・アマドン夫人は次のように描写している。  
「幻の中にいる時、彼女の目は開いていた。呼吸はしていなかったが、肩や腕や手をしなやかに動かして、彼女が見ている事柄を表現していた。他の人はだれも彼女の手や腕を動かすことはできなかった。彼女は、単語を一言ずつ発することがよくあったが、また時には文章を語った。そして、それは彼女がながめている天か地の光景が、どんなものであるかを周りにいた人に表現するものであった。」

「幻の中での彼女の最初のことばは『栄光』であつて、最初は近くに聞こえるが、だんだん遠くの方に消えて行くようにひびいた。そして、これがくり返されることがあった……。」

「幻の間、そこに居合わせた人々の中に興奮はなく、恐怖心を起こさせるようなこともなかった。それは厳肅で静かな光景であつた……。」

「幻が終わつて天国の光が見えなくなった時、ちょうどこの地上に再び帰つて来るかのように、彼女は最初の自然の呼吸をしながら、長い溜息をついて『暗い』と叫ぶのである。そういう時彼女は力のぬけた無力状態であつた。」

ところで、校舎での二時間に及ぶ幻に話を戻さなければならぬ。この幻について、ホワイ

ト夫人は後に「キリストとサタンとの間に行われている各時代の斗争闘について、わたしが十年前に見た事柄の大部分が、再び見せられ、これを書き表すように命じられた」と書いている。

幻の中で光景が自分の前に現れる時、彼女は自分が、そこに居て見ているかのように感じた。

最初に彼女は天国にいるように感じ、ルシファアの罪と墮落を見た。次に世界の創造を見、エデンの家郷にいる、われわれの最初の先祖を見た。そして彼らがへびの誘惑に負けて、彼らの楽園の家庭から追放されるのを見たのである。またたくまに次々と、聖書の歴史が彼女の目の前を通り過ぎた。彼女は、イスラエルの父祖や預言者たちの経験を見た。そして、われわれの救い主イエス・キリストの生涯と死を目撃し、天に昇られるのを見た。その時以来彼はわれらの大祭司として奉仕しておられる。つづいて彼女は、弟子たちが地の果てまで福音のメッセジを広めるために出て行くのを見た。ところがその後、なんと早く背信と更に暗黒時代が起こったことであろう。それから彼女は、高潔な男女たちが生命を賭けて真理のために立った宗教改革を幻の中で見た。また一八四四年に天で始まった審判の光景から今日に至るまでの状態を見せられ、更に未来の光景へと導かれて、天の雲に乗って来られるキリストの来臨を見た。彼女はまた、千年期と新天地の光景を目撃した。

これらの鮮明な描写を見せられたホワイト夫人は、自宅に帰ってから、幻の中で見聞きした

ことを記述する仕事にかかった。約六か月後、『キリストと彼の天使たちとサタンと彼の天使たちとの間の大争闘』と題して二一九ページの小冊子が発行された。

この小冊子は教会が将来直面する経験を鮮明に描写し、サタンの計画と、地上の最後の戦いで教会と一般社会を迷わせるために彼がとる方法とを暴露したものであったので、熱狂的に受け入れられた。再臨信徒は神が、約束通りに、この終わりの時代において、預言の霊を通し、彼らに語っておられることを、どんなに感謝したことであろう。『預言の賜物』というこの小冊子に、非常に簡単に述べられた大争闘の記事は、後日、『初代文集』の後半に転載され、今日も、そこに見ることができる。

しかし、教会が成長し、時が経過するにつれ、主はその後の幻で、大争闘の物語を更に詳細に啓示されたので、ホワイト夫人は、一八七〇年から一八八四年の間に、『預言の霊』と名付けて、四巻の書物に書き改めた。『生き残る人びと』（原書名『贖いの物語』）という本には、これらの書物から引用した、大争闘の物語の特に重要な部分が載せられている。この書物は多くの国語で出版され、これらの幻で示された大争闘の物語を多くの人々に伝えているのである。その後ホワイト夫人は、『人類のあけぼの』『預言者と王』『各時代の希望』『使徒の働き』『大争闘』で構成されている「各時代の争闘シリーズ」の五冊によって、大争闘の全体を詳細

に紹介している。

聖書の記事に並行して、創造からキリスト教時代に及び、続いて終わりの時までの物語を書いた、これらの書物は、大きな光と励ましとを与える。これらは、セブンスデー・アドベンチストを「光の子ら」にし、「昼の子ら」にする助けとなる書物である。われわれは、この経験の中に、次の保証の成就を見るのである。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」(アモス書三ノ七)。

大争闘の物語全体にわたるこれらの書物の中で彼女が提示した光は、どのようにして与えられたかについて、ホワイト夫人はこう言っている。「長年つづけられている善と悪との争闘の場面は、聖霊の光によつて、本書の著者に示された。ときどきわたしは、生命の君であり、救いの創始者であるキリストと、悪の君であり、罪の創始者であり、神の聖なる律法を初めて破った者であるサタンとの間の、各時代の大争闘の経過を見せられた。」

「神の霊がわたしの心に、神のみことばの大いなる真理を開き、過去と未来の光景を示されたとき、わたしは、過去の争闘の歴史をたどるために、そして特に、急速に近づいている未来の争闘に照明を当てるために、自分にこのように示されたことを他の人々に知らせるよう命じられた。」

光はどのようにして預言者に与えられたか

われわれが既に見たように、イスラエル人の経験の中で、ある時主は、ご自分が預言者を通してどのように彼らに語られるかを告げてこう言われた。「あなたがたのうちに、もし、預言者があるならば、主なるわたしは幻をもつて、これにわたしを知らせ、また夢をもつて、これと語るであろう」（民数記一一ノ六）。

他の箇所で、われわれはある種の肉体现象を伴った大争闘の幻の話を読んだ。幻がどうして、このような方法で与えられたかを尋ねるのは当然であろう。疑いもなくそれは、人々の信頼を強め、主が真に預言者に語っておられることを、すべての人に確信させるためであつた。幻の中にいる時の自分の状態について、ホワイト夫人が詳しくふれた事はあまり無かつたが、ある時彼女は次のように言った。「これらのメッセージは、この終末時代にわれわれが預言の霊を信頼することができるよう、すべての者の信仰に確証を与えるため、このようにして与えられたのである。」

ホワイト夫人の働きが進展してからは、「あなたがたはその実によつて彼らを見わけるので

ある」というような聖書のテストで、試験をすることもできたが、実を結ぶためには時間がかかるので、主は最初に、幻を与える方法によって、人々が信じるために助けとなる証拠を、お与えになったのである。

しかし、すべての幻が著しい肉体现象を伴って、公衆の場で与えられたものではなかった。この章の初めに記した聖句に、神は「幻をもつて」預言者にご自身を知らせるだけでなく、「夢をもつてこれと語る」と言われている。これは預言の夢であって、ダニエルが言っているような夢である。「バビロンの王ベルシャザルの元年に、ダニエルは床にあって夢を見、また脳中に幻を得たので、彼はその夢をしるして、その事の大意を述べた」（ダニエル書七ノ一）。

ダニエルは彼に示された事を告げる時、数回にわたって「わたしは夜の幻のうちに見た」と言っている。ホワイト夫人の経験においても、幻は、しばしば夜間、彼女の精神が休息している時に与えられている。「夜の幻の中で、ある事柄が、わたしにはつきり示された」と言うような前置きのことを読むが、神は預言の夢の中で預言者に語られることがしばしばあったのである。預言の夢や夜の幻と普通の夢との関係について、質問が起こるかも知れないが、この事に関してホワイト夫人は一八六八年に次のように記している。

「神の霊が全然関与していない、生活上の一般の事から起こる夢がたくさんある。またサタ

ンの霊の感動によって起こる偽りの夢や幻もある。しかし主から与えられる夢は神のみことばの中で幻と同類のものとされている。そのような夢は、これを見る人と、それが与えられる時の事情を考慮に入れると、夢の真実さをそれ自身が証明する。」

ホワイト夫人の相当晩年において、ある時、彼女の息子W・C・ホワイト長老が、夫人をあまりよく知らない人々にとつて助けとなるような情報を与えるために、彼女に質問をした。「お母さん、あなたは、ある事柄が夜の間に示されたと、よく言われますね。光が与えられる夢についてお話になりますが、われわれも、みな夢を見ます。あなたがあれほどたびたび言われる夢の中で、神があなたにお語りになっておられる事を、どうやって知るのですか。」

彼女は答えて「それは、昼の幻の中でわたしのそばに立つて教えて下さる同じ天の使いが、夜の幻の時もわたしのそばに立つて教えて下さるからです」と言った。彼女の言っている天来の実在者は、時には「天使」と呼ばれ、また「わたしの案内者」とか、「わたしの教師」などと呼ばれている。

夜間に与えられた啓示について、預言者の考えには混乱も疑惑もなかった。なぜならば、それと関係している事情そのものが、その啓示が神から出た教えであることを明らかにしたからであった。



幻はまた時には、夫人がお祈りをしたり、話したり、書いたりしている時に与えられた。周囲の人々は、彼女が公衆の場で話したり、祈ったりしている場合、ことばが、少しの間途切れなければ、幻に気付かないのである。そこで彼女は、ある時こう書いている。「熱心に祈っているうちに、わたしは周囲のすべてに対して意識を失い、室内は光で充満し、わたしは世界總會のように見える集会へのメッセージを聞いていた。」

七〇年にわたる長い奉仕の生涯を通じて、ホワイト夫人に与えられた多くの幻の中で、最も長い幻は四時間も続き、最も短いものはほんの一瞬であつた。しかし三〇分内外のことが多かったが、すべての幻に適用できるような規準を言うことはできない。それはパウロが書いている通りだからである。

「神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られた」(ヘブル一ノ一)。

光は幻を通して預言者に与えられたが、預言者は幻の中にいる間に、これを記さなかった。その働きは機械的な仕事ではなかったのである。稀な場合を除いて、主は、語ることばそのものは、お与えにならなかった。また、天使が預言者の手を導いて正確なことばを記録させるということもなかった。幻によって啓発された知力をもつて、預言者は、メッセージを読んだり

聞いたりする聴衆に、光と教えを伝えることばを、語ったり書いたりしたのである。

預言者の知性がどのようにして啓発されたか、人々に与えなければならない知識や教訓を、どのようにして得たかを、われわれは問うかも知れない。幻を与える方法に、ただ一つの法則を定めることができないように、預言者が聖霊の感動によるメッセージを受ける方法に適用される、唯一の法則を定めることはできない。しかし、どの場合も、それは、預言者の知性に消すことのできない印象を与える経験であつた。われわれが見たり経験したりすることが、聞くことよりも、遙かに深い印象を心に残すように、預言者たちが、その中で事件の起こっているのを見ているかのように感じた啓示も、長く残る深い印象を彼らの心に与えた。

大争闘の幻について話した前の節で、歴史的な事件に関する知識をどのようにして得たかを告げる、彼女のことばを引用したが、また、ある時は光がどのようにして与えられたかについて説明して、幻の中での状態を彼女はこう語った。「わたしの注意は地上で起こっている光景に、たびたび向けられる。時には遠い将来に導かれて行って、何が起こるかを示される。そしてまた、過去に起こった事柄を、見せられる。」

このことばによつて、エレン・ホワイトが、あたかも目撃者のように、これらの事件の起こるのを見たことは確かである。それらが幻の中で、彼女の目前に再現され、彼女の頭脳に鮮明

な印象を与えたのであった。

またある時は、見せられている場面の中で、彼女が実際に役割を演じているかのようであつて、感じたり、見たり、聞いたり、また従つたりしているように思えたのである。しかしもちろん、現実はそのうちではなかつたのであるが、彼女の頭脳には、忘れることができないような印象が刻まれたのである。彼女の最初の幻がそういう性質のものであつた。

また、ある場合、ホワイト夫人は幻の中で、遠くの地方の集会や家庭や機関にいるように感じたが、そのような集会に出席している感じがあまりにも鮮明であつたので、夫人はいろいろな人の動作や語つたことばを詳細に告げることができるほどであつた。ある時、幻の中で夫人は、われわれの教派に属する一つの病院の院内見学につれて行かれ、各部屋を訪れて、起こっている事をすべて見ていているかのように感じた。この体験について記して「不まじめな話、くだらない冗談、無意味な笑いが耳に痛く響いた。……嫉妬心がほしいままにされているのを見、神の使いたちを赤面させるような、ねたみのことばや、不注意な話を聞いて、わたしは驚いた。」その後、同病院のもつと喜ばしい状態も示された。彼女は「祈りの声が聞こえて来る」部屋に案内された。「その声は、どんなにうれしく響いたことだろう。」現実のように感じられた病院の訪問と、各部や各部屋を案内してくれたように見える天使のことばとにもとづいて、教訓の

メッセーじが書かれた。

たびたび光が、非常に鮮明で象徴的な表示によって、夫人に与えられた。そのような表示が次の文章によって明らかに描写されているが、これは、危険な状態にあった指導的な教役者に送られた、個人的なメッセーじから取ったものである。

「ある時、あなたは馬に乗って旗を持った將軍として、わたしに示されました。一人の人が来て、あなたの手から『神の戒めとイエスの信仰』ということばを書いた旗を奪いました。そしてそれは地に踏みじられたのです。わたしは、あなたが人々に取り囲まれているのを見ましたが、その人たちは、あなたを世俗に結びつけていました。」

時にはまた、二つの異なった、あるいは方向の違った光景が夫人に示されることがあった。すなわち一つは、ある特定の計画や方針に従った場合に起こる事を示し、他の光景は他の計画や方針の結果を例証するものであった。このすぐれた例として、アメリカ西部のロマリンダに、健康食品工場の土地を定めた時のことがある。事務長と彼の同僚の人たちは、衛生病院の本館のすぐ近くに大きな建物を建設する計画であった。計画が進みつつあった時、ホワイト夫人は何百マイルも離れた彼女の家で、ある夜二つの幻を与えられた。その最初の幻について彼女はこう言っている。

「わたしは多くの食品が製造されている大きな建物を見せられた。また、小さい建物が何軒か製パン所の近所にあつた。わたしがそのそばに立っていた時、そこでしている働きについて口論している大きな声を聞いた。従業員の間で一致がなく、混乱状態を来たしていた。」

それから彼女は、悩んだ事務長が一致をもたらすために従業員を説得しようと努力しているのを見た。彼女はまた、患者たちがこの口論を洩れ聞きし、病院のこれほど近くの「この美しい土地に食品工場を設置したことを、残念がつて話している」のを見た。「その時一人の方がその場面に現れて、『これはすべて実物教訓として、あなたの前に見せられたのであつて、あなたが、特定の計画を実行する場合の結果を見ることができました』と言われた。」

それから場面が変わり、食品工場が「衛生病院の建物から離れた、鉄道線路の方に向かう道に」建っているのを見た。ここでは働きが神の計画に調和してつつましく運営されていた。その幻の後、数時間内に、ホワイト夫人はロマリンドにいた働き人たちに手紙を書いているが、これで、食品工場をどこに建てるかの問題は解決したのである。もし最初の計画が実行されていたなら、衛生病院のすぐ近くに大きな商業用の建築物が建つて、われわれは後年非常な困難をしたに相違ないのである。

このように、主のメッセンジャーは昼または夜の幻により、各種の方法で知識や教訓を受け

たことが理解できる。預言者は啓発された知力によつて語り、また記述して教訓や知識のメッセージを人々に伝えたのである。その場合、ホワイト夫人は主の霊によつて助けられたが、機械的な支配は受けなかった。メッセージを伝えるためのことばを選ぶのは、彼女の自由に任せられた。働きを始めた最初のころ、彼女は教会の雑誌にこう書いている。「わたしは自分の見解を記す場合、それを受ける時と同様に神の霊の助けに頼らなければならないが、わたしが見たことを説明するのに用いることばは、それが天使によつて語られたことばでない限り、わたし自身のことばである。天使が語ったことばは必ず引用符で囲んでいる。」

### ホワイト夫人の生涯と働き

エレン・G・ハーモンと彼女の双子の姉妹は、一八二七年十一月二十六日、合衆国の北東部にあるメイン州のゴーハムに生まれた。九才の時、エレンは軽率なクラスメイトによつて石を投げられるという事故に会った。顔面のひどい外傷で、ほとんど死にそうになり、衰弱した状態になつて学校教育を続けることができなかった。

十一才で心を神に捧げ、その後間もなく海で、しずめのバプテスマを受け、メソジスト教会

の会員として受け入れられている。彼女は家族の者たちと一緒に、メイン州のポートランドで開かれていた再臨信徒の集会に出席し、ウィリアム・ミラーとその同僚が教えていたキリスト再臨が近いという考え方を完全に受け入れ、確信をもって救い主の再び来られるのを待ち始めた。

一八四四年の十二月のある朝、他の四人の婦人たちと共に祈っているうちに、神の力が彼女の上に下った。彼女は、最初、地上の事に対して感覚を失い、それから神の都へ向かっている再臨信徒の旅と、忠実であった人々の報いを、象徴的な黙示の中で見たのである。おそれおのきながら、この十七才の少女は、この幻とその後の幻について、ポートランドにある同信の人々に語った。また機会があると、メイン州と近所の州の再臨信徒の団体に幻の話をした。

一八四六年の八月、エレン・ハーモンは、若いアドベンチストの牧師、ジェームズ・ホワイと結婚したが、一八八一年八月六日に彼が亡くなるまでの三十五年間、彼女の生涯は主人の生涯と密接に結び合っており、福音事業に奮闘努力した。彼らは合衆国中を広く旅行し、説教し、著述し、植物を植え、家を建て、組織を作り管理をした。

ホワイと長老夫妻と、その同労者たちが築いた土台が、どれほど広大で堅固であり、彼らがどれほど賢明に良く築いたかは、時と試練が証明した。彼らは安息日を守る再臨信徒の間で指

揮をとり、一八四九年と一八五〇年に出版事業を開始し、一八五〇年代の後期には健全な経済体系を持った教会組織を作った。そしてついに、一八六三年、セブンスデー・アドベンチストの世界総会が組織されるに至ったのである。六十年代の中ごろには医療事業の開始を見、七十年代の初期には教団の大教育事業が始まった。毎年天幕集会を持つ計画は、一八六八年に立てられ、一八七四年には、セブンスデー・アドベンチストが最初の外国伝道者をおくり出したのである。

すべてこれらの発展は、神がホワイト夫人を通して、この民に与えた多くの口頭または著述による勧告に指導されて行われた。

最初夫人が人々に語った方法は、大抵個人的な手紙の形式か、または、最初の定期刊行物であった「現代の真理」の記事を通してであった。一八五一年になって初めて、夫人は、「エレン・G・ホワイトのクリスチャン経験と幻の概略」と題して、六四ページに及ぶ最初の書物を発行したのである。

一八五五年から番号付きの一連のパンフレットが、それぞれ「教会のあかし」と題して、出版され始めた。これらは、神が折々に、彼の民を祝福し、譴責し、指導するためにおくことにされたメッセージを、人々の手に入るようにした。この指示に対する需要が相次いだため、



一八八五年には四冊にまとめた書物にして再発行された。そして、一八八九年から一九〇九年までに出版された他の巻を加えて、九巻一組の「教会へのあかし」を構成している。

ホワイト家には四人の子供が生まれた。長男のヘンリーは十六才まで生存し、末の息子ハーバートは生後三か月で死んだ。その間の二人の息子、エドソンとウィリアムは成人し、それぞれセブンスデー・アドベンチスト教団の働きに積極的に従事した。

世界総会の要求にこたえて、ホワイト夫人は、一八八五年の夏、ヨーロッパに行き、大陸に新たに開発された働きを強化するため、二年を費やした。スイスのバーゼルに住んで南、中、北欧と広く旅行し、教会の一般集会に出席し、彼らの集まりで信徒たちと知り合った。

合衆国に帰って四年を経た後、ホワイト夫人は六十三才で、世界総会の招請に応じ、オーストラリアへ出帆した。その地に九年間居住して、み事業の開拓と発展に助力したが、特に教育と医療の方面で助けた。夫人は一九〇〇年に帰国し、合衆国西部のカリフォルニアのセント・ヘレナに住居を持って、一九一五年に亡くなるまで、その地に住んだのである。

アメリカにおける六十年間と海外での十年間に及ぶ長い奉仕の生涯を通じて、ホワイト夫人は約二千の幻を与えられたが、それらが彼女の勤勉な努力によって、個人に、教会に、公共の集会に、または世界総会の会議に対する勧告となつて、この大運動の成長発展をもたらす主要

な原因となつたのである。神に与えられたメッセージを、すべての当事者たちに伝える仕事は、最後まで放棄されなかった。

彼女の著述は十万ページ以上に達している。彼女の書いたメッセージは、個人的な通信や、われわれの教団の雑誌に載せられた毎週の記事、または彼女の数多い著書を通して人々に届いた。取り扱われた問題は、聖書歴史、日常のクリスチャン経験、健康、教育、福音伝道、その他実際的な問題に関連したものである。四六冊に及ぶ彼女の書籍の中の何冊かは、世界の主要な国語で印刷されて無数に販売されている。

八十一才の時、夫人は一九〇九年の世界総会に出席するために北米大陸を横断したが、それが大陸を渡る最後となつた。彼女の六年間の余生は著述の完成に費やされた。生涯の終わりに近づいた時、夫人は次のことばを記した。「わたしの生命が助かつても助からなくても、わたしの書いたものが語り続けるであろう。そしてその働きは、時の続くかぎり前進する。」

不屈の勇氣と、贖い主に対する全き信頼を抱いて、一九一五年七月十六日、彼女は自宅で亡くなり、ミシガン州のバトルクリークにあるオークヒル墓地に、夫と子供たちの横に葬られた。

ホワイト夫人は、彼女の同労者や教会また家族の者たちから、献身的な母親、熱心で寛大で辛抱強い、敬虔な働き人として高く評価され、尊敬された。彼女は一度も公の教会役員になつたこ

とはなかった。彼女は、神が彼の民のためにおくられるメッセージの使者であることを、教会も彼女も承知していたのである。彼女は他の人々に、自分を頼りにするように言ったことはなく、また自分の賜物を利用して自分の経済状態を良くしたり人望を増したりすることは決してなかった。彼女の生涯と彼女の所有するすべてが、神の働きのために捧げられていたのである。

彼女の死に際し、一般の週刊誌『インディペンデント』の編集者が、一九一五年八月二十三日号で、彼女の实り多かった生涯についての論評を次のことばで結んでいる。「彼女は彼女の啓示に対して、全く真実な信仰を持っていた。彼女の生涯はそれにふさわしかった。彼女には霊的なごうまんさは見られなかったし、また不正な利を求めることはなかった。彼女は、りっぱな女預言者の生涯をおくり、その働きを果たした。」

亡くなる数年前に、ホワイ夫人は、教会の指導的な人々で構成された保管委員会を作り、彼女の著作の保護と、出版を継続する責任を負うように命じて、これを彼らにゆだねた。この委員会は、セブンスデー・アドベンチスト教会の世界本部である米国、ワシントンD・C.の世界総会に事務所を持って、E・G・ホワイトの著書が引き続き英語で出版されるように助成し、また他国語で全部あるいは一部が出版されるように奨励している。彼らはまた雑誌の記事や原稿を編纂したものを、数冊発行した。これはホワイ夫人の教えに合ったことである。本

書が発行されたのも、この委員会の認可によるのである。

### 他の人々の知ったホワイト夫人

主の使者としてのホワイト夫人の異例な経験を知って、ある人々は「彼女はどんな人でしたか」と尋ねた。彼女は、われわれと同じような問題を持っていたか、彼女は裕福であったか貧しかったか、ほほえんだ事があったか。

ホワイト夫人は思いやり深い母親であり、注意深い主婦であった。また温情のある女主人で、よく同信の人々を家庭でもてなした。彼女は助けになる隣人であり、信念の婦人であった。快活な性格で、態度と声がやさしかった。彼女の経験の中には、不機嫌でほほえみのない、喜びのない宗教の余地はなかった。人は彼女の前で、完全に気楽に感じた。おそらく、夫人を良く知る最上の方法は、彼女が毎日日誌をつけた最初の年である一八五九年に、彼女の家庭を訪れることかと思う。

ホワイト家の人々は、バトルクリークの町はずれの広い土地に建てられた、小さないなか家に住んでいたもので、畑を持ち、わずかの果樹を栽培し、一匹の牛と何羽かの鶏を飼い、男の子

たちのためには働いたり遊んだりする場所があった。この時、夫人は三十一才で、ホワイト長老は三十六才であって、家庭には四才と九才と十二才となる三人の男の子があった。

また家庭には家事を手伝うために雇われた、善良なクリスチャンの娘がいたが、それは夫人が、しばしば家を留守にしたり、講演や著述に多忙なことが多かったからであつた。それでも夫人が家庭の責任を負って、料理をしたり、掃除をしたり、洗たくや裁縫をしているのを見いだすことができる。何日かは、著述のために静かな場所のある印刷所に行くが、他の日には畑で草花や野菜を植え、時には近所の人たちと花の苗木を交換したりしている夫人を見いだす。彼女は、子供たちが、家庭を最も好ましい場所と、いつも考えるようにと、家族のために自分にできるかぎり家庭を楽しくする決心をしていたのである。

ホワイト夫人は注意深い買い物をする人であって、物の価値を知っていたから、アドベンチストの隣人たちは、彼女と一緒に買い物に行くことができるときには喜んだ。彼女の母は非常に实际的な女性であって、自分の娘たちに多くの貴重な教訓を教えていたのである。粗製品は良質の商品よりも、結局はずっと高価だということを彼女は知った。

安息日は、子供たちにとって、一週間中で最も楽しい日とされた。もちろん家族は教会の集会に出席するのが常であつたが、ホワイト長老夫妻に話をする責任がなければ、家族は礼拝中

一緒の場所に腰をかけた。昼食には、他の日に出ない特別なごちそうがあり、そして、もしも天気がよければ、ホワイト夫人は子供たちと林の中や、小川に沿って散歩し、彼らは自然の美しさを観察し、神の被造物について学ぶのであった。もし雨天であつたり、寒い日であれば、彼女は家で暖炉の周りに子供たちを集め、読んで聞かせるのであるが、それは彼女が旅行中、いろいろの所で得た話の材料から読むことが多かった。これらの話の中のあるものは、他の親たちが持っていて彼らの子女に読んで聞かせるために、後日、印刷して本にされた。

このころ、ホワイト夫人は健康がすぐれず、昼間たびたび失神したが、それは家事や主のための働きをすすめて行くことを彼女にあきらめさせなかった。数年後の一八六三年、彼女は健康と病人の世話に関する幻が与えられた。彼女は幻の中で、強い健康な身体を維持するために、着るべき適当な衣服、食べる食物、適当な運動と休息の必要性、また神に信頼することの重要性を示された。

食事と動物性食品の有害性に関する神からの光は、肉類が健康と体力になくはならないという夫人の個人的な考えを完全に否定するものであった。幻の光で照らされた知性をもって、食卓には穀類、野菜、堅果類、ミルク、クリームおよび卵で作った、健康的で単純な食物だけをのせるように、家族のための料理を手伝う女の子を彼女は教育した。果実は豊富に出された。

家族が食卓についた時には、健康的で良い食物が十分にあったが、肉類はなかった。夫人は肉に対しては空腹を感じたが、他の食物は欲しくなかった。自分が食卓に戻って単純な食物をおいしく食す事ができるまで、食卓を離れることを決心した。次の食事の時にも同じ経験をしたが、単純な食物は食べたいとは思わなかった。また次に彼らは食卓についた。そこには、健康と体力と成長のために最上であると幻の中で示された単純な食物が載っていた。しかし彼女は、食べ慣れた肉に対して空腹を感じた。それでも今では、肉が最上の食物でないことがわかっていたので、彼女は自分の胃の上に手を置いて、次のようなことを言ったら彼女は告げている。「おまえはパンを食べることができるようになるまで待ちなさい」と。

間もなく、夫人は単純な食物を、おいしく食すことができるようになり、食事の変化と共に健康は急速に増進して、その後の長い人生を通じ比較的良い健康を楽しんだのである。このようにホワイト夫人も、われわれが皆持つような問題を経験したことがわかる。われわれが皆勝利しなければならぬように、彼女も自分自身の経験によって、食欲に勝利しなければならなかった。健康改革は、世界中の幾千というアドベンチスト家族にとって、祝福であったように、ホワイト家にとっても大きな祝福であった。

健康改革の幻を受け、ホワイト家で病人の単純な治療法を採用してから、ホワイト長老夫妻

は、たびたび隣人の病気の時に呼ばれて、治療を施すのを助けるように求められたが、主は彼らの努力を大いに祝福された。ある場合には、病人が彼らの家に連れて来られて、完全に回復するまで、やさしく介抱された。

ホワイト夫人は、山であつても、どこかの湖水であつても、または海であつても、休養とレクリエーションの時を楽しんだ。彼女が中年のころ、米国西部にある、われわれの出版所、パシフィック・プレスに近くに住んでいた時、休息とレクリエーションのために、一日を費やそうという提案が出され、ホワイト夫人とその家族と事務所の従業員一同が、出版所の従業員一同に加わるよう招かれたが、彼女は喜んで、この招待を受け入れた。彼女の夫は教会の仕事で東部の方に行っていた。彼への手紙の中に、この経験に関する彼女の記事を見いだす。

海岸で健康的なお弁当を、おいしく食した後、全員がサンフランシスコ湾を船に乗って行くために出かけた。帆船の船長は教会員であり、それは気持ちの良い午後であつた。それから湾の外に出ようという提案がなされたが、夫人は、この経験について次のように詳しく書いている。

「波は高くなり、われわれは非常に雄大に、上へ下へと揺られた。わたしは大いに興奮を感じたが、なんと言つてよいかわからなかった。それは壮大であつた。水しぶきが、われわれの



上を激しく打った。ゴールデン・ゲートの外では風が強かったが、わたしは生涯で、これほど楽しんだことはなかった。」

その時彼女は、船長の注意深い目と、船員たちが彼の命令に従う機敏さを観察して深く考えたのである。

「神は彼の手中に風を握っておられる。彼は水を支配なさる。われわれは太平洋の広大な深い水の上の、ただ一点に過ぎない。しかし天使たちは、この小さな帆船が波の上を走る時に、これを保護するよう、つかわされるのである。ああ、神のすばらしいみわざよ、どんなに、われわれの理解を超越していることであろう、神は一目で最高の天と海の深淵とをごらんになる。」

ホワイト夫人は早くから快活な態度を身につけていた。ある時、彼女は尋ねて、こう言った。

「あなたは、わたしが今までに、憂うつであったり、失望したり、不平を言っているのを見たことがありますか。わたしは、そういうことを許さない信仰を持っているのです。こういう結果に至らせるのは、クリスチャンの品性や奉仕の真の理想を誤解しているからです。……イエスに対して心から喜んでする奉仕は明るい宗教を生みます。キリストにいちばん近く従って行く人々は憂うつではありませんでした。」

また、ある時記して「ある場合、快活はクリスチャン品性の威厳に相反するという考えが持

たれていたが、これは誤りである。天は全く喜びであふれている」と書いている。そして彼女は、人にほほえみかければ、ほほえみは自分に帰って来ることに、親切なことをかければ、親切なことが帰って来ることを発見したのである。

それでも彼女が非常に苦しんだ時もあった。オーストラリアの働きを助けるために行ってもなく、そういう経験をしたのである。彼女は、ほとんど一年間、重い病気にかかり、ひどく苦しんだ。多くの時間、ベッドにしばらく、夜わずかの時間しか眠ることができなかった。この経験について、夫人は友人への手紙に、こう書いている。

「最初わたしは、無力な状態になった自分を見た時、広い海を渡って来たことを深く後悔しました。なぜ自分はアメリカにいなかったのか、なぜ、あれほどの費用をかけて、この国に来ているのか。わたしは何回も、ふとんに顔をうずめて、思うぞんぶん泣くこともできました。しかし、わたしは、いつまでも、このぜいたくな涙にふけてはいませんでした。わたしは自分自身に向かって、こう言ったのです。『エレン・G・ホワイトよ、お前は一体どうしたというのか。お前は、お前が行くのがいちばん良いと世界総会が判断した所へ行くことが、自分の義務であると感じたから、オーストラリアに来たのではなかったのか。それがお前の習慣ではなかったのか』と。そしてわたしは『はい』と答えました。『それならば、なぜお前は、まる

で見捨てられたかのように感じて失望しているのか。これは敵の仕業ではないか。わたしは『そうだと思います』と答えました。

わたしは、できるかぎり早く涙を拭いて言いました。『もうたくさんだ。暗い面は、もう見ないことにしよう。どうなっても、わたしは、わたしのために死んで下さった方に、わたしの魂を、おゆだねする』と。その時、わたしは主がすべての事を良いようにして下さると信じ、身体の不自由な、あの八か月間、少しも失望落胆したり、疑ったりしませんでした。わたしは今、この経験を、この国にいる神の民とアメリカにいる人々のため、また、わたしの益のために立てられた、主の大きな計画の一部として見ております。なぜとか、どうしてもとか説明はできませんが、わたしは、それを信じるのです。そして、わたしは、なやみの中で幸いに思っています。わたしは天の父に信頼することができ、彼の愛を疑いません。』

生涯の最後の十五年間を、カリフォルニアにあった自分の家で生活していた時、彼女はだんだん年をとって行ったが、小さな農園の仕事や、彼女の働きを手伝った人々の家族の福祉のことに関心を示した。彼女は著述に忙しかったが、早く床につくので、夜半を過ぎると間もなく仕事を始めることがしばしばであった。天気の良い日であって、仕事の都合が許す時は、しばらく馬車で郊外を走り、通りすがりの家の庭やポーチで見かけた母親と話をするために、車を

とめるのが習慣であつた。時には食物や衣類の必要なことがわかると、家に帰つて、自分の家にあるものの中から何かを持って行つた。彼女の死後何年もたつて後、彼女が住んでいた村の隣人たちは、彼女を、イエス様の事をいつも愛情こめて話していた小柄な白髪の婦人、として憶えていた。

彼女が亡くなつた時、生活の必需品と生活を楽にするための基本的な物以外には、ほとんど何もなかった。彼女は他の人々に、自分を模範として見るようには求めなかった。それは彼女が、単にわれわれセブンスデー・アドベンチストの中の一人であつて、よみがえられた彼女の主の功績に頼り、主にゆだねられた働きを果たそうと、忠実に努力していたからである。このように心に確信をもつて、クリスチャン経験の終始一貫した生涯を満たして人生を終えたのであつた。

### 人々の生涯を変えたメッセージ

一人の伝道者が、ミシガン州のブッシネルで連続講演会を持ったが、バプテスマを施した後、間もなく、信者たちにメッセージの基礎をよく教えないで去つた。人々は徐々に失望していっ

て、ある人たちは、以前の悪習慣に戻りはじめた。ついに、教会が、あまり少人数になったので、残った十人か十二人の会員は、これ以上継続することはむだであると決断した。最後の集会であると思った集会を彼らが解散した直後に、郵便物が届き、手紙の中に「レビュー・アンド・ヘラルド」誌があつた。その巡回欄に、ホワイト長老夫妻が、一八六七年七月二十日に集会を持つため、ブツシネルに来るという予告が載っていたのである。これは、たった一週間先のことであつた。家路にあつた人々を呼び戻すために、子供たちがつかわされた。だれかが林の中に場所を用意して、全員で隣人たち、特に背信した教会員たちを招待すべきだということに決まった。

七月二十日の安息日の朝、ホワイト長老夫妻は六十人が集まった林に着いた。ホワイト長老が午前中、話をし、午後になって夫人は話をするために立ち上がったが、聖句を朗読した後、困惑している様子であつた。それ以上注釈を加えずに聖書を閉じて、非常に個人的な話し方で、彼らに語り始めたのである。

「わたしは今日の午後、みなさんの前に立っているのですが、二年前に幻の中で、わたしに示された方たちのお顔をながめているのです。みなさんのお顔を、じっと見てみると、あなたがたの経験が、はっきりと、わたしの脳裏によみがえって来ます。そして、わたしは主から、

あなたがたに対するメッセージを持っております。

向こうの松の木の下に、あの兄弟がいます。わたしはあなたに紹介されていないから、あなたの名前を呼ぶことはできませんが、あなたのお顔は、よく知っていて、あなたの経験が、はつきりと浮かび出て来るのです。」それから彼女は、この兄弟に彼の背信状態について話し、彼に、立ち返って神の民と共に歩むよう励ました。

次に会衆の中の他の場所にいた一人の姉妹の方を向いて、「グリーンビル教会のメーナード姉妹の横に腰掛けておられる姉妹、わたしは、あなたのお名前を聞かされていないので、名を呼ぶことはできませんが、二年前に、あなたのことが幻で、わたしに示されましたから、わたしはあなたの経験を良く知っています。」と言って、ホワイト夫人は、この姉妹に励ましを与えた。

「それから、あちらの檜の木の下に、あの兄弟がいます。わたしは、まだお会いしたことがなかったので名前を指して呼ぶことはできませんが、あなたのことも、わたしには、はつきりわかっています。」そして彼女は、この兄弟について語って、その場にいたすべての人に彼の心の奥にある考えを明らかに示し、彼の経験を告げたのであった。

こうして彼女は、次々に、会衆一人一人に二年前に幻で示された事を告げていった。ホワイ

ト夫人は、戒めることばだけでなく励ましのことばを語って、説教を終わり、席についた。すると会衆の中の一人が立ち上がって「わたしは、この午後、ホワイト姉妹がわたしたちに言われたことが真実か、どうかを知りたいと思います。ホワイト長老夫妻は以前ここに來られたことがありません。われわれを全然知っておられないのです。ホワイト姉妹は、われわれのうちで大抵の者の名前さえごぞんじなのに、今日の午後來られて、二年前に幻が与えられ、その中でわれわれのことが示されたと言われます。そして一人ずつ個人に対して話をされ、ここにいるすべての者に、われわれの生活の仕方や、心の奥にある考えを言い表されるのですが、これらはみななどの人の場合も、ほんとうでしょうか。姉妹が何かまちがったことを言われなかったか、わたしは知りたいと思います」と言った。

人々は次々に立ち上がった。松の木の方にいた人が立って、自分が説明できる以上に、ホワイト姉妹は彼のことをよく説明したと言った。彼は自分の不従順な行動を告白し、立ち返って神の民と共に歩む決意を表明した。グリーンビル教会のメーナード姉妹の横に腰掛けていた姉妹もあかしをした。彼女も、ホワイト姉妹が、彼女の経験を自分で話すよりもよく話されたと言った。榎の木のそばにいた男の人で、ホワイト姉妹が、譴責と励ましのことばを与えた人も、ホワイト姉妹は彼のことを、彼が説明できる以上に、よく説明したと言った。人々は告白し、

罪を捨てた。神の霊が下ってブッシネルにリバイバルが起こったのである。

ホワイト長老夫妻は、次の安息日に再び来て、バプテスマ式が行われ、ブッシネルの教会は確立して生き長らえた。

主は彼に頼る、すべての者を愛するように、ブッシネルにいる彼の民を愛されたのである。『すべてわたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になつて悔い改めなさい』（黙示録三ノ一九）の聖句が、そこにいた何人かの人々の思いに浮かんだに相違ない。人々は、自分自身の心を、主がごらんになった通りに見た時、その真の状態を悟り、自分の生涯に変化を切望したのである。これが、ホワイト夫人に与えられた多くの幻の、真の目的であつた。

ホワイト長老の死後、間もなく夫人は、ヒルズバーク・カレッジの近くに住んでいた。数人の若い女の子たちが彼女の家に住み、そこから学校に通っていた。そのころ、頭髮が一日中乱れないように、簡単なネットを髪の上からかぶる習慣があつた。ある日、夫人の部屋を通つたとき一人の娘が、きれいにできたヘアネットを見て、欲しくなり、それがなくなつても不自由はされないであろうと思つて、それを盗んで自分のトランクの一ばん上に入れた。少し後で、ホワイト夫人は外出するために服装を整えていたが、ヘアネットが見当たらず、ネットなしで



出掛けなければならなかった。夕方家族が集まった時、夫人は見失った自分のネットについて質問したが、だれも、その在り場所を知っているような様子を示さなかった。

一、二日過ぎて、ホワイト夫人が、その娘の部屋を通った時、「あのトランクを開けなさい」という声が聞こえた。トランクは彼女のものではなかったから、夫人は開きたくなかった。しかし二度目の命令で、それが天使の声であることに気付いた。彼女がふたを開けると、そこにネットがあつたので、天使の語った理由がわかった。家族が再び集まった時、夫人は、それがひとりで消えてしまうはずがないと言って、ネットに関し、もう一度質問したが、だれ一人進んで答える者はなかった。夫人はその問題について言うことをやめた。

数日後、夫人が書く手を休めていた時、非常に短い幻が与えられた。彼女は一人の娘の手がヘアネットを石油ランプの中に入れるのを見たのである。ネットは炎に触れると、パツと燃えてなくなってしまった。そしてそれが幻の終わりであった。

家族が次に集まった時、ホワイト夫人は再びヘアネットがなくなった問題を追及したが、やはり告白する者もなく、だれもその在り場所を知らないようであった。それから少したって、夫人は、この若い女性を呼んで、あの声のことやトランクの中で見たものについて話した。また、ヘアネットがランプの上で燃えるのを見た非常に短い幻について話したのであった。これ

だけのことを知らされて、娘はネットを盗んだことと、見つかるのを恐れてそれを燃やしたことを告白した。彼女は、ホワイト夫人と主に対して、とるべき行動をとって、ゆるしを得たのである。

これは、主が気にかけるにとしては、あまりに小さな問題 単に一枚のヘアネットだと思いかも知れないが、それは盗まれた物の価値よりも、はるかに大きな重要性を持った問題であったのである。すなわち、ここにセブンスデー・アドベンチスト教会の会員である若い婦人がいた。自分は何も悪いところがないと思っていて、彼女自身の品性に欠陥のあることに気付かなかった。盗んだり人をだましたりさせる自己中心さを、そこに見なかったのである。しかし、神が、ただ一枚のヘアネットについて、この地上にいる忙しい彼のメッセンジャーに幻を与えられるほど、小さな事柄がどんなに重要であるかを認識した時、この若い婦人は、事物を正しく見始めたのである。この経験は、彼女の人生の転換期となって、彼女は美しい堅実なクリスチャン生涯をおくった。

これがホワイト夫人に幻の与えられた理由であった。夫人によって書かれたあかしの多くは、非常に特定の場合に当てはまるものであったが、それらはまた、世界各国にある教会の必要を満たす原則を提供している。ホワイト夫人は、あかしの目的と立場を、次のようなことばで明

らかにしている。

「書かれたあかしは、新しい光を与えるためではなく、靈感によって既に示されている真理を、心にはつきりと印象づけるためである。神と人に対する義務が、何であるかは、神のみことばの中に明細に述べられている。しかし与えられている光に従順な人は、あなたがたの中で少ない。真理が追加されて与えられているのではなく、既に与えられている偉大な真理を、神があかしによってわかりやすくされたのである。∴あかしは神のみことばを軽視するものではなく、かえって、これを高め、真理の美しい単純さが、すべての人を感動させるよう、人の心を見ことばに引きつけるためのものである。」

生涯を通じてホワイト夫人は、聖書を人々の前に示しつづけた。彼女の最初の著書を、彼女は次の思想で閉じている。

「愛する読者方よ、わたしは、あなたの信仰と行動の規準として神のことばを推薦します。そのみことばによって、われわれは裁かれるのです。神は、みことばの中で『終わりの時代』には幻を与えると約束をされましたが、信仰の新しい規準のためではなく、彼の民を慰め、聖書の真理からそれる人々を修正するためです。」

話すことができなかった幻

一八九〇年十一月、ニューヨーク州にあるサラマンカで連続集会があつた時、ホワイト夫人は、その中で大会衆に何回か講演をしたが、その町に来る旅行中に、ひどいかぜを引いたので、相当衰弱をしてしまった。ある集会の後で彼女は失望し、気分も悪いまま、自分の部屋に向かった。彼女は、神の前に自分の心を、そそぎ出して、哀れみと健康と体力を、懇願しようと思つていたのであつた。彼女はイスのそばにひざまずいたが、何が起つたかを彼女自身のことばで告げて、次のように言っている。

「わたしが一言も言わないうちに、部屋の中が柔らかない銀色の光で充滿したように感じた。そして、わたしの失望落胆による苦痛は除かれた。わたしは、慰めと希望      キリストの平安で満たされた。」

それから彼女に幻が与えられたが、幻の後は、睡眠を取りたいとも、休息をとりたいとも思わなかった。彼女は癒され、元気を回復していたのである。

翌朝は決定したことを言わなければならなかった。次の集会を開く場所にそのまま行けるの

か、またはバトルクリークにある自宅に帰らなければならないのか、であった。働きの責任者であった、A・T・ロビンソン長老とホワイト夫人の息子のウィリアム・ホワイト長老が、彼女の返事を聞くために夫人の部屋を訪れたが、彼らは彼女が服を着て、元気になっているのを発見した。彼女はいつでも出掛けられる状態であった。そして癒されたことを話し、幻の話をして「昨夜わたしに示されたことを、あなた方にお伝えしたいと思います。幻の中で、わたしはバトルクリークにいるように感じましたが、天使のメッセンジャーは、わたしに『ついて来なさい』と言いました」と言って、彼女は、そこで、黙ってしまった。幻を思い出すことができなかつたのである。二度話そうとしたが、思い出せなかつた。後日彼女は見せられたことを記述したが、それは、「アメリカン・センチネル」と呼ばれた、われわれの宗教自由の機関誌について立てられた計画のことであった。

「夜間わたしは、いくつかの会議に出席し、そこでわたしは、有力な人々が、もし『アメリカン・センチネル』がその欄から、セブンスデー・アドベンチストということばを除き、安息日について何も言わなければ、社会の有力者たちがこれを支援し、それは人気を得るようになって、もっと大きい働きをするに相違ない、という意味のことばを、くりかえしているのを聞いた。これは非常に気に入ったようであった。」

「わたしは、彼らの顔が輝くのを見た。そして彼らは『センチネル』が大衆に喜ばれて成功するような政策を練りはじめた。すべてが、頭脳と心の中に真理が欠けていた人々によって提起されたのである。」

彼女が、この機関誌の編集方針を討議しているグループの人々を見たことは明らかである。

一八九一年三月に世界総会が開かれた時、ホワイト夫人は、毎朝五時半に教役者たちに話をし、安息日の午後は四千人の全総会出席者に対して説教をするよう頼まれた。安息日の午後のために彼女の選んだ聖句は、「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」であつた。説教全体がセブンスデー・アドベンチストに、彼らの信仰の特色をかかげるようにとの訴えであつた。集会の間に三回、彼女はサラマンカの幻について言い始めたが、その度に抑えられた。幻の事件が、ただ彼女の脳裏から去ってしまうのであつた。そこで彼女は、「これについては後日もお話しします」と言つて一時間ほどで説教をまとめ、じょうずに話を終了し、集会は解散した。みんなは彼女が幻を思い出せなかったことに気付いていた。

世界総会の総理が彼女の所に来て、翌朝の集会におすすめをして下さるかを尋ねたが、彼女は「いいえ、わたしは疲れています、わたしのあかしはいたしました。明朝の集会のためには

他の計画を立ててください」と答えた。他の計画が立てられた。

夫人は家に帰った時、家族の者たちに、翌朝の集会には出席しないことを告げた。疲れていたので、ゆっくり休むつもりであった。日曜の朝は寝ぼうするつもりで、それに応じた計画が立てられた。

その夜、総会の会議が終わった後で、少数の男子のグループがレビュー・アンド・ヘラルド社の中の一つの事務所に集まった。その集まりには、「アメリカン・センチネル」を発行した出版所の代表者たちが出席しており、また宗教自由協会の代表者たちも出席していた。彼らは、きわめてやっかいな問題、すなわち「アメリカン・センチネル」の編集方針を討議して、決定するために集まったのであった。ドアは鍵がかけられ、問題が解決するまでは、ドアを開けないということに全員が同意した。

宗教自由部の人々は、パシフィック・プレスが自分たちの要求を入れて、雑誌の欄から「セブンスデー・アドベンチスト」と「安息日」ということばを除かなければ、もはや宗教自由協会の機関誌としてそれを使用しないと主張して、日曜の朝の三時少し前に、集まりは全く行き詰まってしまった。彼らの主張を通すことは、雑誌を殺すことであつた。彼らはドアの鍵を開けて、それぞれの部屋に帰りベッドに入って眠った。

しかし、まどろむこともなく眠ることもない神は、彼の天使のメッセンジャーを、その朝の三時にエレン・ホワイトの部屋につかわされたのである。彼女は眠りからさまされ、五時半に教役者の集会に行つて、サラマンカで彼女に示されたことを、そこで話さなければならぬと教えられた。彼女は身仕度をととのえて、事務用の机の所に行き、サラマンカで見せられたことを記録しておいた日誌を、そこから取り出した。その光景を、はつきり思い出しながら、彼女はそれに書き足していった。

ホワイト夫人が一束の原稿をかかえて、戸口のところに入つて来た時、天幕の中では、ちょうど祈りが終わつて、牧師たちが立ち上がるころであつた。世界総会の総理が説教者であつたが、彼女にあいさつをして「ホワイト姉妹、よくいらつしゃいました。われわれのためにメッセージをお持ちですか」と言つた。彼女は「はい、確かに」と答えて、前に進んだ。そして前日やめたところから早速話を始め、その朝三時に眠りから覚まされて、五時半に教役者の集まりに行き、サラマンカで彼女に見せられたことを話すように命じられたことを彼らに告げた。

「幻の中で、わたしはバトルクリークにいるように思いました。わたしはレビュー・アンド・ヘラルドの事務所に連れて行かれましたが、天使のメッセンジャーは、『わたしについて来なさい』と命じました。わたしは一団の人々が問題を熱心に討議している部屋に連れて行かれ



ました。そこでは熱意が表れていましたが、それは知識に基づいてはいませんでした」と彼女は言った。彼らが、どのように「アメリカン・センチネル」の編集方針について討議していたかを彼女は告げて、言った。「わたしは、その中の一人が、一冊の『センチネル』をとって彼の頭の上の方に高く上げ、『安息日と再臨の記事が、この雑誌から除かれなければ、われわれは、もう宗教自由協会の機関誌としてこれを使用することはできない』と言っているのを見ました。」エレン・ホワイトは一時間、話をして、何か月も前に幻で彼女に見せられた集会を描写し、その啓示に基づいて勧告を与え、終わって席についた。

世界総会の総理は、どう考えてよいのかわからなかった。彼は、そのような集会のことは聞いたことがなかった。しかし彼らは説明を聞くのに、あまり長くは待たなかった。なぜなら部屋の後方で、一人の人が立って話し始めたからである。

「わたしは、昨夜その集まりに出席していました。」

「昨夜！」ホワイ特夫人は言った。「昨夜ですか？わたしは、それが幻でわたしに見せられた時である何か月も前にその集会は持たれたのだと思いました。」

「わたしは昨夜その会に出席していました。そして、機関誌を頭の上の方に高く持って、その記事について意見を述べていた人間は、わたしです。申しわけありませんが、わたしは、ま

ちがった側にいました。わたしは、この機会に自分を正しい側におきます」と言って、彼は座った。

もう一人の男の人も話をするために立った。彼は宗教自由協会の会長であつた。彼のことに注意していただきたい。「昨夜わたしは総会の終わった後で、その会合に出席していました。

われわれ何人かがレビューの事務所のわたしの部屋に集まり、鍵をかけて閉じこもり、今朝われわれに話された問題を取りあげて討議したのです。われわれは今朝三時まで、その部屋におりました。そこで起こつたことや、その部屋にいた人たちの個人個人の態度をたとえわたしが描写してみても、ホワイト姉妹によつて言われたほど、正確に、誤りなく、語ることはできません。今わたしは、自分が誤つていたこと、わたしのとつた態度が正しくなかつたことを悟ります。今朝与えられた光によつて、わたしは、自分がまちがつていたことを認めます。」

他の人々も、その日、話した。前の晩その集まりにいた者は皆、立ち上がつてあかしをし、エレン・ホワイトが、その集会と部屋にいた人々の態度を正確に描写したと言つた。その日曜日の朝、その集会が終わる前に、宗教自由部のグループが召集され、つい五時間前にとつた決議を撤回したのである。

もしもホワイト夫人が安息日の午後、抑制されずに幻の話をしていたならば、その集まりは

まだ持たれていなかったのであるから、彼女のメッセージは神の計画された目的を果たさなかったであろう。

いずれにしても、その人々は、安息日の午後に与えられた、一般的な勧告を適用しなかったのである。そんなことは言われなくてもわかっていて彼らは思った。あるいは、今日ある人が考えるように、「ホワイト夫人は、多分理解していなかったであろう」とか「われわれは今、ちがった時代に生きているのだ」とか言ったかも知れないし、「そんな勧告は何年も前には当てはまっても、今日には合わない」と考えたかも知れない。今日の時代、サタンが、われわれにささやく思いは、一八九一年に、この人々を誘惑したのと同じである。神は、彼ご自身の定めた時に彼ご自身の方法で、それが神の事業であることを明らかにされた。彼は導いておられ、守っておられたのである。彼は舵を握っておられた。神は「しばしば事柄が危機に直面することをお許しになったが、それは彼のみ手のわざが目立つためである。そうする時に、イスラエルには神がおられることが明らかにされるからである。」

あかしと読者

七十年間、エレン・G・ホワイトは、神が彼女に示された事を語り、また記した。多くの場合、聖書の真理からそれた人々を、正しく直すために勧告が与えられた。それらは、神が彼ら民に、とらせたいと望まれる進路を指摘することが多かった。時には、あかしは生活の仕方を取り扱い、家庭や教会のことを取り扱った。教会員は、どのように、これらのメッセージを受け入れたであろうか。

彼女が働きを始めた最初から、責任を持った指導者たちは、預言の賜物の現れが、本物であることを確信するために、彼女の働きを調べた。使徒パウロは「預言を軽んじてはならない。すべてのものを識別して、良いものを守り」（テサロニケ第一・五ノ二、一二）と忠告している。聖書が示している預言者のテストでホワイト夫人の働きが試験されたが、これは彼女の望むところであった。なぜならば彼女は、こう書いている。

「この働きは神からのものであるか、または、そうでないかのどちらかである。神は、サタンと共同で何もなさらない。過去三十年間のわたしの働きは、神の印が押されているか、さも

なければ敵の印が押されているかである。このことでは中間的な働きはない。」

聖書は預言者を試験する四つのテストを示しているが、ホワイต์夫人の働きは、そのすべてのテストに耐えるものである。

一、真の預言者のメッセージは、神の律法と他の預言者たちのメッセージと調和しなければならぬ（イザヤ書八ノ二〇参照）。

E・G・ホワイットの著述は、神の律法を高め、男女を全聖書へ常に導く。彼女は、聖書を、信仰と行動の規準として、また、「小さい光」である彼女の著書が、これを読むすべての者を導いて連れて行く大きな光として、指し示している。

二、真の預言者の預言は実現しなければならない（エレミヤ書二八ノ九参照）。

ホワイット夫人の働きは、人々を案内し、指導したモーセの働きに、よく似ていたが、また将来起こる多くの事件について、預言的に記述をした。一八四八年、われわれの出版事業の最初に、それがどのように進展して、世界を光で包むかということをお話される。今日、セブンスデー・アドベンチストは、二百の国語で、一年に二千万ドル以上の文書を出版している。

一八九〇年、もはや戦争はなくなり、千年期の朝が明けようとしていると、世界が宣言した時、エレン・ホワイットは「嵐が近づいているから、その猛威に対して、われわれは準備しなけ

ればならない。……至る所に苦難を見るであろう。幾千もの船舶が海底に撃沈されるであろう。海軍は海に沈み、人命が幾百万も犠牲になる」と書いた。これは第一次、第二次世界大戦によって成就したのである。

三、真の預言者は、イエス・キリストが肉体をとって来られたこと、神が人間の肉体をとられたことを告白する（ヨハネ第一・四ノ二参照）。

「各時代の希望」を読むと、エレン・G・ホワイトの働きは、この標準にかなうことが明らかにわかる。次のことばに注意していただきたい。

「イエスは天父のそばにとどまることもおできになった。イエスは天の栄光を保ち、天使たちから、あがめられていることもおできになった。だがイエスは、暗黒のうちにある者に光を与え、滅びる者にいのちを与えるために、王権を天父のみ手にかえし、宇宙の王座からおりることを望まれた。」

「およそ二千年前に、『見よ、わたしはまいりました』という神秘的な意味のことばが、天で神のみ座から出るのがきかれた。『あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えて下さった。……神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました』（ヘブル一〇ノ五七）。このことばのうちに永遠

の昔からかくされていたみこころの成就が告げられている。キリストは人の肉体をとって、この地上においでになろうとしていた。∴キリストは、世の人の目から見れば、慕うべき美しさをもっておられなかった。しかしキリストは、人の肉体をとられた神、天と地の光であった。キリストが、悲嘆にくれ、誘惑されている人間に近づくことができるように、その栄光はおおわれ、その偉大さと威光はかくされた。」

四、真の預言者のいちばん決定的なテストは、おそらく、その生活と働き、そして彼の教えの影響にあるが、キリストは、マタイ七章十五、十六節に「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう」ということばによって、このテストを表現されたのである。

エレン・G・ホワイトの生涯をしらべて見る時、彼女は自分の教えていることと調和し、預言者としての期待にかなった、称賛に値するクリスチャン生涯をおくったと言わざるを得ない。預言の霊の勧告に従った人々の生涯に現れた結果を見る時、われわれは、それが良い実であることがわかる。あかしは良い実を結んだ。また教会を見て、われわれがこれらの勧告によって各方面の活動へと導かれてきたことを知る時、ホワイト夫人の働きがこの標準に合っていることを認めなければならない。七十年間を通して記された教えの一貫性もまた、賜物の完全さを証明している。

## 真の預言者の実際的なテスト

聖書が示している、これらの四大テストに加えて、主は、その働きが彼の指示によるものであることを明らかにする証拠を与えておられる。

一、メッセージが時機を得ていること。神の民が何か特別な必要に直面している時、メッセージはその必要を満たすため、最も適した時に与えられるのである。夫人に与えられた最初の幻がそうであった。

二、メッセージの実用的な性格。幻によって夫人に示された知識は実用的な価値のあるものであって、実際の必要にこたえるものであった。あかしの勧告が、われわれの日常生活に、実際的な面でどのように関与しているかを見ていただきたい。

三、メッセージの高度な霊的水準。それは子供じみた問題や、通俗的な問題を扱うのではなく、壮大で、崇高なテーマを取り扱っている。言葉そのものが卓越している。

四、幻の与えられ方。幻の多くは、序論の始めの方で説明したように、肉体的な現象を伴った。幻の時のホワイト夫人の経験は、聖書の預言者たちの経験に似ていた。これは試金石では



ないが、他の証拠の中の一つの証拠となる。

五、幻は明確な経験であつて、単なる印象ではなかった。幻の中で、夫人は見、聞き、感じ、そして天使たちから教えを受けた。幻が興奮や想像によるものであったと言うことはできない。

六、夫人は周囲の人々によつて影響されなかった。彼女は一人の人に「あなたは、ある人たちが、わたしに偏見をいだかせたと思つておられるが、もしもわたしが、そういう状態であつたら、神の働きをゆだねられるのに不適當です」と書いておられる。

七、彼女の働きは、同時代の人々によつて認められていた。ホワイト夫人と一緒に生活し、働いた、教会内の人々も、また教会外の多くの人たちも、夫人を、本当に「主のメッセンジャー」と認めた。夫人に最も近かつた人々が、彼女の天来の召しと働きに、最大の信頼をよせていたのである。

神の民が、メッセージとメッセンジャーに信頼することができるよう、主がお与えになつた、これら四つの聖書のテストと明らかな証拠は、その働きが神のものであつて、絶対の信頼に価するものであることをわれわれに保証している。

E. G. ホワイトの多くの著書は、教会にとつて永続的な価値のある勧告と教訓で満ちている。それらのあかしが一般的な性格のものであつても、または家族や人々に対する個人的なあ

かしであつたにしても、それらは今日のわれわれに役立つものである。この点に関して、ホワイト夫人は、このように言っている。

「個人のことに對するあかしの中に与えられている、警告や教訓は、そのように特別指摘されなかつた他の多くの人々にも、同等の影響をもつて適用されたので、わたしは教会の益のために、個人的なあかしを出版することを義務のように感じた。∴神を愛して、その戒めを守るすべての者の、一般的な危険や誤りや義務に関して、わたしの見解を示すためには、これらのあかしを提供する以上に良い方法がないことを、わたしは知っている。」

同信の兄弟を非難する根拠になるような点を発見するために、あかしを読むことは、その誤用である。あかしは決して、ある兄弟または姉妹に、自分たちが見る通りに事柄を見させるための、こん棒として用いてはならない。問題の中には、ただ個人と神との間で解決するように本人にまかせなければならないことがある。

勧告は、今日のわれわれ自身の生活に当てはまる根本的な原則を発見するために研究すべきである。あるメッセージは、特定の時または場所のために、警告や譴責として与えられたが、示している原則は、世界的に適用でき、また時機を得た助けとなる。人間の心は、世界中、大體同じである。一人の人間の問題は、しばしばまた他の人の問題でもある。神は「一人の人の

誤りを譴責することによって多くの人を正そうとされた。」「彼は、ある人々の不正を明らかにされるが、それは他の人々が、それによって警告されるためである」とホワイ特夫人は記している。

その生涯の終わりも近づいたころ、夫人は次の勧告を与えた。「聖霊を通して、神のみ声は絶えず、われわれに警告し、教えて来た。……与えられた教訓は、時がたつても試練に会っても無効にはならなかった。……このメッセージの初期に与えられた教えは、今日の終末時代に従うべき安全な教訓として保持されねばならない。」

この本に掲載する勧告は、幾冊かのE・G・ホワイ特的著書から抜粋したものであるが、主として、「教会へのあかし」の世界版である、三冊の「テストimoni・トレジャーズ」から、とったものであつて、これは教会員が少数なために、ある程度の大きさの本は、何冊も出版できない国々の教会に、最大の助けと思われる、いくつかの教訓を提供するものである。これらの勧告を選んで編纂する仕事は、大きい委員会によって行われたが、この会は、預言の霊の勧告を保護し常にその使用を広める責任を負わされているエレン・G・ホワイ特著書委員会の、認可を受けて働いた。選択した記事には、短いものが多く、実用的な基本原則を示すものに制限されている。それによって広い範囲の問題を包含するためである。

「あなたがたの神、主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立つことができる。主の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは成功するでしょう」（歴代志下二〇ノ二〇）。

（一九五七年七月二十二日）

第一編  
信  
仰



## 第一章 忠実な者の受ける報いの幻 (わたしの最初の幻)

わたしが、家庭の礼拝で祈っていたときに、聖霊がわたしにくだった。そして、わたしは、暗い世界から、高く高く上にのぼっていくように感じた。わたしはふり向いて、地上にいる再臨信徒たちを捜したが、見つからなかった。すると、「もう一度見なさい。もう少し上を見なさい」という声が聞こえた。それでわたしが目をあげてみると、地上のはるか上の方に、まっすぐな狭い道がかかっていた。この道の上を、再臨信徒たちは、都に向かって旅していた。都は、その道の向こうの端にあった。道のはじめに、明るい光があつて、彼らを後ろから照らしていた。あれは夜中の叫びですと、天使がわたしに言った。この光が、道をずっと照らし、彼らがつまづかないように、足もとを明るくしていた。もし彼らが、彼らのすぐ前にいて彼らを都に導いておられるイエスに目をとめていれば、彼らは安全であつた。しかし、やがて、ある者たちは疲れてきて、都はまだ遠い、もっと早く都に入れると思っていた、と言った。すると

イエスは、その輝く右手をあげて、彼らを励まされた。彼のみ手から光が流れ出て、再臨信徒の一团の上に照りわたり、彼らは、「ハレルヤ！」と叫んだ。他の者たちは、無分別にも彼らの後ろの光を拒んで、自分たちをここまで導いてきたのは神ではない、と言った。彼らの後の光は消えて、彼らの足もとは真っ暗になった。そして彼らは、つまり、目標とイエスとを見失って、道から暗い邪惡な地上へと落ちていった。やがてわれわれは、多くの水の音のような神の声を聞いた。その声が、イエスの再臨の日と時とをわれわれに知らせた。十四万四千の生きている聖徒たちは、その声を知って理解したが、悪人たちは、それを雷鳴と地震だと思った。神は時を告げられたときに、われわれに聖霊を注がれた。それで、われわれの顔は、モーセの顔が、シナイ山から下りてきたときに輝いたように、輝きはじめた。

十四万四千の人々は、みな印せられ、完全に一致していた。彼らの顔には、神、新エルサレムと書かれ、そして、イエスの新しい名がついた輝く星が書かれていた。悪人たちはわれわれの幸福な聖い状態を見て激怒し、荒々しく襲いかかってわれわれを捕え、投獄しようとしたが、われわれが主の名によって手を伸ばすと、彼らはどうすることもできずに倒れてしまった。そのとき、サタンに属する人々は、互いの足を洗いきよい接吻をもつて兄弟たちとあいさつをかわすことができるわれわれを神が愛しておられたことを知って、われわれの足もとに伏して礼



拝した。

やがて、われわれの目は、東のほうにひきつけられた。それは、人間の手の半分ぐらいの大きさの、小さい黒雲が現われたからである。われわれはみな、これが人の子のしるしであることを知っていた。われわれはみな、その雲が、近づくにつれてますます明るく輝き、さらに輝きを増してついに大きな白い雲になるのを、厳粛な思いで黙って見ていた。雲の下のほうは火のように見えた。雲の上にはじがあつた。その周りでは、無数の天使たちが、この上なく美しい歌を歌っていた。雲の上には人の子が座しておられた。彼の髪は白く波打って肩にかかっていた。彼の頭には、多くの冠があつた。彼の足は火のように見えた。彼の右手には鋭いかまがあり、左手には、銀のラツパがあつた。彼の目は火の炎のようで、彼の民を心の奥底までさぐつた。そのとき、すべての者の顔は青ざめた。神に拒否された人々の顔は絶望で真っ青になった。そのとき、われわれは、みな、「だれが、その前に立つことができようか。わたしの着物には、しみがついていないだろうか」と叫んだ。すると天使たちは、歌うのをやめ、恐ろしい沈黙が、しばらく続いた。そして、イエスは、「手が清く、心のいさぎよい者が、その前に立つことができる。わたしの恵みは、あなたに対して十分である」と言われた。これを聞いてわれわれの顔は輝き、すべての者の心は、喜びにあふれた。天使たちは、ふたたび高らかに

に音楽をかなでて、歌いはじめた。雲はますます地上に近づいた。

それから、イエスが火の炎につつまれて、雲に乗っておりて来られたとき、彼の銀のラツパが鳴り渡った。彼は、眠っている聖徒たちの墓をごらんになった。そして、彼の目と両手とを天にあげて、「さめよ、さめよ、さめよ、さめよ、土の中に眠っている者たちよ、起きよ」と叫ばれた。すると、大きな地震が起こった。墓は開かれて、死んでいた者たちが、不死をまとして出てきた。十四万四千の人々は、死によって引き裂かれていた友人たちを認めて「ハレルヤ！」と叫んだ。それと同時にわれわれも変えられて、空中で主に会うために、彼らと共に引き上げられた。

われわれは、一緒に雲の中に入り、七日間のぼって行って、ガラスの海に着いた。そのとき、イエスは、冠を持って来られて、ご自分の右の手で、それをわれわれの頭にのせてくださった。彼は、われわれに黄金の立琴と勝利のしゅろの枝をお与えになった。十四万四千の人々は、このガラスの海の上に、真四角に並んだ。星が重そうについた冠もあればわずかしがついていないのもあった。すべての者は、自分たちの冠に心から満足していた。そして、彼らはみな、肩から足までとどく輝く白い衣を着ていた。ガラスの海の上を都の門に向かって進むわれわれを天使たちが、取り巻いていた。イエスは、力強い栄光のみ手をあげて、光り輝くちようつがいのついた真珠の門を押し開き、「あなたがたは、わたしの血によって、あなたがたの衣を洗い、

わたしの真理のために堅くたつた。中に入りなさい」とわれわれに言われた。われわれはみな進み入り、都に入る完全な権利が自分たちにあるのだと感じた。

ここで、われわれは、命の木と神のみ座とを見た。み座から清い水の川が流れ出ていて川の両側に命の木があつた。川のこちらにも幹が一つ、川の向こう側にも幹が一つあつて両方とも清く透き通つた金であつた。はじめ、わたしは二本の木を見たと思った。もう一度よく見ると、二本の木は上でつながつて一本の木になっているのを見た。こういうわけで命の川の両側に、命の木があつた。その枝は、われわれの立っている所に垂れ下がっていた。その実は見事で、銀の混じつた金のようにあつた。

われわれは、みな木の下に行つて座り、あたりのすばらしい光景をながめていた。するとそこへフィツチ兄弟とストックマン兄弟がやつてきた。彼らは天国の福音を説教していたが、神は彼らを救うために眠らせられたのである。彼らは、彼らが眠っていた間にわれわれがどんな経験をしたかを尋ねた。われわれは、自分たちの最大の試練を思い出そうとしたが、われわれを取り巻く、あふれるばかりの永遠の重い栄光と比べたときに、それらはあまりにも小さく思われて、口にすることができなかった。われわれはみな「ハレルヤ、天国はなんと安いのだろう」と叫び、輝く立琴をかきならして、天空になり響かせた。

われわれはみな、イエスを先頭にして、都からこの地上の大きな山の上におりてきたがその山は、イエスを支えることができずに、崩れ去って大きな平原となった。そのとき、上を見ると、十二の土台と十二の門のある大いなる都が見えた。門は各々の側に三つずつあつて、それぞれの門に天使が立っていた。われわれはみな、「都が、大いなる都がおりてくる。神のもとを出て、天から下ってくる」と叫んだ。都は、おりてきて、われわれが立っていた所にとどまった。それからわれわれは、都の外の輝かしい光景に目を向けはじめた。そこでわたしは、実に輝かしい家々を見た。それらは銀のように見え、美しい真珠をちりばめた四本の柱に支えられていた。これには聖徒たちが住むのであつた。どの家にも黄金の棚があつた。多くの聖徒たちが家の中に入つて行つて光輝く冠を脱いで棚の上に置き、それから家のそばにある畑へ出て行つて土を扱うのをわたしは見た。それは、地上のわれわれがしなければならないこととは全く違つていた。輝く光が彼らの頭の周りを照らし、彼らは絶えず声をあげて、神を賛美していた。

わたしは、あらゆる種類の花が満ちている別の野原を見た。そしてわたしは、花を摘みながら、「これは、しばむことがない」と叫んだ。次にわたしは、この上もなく美しい背の高い草の生えた野原を見た。それは、生き生きとした緑色で、銀と金を反映し、誇らかに揺れ動いて、王なるイエスに栄光を帰していた。それから、ライオン、小羊、ひょう、おかみなど、あら

ゆる種類の動物がいっぱいいて、みな仲良く一緒にいる野原に入った。われわれが、動物たちの中を通ると、彼らは静かについて来た。それからわれわれは森に入ったが、それは、この地上の森のように暗くはなかった。それは明るく、一面に輝いていた。木の枝は揺れ動いていた。われわれはみな、「心を安んじて荒野に住み、森の中に眠る」と叫んだ。われわれは、森の中を通り抜けてシオンの山へ向かって行った。

われわれは、進んで行く途中で、辺りの栄光をながめている一団の人々に出会った。わたしは、彼らの着物の縁が赤いのに気づいた。彼らの冠は輝かしく、彼らの衣は純白であった。われわれが彼らにあいさつをしたときに、わたしは、彼らがだれなのかをイエスに尋ねた。彼らはイエスのために殺された殉教者たちであると、イエスは言われた。彼らと一緒に数えきれないほどの子供たちがいた。彼らの着物の縁も赤かった。シオンの山はわれわれのすぐ前にあった。そして山の上には輝かしい神殿があった。その周りには、ほかに七つの山があつて、バラやユリが生えていた。子供たちがのぼったり、あるいは、飛びたければ、彼らの小さい翼を使って山々の頂上に飛んで行ってしぼむことのない花を摘んだりするのをわたしは見た。神殿の周りには、あらゆる種類の樹木が生えていて、その場所を美しくしていた。からまつ、すずかけ、いとすぎ、オリーブ、ミルトス、ざくろなどがあり、いちじくは、ちょうど実った実の重

みで枝が垂れ、これらの木々があたり一帯を美しくしていた。われわれが聖なる神殿に入ろうとすると、イエスは、麗わしい声をあげて、「十四万四千の人々だけが、ここに入ることができ」と叫んだ。

この神殿は、光り輝く真珠をちりばめた透き通る黄金の七つの柱に支えられていた。わたしは、そこで見た数々の驚くべきものを、描写することができない。ああ、わたしにカナンの言葉が話せたならば、少しは天国の栄光を語ることができだろうに。わたしはそこで、十四万四千の人々の名が黄金の文字で刻まれた石の板を見た。神殿の栄光を見てから、われわれは外に出た。イエスは、われわれをそこにおいて、都に行かれた。間もなく「わたしの民よ、来なさい。あなたがたは、大いなる患難に会い、わたしの意志を行い、わたしのために苦しみを受けた。夕食に入つて来なさい。わたしは帯をしめて給仕をしよう」という彼の麗しい声がもう一度聞こえた。われわれは、「ハレルヤ！ 栄光があるように！」と叫んで、都の中に入った。わたしは純銀のテーブルを見た。それは、何マイルもあるものであった。しかし、われわれの目は、それをずっと見渡すことができた。命の木の実、マナ、あめんどう、いちじく、ざくろ、ぶどう、その他多くの果物をわたしは見た。わたしはイエスに、果物を食べさせてくださいと頼んだ。イエスは、「今は、いけない。この国の果物を食べるものは、二度と地上にはもどら

ない。しかし、あなたが忠実であるならばもうしばらくして、命の木の実を食べることも、泉の水を飲むこともできるだろう」と言われた。それから彼は「あなたは、もう一度、地上に帰って、わたしがあなたに示したことを他の人々に語らなければならない」と言われた。そして天使が、静かにわたしをこの暗い世界に連れもどした。時々、わたしはもうここにはいられないような気がする。この地上のものはすべて、非常に陰うつに見える。わたしは天国を見たので、ここにいるのを非常に寂しく思う。ああ、わたしに鳩のような翼があつたならば、飛んで行って、休みに入ることができるのに。

（初代文集六二 七一ページ）





## 第二章 終わりの時

われわれは終わりの時に生存している。急速に成就しつつある、時のしるしは、キリストの来臨の近いことを宣言している。われわれの生きている時代は、厳粛で重要である。神の霊は徐々に、しかも確実に、地上から取り去られつつあるのである。災いと審きは、神の恵みを軽べつする者たちの上に、既に降りかかっている。陸と海との災害、不安な社会情勢、戦争の警報は不吉であって、接近しつつある最大事件を予報している。

悪の力は、その勢力を結集し、強化している。最後の大危機に対して、彼らは力を増強しているのである。間もなく一大変化が、この世界に起こるのであり、しかも最後の動きは急速である。

世界情勢は、困難な時が切迫していることを示している。日々の新聞は、近い将来に、恐ろしい戦争が起こることを示す徴候で満ちている。大胆な強奪犯罪は頻発し、ストライキはあり

ふれた事件となった。窃盗や殺人は至る所で行われている。悪鬼につかれた人間が、男や女や幼い子供たちの生命を奪っている。人類は罪悪で逆上しており、あらゆる種類の悪事が行き渡っている。

敵は、正義を曲げ、人の心を利己的な欲望で満たすことに成功してきた。「正義ははるかに立つ。それは、真実は広場に倒れ、正直は、はいることができないからである」（イザヤ書五九ノ一四）。大都市では多くの人々が、貧困で、みじめな生活をしており、ほとんど衣食住にも事欠いているのに、同じ都市の中には思う存分に欲しいものが得られ、ぜいたくに生活し、豪華な装飾家具で飾った家や、身の飾りに金銭を費やしている人々がいる。更に悪いことは、情欲を満たすために、また、酒やタバコやその他、頭脳力を破壊し、精神を狂わせ、魂を墮落させるものに金銭を費やす人がいることである。飢えた人類の叫びが神の前に昇っているのに、あらゆる種類の圧制と搾取によって、人々は巨大な財産を築いている。

わたしは夜間、呼ばれて、空中高く階を重ねて建てられて行く建築物を見せられた。それらの建物は耐火建築と保証されていて、所有者や建設者の名誉のために建てられていた。これらのビルは、ますます高くなって行き、最も高価な資材が使われていた。建物の所有者たちは「私たちはどうしたら神を最もよく崇めることができるか」と自問してはいなかった。主は彼らの、

思いの中におられなかった。

これらの高層建築物が建った時、その所有者らは、自己を満足させ、隣人をうらやましがるために使う金銭があることに野心的な誇りを感じて喜んだ。彼らが投資した金銭の多くは、貧民をしいたげ、無理に取り立てて得たものであった。彼らは、すべての商取引の記録が天に保存されていることを忘れていた。不正な取り引き、不正直な行動の一つ一つが、天に記録されているのである。

次にわたしの前を通過した光景は、人々が驚きあわてている火事の場面であった。人々は耐火建築と信じられていた高層建築物をながめて「あれは絶対に安全だ」と言った。しかし、これらの建物は、まるで松やにできているかのように焼けてしまった。消防車は破壊を止めるために何もできなかった。消防士たちはポンプの操作もできなかった。

主の時が到来してもなお、ごうまんて野心的な人間の心に変化が起こっていなければ、救うために強かった手は滅ぼすためにも強いということを知るであろうと、わたしは教えられた。この世のどんな力も、神のみ手をとどめることはできない。どんな材料を使っても、人間が神の律法を無視し利己的な野心を満たしたことに対し、報復するために神の定められた時がきたとき、破壊をまぬかれるような建物は建てることができない。

教育者や政治家たちの中でさえ、現在の社会情勢の根本的な原因を理解する者は多くはない。政権を握る人々は、道徳的な腐敗や貧困、窮乏、また増加する犯罪の問題を解くことができない。彼らは事業の経営を、もっと安全な基盤の上におこうとむなしい努力をしている。人間が神のみことばの教えに、もっと耳を傾けるなら、彼らを困らせている問題の解決を見出すのである。

聖書はキリスト再臨直前の世界の状態を描写している。盗みや搾取によって巨大な財産を積んでいる人々について、こう書かれている。「あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている。見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している。あなたがたは、地上でогり暮し、快樂にふけり、『ほふらるる日』のために、おのが心を肥やしている。そして、義人を罪に定め、これを殺した。しかも彼は、あなたがたに抵抗しない」（ヤコブ五ノ三 六）。

しかし、急速に成就しつつある時の前兆から、だれが警告を読みとるのであるう。世俗的な人々は、どんな印象を受けているのであろう。彼らの態度にどんな変化が見られるのであろう。それは、ノアの時代の人々の態度に勝ってはいないのである。洪水前の人々は、この世の事業

と快楽に夢中になっていて「洪水が襲ってきて、いつさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった」(マタイ二四ノ三九)。彼らは、天来の警告を与えられたが、聞くことを拒んだ。そのように今日、世界は神の警告の声を全く無視して、永遠の破滅へと急いでいる。

世界は戦争の精神でかき立てられている。ダニエル書十一章の預言は、ほとんど、完全に成就しようとしている。預言の中で言われている悩みの光景が、間もなく実現する。

「見よ、主はこの地をむなしくし、これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、その民を散らされる。……これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ。

それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住む者はその罪に苦しみ、……鼓の音は静まり、喜ぶ者の騒ぎはやみ、琴の音もまた静まった」(イザヤ書二四ノ一八)。

「ああ、その日はわざわいだ。主の日は近く、全能者からの滅びのように来るからである」(ヨエル書一ノ一五)。

「わたしは地を見たが、それは形がなく、またむなしかった。天をあおいだが、そこには光がなかった。わたしは山を見たが、みな震え、もろもろの丘は動いていた。わたしは見たが、人はひとりもおらず、空の鳥はみな飛び去っていた。わたしは見たが、豊かな地は荒れ地となり、そのすべての町は、主の前に、その激しい怒りの前に、破壊されていた」(エレミヤ書四

ノ二三 二六）。

「悲しいかな、その日は大いなる日であつて、それに比べるべき日はない。それはヤコブの悩みの時である。しかし彼はそれから救い出される」（同三〇ノ七）。

世界中のすべての人が神に反対して、敵の側についたわけではない。あらゆる人間が忠誠を失つたのではない。ヨハネが「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」（黙示録一四ノ一二）と言っているのであるから、神に対して眞実さを保つ少数の忠実な人々がいるのである。

間もなく、神に仕える者と仕えない者との間に、激しい戦いが戦われる。近い将来、ふるわれないものが後に残るために、ふるわれ得るものはすべてふるわれる。

サタンは勤勉な聖書研究者である。彼は自分の時の短いことを知つて、地上にある主の働きをくつがえすため、あらゆる点で努力をする。天の栄光と過去の迫害の再現とが入り混じる時、地上に生存している神の民の体験がどのようなものであるかは想像もできない。彼らは神のみ座から発する光の中を歩む。天使によつて天と地の間には、絶えず連絡が保たれる。悪天使らに囲まれたサタンは、神であると自称して、できるなら神の選民さえも惑わそうと、あらゆる種類の奇跡を行う。神の民が奇跡を行うことは安全ではない。サタンがその奇跡をまねるから

である。試みられ、ためされた神の民は、出エジプト記三十一章十二 十八節に言われているしの中に、彼らの力を見出す。彼らは「……と書いてある」と言う、みことばの上に立たなければならない。これが彼らの安全に立つことのできる唯一の土台である。神との契約を破った人々には、その日、神もなく望みもないのである。

神の礼拝者たちは、第四条の律法を重要視することによって特にきわだつ。なぜならば、これが神の創造力のしるしであり、人間の畏敬と服従を要求される彼の主張を証明するものだからである。悪人は、創造主の記念碑を破壊し、ローマの制度を高めようとする努力によって特色を現す。争闘の結果、全キリスト教会は二つの大きな組、すなわち、神の戒めとイエスを信じる信仰を守る人々と、獣とその像とを拝み、そのしるしを受ける人々とに分かれる。教会と国家は協力して、すべて「小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも」獣の印を受けるように強制するが、神の民は、それを受けない（黙示録一三ノ一六）。パトモスの預言者は、「ガラスの海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が、神の立琴を手にして立って」モーセの歌と小羊の歌とを歌っているのを見た（黙示録一五ノ二）。

おそるべき試練と困難が神の民を待っている。戦争の精神が地上の各国民を扇動している。

しかし、近づきつつある悩みの時、すなわち、国が始まってから、その時に至るまで、かつてなかったほどの悩みの時のさ中にあっても、神の選民は動揺しない。サタンとその軍勢は彼らを滅ぼすことができない。力のすぐれた天使たちが彼らを保護するからである。



## 第三章 主に会う準備をしなさい

わたしは、われわれが主の来臨をおくらせてはならないことを見た。天使は「地上に起ろうとしている事のために準備しなさい、準備しなさい。あなたがたの行動を信仰と一致させなさい」と言った。常に神を思い、われわれの影響力が、神と彼の真理のために益とならなければならないことを、わたしは見た。不注意や無関心であつては主を崇めることはできない。失望落胆しては主に栄えを帰すことはできない。われわれは自分自身の魂の救いを確保し、他を救うのに、熱心でなければならない。これは何よりも重要視されねばならないことであつて、他のことは、すべて二次的に扱われるべきである。

わたしは天国の美しさを見、天使たちが歓喜して歌い、イエスに賛美とほまれと栄光を帰すのを聞いた。その時わたしは、神のみ子のおどろくべき愛を、いくらか認識することができたのである。彼は天で持つておられたすべての栄光とほまれを捨てられた。そして彼は、われわ

れの救いに非常な関心を持つておられたので、人間が彼に加えることのできるあらゆる侮辱と無礼に、忍耐強く、柔和に耐えられた。彼は傷つけられ、打たれ、砕かれた。彼は、われわれを死から救うために、カルバリーの十字架上にはりつけられ、最も苦しい死を経験されたが、それは、われわれが、彼の血によって洗われ、よみがえらされ、彼がわれわれのために用意しておられるすまいに彼と共に住み、天の光とすばらしさを楽しみ、天使たちの歌声を聞いて共に歌うことができるためである。

わたしは、全天がわれわれの救いに関心を持つていたのを見た。そうであるのに、われわれが無関心でいられようか。自分が救われても滅びても、小さい問題であるかのように不注意であつてよいであろうか。われわれのために払われた犠牲を軽視してよいだろうか。ある人々はそうしている。彼らは提供されたあわれみを粗末にしたために神の不興を買っている。神の霊は、いつまでも悲しませておくことはできない。今しばらく悲しませるならば離れ去って行くのである。人間を救うために、神のなし得るすべてがなされて後、もし人が、提供されたイエスのあわれみを、自分の生活によって軽視するならば、死が彼らの受ける分となり、それは非常に高い代価を支払ったことになる。そして、それはおそろしい死である。なぜならば、彼らは救いを拒絶したが、キリストがその救いを買収するために十字架上で味わわれた苦悩を、彼

らが味わわなければならないからである。その時、彼らは自分たちが失ったものが何であるか、すなわち永遠の生命と不滅の嗣業であることを悟るのである。人間を救うために払われた大きい犠牲が、それらの価値を示している。尊い魂が一度失われれば、それは永久に失われるのである。

わたしは、一人の天使が、はかりを手にとって立ち、神の民、特に若い人たちの思考や関心を計っているのを見た。はかりの一方には、天に向いた思考や関心がのつていて、他方には地上に向いた思考や関心がのつていた。そして、このはかりに、小説を読むことや、服装や映画、虚栄や誇りなどを思う心すべてが、ほうり込まれた。ああ、なんと厳粛な瞬間であつたことか。

神の天使たちが、はかりを持って立ち、神のこどもであると公言する人々、すなわち、世俗に對しては死に、神に對しては生きていると言っている人々の思いを計っているのである。地上の思いや虚栄心、自負心でいっぱいになったばかりは、次々に重りを除いても、たちまち下つてしまった。そして一方が下がると同時に、天に向かう思いや関心をのせた方はすぐに上がつてしまった。そして、それはなんと軽かつたことであろう。わたしは見たままを話すことはできが、はかりを持った天使が神の民の思考や関心を計っているのを見た時、わたしの頭脳に刻まれた、厳粛で鮮明な印象を言い表すことは、決してできない。天使は言った。「このよう

な人々が天国にはいれるでしょうか。いいえ、いいえ、決してはいれません。彼らが今持っている希望はむだです。彼らが早く悔い改めて、救いを得なければ、滅びなければならない、と彼らに告げなさい。」

信心深い様子は、だれをも救わない。すべての者が、深い、生きた経験を持たなければならぬ。これだけが、悩みの時に彼らを救うのである。その時、彼らの業が、どんなものであるかが試される。もし金や銀や宝石であれば、彼は主の幕屋の奥にかくされる。しかし、その業が木や草やわらであれば、何ものも、彼らをエホバの激しい怒りから守ることはできない。

わたしは多くの人が、お互いに評価し合い、自分の生活を他の人の生活と比較しているのを見たが、そうであってはならない。キリスト以外には、われらの模範は与えられていない。彼が、われわれの真の手本であって、各自は彼を模倣することで他の人に勝るよう努力すべきである。われわれは、キリストの協力者であるか、または敵の協力者であるか、である。われわれはキリストと共に集めるか、または散らすかである。われわれは断固とした、心からのクリスチャンであるか、さもなければ全然クリスチャンではない。「わたしは……（あなたが）むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬいので、あなたを口から吐き出そう」（黙示録三ノ一五、一六）とキリストは言っておられる。

ある人々は克己とか犠牲が何であるか、または真理のために苦しむということがどんなことを、いまだほとんど知らない、ということわたしは見た。しかし、だれ一人、犠牲を払わずに天国にはいる者はいないのである。克己と犠牲の精神が養われなければならない。ある人は自分自身を、すなわち自分のからだを神の祭壇の上に犠牲にしていない。彼らは、短気で、気まぐれな気性をほしいままにし、食欲を満たし、神のみ働きを無視して、自分の利益のために行動している。永遠の生命のために、どんな犠牲も惜しまない人々が、それを得るのである。そして、それは苦しむだけの価値があり、そのために自己を十字架につけ、また、あらゆる偶像を犠牲にするだけの価値がある。あふれるばかりの永遠の重い栄光が、すべてをかき消してしまい、この世のあらゆる快樂をも、おおい隠してしまうのである。

(1 T・一二三 一二六ページ)



## 第四章 神の聖安息日の遵守

安息日を守ることは大きな祝福が含まれているのであって、神は、安息日が、われわれにとって喜びの日であるように望んでおられる。安息日が制定された時には喜びがあった。神は彼のみ手のわざを御覧になって満足されたのである。神は、彼の創ったすべてのものを「はなはだ良かった」と言われた（創世記一ノ三一）。天と地が喜びに満たされた。「明けの星は共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」（ヨブ記三八ノ七）。罪がこの世界に侵入し、彼の完全な作品を傷つけたが、限りなく恵みと、いつくしみに満ちた、全能の神は、万物を創造された証拠として、今もなお、われわれに安息日を与えておられる。われわれの天の父は、安息日を守ることによって、人類の間に、彼ご自身に関する知識を保存したいと望んでおられるのである。彼は、安息日が、われわれの思いを、真実な生ける神である彼に向け、彼を知ることによって、われわれが生命と平安を得るように願っておられる。

主は、彼の民であるイスラエル人をエジプトから救出し、彼の律法を託された時、彼らが安息日を守ることによって、偶像礼拝者たちとの区別がはっきりしていなければならないことを教えられた。これが、神の主権を認める人々と、彼を自分の創造主また王として信じることを拒む人々とを区別するものであったのである。「これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。」ゆえに、イスラエルの人々は安息日を覚え、永遠の契約として、代々安息日を守らなければならない」（出エジプト記三一ノ一七、一六）と主は言われた。

安息日は、イスラエル人が、この世のカナンにはいるために、エジプトから出て来た時、彼らを区別するしるしであつたように、今日神の民が天の安息にはいるために、この世から出て来る時、彼らを区別するしるしなのである。安息日は神と彼の民との間の関係を示すしるしであり、彼らが神の律法を尊ぶというしるしである。それは、彼の忠義な臣民と、律法の違反者たちとを区別するものである。

キリストは雲の柱の中から、安息日に関して宣言し「あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしであつて、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである」（出エジプト記三一ノ一三）と言われた。神が創造主であることのしるしとして、この世界に与えられた安息日



は、また彼が聖別する神であるとのしるしでもある。万物を創造された力は、人を彼ご自身に似せて再創造する力である。安息日を清く守る人々にとって、それは清めのしるしである。真の清めは神との調和であり、彼と同じ品性になることである。それは、彼の品性の写しである原則に、服従することによって得るものである。そして安息日は服従のしるしである。心から第四条の戒めを守る者は、律法全体に服従し、服従することによって彼は清められるのである。

イスラエル人に対するように、安息日は、われわれに対して「永遠の契約として」与えられた。神の聖日を尊ぶ人々にとって、安息日は、神が彼らを、彼の選民として認めておられるという、しるしである。それは、神が彼の契約を、彼らに対して守られるという保証である。神の統治権のしるしを受け入れる者はすべて、自分を神聖な永遠の契約下に置く。その人は服従という黄金の鎖に自分を結び付けるが、その鎖の一つ一つの輪が約束なのである。

(6 T・三四九、三五〇ページ)

「安息日を覚えよ」

第四条の戒めの始めに、主は「覚えよ」と言われた。人間が多くの思いわずらいや混乱の中

で、律法の全要求に応じることから言い逃れをするように誘惑されること、また、その神聖な重大さを忘れることを、神は知っておられたので、彼は「安息日を覚えて、これを聖とせよ」（出エジプト記二〇ノ八）と言われたのである。

一週間中、われわれは安息日を覚えて、戒めに従ってこれを守るように準備をしていなければならぬ。ただ法律的なことのように安息日を守ってはならない。われわれは、生活上の行動すべてに対して安息日が持つ霊的な意味を、理解すべきである。安息日を、彼らと神との間のしるしと考え、彼は彼らを清める神であることを示す、すべての者は、彼の統治の原則を表す。彼らは日常の行動の中に、神の国の法則を取り入れる。安息日の清めが、彼らの上にのぞむようにと、彼らは毎日祈る。日ごとにキリストを友とし、彼のご品性の完全さを例示する。毎日彼らの光が、良い行いとなって、他の人々を照らすのである。

神の働きの成功に係るすべての事のうち、最初の勝利は家庭生活の中で勝ち取らなければならない。安息日の準備は、ここで始めなければならない。一週を通じて、両親は、彼らの家庭が、子供たちが天国に行く準備のための学校とならなければならないことをおぼえなさい。適切な言葉を語るようにしなさい。子供たちが聞くべきでないような言葉は、一言も彼らの口から漏れてはならないのである。いら立った気持ちを少しでも起こさないようにしなさい。両

親よ、神のために教育するようにとあなたがたに子供を与えられた、聖なる神の面前で生きているかのように、週を通して生活しなさい。安息日には主の聖所で全員が礼拝する用意ができているよう、神のために、あなたの家庭で、小さい教会を訓練しなさい。毎朝、毎晩、あなたの子供たちを、彼の血しおで買われた嗣業として、神に捧げなさい。神を愛し、神に仕えることは、最高の義務であり特権であることを、彼らに教えなさい。

安息日が、このようにして覚えられる時、世俗の事物が霊的なことを侵害するようなことは許されない。六日間の労働日に関係したどんな務めも、安息日まで残されることはない。主が休み、気分もさわやかであられた日に、われわれが疲れ果てていて彼の礼拝に従事できないほど、週日に、この世の仕事でエネルギーを消耗し切るような事はしない。

安息日の準備は、一週を通してなされなければならないが、金曜日は特別な準備の日とすべきである。モーセを通して、主はイスラエルの人々に「あすは主の聖安息日で休みである。きよう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残ったものはみな朝までたくわえて保存しなさい」と言われた。「民は歩きまわって、これ(マナ)を集め、ひきうすでき、または、うすでつき、かまで煮て、これをもちとした」(出エジプト記一六ノ二三、民数記一一ノ八)。天来のパンを料理するために、イスラエルの人々がしなければならなかったことがあ

ったが、主は、この仕事を、備え日である金曜日にしなければならないと、彼らに言われたのである。

安息日の準備は、金曜日に完成するようにしなさい。すべての衣服が準備され、料理も全部終わるように取り計らいなさい。靴はみがき、おふろはすませなさい。そうすることは可能である。それを習慣にすれば、できるのである。安息日は、衣服の修繕をしたり、食物の煮たきをしたり、快楽を求めたり、あるいは、その他どんな世的な事のためにも使ってはならない。日没前に、すべて、世俗的な仕事はやめ、通俗の読み物は、見えない所に片付けてしまいなさい。両親よ、あなたがたのすることとその目的を、子供たちに説明し、安息日を戒めに従って守るための準備に彼らに参加させなさい。

われわれは熱心に安息日のふちを守るべきである。各瞬間が聖別された清い時間であることを覚えなさい。できる限り、雇用者は金曜日の正午から安息日の始まるまでの時間を、働き人たちに与えるべきである。彼らが静かな気持ちで、主の日を迎えることができるように、準備をする時間を与えなさい。そういうやり方することによって、あなたは、たとえこの世の物においても損はしないのである。

備え日に、気をくばらなければならない、今一つの仕事がある。この日には、家庭内であつ

ても、あるいは教会内であっても、兄弟間の争いを片付けなければならない。心の中から、にがにがしい気持ちや、怒り、また悪意を、すべて追い出しなさい。謙遜な気持ちで「互に罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ五ノ一六)。

(6 T・三五三 三五六ページ)

聖安息日を犯すことと神に見なされるようなことは、何一つ、安息日には言ったり行ったりしないようにすべきである。神は、われわれが、安息日に肉体労働を慎むだけでなく、精神が神聖な話題を考えるように、訓練することを要求しておられる。第四条の戒めは、世俗的なことを話し合ったり、軽率な、くだらない会話をしたりすることによって、事実上犯される。頭に浮かんで来ることを何でも、すべて語ることは、おのが言葉を語ることである。正しい事から、それることは、われわれを罪のとりことし、罪の宣告を受ける者にするのである。

(2 T・七〇三ページ)

日  
没  
礼  
拝

安息日は、安息日遵守者であると公言する多くの人々が考えるよりも、はるかにまさって神

聖なものなのである。文字通りに、あるいは精神において、安息日を戒めに従って守らない人によって、主は大いにはずかしめを受けて来られた。安息日遵守について改革をするように、彼は呼びかけておられる。

日没前に、家族の者は、聖書を読み、歌い、祈るために集まりなさい。多くの者が、この点に不注意であつたから、改めることが必要である。われわれは、神に対し、また互いに告白する必要がある。われわれは、神が祝福し、聖別された日を、家族の各員があがめる用意のできるよう、特別な手配を、新たに始めるべきである。

家族礼拝においては、子供たちに役割を持たせなさい。みな聖書を持って来て、各自一節ずつ読み、それから、良く知っている讃美歌を歌つて、お祈りをなさい。このためにキリストは、モデルを与えておられる。主の祈りは、単なる形式としてとなえるために与えられたものではなく、これは、われわれの祈りのあるべき姿、すなわち単純で、熱心で、包括的な祈りの例なのである。単純な祈りによって、主に、あなたの必要を告げ、彼のいつくしみに対して、感謝を表現しなさい。こうして、あなたは、歓迎するお客として、イエスをあなたの家庭と心の中に招待するのである。家庭では、かけ離れた事柄に関する長い祈りは不適當である。祈りの時の特権とし祝福と考えるべきであるのに、それによって退屈なものにしてしまう。祈りの

時を、興味深い、うれしい時としなさい。

安息日が終わって太陽が沈む時、祈りの声と賛美の歌によって、神聖な時間の終わりを示し、働く一週間の労苦を通して神が共にいて下さるように求めなさい。

主に対して安息日を清く守ることは、永遠の救いを意味するのである。神は「わたしを尊ぶ者を、わたしは尊ぶ」と言われる（サムエル記上二ノ三〇）。

（6 T・三五三 三五九ページ）

### 家族の最も神聖な時間

安息日学校と礼拝のための集会は、安息日の一部を占めるに過ぎない。家族に残された部分を、安息日の全時間中で最も神聖な貴重な時とすることができるのである。この時間の多くを、両親は自分の子供たちと費やすべきである。多くの家庭で、年少の子供たちが、自分にできる最善の努力によって楽しみを見出すよう放置されている。放っておかれると子供たちはすぐ、落ち着かなくなって、遊び始め、また何かいたずらをするものである。こうして安息日は彼らにとって、なんら神聖な意味を持たないものとなってしまうのである。

天気の良い日には、両親は子供たちと一緒に野や森の中を散歩なさい。自然の美しい事物の中で、安息日が定められた理由を彼らに告げなさい。神の偉大な創造のみ業について彼らに説明し、この世界は神のみ手によって作られた時には、清くて美しかったことを話しなさい。花も、かん木も、樹も、一本一本がすべてその創造主の目的にかなったのである。見るものが、すべて美しく、神を愛する思いで心を満たした。あらゆる音が神のみ声と調和した音楽であった。神の完全なみ業を傷つけたものは罪であったこと、すなわち、いばらとあざみ、悲しみと痛みと死は、みな、神に対する不従順の結果であることを示しなさい。そして、この世界が、罪ののろいで傷ついていながら、今なお、どれほど神のいつくしみを表しているかを見るように命じなさい。緑の野、そびえる樹木、ここちよい日光、雲、露、厳肅な夜の静けさ、星空のすばらしさ、そして、美しく照る月、すべてが創造主をあかししている。感謝することのない、われわれの世界に、降る一滴の雨も、射す一条の光線も、神の忍耐と愛を立証しているのである。

救いの道について彼らに告げなさい。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ三ノ一六）とは、どんなことを告げなさい。美しいベツレヘムの話をくりかえして語り



なさい。子供たちに、両親に従順な子供としてのイエスや、忠実で勤勉な青年としてのイエス、また家計を支えるために助けておられるイエスを示しなさい。それによって、あなたは救い主が、青年の試練や困惑や誘惑、また希望や喜びを知っておられること、彼らに同情と助けを与え得ることを、子供たちに教えることができる。時々、聖書歴史の中の興味深い物語と一緒に読みなさい。安息日学校で彼らが学んだことについて質問し、彼らとともに次の安息日の教課を、勉強しなさい。

(6 T・三五八、三五九ページ)

安息日には、厳粛な気持ちで、家族を神にささげるべきである。戒めは、われわれの門のうちにいる、すべての者を含む。すなわち、その家の居住者全員が、世俗的な仕事をやめて、神聖な時間を信仰的な事のために用いなければならない。神の聖日に、全員一致して、喜びにあふれた礼拝をもって神を崇めなさい。

(2 T T・一八五ページ)

「さあ、われらは主を拝もう」

キリストは「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ一八ノ二)と言われた。二、三人の信者でもいる所ではどこで

も、安息日に集まって、主のみ約束の成就を求めなさい。

神の聖日に、彼を礼拝するために集まった、少数の群れは、エホバのゆたかな祝福を求める権利があるのである。彼らの集まりに、主イエスが、名誉の賓客であることを信じるべきである。安息日を清く守る真の礼拝者はみな、「わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである」（出エジプト記三一ノ一三）との約束の成就を求めるべきである。

（6 T・三六、三六一ページ）

安息日は、世俗的な働きから心を転じて、神の恵みと栄光を沈思黙考することにより、祝福となるよう、人間のために創られたのである。神の民が集まって、彼について語り、み言葉の中の真理に関する思想や考えを話し合い、時間の一部を祈りのために費やすことは、必要である。しかし、これらの時は、安息日であっても、長くしたり、興味のないものにして、退屈するようにしてはならない。

（2 T・五八三ページ）

教会に牧師がいない時は、だれかが集会の指導者として指名されなければならない。しかし、彼は説教をしたり、礼拝時間の大部分を使う必要はないのである。短い、興味深いバイブル・リーディング―聖書問答集による聖書研究―の方が、説教よりも有益な場合がよくある。そして、この後に祈祷とあかしのための集まりをすることができるのである。

安息日の集会を興味深いものにするために、各自がしなければならぬことがあると、感じるべきである。ただ形式のために集まるのではなく、思想を交換し、日常の経験について述べ、感謝を言い表し、また、神と彼がつかわれたイエス・キリストを知るために、神の光を求める真実な願いを述べるために集まるのである。キリストについて、共に親しく語り合うことは、心を、人生の試練や戦いに対して強める。クリスチャンであって、しかも自分自身の中に引っ込んでいられると、決して考えてはならない。各自が人類の大きな織物の一部であって、一人の経験が、その仲間の経験によって、大きく決定されるのである。

(6 T・三六一、三六二ページ)

## 安息日学校

安息日学校の働きの目的は、魂の収穫でなければならない。運営の仕方が完全で、設備も、望むすべてがあっても、子供や青年たちがキリストに導かれなければ、学校は失敗である。なぜならば、魂がキリストに引きつけられない場合、形式的な宗教の感化の下で、ますます感動しにくくなるからである。教師は、キリストが、助けを必要としている人々の心の戸をたたか

れる時、協力すべきである。もし生徒が、聖霊の訴えにこたえて、イエスがはいることができるように、心の戸を開くならば、イエスは彼らの理解力を拡大して、神のことがわかるようにしてくださる。教師の働きは単純な働きであるが、イエスの霊によつてなされるならば、神の霊が働いて、これに深みと能力が加えられる。

両親よ、毎日少しの時間をとつておいて、あなたの子供たちと、安息日学校の教課を勉強しなさい。聖書にある歴史の貴重な教訓を学ぶために費やす時間を犠牲にするよりは、むしろ必要なら社交的訪問をやめなさい。両親も子供たちも、この研究によつて益を受けるのである。教課に関連した、より重要な聖句は、務めとしてでなく、特権として暗唱しなさい。最初は暗唱もよくできないかもしれないが、することによつて力がつき、しばらくすると、あなたは、尊い真理の言葉を、このように蓄えることに喜びを感じるようになる。そして、この習慣が、宗教的な成長に非常に価値のある助けとなるのである。……

あなたの家庭における聖書研究を組織的に行いなさい。世的なことは何であつても放つておきなさい。すべての不必要な裁縫や、食卓のための余計な準備は廃しても、魂が生命のパンで養われるように必ずしなさい。一日一時間、あるいは三十分でも、楽しく、互いに交わりをもつて、神のみ言葉の研究にささげるならば、その効果は計り知れないのである。いろいろな時

に、さまざまな事情のもとで、特定の問題に関して言われたことを総合して、聖書をそれ自体の解説者にしなさい。訪問者や、来客のために、あなたの家庭のクラスを中止しないようにしなさい。もしも、勉強の途中で来客があった時は、それに参加するように、彼らを招きなさい。世的な利益や快樂を得るよりも、神のみ言葉の知識を得ることの方が重要であると、あなたが考えていることを示しなさい。

ある（安息日）学校では、残念ながら、教課の記事を読む習慣が一般に行われているが、そうであってはならない。たびたび、不必要に、または罪深いことにさえ用いる時間を、聖書の勉強に費やすならば、そうする必要がないのである。普通の学校の勉強よりも、安息日学校の教課を、教師や生徒たちが、より不完全に学ぶ理由はない。それは、比較できないほど重要な問題を取り扱っているのであるから、もっとよく学ぶべきであり、この事の怠慢を神は喜ばれない。

安息日学校で教える者は、神の真理で自分の心が熱し、活気づいていなければならないし、み言葉を聞くだけの者とならず、み言葉を行う人でなければならない。彼らは、枝が、ぶどうの木の中で養われるように、キリストの中で養われるべきである。天来の恵みの露が、彼らの上に下らなければならない。それは彼らの心が、かわいい植木のように、つぼみが開いて、大

きくなり、神の園にある花のように良い香りを放つためである。教師は神のみ言葉の勤勉な研究者であつて、毎日、キリストの学校で学んでいることを、いつも示さなければならない。そして、偉大な父であり、世の光である彼から受けた光を、他の人々に伝えることができないばならない。

時々、役員を選ぶ場合、決して個人的な好みによつて支配されず、神を愛し、おそれ、神を助言者にする人であると、あなたが確信する人々を、責任の地位につけなさい。

（2 T T・五五七 五六六ページ）

「安息日に善を行うのは良い」

家庭でも教会でも、奉仕の精神が表されなければならない。この世の働きのために、六日間を与えて下さった神は、七日目を祝し、聖別して彼ご自身のために取っておかれたのである。この日、彼の働きのために献身するすべての者を、彼は特別に祝福される。

全天は安息日を守っているが、ぼんやりして、何もしないではない。この日は、神と、われわれの救い主キリストに、お会いするのであるから、魂の全エネルギーが目ざめるべ

きではないだろうか。われわれは信仰によつて、彼を見ることができ。彼は、一人一人の心を元気づけ、祝福したいと切望しておられるのである。

(6 T・三六一、三六二ページ)

神のなさけは、病人や苦しんでいる者が世話をされるように指示された。彼らを楽にするためにしなければならぬ労働は、必要な働きであつて、安息日を犯すことにはならない。しかし、不必要な働きは、すべて避けるべきである。多くの者が、備え日にして置くべきであつた小さい事柄を、安息日の始まるまで、不注意に遅らせる。そうであつてはならない。神聖な時間の始まるまで怠つていた働きは、何であつても、安息日が過ぎるまで行わずにおくべきである。

(2 T T・一八四、一八五ページ)

安息日に料理をすることは避けるべきであるが、冷たい食物を食す必要はない。寒い氣候の時には、前日料理したものを温めなさい。食事は単純であつても、味がよく、魅力的であるようにしなさい。ごちそうと思われるようなもの、家族が日常食さないようなものを何か用意しなさい。

服従する者に約束された祝福を、望むならば、われわれは、もっと厳格に安息日を守らなければならぬ。われわれは、避けることもできるのに、よくこの日に旅行をするのではないか

と、わたしは恐れる。安息日遵守に関して、主が与えて下さった光に調和し、われわれは、この日に船によつても、車によつても、旅行をすることにつき、もっと注意深くなければならぬ。これらの問題で、われわれは、自分たちの子供や青年たちの前に、正しい模範を示さなければならぬ。われわれの助けを必要としている教会に到着して、神が彼らに聞かせたいと望まれるメッセージを彼らに与えるためには、安息日に旅行しなければならぬかもしれないが、できるかぎり他の日に、切符を買い、すべて必要な手はずを整えておくべきである。旅に出かける時は、安息日に目的地に着くことを避けるような計画を立てるために、あらゆる努力をすべきである。

安息日に旅行をしなければならなくなった時には、われわれの注意を世的なことに引く人々と一緒に行かないように努力すべきである。われわれの精神が、常に神を思い、彼と語るようにしなければならぬ。機会ある度に、真理について他の人々に話すべきである。苦しんでいる人を救い、困っている人を助けるために、いつも用意ができていなければならない。そういう場合は、神から与えられた知識と知恵を活用するように神は望まれるのである。しかし、事業のことについて話したり、またどのような一般的な世俗の会話に携わったりしてもならない。いつでも、またどこにおいても、神は、われわれが安息日を尊ぶことによって、彼に対するわ



れわれの忠誠を証明するよう、要求しておられる。

(6 T・三五七 三六〇ページ)

### 安息日に登校すること

第四条の戒めに従う者は、だれでも、自分と世の中との間に境界線が引かれていることに気付く。安息日はテストであるが、人間が要求しているものではなく、神のテストなのである。それは、神に仕える者と仕えない者とを区別するものであつて、真理と誤りゆうの間の争いの最後の大争闘が、この点で起こるのである。

われわれの中のある人々は、安息日に子供たちを学校に行かせた。彼らは強制されたのではないが、学校の当局者たちが、六日間登校しなければ、子供たちを受け入れることに反対したのである。これらの学校の中には、生徒が普通の教育課目を教えられるだけでなく、各種の作業をするように教育されるところがあるが、こういう学校へ、律法を守る人々と公言している者の子供たちが、安息日に行かされていたのである。ある両親は、安息日に善を行うのは良いと言う、キリストのみ言葉を引用して、自分たちの行動を正当化しようとした。しかし同じ論

法が、子供たちのために生活費をかせがなければならないから、安息日に働いても良いということ立証することになり、何をすべきで何をすべきでないかを示すための限度や境界線がなくなってしまう。

われわれの兄弟たちは、第四条の戒めに従うことができない場所に、子供たちを置いている間、神の是認を期待することはできない。彼らは、子供たちが七日目に登校することから免除されるために、当局者たちとなんらかの取りきめをするよう努力すべきである。もしもこれが失敗に終わる時、彼らのなすべきことは明瞭であって、どんな犠牲を払っても神のご要求に従うことである。

ある人々は、主が要求される事において、それほど厳格ではない。あまり大きな損失をしてまで安息日をきびしく守ることは自分たちの義務ではない、あるいは、国の法律に反するような立場に自身を置くことは、なすべきことでないと主張する。これが、神を尊ぶ人々と、彼をはずかしめる人々とを区別するものである。われわれの忠誠を証明しなければならないのは、この点であって、すべての時代において神が彼の民を扱われた歴史は、彼が厳密な服従を要求されることを示している。

両親が子供たちに、世間の人々と共に教育を受けさせ、安息日を普通一般の日とするならば、

神の印は彼らの上に押されることはできない。彼らは世界と共に滅ぼされるが、彼らの血は両親にかからないであろうか。しかし、われわれが神の戒めを忠実に、自分の子供たちに教え、親の権威に服従させ、信仰と祈りによって、彼らを神にゆだねるならば、彼は、われわれの努力と共に働いて下さる。それは彼が約束されたからである。そして、みなぎりあふれる災いが地を過ぎる時、彼らはわれわれと共に、主の仮屋のひそかな所に隠されることができるのである。

(2 T T・一八〇 一八四ページ)

### 世俗の仕事を休む日

死ぬべき運命にある人間が、自分のとるに足らない世間的利益を得るために、大胆にも全能者と妥協しようとすることは、最もひどい無礼さである。時折安息日を世俗の仕事のために使うことは、安息日を完全に否定するのと同様、ひどい律法の犯し方である。なぜならば、それは主の律法を便宜上の問題にすることになるからである。「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神である」と、雷鳴のようにシナイ山からとどろいている。彼を憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、彼を愛し、彼の戒めを守るものには、恵みを施して、千代

に至らせると、宣言される彼には、中途半ばな服従や、ふたごころは受け入れられない。隣人のものを盗むことは、小さい問題ではなく、そのような罪を犯したことを発見された人が着せられる汚名は大きい。しかし、他の人から詐取するようなことは、軽べつする人間が、彼の天の父が祝福し、特別な目的のために分けられた時間を、恥も知らずに盗むのである。

（4 T・二四九、二五〇ページ）

言葉と思想を慎むべきである。安息日に事業の問題を話し合ったり、計画を立てたりする人は、事実上の仕事の取り引きをしているものと、神に見なされる。安息日を清く守るためには、われわれの精神が、世的な性質の事柄を考えることさえ許しておいてはならないのである。

（2 T T・一八五ページ）

神が語られたのであって、人間が服従することを彼は意図しておられるのである。そうすることが都合が良いかどうかを聞いておられるのではない。生命と栄光の主が、高い司令官の地位を後にし、悲しみの人で、悩みを知った人となり、人間の不従順の結果から人間を救うために、恥辱と死を受けられた時、ご自身の都合や楽しみは考慮されなかった。イエスは、人間を罪の中にあるまま救うのではなく、罪から救うために死なれたのである。人間は、誤った生活習慣を捨てて、キリストの模範にならない、自分の十字架を負って彼に従い、自己を制し、どんな

ことがあっても神に服従しなければならない。

世的な利益のために安息日に働くどんな人も、事情によつて正当化はされない。もし神が一人の人間に許されるなら、全員に許されても良いはずである。なぜ貧しい兄弟は、安息日に働くことによつて家族をより良く扶養することができるのに、生活費をかせぐために安息日に働いてはいけなのか。なぜ他の兄弟たちも、あるいは、われわれのすべてが、都合の良い時だけ安息日を守つてはいけなのか。シナイ山からのみ声が、答えておられる。「六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息である」(出エジプト記二〇ノ九、一〇)。

あなたの年令は、神の命令に服従することからあなたを免除しない。アブラハムは老年になつて、非常な試練を受けた。主のみ言葉は、悲しみで打ちひしがれた老人には、恐ろしく、また不適當に感じられたが、彼は決して、その正当さを問うことも、また服従するのにちゅうちよすることもしなかつた。彼は、自分が年をとつて弱っているから、自分の人生の喜びであつた息子を犠牲にすることはできないと、訴えることもできた。この命令は、息子に関して与えられた約束に矛盾することを主に思い出していたくよう言えたかも知れない。しかし、アブラハムの服従には、不平や非難はなかつた。神に対する彼の信頼は絶対であつた。

イエスの牧師たちは、安息日を覚えてこれを清く守らない人々を、譴責する者として立たなければならぬ。安息日に世的な会話をしながら、安息日遵守者であると主張する人々を、彼らは親切に、しかも厳粛にいさめるべきである。神の聖日には神に全く心を向けるよう奨励しなければならない。

聖別された時間をむだに過ごすことも自由だと、だれも考えてはならない。安息日の多くの時間を、安息日遵守者が睡眠に費やすことを神は喜ばれない。そうすることによって彼らは創造主を辱め、また彼らの実例によつて、六日間休息に費やすためには自分たちにとって貴重過ぎる、と言っているのである。彼らは、必要な睡眠を自分から奪つてでも、お金をもうけなければならぬとして、失われた睡眠を、神聖な時間を眠つて過ごすことによつて補うのである。そして彼らは、「安息日は休みの日として与えられたのである。わたしは休息を必要としているから、集会に出席するために自分から休息を奪うことはしない」と言つて弁解する。そういう人は聖別された日を誤用しているのである。彼らは、この日には特に、これを守ること家族の関心を起こさせ、場合によつて集まる人数の多少はあつても、祈りの家に集まるべきである。安息日に与えられている神の感化力が、週を通して彼らと共にあるように、彼らは時

間とエネルギーを靈的な活動に用いなければならない。一週間中で安息日ほど、信仰的な思考や感情のために有利な日は他にないのである。

(2 T・七〇四ページ)

### 安息日遵守の祝福

第四条の戒めの主張する事を認め、安息日を遵守している人々を、全天が安息日に見つめ見守っているのを、わたしは示された。天使たちが、この神聖な制度に対する彼らの関心と、高い尊敬の念に、注目していた。厳密に信仰的な気持ちをもって心の中でキリストを主と崇めた者、安息日を自分のできる最善を尽くして守り、その神聖な時間を活用するために努力し、安息日を喜びの日と呼ぶことによって神を崇めようとつとめた者 これらの人々を、天使たちは光と健康をもって特に祝福していた。そして特別な力が彼らに与えられた。

(2 T・七〇四、七〇五ページ)

天の要求に厳格に従うことは、靈的な祝福と同時にこの世での祝福をももたらす。

(P K・五四六ページ)

「『安息日を守って、これを汚さず、その手をおさえて、悪しき事をせず、このように行う人、これを堅く守る人の子はさいわいである』。」「また主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守って、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は、わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のうちで楽しませる」（イザヤ書五六ノ二、六、七）。

（各時代の斗争闘下巻・一七四ページ）

天と地がつづくかぎり、安息日は、創造主の力のしるしとしてつづくのである。そしてエデンがふたたびこの地上に栄えるときに、神の聖なる休日は、天下のすべての者によってあがめられるのである。「安息日ごとに、」輝く新天地の住民は「『わが前に来て礼拝する』と主は言われる。」

（各時代の希望第一巻・三六三ページ）



## 第五章 神は、あなたのなすべき働きを 用意しておられる

この地上における神の働きは、われわれの教会の会員である男女が、働くために奮起し、牧師や教会役員たちと力を合わせるまでは、決して終わることができない。

(9 T・一七ページ)

「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マルコ一六ノ一五)とのみ言葉は、キリスト信者の一人びとりに言われているのである。キリストの命を受けたすべての者は、人間同志の救いのために働くよう任命されている。失われた者を救うためにキリストが感じられた、同じ魂の切望感が、彼らの中に表れなければならない。すべての人が同じ立場を占めることはできないが、すべての人のために、場所と仕事がある。神の祝福を与えられた者はみな、実際の奉仕によって、こたえるべきであって、賜物はすべて、神の王国の進展のために用いなければならない。

(8 T・一六ページ)

説教は、救霊のためになされる働きの一小部分に過ぎない。神の霊は、罪人に真理を悟らせ、教会の腕の中に彼らを置く。牧師は自分たちの役目を果たすかも知れないが、しかし、教会がしなければならぬ働きをすることは決してできない。神はご自分の教会が、信仰と経験の未熟な人々を養い、雑談をするためではなく祈るため、また「銀の彫り物に金のりんごをはめたよう」な言葉を語るために、彼らの所に行くよう、要求しておられる。

（4 T・六九ページ）

神は、古代のイスラエル人を、この世の光として立つために召されたように、今日、彼の教会を召しておられる。第一、第二、第三天使の使命である真理の、強力な包丁によつて、彼は多くの教会から、また世の中から、彼らを切り離し、彼ご自身との神聖な近い関係へと導かれた。そして彼の律法の保管者とし、現代の重大な預言の真理を彼らに委託されたのである。古代のイスラエル人にゆだねられた聖なるみ言葉のように、これは世界に伝えなければならない神聖な信託財産である。

黙示録十四章の三天使は、神のメッセージの光を受け入れ、彼の代理人として、地のすみずみまで警告の声を響かせるために、出て行く人々を代表している。キリストは彼の信者たちに「あなたがたは、世の光である」（マタイ五ノ一四）と宣言しておられる。イエスを受け入れ

るすべての者に、カルバリーの十字架は「魂の価値を見なさい。『全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ』(マルコ一六ノ一五)」と語っている。何ものによつても、この働きを妨げさせてはならない。今日それはきわめて重要な働きであつて、永遠にまで影響の及ぶ働きである。イエスが人々の贖いのために払われた犠牲により、人間の魂に対し表された愛が、彼のすべての信者たちを動かすのである。(5 T・四五五、四五六ページ)

キリストは、彼に自己をゆだねる人間たちの一人びとりを、どんなに喜んで受け入れられることであろう。彼は人間を導いて神と結合させるが、それは、彼が受肉の愛の奥義を世界に伝えることができるためである。そのことを語りなさい、祈りなさい、歌いなさい、世界を彼の真理のメッセージで満たし、遠い地方にまで前進し続けなさい。(9 T・三〇ページ)

### キリストの真の信者は彼のためにあかしする

あなたがたの一人びとりが生きた伝道者であるならば、現代のメッセージは、速やかに、すべての国々、民族、国民、国語に対してのべ伝えられるのである。

(6 T・四三八ページ)

神の都にはいりたいと願う者は、すべて、地上の生涯において、その行動の中にキリストを表さなければならぬ。これが彼らをキリストのメッセンジャーとし、彼の証人とするのである。彼らは、すべての悪い習慣に反対して率直な、断固としたあかしを立て、世の罪を除く神の小羊を罪人に指し示さなければならない。彼は、彼を受け入れるすべての者に、神の子となる力を与えられる。生まれ変わることが、神の都にわれわれが入りうる唯一の道である。それは細く、われわれの入る門は狭いが、それに沿って、男女、子供を導いて行き、彼らに、救われるためには新しい心と新しい精神を持たなければならないことを、教えなければならない。生まれつきの古い性格に勝利しなければならない。生来の心の欲望は変わらなければならない。すべての欺き、すべての偽り、すべての悪口は止めなければならない。男女をキリストのようになる新しい生涯を生きなければならないのである。

（9 T・二三ページ）

同信の兄弟姉妹がた、あなたがたは自分をとらえている魔力を破りたいと望みますか。死の麻痺にも似た、この不活発さから覚醒したいと思いませんか。気が向いても向かなくても、働きに出なさい。魂をキリストと真理の知識に導くために個人的な努力をしなさい。そういう働きをすると、刺激を受け、力が増すことを発見するのである。それは覚醒させ、また強くする。働くことによって、あなたの霊的な力は活気を増すので、あなた自身の救いを達成する上でも、よ

りよい成功を収めることができるようになる。死のような無感覚さが、キリストを告白する多くの者を侵している。彼らを覚醒させるために、あらゆる努力をなささい。警告し、懇請し、説得しなさい。心を溶かす神の愛が、彼らの氷にとざされた性質を温め、和らげるように祈りなさい。たとえ彼らが聞くことを拒否しても、あなたの努力は失われない。他を祝福するための努力によつて、あなた自身の魂が祝福されるのである。

(5 T・三八七ページ)

だれも、自分は教育を受けていないから、主のみ働きに携わることとはできない、と感じてはならない。神はあなたのなすべき働きを持っておられる。彼は、すべての人に、その人の働きを与えておられるのである。あなたは自分で聖書を調べることができる。「み言葉が開けると光を放つて、無学な者に知恵を与えます」(詩篇一九〇—三〇)。あなたは仕事を与えられるように祈ることができる。信仰によつてささげられる、真実な心の祈りは、天で聞かれるのである。そして、あなたは、自分の能力に応じて働かなければならない。

(6 T・四三三ページ)

知恵のすぐれた天使たちは、人間のうつわと協力するために待っているが、それは、人間がどんな者になれるか、また、滅びようとしている魂の救済のために、彼らの感化によつて、どんな事ができるかを、世に示すためである。

キリストは、人なき海辺に打ち上げられた残がいのように、各国に散在し、罪のうちに滅びつつある、幾千という人々のために、忍耐強く、根気をもって働くようにと、われわれに呼びかけておられる。キリストの栄光にあずかる者は、弱い人や、不運な人や失望落胆している人を助けて、彼の奉仕にもまたあずからなければならない。

（9 T・三〇、三一ページ）

信者はみな教会を心から愛すべきである。教会の繁栄が第一の関心事でなければならないのであって、教会との関係を、自分のことよりも教会に利益になるようにする神聖な義務が、自分にあると感じるのでなければ、教会はその人がいない方がはるかに良くやって行けるのである。神のみ事業のために何かをする力を、みな持っている。不必要なぜいたく品のために多額の費用を費やし、食欲を満たしながら、教会を維持するための費用を寄附することは大きな重荷だと感じる人々がいる。そういう人々は、特権として受ける利益は全部喜んで受けるが、代価はむしろ他の人たちに払わせることを好むのである。

（4 T・一八ページ）

キリストの教会は軍隊によく似ている。どの兵隊の生活も苦勞で困難で危険である。決してまどろむこともまた自分の部署を離れることもしない暗黒の力の君によって、導かれた注意深い敵が至る所にいる。クリスチャンが警戒をしていないと、いつでも、この有力な敵は突然、

激しく攻撃して来る。教会員が活動し、用心していなければ、彼の計略によって負かされてしまう。

任務につくように命令された時、軍隊の兵卒の半数が怠けていたり、眠っていたらどうであろう。結果は敗北と捕虜、あるいは死である。だれかが敵の手を逃れたとしたら、その人は報酬を受けるに値すると思われるであろうか。いや、彼らは直ちに死刑の宣告を受けるであろう。しかしキリストの教会が不注意であつたり、不忠実であるならば、それよりもはるかに重大な結果をもたらすのである。眠っているクリスチャン兵士の軍隊　これより恐ろしいことがあるだろうか。暗黒の君に支配されている世界に対して、どんな前進ができるだろうか。戦いの日に、戦争の結果について興味が無く、何の責任も感じないかのように、無関心に、ただ立っている者は、彼らの方針を変えるか、または直ちに兵隊の列を出たほうが良い。

(5 T・三九四ページ)

### 家族一人一人のための場所

真理が中から働いて外に表れるような場所に、これを隠す働きを、男性と同様、女性たちも

することができ。今日の危機に当たって、み事業の中の彼らの部署につくことができる。そして主は彼らを通して働かれるのである。もし彼らが、自分たちの義務を十分に感じ、神の靈の感化のもとに伝道するならば、今日ちようど必要な沈着さを彼らは持つようになる。救い主は、これらの自己犠牲的な婦人たちに、み顔の光を反映させ、それによって男子にもまさる力を与えられるのである。彼女たちは、家庭で、男子にできない働き、すなわち精神生活に影響を及ぼす働きをすることができる。男性には到達できない人々の心に、彼女たちは近づくことができる。彼女たちの働きが必要である。思慮深い、謙遜な婦人たちは、人々の家庭で真理を彼らに説明することによって、良い働きをすることができる。このように説明された神のみ言葉が、パン種の作用を果たし、その感化によって全家族が信仰に入るのである。

（9 T・一二八、一二九ページ）

すべての人が何かをすることができる。言い逃れをするために、ある人々は、「わたしの家庭の義務が、わたしの子供たちが、わたしの時間と金銭を必要としている」と言う。両親よ、あなたの子供たちが、あなたの助手になって、主のために働くあなたの力や能力を増すはずである。子供たちは、主の家族の中の若いメンバーなのである。彼らが自分を神にささげるように導かなければならない。彼らは創造によっても贖いによっても神のものなのである。彼らは、



彼らの肉体と精神と魂のすべての力が神のものであることを、教えられなければならない。さまざまな無私の奉仕を手伝うように彼らを訓練すべきである。あなたの子供たちが妨げになるようにさせておいてはならない。あなたと一緒に、肉体的にも霊的にも、重荷を、子供たちに分担させなさい。他の人々を助けることによって、彼ら自身の幸福と有用性を増すのである。

(7 T・六三ページ)

キリストのためにする、われわれの働きは、まず家庭で家族に対して始めるべきである。青年の教育は、過去になされて来たのとは違ったやり方でなされなければならない。彼らの幸福のためには、今まで与えて来たよりも、はるかに多くの骨折りが必要である。これ以上に重要な伝道地は他にない。両親は、言葉と模範によつて、子供たちに、信仰を持たない人々のために働くよう教えるべきである。子供たちは、老人や病人に同情し、貧しい者や悩む者の苦しみを軽くするために努力するように、教育されなければならない。伝道の働きに勤勉であるように教えるべきであり、幼少のころから、他の人々の益のためと、キリストの働きの進展のために、自制することと犠牲を払うことを、教え込まなければならないが、それは彼らが、神の同労者となるためである。

(6 T・四二九ページ)

新しい地方に移転することによるあかし

神の民が部落を作ったり、大きな地域社会を作って一緒に住むことは、神の意向ではない。キリストの弟子たちは地上における彼の代表者たちであるから、暗黒の世の光として、都市にも町々にも村々にも、国中に散在するよう神は計画しておられる。彼らは、神のための伝道者となつて、救い主来臨の近いことを、信仰と行いによってあかししなければならない。

われわれの教会の平信徒たちは、彼らがまだ、ほとんど開始していない働きを、成し遂げることがするのである。だれも、世的な便宜のためにだけ、新しい地方に移転すべきではないが、生計を立てるために道が開かれるならば、真理に堅く立った家族が、一か所に一、二家族ずつ、伝道者として働くために入りなさい。彼らは、魂に対する愛と、彼らのために働く責任を感じ、彼らを真理に導く方法を研究すべきである。われわれの印刷物を配布し、家庭で集会を開き、隣人と親しくなつて、それらの集会に来るように招待することができる。このようにして、良い行いにより彼らの光を輝かすことができるのである。

働き人たちは一人で神と共に立ち、人々の救いのために泣き、祈り、働きなさい。自分は競

走しているのであって、不滅の冠を得るために奮闘しているのだということを覚えなさい。多くの人は神によく思われるよりも人の賞賛を愛するが、あなたの場合は謙遜な気持ちで働きなさい。恵みのみ座の前に隣人を連れて行き、彼らの心を神が感動させて下さるように嘆願する時、信仰を働かせることを学びなさい。このようにして効果的な伝道の働きをすることができ。牧師や文書伝道者には耳を傾けないような人々が、心を動かされるかも知れないのである。新しい地方で、こうして伝道する者は、人々に接近する最上の方法を学び、他の伝道者たちのために道を備えることができる。

(8 T・二四四、二四五ページ)

隣人を訪問して彼らの魂の救いに関心を示しなさい。霊的な全エネルギーを活動へと覚醒させなさい。あなたが訪問する人々に、すべての物の終わりが近いことを告げなさい。主イエス・キリストは彼らの心の戸を開き、彼らの思いに永続的な印象を与えられる。

神の民は、日常の仕事に携わっている間にも、他の人々をキリストに導くことができる。そして、そういう事をしている時に、救い主がそば近くおられるという尊い確信を持つのである。自分自身の弱い努力に頼るがままに放っておかれると考える必要はない。キリストは、暗黒の中でもがいている哀れな人々を、元気づけ励まし、力づけるために語る言葉を、彼らにお与えになる。そして贖い主の約束が成就していることを悟るとき、彼ら自身の信仰が強められるの

である。他の人々に対して自分が祝福となるだけでなく、キリストのための働きが自分自身に祝福をもたらすのである。

（9 T・三八、三九ページ）

聖書をそのまま人々に示すことによって大きな働きをすることができる。神のみ言葉を、すべての人の家に運び、その明白な教えを、各人の良心に説きすすめ、「聖書を調べよ」（ヨハネ五ノ三九）との救い主の命令をすべての人に告げなさい。聖書をそのまま信じ、神からの啓発を求め、光が照らされた時は、喜んで尊い光のひとつひとつを受け入れ、結果には大胆に服するよう、彼らに諭しなさい。

（5 T・三八八ページ）

われわれの教会員の間では、聖書研究や文書の配布による戸別訪問伝道がもつとなされなければならぬ。自分を忘れて真理の宣伝のために働き、資力をもつて神のみ事業を支持することを、神のうつわである人間が特権と考える時に初めて、クリスチャンの品性は均整がとれて完全に形成され得るのである。われわれは、すべての水のほとりに種をまき、神の愛の中に自分の心を守り、昼の間に働き、主に与えられた資力を用いて、生じて来る義務は何であれ果たさなければならぬ。われわれの手が見出すなすべきことは何でも、忠実にしなければならぬ。犠牲を払うように要求されることはすべて喜んですべきである。すべての水のほとりに種をまくとき、われわれは「豊かにまく者は、豊かに刈り取る」（コリント第二・九ノ六）こと

を悟るのである。

(9 T・一二七ページ)

### 宗教の実際的な表示

活動的に、熱心に、主のために働かなければ、われわれの信仰の告白に対し偽ることになる。熱心な、実際的な働きによつて示されるキリスト教だけが、罪過と罪によつて死んでいる人に感動を与えるのである。祈る、謙遜な、信仰を持っているクリスチャン、すべての人を試験する救いの真理を知らせることが最大の願いであることを、行動で示す者たちが、主のために豊かな魂の収穫を集めるのである。

われわれの教会の信仰が、これほど弱々しく、氣力に乏しい事の言いわけは立たない。「望みをいだく捕われ人よ、あなたの城に帰れ」(ゼカリヤ書九ノ一二)。キリストの中に、われわれのための力がある。彼は父のみ前におられる、われわれの助け主である。彼はその使者たちを彼の支配下にある各地に急いで派遣し、みむねを彼の民に伝達される。彼は彼の教会の中を歩かれる。彼は信者たちを清め、向上させ、品位を高めたいと望まれる。真実に彼を信じる人の感化は、この世界で生命の香りとなる。彼は、その右手に星を持っておられるが、これら

を通して世に彼の光を輝かせることが、彼の目的である。こうして彼の民を、天にある教会の、より高い奉仕のために準備したいと望んでおられるのである。彼は、われわれがなすべき大きな仕事を与えておられる。正確さと決意をもつてわれわれはこれをしよう。真理が何をわれわれのためになしたかを、われわれの生活によって示そう。

各種の伝道事業を今日の状態にまで育てるためには、克己と自己犠牲と不屈の精力が必要であった。今日活動の舞台に登場して来るある人々は、このメッセーの指導者たちが経験したような大きな克己や勤勉さ、あれほどのつらいやな働きは今日不必要である。時代は変わったのである。神のみ事業に、今はもつと資金もあるから、メッセーの始まったところ多くの人が会わなければならなかったような苦しい事情に自分をおく必要はない、と感じて、自分たちの無能力さに甘んじ、安心してゐる危険がある。

しかし、今日の働きの段階で、その開始時に表された同じ勤勉さと自己犠牲が表されるならば、今日成し遂げられているものの百倍のものをみるはずである。

（6 T・四一七 四一九ページ）

われわれの信仰告白は崇高なものである。安息日を守る再臨信徒として、われわれは、神のすべての律法に従い、贖い主の来臨を待ち望んでいると公言する。非常に厳粛な警告のメッセ

ージが神の忠実な少数の者に委託された。われわれは、自分に負わされた大きな責任を認識していることを、言葉と行動によって示さなければならない。われわれは日常生活によって天父をあげていること、われわれが天とつながっていて、イエス・キリストと共同の相続人であること、そして、彼が力と大いなる栄光とをもって現れる時、われわれは彼に似るものとなることを、他の人々が見ることができるよう、われわれの光は、はっきりと輝かなければならないのである。

(4 T・一六ページ)





## 第六章

### ここにわたしがおります。 わたしをおつかわしてください

終わりは近い、音もなく夜、盗人が近づくように、こっそりと、気付かないうちに、忍び寄って来ている。われわれは、これ以上ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいるよう、主が助けて下さるように。真理は間もなく、輝かしく勝利するのであって、今日、神の同労者となることを選ぶ者は、すべて、それと共に勝利する。時は短い。だれも働けない夜がすぐ来る。現代の真理の光を受けて喜んでいる人々は、今、急いで他の人たちに真理を分け与えなさい。主は「わたしはだれをつかわそうか」とたずねておられる。真理のために犠牲を払いたいと望む者は今「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」と答えるべきである。

われわれは、隣人や知人の間でするように神が望んでおられる福音伝道の働きの、一小部分を果たしてきたに過ぎない。国内の各都市に真理を知らない人々がいる。また、海のかなたの

広い世界に、われわれが土地を耕して、種をまかなければならない多くの新しい伝道地がある。

（牧師と教会役員に対する訴え）

われわれは、悩みの時のまさにその瀬戸際に立っているものであつて、ほとんど夢想だにしない難局が、前に控えている。下からの力が人類を導いて、天に向かって戦わせようとしている。人間は神の律法を無効にするために、サタンの代理者たちと同盟を結んでいる。世界の住民は、急速に、洪水で一掃されたノアの時代の世界の人々や、天からの火で焼き尽くされたソドムの住民のようになりつつある。サタンの勢力は、永遠の事実から人々の思考を、いつもそらせておくために働いている。敵は彼自身の目的に合うように、事を手配した。世の中の事業やスポーツや、時代の流行、これらの事が男女の思いを占領している。娯楽と、無益な読書が、判断をそこなわせている。永遠の破滅に導く広い道に、長い行列が行く。暴力や、お祭り騒ぎや、酒酔いで充満した世界が、教会を改変しつつある。義についての神の標準である、神の律法は、無効であると言われている。

（9 T・四二、四三ページ）

われわれは、終末の預言が成就するまで、それについて何も言わずに待つべきであろうか。その時が来たら、われわれの言葉は、どれほどの価値があるうか。われわれは、神の審きによる災いが罪人の上に降るまで待つて、それを避ける方法を告げるのであろうか。神のみ言葉に

対する、われわれの信仰は、どこにあるのか。預言された事が実現するのを見なければ、彼が言われたことを信じないのか。光は非常に明瞭に、われわれを照らし、エホバの大いなる日が「戸口まで」近づいていることを示している。遅過ぎないうちに、読んで理解しよう。

(9 T・二〇ページ)

### あなたの才能が必要にこたえる

主は、彼の大いなる計画の中に一人びとりの場所を備えておられる。不必要な才能は与えられていない。その才能が小さいにしても、神はのために場所を用意しておられるのであって、その一タラントが、忠実に用いられるならば、それが果たすように神が計画しておられるその働きをするのである。素朴な一般庶民の才能が、戸別訪問の働きに必要であって、この働きでは、すばらしい才能を持つ人よりも多くのことができるのである。

(9 T・三七、三八ページ)

人が自分の能力を神の指示通りに用いるならば、才能はふえ、能力は増大し、失われた者をたずねて救う天来の知恵が与えられる。しかし、教会員が無気力で、他の人々に伝えるよう神

から与えられた責任を、おろそかにしているならば、どうして天の宝を受けることを期待できるよう。クリスチャンであることを公言する者が、暗黒にいる人々に光を与える責任を感じず、恵みと知識を分け与えることをやめる時、彼らの認識力は減退して、天から授けられた富の豊かさを評価する力を失う。そして自分が、その価値を見ることができないので、他の人々にそれを提供する必要性を悟らないのである。

各地に大きな教会が集まっているのをわれわれは見る。その教会員たちは真理の知識を持っていながら、多くの者は光を分け与えようとしていないで、生命の言葉を聞くことに満足している。彼らは、働きの進展に対する責任を、あまり感じないし、人々の救いに、ほとんど関心がない。世俗の事には全く熱心であるが、自分の宗教を仕事の中に適用しない。「宗教は宗教で、仕事は仕事だ」と彼らは言う。彼らは、それぞれに特有の領域があると信じるが、しかし、「別々に分けておこう」と言うのである。

機会をおろそかにし、特権を乱用したために、これらの教会の会員たちは、「わたしたちの主また救主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて」（ペテロ第二・三ノ一八）成長していない。そのために彼らは、信仰に弱く、知識に乏しく、経験においては子供である。彼らは真理に根ざし真理を基としていない。もしこのままの状態にいるならば、真理と誤りゅうを見分

ける靈的視力を持たないために、終わりの時代の多くの惑わしが必ず彼らを欺くであろう。

(6 T・四二四、四二五ページ)

### 神は聖靈の賜物を授けたいと望まれる

われわれの教会の信者が住んでいる地域社会で、経験の深い教役者たちが、特別な努力をしている時、その伝道地の信者は、主が働かれる道を開くために、全力を注ぐ最も厳粛な義務がある。よく祈って心を探り、神と兄弟たちに協力することを妨げるすべての罪を捨てて、王の大路を備えなければならない。

夜の幻のうちに、神の民の間に起こる大改革運動の光景がわたしの前を通過した。多くの人が神を賛美していた。病人は癒され、他の奇跡も行われていた。ペンテコステのあの大きな日の前に表されたような、とりなしの精神が見られ、何百、何千人もの人々が、多くの家庭を訪問して、彼らの前に神のみ言葉を聞いているのが見られた。人々の心は聖靈の力によって罪を悟り、真実な改心の精神が表された。真理の宣伝のため、あらゆる方面に門戸が開かれていた。世界は、天の威光で輝いているように見えた。神の真実な謙遜な民は大きな祝福を受けた。

わたしは、感謝と賛美の声を聞いた。そこには一八四四年にわれわれが見たような改革が起こっているようであった。

（9 T・一二五、一二六ページ）

神は聖霊の賜物によって、彼の民を元気づけ、彼の愛のうちに新たにバプテスマを授けたいと望んでおられる。教会内に聖霊が欠乏する必要はないのである。キリストの昇天後、聖霊は、待つて、祈つて、信じていた弟子たちに、一人一人の心を満たすほど豊かに、力をもつて下つた。将来、地上は神の栄光によつて照らされるのである。真理によつて清められた人々から、世界に清い感化が及ぼされるのである。世界は恵みのふん囲氣で囲まれ、聖霊が人の心に働き、神のものを受けてそれを人々に知らせるのである。

（9 T・四〇ページ）

主は、彼を本当に信じるすべての者のために、喜んで偉大な働きをなさるうとしておられる。教会の一般信徒たちが目覚めて、自分たちにできる働きをなし、自費で戦いを続け、各自が人をイエスに導くために、どれだけ的事を果たせるかを見るならば、多くの人がサタンの列を離れて、キリストの旗の下に立つのをわれわれは見るであろう。もしわれわれの民が、これら数語の教え（ヨハネ一五ノ八）の中に与えられている光に従つて行動するならば、必ず神の救いを見るであろう。驚くほどのリバイバルが起こり、罪人は改心し、多くの魂が教会に加えられる。われわれの心をキリストと一致させ、生活を彼の働きと調和させる時、ペンテコステの

日に弟子たちの上に下った聖霊が、われわれの上に下るのである。

(8 T・二四六ページ)

### 遅らせることの危険

夜の幻の中で、非常に印象的な光景が、わたしの前を通り過ぎた。巨大な火の玉が美しい邸宅の間に落ちて、またたく間に破壊してしまうのをわたしは見、だれかが「われわれは神の裁きが地上に下ることは知っていたが、こんなに早く下るとは知らなかった」と言うのを聞いた。他の人々は、苦しみの声をあげて、「あなたは知っていたのだ。それなら、なぜ、われわれに言わなかったのか。われわれは知らなかったのに」と言った。どこでもわたしは同様な非難の言葉を語っているのを聞いた。

非常に悩みながら、わたしは目をさました。再び眠りについたが、わたしは大きな集会に出ているように感じられた。権威者の一人が一同に向かって演説をしていて、世界地図が彼らの前に広げられていた。彼は、地図が、耕されなければならない神のぶどう園を描いたものであると言った。だれでも天からの光に照らされた者は、その光を他の人々に反映させなければな

らない。多くの場所で光が点火され、これらの光から、また他の多くの光が点火されなければならない。

次の言葉が重ねて言われた。「あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によつてその味が取りもとされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである。あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」（マタイ五ノ一三 一六）。

過ぎて行く毎日が、われわれを終わりに近づけている。が、それはまた、われわれを神に近づけているだろうか。われわれは目をさまして祈っているだろうか。われわれが毎日交わっている人々が、われわれの助けや指導を必要としている。彼らは、適切な言葉が、聖霊によつて、ねらった所に打たれる釘のように胸にこたえるような心の状態にいるかも知れない。明日は、これらの魂の中の何人かが、われわれの二度と届かない所へ行ってしまうかも知れない。これらの、旅路を共に行く人々に対する、われわれの感化はどうであらうか。彼らをキリストのも



のにするために、われわれはどんな努力を払っているだろうか。

(9 T・二七、二八ページ)

天使たちが四方の風を引きとめている間に、われわれは全能力を注いで働かなければならない。これ以上遅れないで、われわれのメッセージを伝えなければならない。われわれの宗教は、信仰と力の宗教であって、キリストがその導き手であること、そして聖書が神のみ言葉であることを、天上の世界と、墮落した現代の人々に、立証しなければならない。人々の魂は、危険な状態にある。彼らは神の王国の民になるか、あるいはサタンの圧制の奴隷になるか、そのどちらかである。すべての者が、福音によって示される希望をつかむ特権にあずからねばならないのであるが、宣教する者がいなければ、どうして聞くことができようか。人類は、神の面前に立つことができるために、道徳的革新、すなわち品性の準備が必要なのである。福音の使命に対抗して働くよう計画されて、広く行き渡っている誤った理論のために、滅びそうになっている人々がある。今、自分を完全にささげて、神の同労者になるのは、だれであろうか。

(6 T・二一ページ)

今日、われわれの会衆を構成している人々の大部分は、罪とがの中で死んでいる。彼らは、ちようつがいと動く戸のように、出たり入ったりしている。最も厳粛な、魂をゆり動かすよう

な真理を、彼らは長年満足して聞いてきたが、しかしそれらを実行に移してはこなかった。そのため彼らは、真理の尊さについて、だんだん無感覚になっている。譴責や警告の感動的なあかしも、彼らを悔い改めへと覚醒しない。人間のくちびるを通して神から聞こえて来る最も美しい歌 信仰による義認と、キリストの義 も、彼らから愛と感謝の反応を呼び起こさない。天の商人が、信仰と愛の非常に高価な宝石を、彼らの前に並べても、また、「火で精錬された金」と、身につけるように「白い衣」と、見えるようになるために「目薬」を、彼から買うように勧めても、彼に対して心を、はがねのようにかたくなにして、彼らのなまぬるさを愛と熱意に変えない。信仰を告白しながら、その力を否定している。彼らが、この状態を続けるならば、神は彼らを捨てられるであろう。彼らは、自分たち自身を、神の家族のメンバーとしては不適当な者に行っているのである。

（6 T・四二六、四二七ページ）

教会員たちは、彼らの名前が教会員名簿に記録されていても、その事が彼らを救いはしないということ覚えなさい。彼らは、恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげなければならぬのである。日ごとに彼らは、キリストの指示に従って品性を築かなければならない。彼らは、キリストにつながって、たえず彼に対する信仰を働かせていなければならない。このようにして彼らは、キリストにある男女の完全な高さ 健全で明るく、感謝

にあふれ、神によってますます明るい光へと導かれて行くクリスチャンに成長していくのである。もし、彼らが、こういう経験をしていなければ、ある日「刈入れの時は過ぎ、夏もはや終わった、しかし、わたしの魂はまだ救われない。なぜわたしは、災いから逃れるために、要さいに逃げ込まなかったのだろう。なぜわたしは、自分の魂の救いを粗末にし、恵みのみ霊を軽べつしたのだろう」と、悲痛な嘆きの声をあげる人々のひとりとなるであろう。

(9 T・四八ページ)

真理を信じると、長い間公言して来た兄弟姉妹方、わたしは個人的に、あなたにお尋ねする。あなたの行動は、天からあなたに授けられた光と特権と機会に調和していたであろうか。これは重大な質問である。義の太陽が教会の上にのぼった。光を輝かすことは教会の義務である。前進することは、各自の特権である。キリストにつながっている者は、神の子の恵みと知識とにおいて、ますます豊かになり、完全な高さの男女になる。もし、真理を信じることを主張する者が、みな自分の能力と機会を最高に利用して、学び、また働いていたならば、彼らはキリストに在って強くなっていたはずである。職業が何であろうと、すなわち、農夫、機械工、教師、あるいは牧師であろうと、完全に自分を神にささげるならば、天の主人のための有能な働き人となったはずである。

(6 T・四二三ページ)

## 教役者は教会員を訓練する

これほど多くの説教がなされても、献身的な働き人を多く作ってこなかったことは、明らかである。この問題は、非常に重大な結果を意味するものとして考慮されなければならない。永遠にかかわるわれわれの将来は、危険にさらされている。教会は、光を広く照らすために自分の能力を用いてこなかったので、衰えて来ている。全員が、自分たちの光を実際に役立てるよう、主からの教えとして、注意深い指示が与えられるべきである。教会を監督している者は、能力のある教会員たちを選んで、責任を負わせ、同時に、どのようにして最も良く他に奉仕し、他を祝福することができかを指導すべきである。

（6 T・四三一ページ）

機械工も法律家も商人も、あらゆる職業人は、自分の仕事の熟達者になるために自分を教育する。キリストの信者たちは、それよりも理解が悪くていいであろうか。そして、主の働きに携わっていると口で言いながら、用いる方法や手段について無知であってよいだろうか。永遠の生命を獲得する事業は、考慮すべきこの世のすべての問題を越えて重要なのである。魂をイエスに導くためには、人間の性質を知り、人間の心理を学ばなければならない。真理の大きな

課題について男女に接近する方法を知るためには、多くの注意深い思考と熱心な祈りが必要である。

(4 T・六七ページ)

教会が組織された時はすぐ、牧師が教会員たちを働かせるようにしなさい。彼らは伝道して成功する方法を教えてもらう必要がある。牧師は、説教するよりも多くの時間を、教育することとに費やすようにしなさい。牧師は人々に、自分たちが受けた知識を他の人に与える方法を、教えるようにしなさい。新しい信者には、この働きにおいて、より経験の深い人々から助言を求めるよう教えるべきであるが、また、牧師を神の代わりにしないように教えなければならぬ。

われわれの信者に与えることのできる最大の助けは、彼らに、神のために働き、牧師でなく神に頼るように教えることである。キリストが働かれたように働くことを学ばせなさい。彼の働き人たちの軍隊に加わり、彼のために忠実な奉仕をするようにさせなさい。

(7 T・一九、二〇ページ)

教師が先に立って人々の間で働かならば他の人はそれと協力し、その模範から学ぶのである。一つの模範は多くの言葉にまさる。

(ミニストリー・オブ・ヒーリング・セミナーページ)

教会の靈的狀態を監督している者は、教会の各メンバーが、神の働きの中で、何かの役割を果たすように、機会を与える方法や手段を工夫すべきである。この事は、過去において、いつも行われてはいなかった。全員の能力が活動的な働きに利用されるような計画が、完全に実行されてこなかったのである。そのためにどれだけ損失をしたかを認識する者は、ほんのわずかしいかない。

どの教会にも、適当な種類の働きによつて育成するなら、この事業のための大きな助けとなり得る才能がある。教役者たちを、大小すべてのわれわれの教会におくり、教会員たちに、教会建設のためと未信者たちのために、どのように働くかを教えるようにさせるための、組織的な計画がなければならぬ。**必要なのは訓練であり、教育である。**すべての者がこの時代のための働きに関して賢明になるために、心も精神も集中し、**自分に最も適した事ができるように、自分を準備するようにさせなさい。**

われわれの教会を築くために今必要なことは、賢明な伝道者が教会内に才能を見付けて、育てるという価値のある仕事である。すなわち、主のご用のために教育することのできる才能を育てるのである。教会を巡回して伝道する人々は、兄弟姉妹たちに、**伝道の働きをする実際的な方法を教えるべきである。**また、青年を訓練するためのクラスを開きなさい。若い男女が、

家庭で、隣人間で、そして教会内で、伝道者になるように、教育されなければならない。

(牧師と教会役員に対する訴え)

天使たちは、なされなければならない大事業をするために、人間の働き手、すなわち教会員たちと協力しようと、長い間待ち続けている。彼らは、あなたを待っているのである。伝道地は非常に広大であり、計画は内容が大きいので、清められた心の持ち主はすべて、神の力のうつわとして働きにつかなければなくなる。

(9 T・四六、四七ページ)

もしクリスチャンが協調して行動し、一つの目的を成就するために、一つの力の指示を受けて、一体となって前進するならば、彼らは世界を動かす。

(9 T・二二一ページ)

「町の大通り」で呼びかけるべき招声を、世界的な働きで活躍しているすべての人に、教師や指導者たちに、宣べ伝えなければならない。一般社会で重い責任を負っている人々、すなわち、医師や教師、弁護士や裁判官、官吏や実業家たちに、はっきりした、明瞭なメッセージを与えるべきである。「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」(マルコ八ノ三六、三七)。

われわれは、おろそかにされている貧しい人々について、多く語り、また書くが、おろそか

にされている金持ちにも、目を向けるべきではなからうか。多くの者は、この階級を、見込みのないものとして見ているので、サタンの力に惑わされて盲目になり、永遠の希望のないこれらの人々の目を開くために、ほとんど何もしない。多くの富める人々が、外観で判断されて、見込みのない人間として無視されたために、警告されずに死んで行った。しかし、無関心なように見えても、この階級の中の大部分の人は、心に悩みを持っているということを、わたしは示された。霊的な食物に飢えている金持ちが多くいる。役人生活をしている者の多くが、自分たちの持つていない何かの必要を感じている。彼らは、利益を受けるとは思わないから、教会へ行く者は少ない。彼らが聞く教えは魂に触れない。われわれは、彼らのために個人的な努力を払わないでいてよいだろうか。

ある人は「出版物を使って彼らに手を届かせることはできないのか」とたずねる。この方法で届くことのできない人々が、たくさんいる。彼らが必要としているものは、個人的な伝道である。特別な警告を受けずに、彼らは滅びなければならないのだろうか。昔はそうではなかった。神のしもべたちが、高い地位にある人々につかわされて、彼らは主イエス・キリストにのみ平安と安息を見出すことができることを教えられたのであった。

天の王は、失われ、墮落した人類を救うために、われわれの世界に來られたのである。彼の



努力は、ただ社会から見捨てられた人々のためにだけ払われたのではなく、高貴な地位にある人々のためにも払われたのであった。彼は、神を知らず、律法を守っていない上流社会の人々に近づくために、賢明に努力された。

キリストの昇天後、同じ働きが継続された。わたしの心は、コルネリオに対して主が表された関心について読む時、感動させられる。コルネリオは高い地位にある人であって、ローマの軍隊の将校であつたが、自分が受けたすべての光に、厳格に従って歩んでいた。主は、天から彼に特別なメッセージをおくり、また別のメッセージによって、ペテロに指示して彼を訪れさせ、彼に光を与えるようにされた。光を求めて祈っている人々に対する、神の憐みとやさしい愛を思うことは、伝道に携わっているわれわれにとって、大きな励ましとなるべきである。

コルネリオと同じような人として、わたしに示された人々、すなわち、神がご自分の教会に属させたいと望んでおられる人々が多数いる。彼らは、神の戒めを守っている民に共鳴しているが、しかし彼らを社会に結びつけている系が、しっかりと彼らをとらえている。彼らは、身分の低い人々と立場を共にする精神的な勇気がない。われわれは、責任と誘惑のゆえに特別な骨折りが必要としているこれらの魂のために、特に努力をしなければならないのである。

わたしに与えられた光によって、わたしは、「主はこう仰せられる」という明白な言葉が、

社会で勢力と權威を持っている人々に、今語られなければならないことを知っている。彼らは、神が重要な委託財産を委託された管理人なのである。もし彼らが主の招声を受け入れるならば、神はみ事業の中で彼らを用いられる。

上流社会に伝道するのに特に適した人々がある。これらの人は、日々主を求めて、この人たちに手を届かせる方法を研究すべきである。ただ彼らと気まぐれなつき合いをするのではなく、彼らの魂に対する深い愛と、彼らが聖書にある真理を知るようにとの真実な関心を表して、個人的な努力と生きた信仰によって彼らを捕えるのである。

## 第七章 教会の出版物

われわれの出版事業は、神の指示と、彼の特別な監督のもとに設立された。それは、特殊な目的を果たすために計画されたものである。セブンスデー・アドベンチストは、世俗から離れた、特別な民として、神によつて選ばれたのである。真理の大きな刀で、神は彼らを世の石切り場から切り出し、ご自身と結びつけられた。また、神は彼らをご自分の代表者とし、救いの最後の働きにおいてご自分の大使となるように彼らを呼び出されたのである。人間にゆだねられた真理のうちで最も大いなる真理の富、神から人間におくられた警告の中で最も厳粛で恐るべき警告が、世界に与えるために彼らにゆだねられている。そして、この働きを成就するため、われわれの出版所は最も効果的な機関の一つである。

われわれの印刷所から送り出される出版物は、人々に、神に会う備えをさせるためのものである。

(7 T・一三八、一三九ページ)

もし他の働きと比較して、一つ重要な働きがあるとすれば、それは、われわれの出版物を一般社会の人々に読ませることによって、聖書を調べるように導くことである。伝道の働き、すなわち、われわれの出版物を家庭に紹介し、交わり、彼らと共に、また彼らのために祈ることは、良い働きであって、牧師の働きをするために男女を教育するものである。

（4 T・三九〇ページ）

出版物を人々に勧める働きは伝道事業の重要な、最も有利なものである。出版物は伝道集会の開催できない場所に行くことができる。こうした所では、忠実な文書伝道者は、生きた説教者の代わりをつとめる。文書伝道の働きによって、他の方法では、聞くことのない多くの人々に真理を紹介するのである。

文書伝道者は津々浦々にまで出て行かなければならない。この働きの重要性は牧師の働きと全く同じである。私たちの前にある大いなる働きを完成するためには、生きた説教者と無言の使者の二つが必要である。

（文書伝道・八ページ）

神は文書伝道事業を、われわれの書物に含まれた光を人々に示す手段として定められたのであるから、文書伝道者は、人々の霊的な教育と啓もうのために必要な書籍を、できるだけ早く彼らの前に提供することの重要性を、強く感じなければならぬ。これこそ主が、今日、彼の

民に行うように望んでおられる働きである。文書伝道者として働くために、神に献身をした者はすべて、最後の警告のメッセージを世界に与える助けをしているのである。われわれは、この働きを、どんなに高く評価してもしすぎることはない。なぜなら、文書伝道者の努力なしには、多くの人々は決して警告を聞くことがないからである。

(6 T・三一三ページ)

われわれの出版物は、至る所に行かねばならない。それらを多くの国語で発行しなさい。この手段を通し、また、生きた教師を通して、第三天使の使命が与えられなければならない。現代の真理を信じるかたがた、目をさましなさい。真理を理解している人々を助けて、これを宣傳伝えさせるために、あらゆる手段を講ずることが、現在、あなたがたの義務である。われわれの出版物の売上金の一部は、人々の心の目を開き、心の新田を耕す文書を、より多く発行する設備を増すために用いられねばならない。

(9 T・六二ページ)

人々が、生きた説教者からメッセージを聞いている場所でも、文書伝道者は牧師と協力して、彼の働きを続行すべきであるということを、わたしは教えられて来た。それは、牧師が忠実にメッセージを与えても、人々は全部を記憶することができないからである。したがって印刷物は、現代の真理の重要性に対して彼らを覚醒させるためばかりでなく、真理に根ざし真理を基

として生活させるために、そして、人を迷わす誤りに対抗して彼らを堅く立たせるために、欠くことができないのである。雑誌や書籍は、現代のためのメッセージを絶えず人々の前に提示しておく主の手段である。人々を啓もうし、真理に堅く立たせるのに、話すことだけでなされる伝道が果たし得る以上に大きい働きを、出版物がするのである。文書伝道者の働きを通して、人々の家庭に置かれる無言の使者たちは、あらゆる点で福音伝道を強める。それは、聖霊が、説教を聞く人々の心に印象を与えるように、彼らが書物を読む時、その心に印象を与えるからである。牧師の働きに伴うのと同じ天使たちの奉仕が、真理を含んだ書物には伴うのである。

（6 T・三一五、三一六ページ）

もし希望するならば、それにふさわしい学生たちが、これらの書籍を売る事によって学費を得るように助ける、賢明な計画を立てなさい。われわれの養成学校において、自給しながら一つのコースを終えるために、このようにして学費を得る者は、他の伝道地で開拓伝道の働きをするのに彼らを準備させる、非常に貴重な実際の体験を得るのである。

（9 T・七九ページ）

教会の信徒が文書配布の重要性を認識するときこの働きにもっと多くの時間をささげるようになる。

（文書伝道・七ページ）

恩恵期間の続く限り、文書伝道の働く機会がある。

(6 T・四七八ページ)

兄弟姉妹方よ、もしもあなたが心から出版機関のことを考え、あなたの祈りと資力をもって支えるならば、主は喜ばれる。それが神の最も豊かな祝福を受けるよう朝夕祈りなさい。批判やつぶやきを奨励しないようにしなさい。不平やつぶやきがあなたの口から出ないようにしなさい。天使たちが、それらの言葉を聞いていることをおぼえなさい。これらの機関は神が指定されたものであることを、すべての人に悟らせなければならない。自分自身の利益のためにそれらをけなす者は、神に対して申し開きをしなければならぬ。神は、ご自分の働きに関係しているすべてのものが、神聖なものとして取り扱われるよう意図しておられるのである。

(7 T・一八二、一八三ページ)





## 第八章 管理者の務めについての勧告

物惜しみをしない精神は天の精神である。キリストの自己犠牲の愛は、十字架の上に示されている。人間が救われるために彼は、彼の持つておられるすべてを与え、そしてご自身を与えて下さったのである。キリストの十字架は聖なる救い主に従う信者すべての慈善心に訴える。そこに例証されている原則は、ただ与えることである。これが実際の慈善と善行になって実行される時、それがクリスチャン生活の真の実である。世俗の人々の主義原則は、ただ獲得することであつて、彼らはそれによつて幸福を得ることを期待する。しかし、あらゆる関係において実行して見る時、その結果は不幸と死である。

キリストの十字架から輝いている福音の光は、利己主義を譴責し、物惜しみしない心と慈善心を奨励している。与えるようにとの要求が増えて行くことが、悲しく思われるようであつてはならない。神はみ摂理のうちに、彼の民を限られた行動範囲から呼び出し、より大きな事業

に着手させようと召しておられる。道徳的な暗黒が世界をおおっている今日、無限の努力が要求されている。神の民の多くは、世俗的な心と貪欲心によって誘惑に陥るという危険の中にある。彼らは、自分たちの財産に対する要求が増すことは、神のあわれみであると理解すべきである。慈善心を働かせるように求めるその対象を、彼らに示さなければならない。さもなければ彼らは、偉大な模範者の品性に似ることはできない。

キリストは、彼の弟子たちに「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」と命令することによって、彼の恵みに関する知識を普及する働きを人間に与えられたのである。しかし、ある人々は宣べ伝えるために出て行き、他の人々は、地上での彼の働きを支えるための献金を捧げるように、彼は要求し、この要求に応じるよう呼びかけておられる。彼は、人間の手に、金銭を渡されたが、それは、神の賜物が人間の通路を通して流れ、同胞の救いにおいてわれわれがするよう指定されている働きをなすためである。これは、人間を高めるための神の方法の一つである。これこそ人間に必要な働きである。なぜならば、それは人の心に最も深い同情心を起こさせ、精神の最高の能力を働かせるからである。

（9 T・二五四、二五五ページ）

正しく指導するならば、慈善心は人間の精神的道徳的エネルギーも引き出して、貧しい人を

祝し神のみ事業を進展させるきわめて健全な行動を起こすように、彼らを奮い立たせるのである。

(3 T・四〇一ページ)

貧しい兄弟を助け、あるいは真理を広めて神のみ事業を促進する機会は、すべて真珠や、天の銀行の預金のようなもので、安全に保管してもらうためにあなたがたが前もって送ることができるものである。

(3 T・三四九ページ)

「すべて、心から喜んでする(与える)者から」

神が彼の事業を進展させるために定められた唯一の手段は、物資をもって人々を祝福することである。彼は、人間に日光と雨を与え、植物を茂らせ、健康を与え、富を得る能力を授けられる。われわれの祝福はすべて、彼の豊かなみ手から与えられるのである。そこで彼は、男女もまた、その一部分を、十分の一献金やその他の献金、例えば感謝献金や自由献金、罪のための献金によって彼にお返しして、彼らの感謝を示すよう望んでおられる。

(5 T・一五〇ページ)

幕屋の建造と神殿の設立に当たってユダヤ人の示した惜しみなく与える精神は、後世のどの

時代のクリスチャンにも見られないほどの慈善の精神を例証するものである。彼らは、エジプトの長い奴隷生活から解放されたばかりであって、荒野のさすらい人たちであった。しかも、あわただしい旅をしていた彼らを追撃して来たエジプト軍から、やっと救われるや否や、エホバの言葉がモーセに臨み、「イスラエルの人々に告げて、わたしのためにささげ物を携えてこさせなさい。すべて、心から喜んでする者から、わたしにささげる物を受け取りなさい」（出エジプト記二五ノ二）と言われたのである。

神の民の財産はわずかで、それをふやす有望な見込みもなかった。しかし、神の幕屋を建てるという一つの目的が彼らの前にあった。主が仰せになったのであって、彼らは、そのみ声に従わなければならないのであった。彼らは、何一つ惜しまなかった。すべての者が、すすんで与え、利益の中のある量ではなく、実際の所有物を大量に捧げたのである。彼らは喜んで、心から主に捧げたので、そうすることによって彼をお喜ばせした。しかし、すべては彼の物ではなかったであろうか。彼らが持っていた物は、みな彼が彼らに与えられたものではなかったであろうか。もし彼が要求されるならば、貸し主に彼の物をお返しすることは、彼らの義務ではなかったであろうか。

しきりに催促する必要はなかった。人々は要求された以上に持って来て、も早使用できる量

を越えたから持つて来ることを止めるようにと言われたのであった。神殿の建設の時もまた、財産に対する要求は、心からの応答を呼んだ。民は、いやいや捧げたものではなかった。神を礼拝するために建物が建設されることを期待して喜び、その目的のために、あり余るほど寄附したのである。

ヘブル人よりも広大な光を誇るクリスチャンたちが、彼らより少なく捧げることができであろうか。終わりの時に近く生存しているクリスチャンたちが、ユダヤ人の半分にも足らない捧げ物をして満足できるだろうか。

(4 T・七七 七九ページ)

主は地上に光と真理を普及させることを、天の賜物を受けた人々の自発的な努力と献金に頼ってするようにされた。比較的少数の者が、牧師や伝道者として旅をするよう召されるが、多数の者は、真理を広めるために金銭をもって協力しなければならないのである。

み事業のための献金の要求はたえず訴えられているから、自分は献金するのがもういやになった、と言う人がある。あなたもそうだろうか。もしそうであつたら、わたしはお尋ねしたい。

あなたは、神の恵み深いみ手から受けることに飽きたであろうか。彼があなたを祝福することをやめられるまでは、あなたが、彼がご自分のものと主張される部分をお返しするという義務のもとにあることもやまないのである。あなたがあなたの力で他の人々を祝福することが

できるようにと、彼はあなたを祝福されるのである。あなたが受けることに疲れた時はじめて、わたしは捧げよというこれほど多くの要求に疲れたと言ってもよいのである。神は、われわれが受けるすべてのものの一部分を、ご自身のために取って置かれる。これを彼にお返しする時、残りの部分が祝福されるが、それをお返ししないと、おそかれ早かれ全部がのろわれるのである。神のご要求が第一であって、その他は何でも二次的である。

（5 T・一四八、一五〇ページ）

### 十分の一献金は神によって制定された

自由献金と十分の一献金が、福音の財源である。人間に委託される財産の中から、神は、特定の部分、すなわち十分の一を、ご自身のものとして主張される。

（5 T・一四九ページ）

われわれに対する神のご要求は、他のすべての要求に優先することを、すべての者は憶えなければならぬ。彼はわれわれに惜しみなく与えておられるが、彼が人間と結ばれた契約は、人間が所有物の十分の一を神に返還するということである。主はご自分の管理者たちに、恵み

深く、ご自身の宝を委託されるが、十分の一については、これはわたしのものであると言われる。神が彼の財産を人間にお与えになるその割合で、人間は、自分の財産のすべての正確な十分の一を、神にお返ししなければならない。この独特なとりきめは、イエス・キリストご自身によつて定められたのである。

(6 T・三八四ページ)

現代の真理は暗い世のすみずみまで伝えられなければならないが、この働きは家庭で始めることができる。キリストの信者は利己的な生活をおくるのではなく、キリストの霊に満たされて、彼と調和して働かなければならない。

(3 T・三八一ページ)

イエスが、自分はそれを行うために来たと宣言された大きな働きは、地上にいる彼の信者たちにゆだねられた。彼は、その事業が自給自足できるために、十分な金額を集める計画を、彼の民に与えられた。十分の一献金制度による神の計画は、その単純さと平等さにおいてすばらしいものである。それは神から出たものであるから、みな信仰と勇気をもって、これをとらえることができる。その中には、単純さと実用性が結びついており、これを理解して実行するために、深く学ぶ必要もない。すべての者が、救霊の尊い働きを前進させるのに、自分も一役を担うことができると感じ得るのである。男も女も、青年も、主のための会計係となり、資金の要求に応じる代理人となることができる。「あなたがたはそれぞれ、いくらでも収入に応じ

て手もとにたくわえておき……なさい」（コリント第一・一六ノ二）と使徒は言っている。

この制度によつて、大きな目的が果たされる。もしも全員すべてが、それを受け入れるならば、各自が神のための注意深い忠実な会計係となり、世界に対する最後の警告の使命を告げる大事業を前進させるための費用は、不足することがないであろう。皆がこの制度を実行すれば、資金は一杯になり、しかも、捧げた者が貧しくなることはない。投資することに、彼らは、それによつて現代の真理の働きにいつそう結びつくのである。彼らは「こうして、真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台を自分のために築き上げる」（テモテ第一・六ノ一九）のである。

忍耐強い、計画的な働き人は、自分たちの慈善的な努力が、神と人に対する愛を育てる傾向のあることを悟り、また、個人的な努力が自分たちの有用性を拡大していることを悟る時、キリストの同労者である事の大きな祝福を認める。一般に、キリスト教会は、世界にみなぎる道徳的な暗黒に対する戦いを支えるために、自分たちの持ち物を施すようにとの神のご要求を否認している。キリストの信者たちが、活動的な熱心な働き人になるまでは、決して神の働きは前進すべきほどには前進することができない。

（3 T・三八八、三八九ページ）



### 神の同労者である特権

神は、み事業を支えるのに人間に頼らなければならないわけではない。もしも、それが人間のために最善であると摂理のうちに認められたなら、ご自分の資金を供給するために、天から直接、資産を送ることもおできになった。また、人間を用いずに、天使をおくつて世界に真理を広める方法を、計画されたかも知れない。彼は天空に真理を書いて、生きた文字によって、彼のご要求を世界に宣言させるということもあり得たのである。神は人間の金や銀には全然依存してはおられない。彼は「林のすべての獣はわたしのもの、丘の上の千々の家畜もわたしのものである」「たといわたしは飢えても、あなたに告げない、世界とその中に満ちるものとは、わたしのものだからである」(詩篇五〇ノ一〇、一二)と言われる。神の働きの進展している時、われわれの機関にどのような必要があっても、それは彼が、われわれの益のために故意に取り計らわれたのである。彼は、われわれを彼の同労者とすることによって、われわれに名誉を与えてくださったのである。彼は人間の協力が必要であるように定められたが、それは、彼らが慈善心を働かせ続けるためである。

道徳律は安息日を遵守することを命じたが、それは、律法を犯し、これを破ることに伴う刑罰によって束縛を受ける場合を除いては、重荷ではなかった。十分の一献金制度も、その計画から離れなかった者にとっては、重荷ではなかった。ヘブル人に守るよう命じられた、この制度は、これを創設された方によって、廃止されたことも緩和されたこともなかった。キリスト教時代において、キリストによる救いだけが、もっと完全に示されなければならないのであるから、この制度は、今日効力を失うどころか、もっと完全に実行され、もっと広く普及されねばならないのであった。

キリストの死後、範囲を広めて行つた福音は、戦いを維持するために、より多量の物資を必要とするようになり、そのために施しの規定は、ヘブル人の時代よりももっとさし迫つた必要事になった。今日、神は、この世のどの時代よりも、少なくではなく、多くの捧げ物を要求しておられる。キリストによって定められた原則は、受けた光と祝福に応じて捧げ物や献金をするということである。「多く与えられた者からは多く求められ」（ルカー二ノ四八）と彼は言われた。

（3 T・三九〇 三九二ページ）

豊かな光が神のみ言葉から輝いているのであるから、おろそかにされている機会に気付かなければならない。皆が、神のものを、十分の一献金や他の献金によって彼にお返しすることに

忠実であれば、世の人々が現代のメッセージを聞く道が開かれる。もし神の民の心が、キリストを愛する愛で満たされ、すべての教会員に、自己犠牲の精神が完全に浸透すれば、そして、全員が徹底的な熱心さを表すならば、国内伝道のためにも外国伝道のためにも、資金の欠乏はないはずである。われわれの資金は増し、多くの有用な門戸が開かれて、われわれは入るように招かれるはずである。あわれみのメッセージを世界に与えるという神の目的が、彼の民によって遂行されていたならば、キリストは、今より前に、地上に来られ、聖徒たちは神の都に喜んで迎えられていたであろう。

(6 T・四四九、四五〇ページ)

### 神は与える産物の十分の一を求められる

十分の一献金制度は、モーセの時代以前からあった。明確な制度がモーセに与えられる前に、人類は、宗教的な目的のために神に捧げ物を捧げることが要求されていたが、すでにアダムの時代にそうであった。神のご要求に従うことによって、彼らは、自分たちに対する神の憐れみと祝福を感謝する気持ちを、捧げ物で表現するのであった。これは代々続き、いと高き神の祭司メルキゼデクに十分の一を捧げたアブラハムによって実行された。同じ原則がヨブの時代に

も存在した。ヤコブは、ベテルで、追放された無一文のさすらい人として、夜一人寂しく石を枕に寝た時、そこで主に約束して「あなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます」（創世記二八ノ二二）と言った。神は人に、捧げることを強制なさない。捧げる物は、すべて自発的でなければならぬ。神はご自分の金庫を、いやいや捧げる捧げ物で補充することはなさない。

要求される額について、神は、産物の十分の一と明確に指定された。しかしこれは、人々の良心と慈善心の自由に任せられているのであって、人々は、十分の一献金制度に関し、十分自分の判断力を働かせるべきである。ただし、良心の自由に任せられているとは言っても、計画は、すべての人にわかるよう明確に立てられている。ただ、強制することは要求されていない。

モーセの時代、神は人間に、彼らのすべての産物（収入）の十分の一を捧げるよう命じられた。神は、この世の物や才能を、活用して彼に返すようにと彼らに委託された。彼は十分の一を要求されたが、これは、人間が彼にお返しすべき最少のものとして要求しておられるのである。彼は、十分の九はあなたに与えるが、わたしは十分の一を要求する、それはわたしのものだ、と言われる。人が十分の一を捧げないと、神から盗むことになる。罪祭、酬恩祭、感謝の犠牲もまた、産物の十分の一に加えて要求された。

神がご自分のものであると主張されるもの、すなわち収入の十分の一を捧げないでいると、それは皆、盗みとして、その者に対し不利な記録を天の書に残す。そういう人は創造主から詐欺しているのであって、この怠慢の罪が示される時、その方針を変えて、その時から正しい原則に従って努力し始めるだけでは足りないのである。それは、貸し主に返還するよう委託された財産を横領したために書かれた天の記録の数字を、訂正しない。神に対する不正直な取り引きと卑劣な忘恩に対する、悔い改めが要求されている。

この世の、どんな時代においても、神の民が喜んで、心からすすんで神の、ご計画を遂行し、彼のご要求に従い、自分たちの財産をもつて彼をあがめた時には、いつでも、彼らの倉は一杯に満たされた。しかし、十分の一や捧げ物で神のものを盗んだ時、彼らは自分たちが、神から盗んでいただけでなく、自分自身からも盗んでいたことを悟らせられた。なぜなら、彼らが神に対する捧げ物を制限するのに比例して、神は彼らに対する祝福を制限されたからである。

(3T・三九三 三九五ページ)

不幸にして負債をしている人は、人間に対する負債を解消するために主の分を取ってはならない。これらの取引業務において自分が試みられていること、そして、主の分を自分の使用のために保留することにより与え主から盗んでいることを考慮すべきである。彼は自分の持つす

べてについて神に対し負債者であるが、人間に対する負債を払うために、主の資金を使用する時、二重の負債者となる。「神に対して不忠実」と、彼の名に不利な記録が天の書に書かれる。彼は、主の財産を自分の都合のために用いた事について、神に対し、責任をとらなければならぬ。神の財産を私用することに示された原則の欠如は、他の問題の取り扱いにも表れる。それは彼自身の仕事に関係した、あらゆる事に見られるものである。神のものを盗む人は、天にある神の家族に受け入れられることから、自分を切り離すような性格を育成しているのである。

（6 T・三九一ページ）

### 神は犠牲を捧げる動機となった愛によって捧げ物を評価される

聖所のはかりは、キリストに対する愛によって捧げられた、貧しい人々の捧げ物を、その量で評価せず、犠牲を捧げる動機となった愛によって評価する。捧げ物はわずかしかなくても、そのわずかなものを惜しみなく捧げる、物惜しみをしない貧乏人は、豊かな中から捧げる金持ちと同様、必ず、イエスの約束の成就することを悟るのである。貧しい者は彼のわずかなものを犠牲にするが、それは彼の身実際にこたえるのである。彼は、自分の生活を楽しむため

に必要な何かを犠牲にして本当に自制するのであるが、裕福な人は、豊かに持っている中から捧げるのであって、何かの不足を感じるといこともなく、実際に必要なものを持たないで自制するということは全然ないのである。ゆえに貧しい人の捧げ物には、豊かな人の捧げ物に見られない、神聖さがある。なぜなら金持ちは、豊かなものの中から捧げるからである。神の摂理は、人間の益のために、組織的な献金の全体計画を立てられた。神の摂理は決して立ち止まることがない。もし神のしもべたちが、彼の最初の摂理に従うなら、皆活動的な働き人となるであろう。

(3 T・三九八、三九九ページ)

幼い子供たちの捧げ物は、神に受け入れられ、喜ばれることができる。捧げ物を捧げる精神に従ってその価値が定まるのである。貧しい人たちが、使徒のやり方に従って、毎週少しずつ貯え、資金を増す助けをする時、彼らの捧げ物は全く神に受け入れられる。それは彼らが、もっと裕福な兄弟たちと同様、あるいはそれ以上に大きな犠牲を払っているからである。組織的に捧げる計画は、不必要な物のために浪費する誘惑に対して、すべての家族を守る予防策となるが、特に、富める人々には、ぜいたくにふけることから彼らを守ることによって、祝福となる。

(3 T・四一二ページ)

真心から惜しみなく捧げることの報酬は、精神と心が、聖霊とのいっそう密接な交わりに導

かれることである。

（6 T・三九〇ページ）

パウロは、神の事業に捧げるためのやり方を定め、われわれ自身に関する結果と、また、神に関する結果が、どうなるかを告げている。「各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。」  
 「わたしの考えはこうである。少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。」  
 「神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。（……種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。）  
 こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、……神に感謝するに至るのである」（コリント第二・九ノ六一）。

（5 T・七三五ページ）

## 財産の正しい処分

両親は、精神が健全で、判断も確かなうちに、よく祈って考え、真理の体験と神のみむねの



知識を持った適切な助言者の助けを得て、自分たちの財産を処分すべきである。

もしも彼らに、何かで苦しんでいるとか、貧しい中で苦闘している子供たちがいて、それが財産を賢明に使用する者たちであれば、彼らのことを考慮すべきであるが、この世の物を豊富に持って、この世に仕えている、信仰のない子供たちを持っている場合に、ただ彼らが自分たちの子供であるという理由で、財産を彼らの手に渡すならば、それは自分たちをご自身の管理人として下さった主に対して、罪を犯すのである。神のご要求を、軽率に考えてはならない。

親は遺言書を作ったからといって、生きている間は財産を神の働きに捧げなくともよいということにはならない、ということがはっきり理解されねばならない。彼らは捧げるべきである。

彼らは、生存中に余分の財産を処分することによって、この地上で満足を覚え、また来世の報いを受けるべきである。彼らは、神の働きの進展のために、自分たちの分を果たさなければならぬ。主のぶどう園でなされなければならない働きを、遂行していくために、主によって貸与された財産を用いるべきである。

(3 T・一一一ページ)

財産を神の倉におさめず、自分の子供たちのために死蔵する者は、子供たちの霊的関心を危険にさらす。彼らは、自分たち自身にとってつまずきの石である財産を、子供たちの道において、子供たちがそれにつまずいて滅びるようにさせてしまう。多くの人が、この世の事柄につ

いて、大きな誤りをしている。彼らは、節約し、神が自分たちに貸してくださった財産を正しく用いることによって受けることのできる利益を、自分自身にも他の人々にも得させず、そして利己主義になり、貪欲になる。彼らは、自分たちの靈的問題をおろそかにして、宗教的な成長においては小びとになるが、それは皆、自分たちの使用できない富をためるからである。彼らは、自分たちの財産を子供たちに残すが、それは十中、八、九まで、自分たちにとってそうであった以上に、彼らの相続人にとって大きな災いとなるのである。子供たちは、親の財産に頼るために、この世で成功できない場合が多く、そして一般に、来たるべき生命を獲得することに完全に失敗する。

親が自分の子供たちに残すことのできる最上の遺産は、有用な労働の知識と、私心のない慈善によって特徴づけられた生活の模範である。親はそのような生活によって、金銭の真の価値、すなわち、金銭は自分自身と他の人々の必要を満たし、神の働きを進展させることにおいて果たす善事によってのみ、評価されねばならないことを示すのである。

「富の増し加わるとき、これに心をかけてはならない」

十分の一献金という特別な制度は、神の律法と同様恒久的な原則の上に立てられたものである。この十分の一献金制度は、ユダヤ人にとって祝福であった。さもなければ、神は彼らに与えにならなかつたであろう。であるから、それはまた、時の終わりまで、これを実行する人にとって祝福となるのである。

神の事業を維持するために、最も組織的に、惜しみなく捧げる教会が、靈的に最も繁栄する。キリストの信者が真に惜しみなく与える精神を持つ時、彼の主の関心事が自分の関心事となる。財産を持っている人々が、彼らの費やすドルードルについて、神に対し責任があることを認識するならば、彼らが自分で必要だと思っているものが、ずっと少なくなるであろう。もし良心が生きているならば、食欲や誇りや虚栄心や、娯楽を愛する気持ちを満足させるために、不必要に支出したことを証言し、主の働きに捧げなければならなかった主の金銭を浪費したことを、報告するであろう。主のものをむだにした人々は、やがて、自分の行動について、主に説明をしなければならぬ。

もし、クリスチャンと公言する者たちが、身体を飾ったり、自分の家を美しくしたりするに自分の財産を使うことを、少なくし、健康を害するぜいたくなごちそうを、食卓に用意するという浪費を減らすならば、神の倉に、はるかに多額の金銭を入れることができる。そうすることによって彼らは、天を離れ富も栄光も捨て、われわれに永遠の富が得られるようにと、われらのために貧しくなられた救い主にならうのである。

しかし、多くの者は、この世の富を集め始めると、一定の金額を所有できるまでにどのくらいかかるかを計算し始める。自分のために財産を積むことの気づかいで、神に対して富める者になれない。彼らの慈善は富の蓄積と歩調をそろえない。富に対する彼らの熱心が増すにつれて、彼らの愛着は彼らの宝に結び着く。彼らの財産の増すことが、更に多くを求める熱心な欲望を強め、ついには、十分の一を主に捧げることが、ひどい不当な税金のようにある人々は考えるのである。

霊感「富の増し加わるとき、これに心をかけてはならない」（詩篇六二ノ一〇）と言っている。多くの人はこう言う、「もしわたしが、あの人のように金持ちであつたら、わたしは神の倉に捧げる捧げ物を増やすのに。わたしは神の働きの進展のために財産を使って、他のどんな事のためにも使わないのに」。神は、これらのうちのある人々に、富を与えて試験をされたが、

富が加わると共に誘惑は激しくなり、彼らの慈善行為は、彼らが貧しかった時よりもずっと少なくなつた。より多くの富を求める、欲深い気持ち、彼らの精神も心も奪つてしまい、彼らは偶像礼拝の罪を犯したのである。

(3T・四〇一 四〇五ページ)

### 神に対する契約は拘束力を持ち、神聖である

だれでも自ら財産査定者となつて、自分の心に定めたとおりに捧げるよう、各自に任せられるべきである。しかし、アナニヤやサツピラと同じ罪を犯している人々があつて、彼らは、十分の一献金制度によつて神が要求しておられるものの一部分を保留しても、兄弟たちは決して知らないだろうと思つてゐる。われわれに警告としてその実例が示された、あの罪深い夫婦も、そう思つたのである。この事例において、神はご自分が心を探るおかたであることを証明しておられる。人間の動機や意図は、神から隠れることができない。彼は、人の心が絶えず傾きがちな罪に警戒するよう、すべての時代のクリスチャンに、永続的な警告を残されたのである。一定額を捧げるという誓約が、口頭でまたは書類をもって、われわれの兄弟たちの前でなされた時、彼らは、われわれと神との間に結ばれた契約の、目に見える証人である。誓約がなさ

れたのは、人間に対してではなく、神に対してであつて、それは隣人に対して出す契約書のよ  
うなものである。神に対してなされた誓約ほど、金銭の支払いについてクリスチャンを拘束す  
る法的契約はない。

このようにして人間同士に対して誓つた人は、自分の誓約から解除されるように求めること  
は、普通考えない。すべての恩恵の与え主である神に対して立てられた誓約は、更に重要なも  
のである。それであるのに、なぜわれわれは、神に対するわれわれの誓いから解除されること  
を求めたりするのだろうか。人間は、神に対して誓つたのだから自分の約束はそれほど拘束し  
ないと、考えるのだろうか。自分の誓約は法廷で裁判にかけられることがないから、それほど  
有効ではないというのだろうか。イエス・キリストの計り知れない犠牲の血によつて救われる  
と公言する人が、「神の物を盗む」だろうか。彼の誓約と行動は、天の法廷にある正義のはか  
りで計られるのではないだろうか。

教会は、教会員一人びとりの誓約について責任がある。もし自分の誓約を果たすことを怠つ  
ている兄弟がいたなら、親切に、しかしはっきりと彼に説明すべきである。もし彼が、誓約を  
果たせるような情況になく、そして彼が、きちんとした教会員であつて、喜んでする気持ちの  
ある人であれば、教会は情け深く、彼を助けなさい。こうして、彼らは、困難を切り抜けるこ

とができ、彼ら自身も祝福を受けるのである。

(4 T・四六九 四七六ページ)

### 感謝献金は貧しい人々のために取って置く

各教会に、貧しい人のための資金を設けるべきである。そして各会員は、都合のいいように、週に一回または月に一回、神に感謝の献金を捧げなさい。この献金は、健康や食物や、気持ちの良い衣類が与えられていることに対する、われわれの感謝を表す。神が、これらの楽しみをもつてわれわれを祝福して下さっているのに応じて、われわれは、貧しい人や、苦しんでいる人や、悩んでいる人々のために、献金を蓄えておくのである。この点に特に、同信の兄弟がたの注意を喚起したい。貧しい人々をおぼえなさい。あなたのぜいたくのうちの何かを、たとえば楽しみであつても捨てて、ほんとうに貧弱な食物や衣類しか得られない人々を助けなさい。聖徒たちのためにすることによつて、あなたは、イエスのためにしているのである。彼はご自身を、苦しんでいる人類と同一視される。自分の想像上の必要が全部満たされるまで待つてはならない。自分の気分頼つて、気の向く時には与え、気が向かなければ与えない、ということをしてはならない。規則的に捧げなさい。……神の日に、天国の記録にあなたが見たい

と思うように。

（5 T・一五〇、一五一ページ）

### われわれの財産と神の働きの支持

真心から神を愛し、そして資力のある人々に対して、わたしは次のことを言うよう命じられている。主の働きを支えるためにあなたの資力を投資する時は今である。今こそ、滅びゆく魂を救うために献身的な努力をしている牧師たちの手を、支える時である。救うために、あなたが手伝った魂と、天の宮廷で会う時、あなたはすばらしい報いを受けないだろうか。

だれも、自分のわずかな富を差し控えないようにしなさい。そして多く持てる者は、尽きることのない宝を天に蓄えることができるのを喜びなさい。われわれが主の働きに投資することを拒んだ金銭は消滅する。それには天の銀行で利子が積らないのである。

主は今日、各地のセブンスデー・アドベンチストに対し、彼ら自身を主に捧げ、彼の働きを助けるために、彼らの事情に応じて最善を尽くすよう呼びかけておられる。惜しみなく、捧げ物や諸献金することによって、主の祝福の価値を認める気持ちと、彼の憐れみに対する彼らの感謝とを表すように、彼は望んでおられる。

（9 T・一三一、一三二ページ）



悩みの時の物質的必要性のための準備をすることは、聖書に反することであることを、主は、繰り返しわたしに示された。もし聖徒たちが、自分たちのところ、または畑に食糧を貯えていたりしても、もし国に戦争、ききん、疫病が起これば、それは暴徒たちに奪い去られ、他人が畑の作物を刈るようになることを、わたしは見た。それは、われわれが神に全く信頼する時である。そして神はわれわれをお支えになる。その時に、われわれのパンと水は必ず与えられ、われわれが物に乏しかったり、飢えたりすることがないことを、わたしは見た。なぜならば、神は荒野で、われわれのために食卓の用意をすることがおできである。もし必要ならば、彼がエリヤを養われたように、われわれを養うためにからすを送ったり、あるいは、イスラエルのためになさったように、天からマナを降らせることもなさるのである。

悩みの時に、家や土地はなんの役にも立たなくなる。その時、彼らは怒り狂った群衆から逃げなければならない。そしてその時、彼らの財産は、現代の真理の働きを推進するために用いることができないからである。聖徒たちが、悩みの時がやってくる前にすべての邪魔物を切り捨てて、犠牲によって神と契約を結ぶことが、神のみこころであることを、わたしは示された。もし彼らが、財産を祭壇の上において、なすべき務めについて、熱心に神に祈り求めるならば、神は、これらのものをいつ処理すべきかを教えてくださる。そうすれば、彼らは悩みの時に自

由になり、負担となる邪魔物がなくなる。

（初代文集・一二七、一二八ページ）

### 克己と犠牲の精神

救いの計画は、神のみ子の、計り知れない犠牲によって立てられた。キリストの十字架から輝いている福音の光は、利己主義を譴責し、物惜しみしない心と慈善心を奨励している。与えるようにとの要求が増して行くことが、悲しく思われるようであってはならない。神は、み摂理のうちに、ご自分の民を限られた行動範囲から呼び出して、より大いなる事業に着手させようと召しておられる。道徳的な暗黒が世界をおおっている今日、無限の努力が要求されている。世俗的な心と貪欲が、神の民の命をむしろみつつある。彼らは、自分たちの財産に対する要求が増すことは、神のあわれみであるということを、理解しなければならぬ。神の使いは、慈善行為を祈りのすぐそばに位置づけている。彼はコルネリオに、「あなたの祈や施しは神のみ前にとどいて、おぼえられている」（使徒行伝一〇ノ四）と言った。

（3 T・四〇五ページ）

あなたの家庭で節約を実行しなさい。多くの者が、偶像を大切にしている。あなたの

偶像を廃しなさい。あなたの利己的な快樂を捨てなさい。わたしはお願いしたい、家を飾るのに財産を費やすことのないように。なぜなら、それは神の金銭であつて、再びあなたから要求されるものだからである。両親がた、子供たちの氣まぐれな心を喜ばせるために主の金銭を使うことは、キリストのために、してはならない。世の中で勢力を得るために流行のスタイルや人目を引くことを求めるよう、彼らを教育してはならない。そういうことが彼らを、キリストがそのために死なれたその魂の救いへと向かわせるであらうか。否、それは、嫉妬や羨望や猜疑心を起こさせる。子供たちは、この世の外観やぜいたくを競うようになり、健康や幸福にとつて重要ではないもののために、主の金銭を費やすようになってしまう。

子供たちに対するあなたの愛は、彼らの誇りやぜいたくや、みせびらかしたい心を満足させることによつて表現されねばならないと、子供たちが考えるように教育してはならない。金銭を費やす方法を考案している暇は、今ないのである。あなたの創意力は、節約する方法を考え出すのに使いなさい。利己的な気持ちを満足させ、思考力を破壊する事物のために金銭を消費する代わりに、新しい伝道地に真理の旗をかかげるために何かを投資できるよう、自分の欲望を制する方法を考えなさい。知性はタレントである。それを使って、人々の救いのために、どうしたらいちばん良く財産を用いることができるかを研究しなさい。

（6 T・四五〇、四五一ページ）

他の人々に益を与えるために自己を制し、自分自身と持てる物すべてを、キリストの奉仕のために捧げる者は、利己的な人間が求めて得られない幸福を実感する。われわれの救い主は、「自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」（ルカ一四ノ三三）と言われた。愛は「自分の利益を求めない」。これは、キリストの生涯を特徴づけた、無我の愛と慈善の実である。われわれの心の中にある神の律法は、自分自身の利益を、高き永遠の事柄に従属させるのである。

（3 T・三九七ページ）

## 第九章 キリストとの結合と兄弟愛

神のみ心は、彼の子供たちが、一つに溶け合うことである。彼らは、同じ天国で一緒に生活することを期待していないのだろうか。キリストの中で分裂が起こったのだろうか。神は、ご自分の民が、さいぎ心や不和のがらくたを一掃しないうちに、また働き人たちが、これ程神のみに神聖な働きのために、目的を一つにし、心と知性と力を捧げないうちに、成功を収めさせて下さるだろうか。一致は力をもたらし、分裂は弱さをもたらす。互いに一致し、人の救いのために共に仲良く働くならば、われわれは真に「神の同労者」となるのである。協調して働くことを拒む人々は、大いに神を辱めることになる。魂の敵は、彼らが互いに食い違った目的をもって働いているのを見て喜ぶのである。そういう人々は、兄弟愛とやさしい心を育てなければならぬ。もしも彼らが、未来を隠している幕を開けることができ、自分たちの不和の結果を見ることができたならば、彼らはきっと悔い改めることであろう。

キリストと結合し、互いに一致することが、

われわれの唯一の安全である

世はクリスチャンの間の分裂を、満足してながめている。神を信じない者たちは、全く喜んでいる。神は、ご自分の民の間に変化が起きることを求めておられる。キリストと結合し、互いに一致することが、この最後の時代において、われわれの唯一の安全である。サタンが、われわれの教会員たちを指さして、「キリストの旗の下に立っているこれらの民が、互いにどんなに憎み合っているかを見よ。彼らが、わたしの軍勢と戦うよりも、互いに戦うことにもっと力を費やしている間は、彼らを少しも恐れる必要はない」などと言えないようにしよう。

弟子たちは聖霊降下の後、人々の救いをただ一つの願いとして、よみがえられた救い主を宣傳伝えるために出て行った。彼らは聖徒たちとの麗しい交わりを喜んだ。彼らはやさしく、思いやり深く、自分を制し、真理のためにはどんな犠牲も喜んで払う気持ちを持っていた。日常の互いの交わりに、キリストが表すように命じられた愛を表した。私欲のない言葉や行為によって、彼らは他の人々の心にこの愛を燃やそうと努力した。

信者たちは、聖靈降下後に使徒たちの心を満たした愛を、常に大切に育てて行かねばならなかった。彼らは、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」(ヨハネ一三ノ三四)という新しい戒めに、心から服従して前進しなければならなかった。キリストのご要求を満たすことができるように、彼と密接に結合しなければならないのであった。ご自分の義によつて彼らを義としてくださる救い主の力が、崇められねばならないのであった。しかし初代のクリスチャンたちは、互いの欠点を探し始めた。人の誤りにこだわり、不親切な批判をすることによつて、彼らは救い主を見失い、彼が罪人のために表された大いなる愛を見失った。外見的な儀式について、より厳格になり、信仰の理論について、もつとやかましくなった。他の人々を非難するのに熱心で、自分の誤りは忘れてしまった。彼らは、キリストが教えられた兄弟愛の教訓を、忘れたのである。そして、最も悲しむべきことに、彼らは自分たちの失ったものに気づかなかつた。彼らは、幸福や喜びが、自分たちの生活から消えつつあることを悟らず、また、心の中から神の愛を閉め出したために、間もなく暗黒の中を歩むようになるということに悟らなかつた。

使徒ヨハネは、兄弟愛が教会内に衰えて行きつつあることを認めて、特にこの点について説いた。彼は、自分の死ぬ日まで、信者たちに、互いの愛を絶えず働かせるようにと熱心にすす

めた。教会に対する彼の手紙は、この思いであふれている。「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。∴神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。∴愛する者たちよ。神がこのようなにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである」

（ヨハネ第一・四ノ七 一一）。

今日、神の教会には、兄弟愛が非常に欠けている。救い主を愛すると公言する多くの者が、クリスチャンの友情で結ばれた人々を愛することを、おろそかにしている。われわれは、同じ信仰を持つ者、一つ家族のメンバーであり、同じ天の父の子供たちであって、皆同じ幸いな不死の望みを持っているのである。われわれを一つに結ぶきずなは、どんなに親密で、思いやりのあるものでなければならぬことであろう。世の人々は、われわれの信仰がわれわれの心に、清める感化を及ぼしているか否かを見ようとして、われわれを見守っている。彼らは、われわれの生活の中のあらゆる欠陥、われわれの行動のすべての矛盾を見つけるのに早い。彼らに、われわれの信仰を非難する機会を与えないようにしよう。



調和と一致がわれわれの最も強い証言である

われわれを最も危険に陥らせるのは、世の反対ではない。信仰を公言する人々が心にいだいている悪が、われわれの最も悲しい災難を来たらせ、神のみ働きの進展を最も遅れさせるのである。互いにねたんだり、疑ったり、あら探しやさいぎ心に満たされること以上に、われわれの靈性を弱める確かな方法は他にないのである。「そのような知恵は、上から下つてきたものではなくて、地につくもの、肉に属するもの、悪魔的なものである。ねたみと党派心のあるところには、混乱とあらゆる忌むべき行為とがある。しかし上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りが無い。義の実、平和を造り出す人たちによって、平和のうちにまかれるものである」(ヤコブ三ノ一五—一八)。

さまざまな性格の人々の中に、調和と一致のあることは、神が罪人を救うために、その御子をこの世につかわされたことをあかしする、最も強い証言である。このあかしを立てることは、われわれの特権である。しかし、これをするためには、自分自身をキリストの支配下に署かな

ければならない。われわれの品性が彼の品性と調和して形成され、われわれの意志が彼の意志に降伏しなければならない。そうする時、われわれは衝突の心配なしに共に働くのである。

わずかな意見の相違にこだわることは、クリスチャンの交わりを破壊するような行動の原因となる。そのようにして敵に有利な立場をとらせないようにしよう。われわれは神にますます近づくようにし、そしてお互いにますます近づくようにしよう。そうする時、われわれは、主によって植えられ、命の川によってうるおされた、義の木のようになる。そして、どんなに良く実を結ぶことであろう。キリストは「あなたがたが実を豊かに結び、…それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう」（ヨハネ一五ノ八）と言われなかったであろうか。

キリストの祈りが完全に信じられ、その教えが、神の民の日常生活の中に実践される時、行動の一致が、われわれの間に見られるようになる。キリストの愛という黄金のきずなによって、兄弟は兄弟に結び合わされる。神の霊だけが、この一致をもたらすことができる。ご自分を聖別されたおかたは、ご自分の弟子たちを聖別することがおできになる。彼と結合する時、彼らは、最も清い信仰によって、相互に一致結合するのである。この一致をもたらすため、神がわれわれに望まれる通りにわれわれが努力をする時、それはわれわれに成就するのである。

神が要求されるものは、多くの機関や、大きな建物や、外面的なりっぱさではなく、神の特別な民の、調和のとれた行動である。すなわち、神によって選ばれた貴い民が、互いに一致協力し、彼らの生命が、キリストと共に、神のうちに隠されることである。すべての者が、各自の持ち場、立ち場に立って、思いと言葉と行いにより、正しい感化を及ぼさなければならぬのである。神の働き人が皆そうする時にはじめて、神の働きは、完全な、均整のとれた統一体となるのである。

(8 T・一八三ページ)

主は、真実な信仰と健全な精神を持った人々、本物と偽物との区別がわかる人々を求めている。各自は自ら警戒し、ヨハネによる福音書の十七章に与えられている教訓を学んで、実行し、現代の真理に対する生きた信仰を保って行かなければならない。われわれは、自分の習慣をキリストの祈りに調和させることができるようにする自制心が必要である。

(8 T・二三九ページ)

救い主のみ心は、彼の信者たちが、神の高く深い御目的をすべて成就するように、熱望しておられる。彼らは世界中に散っていても、彼にあって一つにならなければならない。しかし、彼らが自分の勝手な行きかたを捨てて、彼の道に従う気持ちにならなければならない。神は彼らをキリストにあって一つにすることがおできにならないのである。

(8 T・二四三ページ)

## 協 力

新しい伝道地に機関を設立する場合、事業の細かい点について十分に知らない人々に責任を負わせなければならぬことがよくある。これらの人々は非常に不利な立場で働くのであるから、彼らと彼らの同労者たちが、主の機関に対して無私の関心を持つていないと、その繁栄を妨げるような事態を招くであろう。

多くの者は、自分たちのしている種類の仕事で、自分たちにだけ属していて、それに関して他の人はだれも、何一つ提案をしてはならないと思つてゐる。ところが、この人たちこそ、その働きを運営する最上の方法について無知であるかも知れないのである。にもかかわらず、だけれど、勇気を出して助言を与えると、彼らは感情を害し、自分独自の判断に従う決意をさらに強くする。また一方、ある働き人たちは、同労者たちを助けたり指導したりする事を喜んでしないのである。そして経験のない他の者たちは、自分の無知を知られたくないと思ひ、多くの時間と物をむだにして、間違いをするが、それは彼らが余りにも高慢で、助言を求めようとしないからである。

問題の原因を見定めることは困難ではない。働き人たちは、自分たちを、模様を形成する助けとなるために、一緒に織られねばならない糸であると見なすべきであつたのに、実際は互いに無関係な独立した糸であつた。

これらの事は聖霊を悲しませる。神は、われわれが互いに知り合うことを望んでおられる。清められていない独立性は、神がわれわれと共に働けないような状態にわれわれを置く。そのような事態を見て、サタンは大いに満足するのである。

働き人は皆、主の機関の進展のために働いているのか、それとも自分自身の私益のために働いているのかについてテストされる。

たいてい、ほとんど絶望的で、いやしがたい罪は、自分の見解に対する誇り、自負心である。

これは、すべての成長のじやまになる。人が品性に欠陥を持っていて、しかもこれを認めることができない場合、自己満足が心にしみ込んでいて、自分の短所が見えない場合に、どうして清められることができるだろう。「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である」(マタイ九ノ一二)。自分のやりかたは完全だと思っている時、どうして改善することができるだろうか。心からのクリスチャンでなければ、だれも真の紳士になることができない。



## 第十章 われわれの義であるキリスト

「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(ヨハネ第一・一ノ九)。

神は、われわれが自分の罪を告白し、神のみに、心を謙虚にすることを要求されるが、しかし、われわれは、やはり、信頼する者を見捨てられないやさしい父として、神に信頼を持つべきである。われわれの多くは、信仰によらず、見ることによって歩いている。見えるものは信じるが、神のみ言葉の中に与えられている尊い約束の価値を、理解していない。また、神が言われたことを信頼せず、われわれに対して主が本気でおられるのか、われわれを欺いておられるのではないかなどと疑いを示すことほど、決定的に神を侮辱することはない。

神は、われわれの罪のゆえに、われわれを見放されない。われわれは間違いをして神のみ霊を悲しませるかも知れないが、悔いて、罪を悲しむ心をもって、みもとに行くならば、神は、

われわれを退けられないのである。ただし、妨げになるものは取り除かなければならない。悪い感情をいだいていたり、高慢、自負心、短気、つぶやき等があったかも知れない。これらは、すべて神から、われわれを引き離す。罪を告白し、心の中に、もつと深く恵みの働きが起らなければならぬ。弱さと失望を感じている人々は、強い神の人となり、主のためにりっぱな働きをすることができ。しかし、高い見地から働かなければならない。利己的な動機によって動かされてはならないのである。

われわれは、キリストの学校で学ばなければならない。恵みの契約による祝福の一つを、われわれが受けられるように資格を与えるのは、キリストの義だけである。われわれは、これらの祝福を得たいと長く望んで努力して来たが得られなかった。それは、われわれが、それらを得るのにふさわしい者となるために、自分は何かができるといふ考えを、いだいていたからである。われわれは、イエスが生きた救い主であることを信じ自分自身から目をそらすことをしなかった。自分自身の美德や価値が、自分を救うと思ってはならない。キリストの恵みこそが、われわれが救われる唯一の希望である。預言者を通して、主は「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」（イザヤ書五五ノ七）と約束しておられる



のである。われわれは、ありのままの約束を信じなければならぬのであり、感じを信仰の代わりにはしてはならない。われわれが全く神に信頼し、罪をゆるして下さる救い主としてのイエスの功績に頼る時、望み通りの助けを、すべて受けられるのである。

われわれは、自分自身を救う力があるかのように、自分をたよりにするが、われわれが、自分を救うことができないからこそ、イエスは、われわれのために死なれたのである。イエスの中に、われわれの希望があり、義認があり、正義がある。失望して、われわれに救い主がないと恐れたり、キリストは、われわれに対して、あわれみの気持ちを持つてはおられないと不安がったりしてはならない。今この時間、イエスは、われわれのためにご自身の働きを進めておられ、われわれが無力なままでキリストのもとに行き、救われるように招いておられるのである。われわれは、不信仰によつてイエスを侮辱する。われわれが自分の最上の友を、どんなに扱うか、われわれを完全に救うことができ、大きな愛の、あらゆる証拠を与えておられるイエスに、どれほどわずかの信頼しか置いていないかということは、驚くほどである。

兄弟がたよ、あなたは、自分の功績によつて、神の好意を受けることを期待し、神の救う力にたよる前に、罪から解放されなければならないと思つていいのか。もしも、あなたの考えの中で、こういう戦いが行われているならば、あなたは、力を得ることなく、最後には失望落胆

してしまうであろうと、わたしは恐れる。

荒野において主が毒蛇に、反逆的なイスラエル人を噛むことをゆるされた時、モーセは、真ちゅうのへびをかかげて、傷を受けた者すべてに、それをながめて生きよと命じるように示された。しかし、多くの者は、この天の定めた治療法によって助かるとは思わなかった。周囲全体に死人や死にかけている者たちがいて、彼らは神の助けがなければ、自分の破滅は確かであることを知っていた。しかも彼らは、即刻癒されることもできたのに、体力が尽きて目がかすんでしまうまで、自分の傷と痛みと迫りくる死を嘆くのであった。

「モーセが荒野でへびを上げた」のとちょうど同じように「人の子もまた上げられた。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」あなたが自分の罪を意識しているなら、それを嘆くためにあなたの労力を費やさずに、ただ見て命を得なさい。イエスは、われわれの唯一の救い主である。癒される必要のある無数の人々が、イエスによって彼に提供された、あわれみを拒否しても、イエス・キリストの功績にたよる者は、だれ一人滅びるままに放って置かれることはないのである。われわれは、キリストなしには自分の無力な状態を認識するが、失望してはならない。われわれは、十字架につき、よみがえられた救い主に信頼しなければならぬのである。哀れな、罪に悩む、失望している魂よ、見ていのちを得な

さい。イエスは彼のもとに来るすべての者を救うと誓って言われたのである。

イエスのもとに来て、安息と平安を得なさい。あなたは今、その祝福を受けることができるのである。サタンは、あなたが無力で、自分自身を祝福することができないことを暗示する。それは本当であつて、あなたは無力であるが、イエスをサタンの前にかかげなさい。「わたしにはよみがえられた救い主がある。わたしは主により頼む。主は決して、わたしを失望に終わらせるようなことはされない。わたしは主のみ名によつて勝利する。イエスは、わたしの義であり、わたしの喜びの冠である。」だれ一人、ここで自分の場合は絶望的だなどと思つてはならない。なぜなら、そうではないからである。あなたは、自分が罪深く、だめだということを悟るかも知れないが、あなたが救い主を必要とするのは、まさにそのためなのである。もしもあなたが告白しなければならぬ罪があるなら、一刻も待つてはならない。一瞬一瞬がまさに黄金なのである。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(ヨハネ第一・一ノ九)。義に飢えかわいている人たちは、飽き足りるようになるであろう。なぜならばイエスが、約束をされたからである。尊い救い主なるキリストのみ腕は、われわれを受け入れるために広げられており、主の大きな愛のみ心は、われわれを祝福するために待っておられる。

ある人々は、自分が試験期間中で、主の祝福を自分のものとして主張するためには、自分が行いを改めたことを主に証明しなければならぬと、感じているようである。しかし、これらの愛する人々は、今でも、主の祝福を求めることができる。彼らは、主の恵み、キリストの靈を、彼らの弱さを助けるために受けなければならない。さもなければ、彼らは、クリスチャンの品性を形成することができないのである。イエスは、われわれが、罪深い、無力な、依存的な、そのままの姿でみもとに来ることを愛される。

悔い改めは、ゆるしと同様、キリストを通してもたらされる神の賜物である。われわれが罪を悟って、ゆるしの必要を感じるのは聖靈の感化を通してである。罪を深く悔いる者以外は、だれもゆるされない。しかし心に罪を悔いるようにさせるのは、神の恵みである。彼は、われわれの弱さや欠点のすべてをよく知っておられて、われわれを助けて下さるのである。

悔い改めと告白によつて神のもとに行き、自分の罪はゆるされたことを信じてさえもなお、神の約束を自分のものとしてそれほど、要求しない人々がいる。彼らは、イエスが常に臨在される救い主であることを悟らない。そして、自分の魂を守っていたために彼にゆだね、自分の心の中に始められた恵みのわざを完成していただくように彼にすぎる気持ちになつていない。彼らは自分自身を神に任せていると考えていながら、大いに自己に信頼している。一部は

神に頼り、一部は自分自身に頼る、良心的な人々がいる。彼らは、神の力に守られるために、神に頼るということをしてしないで、誘惑に対する警戒の周到さや、彼に受け入れられるために何かの義務を果たすことに頼るのである。こういう種類の信仰には勝利はない。このような人々は全くむだな骨折りをしているのであつて、心にいつも自由がなく、イエスの足もとに彼らの重荷を置くまでは、休息を見出さないのである。

絶えず警戒し、熱心に、愛情をこめて献身することは必要であるが、心が信仰によつて神の力に守られる時、これらのことは自然に起こるのである。神によく思われて、彼の恩恵を受けるためには、われわれは何一つ、絶対に何一つできない。われわれは、自分自身にも、また自分の善行にも、全然頼つてはならない。しかし、ただ、われわれが、誤りやすい、罪深い者として、キリストのもとに行く時、彼の愛のうちに休息を見出すことができるのである。十字架にかけられた救い主の功績に、完全に頼つて、彼のもとに行く者をすべて、神は受け入れられる。愛は心の中にわき出て来る。恍惚とした感じは起こらないかも知れないが、永続的な、平安に満ちた信頼がある。すべての荷が軽くなる。キリストが負わせるくびきは負いやすいからである。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみとなる。以前は、暗黒に包まれたように思えた道も、義の太陽からの光で明るく輝く。これが、キリストが光のうちにあるように、光の中を歩くこ

となのである。

## 第十一章 きよめられた生活

われわれの救い主は、われわれのすべてを、御自身のものであると主張される。主は、われわれの第一で最も清い思い、最も純粋で熱烈な愛情を求められる。われわれが本当に神の性質を受けているならば、心の中でも、また、くちびるからも絶えず神を讃美しているであらう。われわれの唯一の安全は、自分のすべてを神にあげわたして、恵みと、真理の知識の中で絶えず成長していることである。

(S L・九五ページ)

聖書の中に示されているきよめは、人間全体すなわち霊と心とからだとに関係している。ここに、全的献身の真の意味がある。パウロは、テサロニケの教会がこの大きな祝福を楽しむことができるように祈っている。「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように」(テサロニケ第一・

五ノ二三）。

宗教界には、それ自身が誤りで、危険な影響を及ぼすきよめの理論がある。多くの場合、きよめを受けていると公言する人々が本当のものを把握していない。彼らのきよめは、言葉と意志の崇拜によって成り立っている。

彼らは、理性と判断をさし置いて、全く、感じにたより、過去に経験した感情に基づいて、きよめを受けたことを主張する。彼らは強情で、自分がきよいという固い主張を、かたくなに説いて、多く語るが、証拠として尊い実を結んでいない。これらの、きよめられたと公言する人々は、彼らの主張によって、自分自身の魂を欺いているだけでなく、神のみ心に従いたいと熱心に望んでいる多くの者を惑わすような影響を及ぼしているのである。彼らは、何回も繰り返し言うかも知れない。「神は、わたしを導いておられる、神はわたしを教えておられる。わたしは罪を犯さずに生活している」と。多くの人々はこのような人に接する時、理解できない、暗い、不可思議な何ものかを感じるのである。しかしそれは、唯一の真の型であられるキリストとは全く違ったものである。

（SL・七一〇ページ）

きよめは漸進的な働きである。連続した段階が、ペテロの言葉で提示されている。「力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍



耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい。これらのものがあなたがたに備わって、いよいよ豊かになるならば、わたしたちの主イエス・キリストを知る知識について、あなたがたは、怠る者、実を結ばない者となることはないであろう」(ペテロ第二・一ノ五 八)。

「兄弟たちよ、それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである」(同一〇、一一節)。

ここに、われわれが決してあやまちに陥ることがないと確信のできる道がある。クリスチャンの美德を得るために、このように足し算の方法で努力している者は、神が掛け算の方法で働いて、神のみ霊の賜物を彼らに授けて下さるという保証が与えられているのである。

(S L・九四、九五ページ)

きよめは一瞬や、一時間や、一日の仕事ではない。それは恵みのうちに絶えず成長することである。われわれは、次の戦いがどんなに激しいか、前もって知ることができない。サタンは生きていて、活動しているのであるから、われわれは、彼に抵抗するために、助けと力を求めて、神に熱心に嘆願しなければならぬ。サタンが勢力を振るっているあいだ、われわれは、自

我を征服し、陥りやすい罪に勝利しなければならなかったのであって、停止する場所はない。ある段階に到達して完全を達成したなどと言える所はないのである。

クリスチャンの生涯は、たえず前進することにある。イエスは、彼の民を精練し、清める者としての役についておられるのであって、彼のみ姿が、彼らの中に完全に反映される時、彼らは、完全で、清くなり、天に移される準備ができるのである。クリスチャンには大きな仕事及要求されている。われわれは、肉と霊とのいつさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれたく清くなるように熱心に勧められている。ここに大きな仕事があることを悟るのである。クリスチャンにとっては絶え間のない働きがあるのである。ぶどうの木の下から出ているすべての枝が、実を結ぶためにその幹から命と力とを受けなければならない。

（1 T・三四〇ページ）

神の御要求のうちのどれかを踏みにじっていないながら、神が自分をゆるし、祝福して下さると信じて、自分自身を欺かないようにしよう。罪を承知しながら故意にその罪を犯すことは、聖霊が証言する声を沈黙させ、魂を神から引き離す。どんなに心を奪われるような宗教的な喜びを感じても、神の律法を無視する心の中にはイエスは、お住みになることはできない。神は、ご自身を尊ぶ者だけを尊ばれる。

（S L・九二ページ）

パウロが「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように」(テサロニケ第一・五ノ二三)と書いた時、彼は、彼の兄弟たちに、彼らが達成できない標準をめざすように、勧めたのではなかった。神が与える意志のない祝福を、彼らが受けるように祈ったのではない。平和にキリストをお迎えするのにふさわしい者になりたいと願うすべての人は、純潔で清い品性を持たなければならないことを、彼は知っていたのである(コリント第一・九ノ二五 二七、六ノ一九、二〇参照)。

真のクリスチャンの主義原則は、結果にとらわれない。わたしが、これをしたら人々がわたしをどう思うか、とか、あれをしたら、わたしの世的な可能性にどう影響するかなどは問わない。最も強い願望をもって、神の子供たちは、自分のすることが神の栄光となるために、彼らは何をすることを、神が望んでおられるかを知りたいと願う。主は、彼の信者すべての者の心と生活が、神の恵みによって支配されることができるよう、十分な備えをされたが、それは、彼らが世界で、照り輝く光となるためである。

(S L・二六、三九ページ)

# きよめの真の証拠

われわれの救い主は、世の光であられたが、世は彼を知らなかった。主は絶えず、慈悲深い行いをもつてすべての人の道に光を照らされた。しかし、主は、彼が交わっている人々に、彼の無比の美徳や、克己、自己犠牲、また慈善をながめるようには求められなかった。ユダヤ人は、そういう人生を賞賛しはしなかったのである。彼らは、イエスの宗教が、自分たちの信心の標準に合わなかったので、価値がないと考えた。彼らは、キリストが精神においても、品性においても信仰的でないと定めた。なぜならば、彼らの宗教は、見せびらかした行為や、公衆の場で祈ったり、効果をねらって慈善行為をしたりすることにあつたからである。

最も尊いきよめの実は柔和である。この性質が心の中を支配していると、性格は、その感化によつて形成されて、絶えず神に仕え、神のみ心に自分の意志を従わせるようになる。

克己、自己犠牲、慈善、親切、愛、忍耐、不屈の精神、またキリスト教的な信頼は、実際に神と連なった人々が、日々生ずる実である。彼らの行動は世界に公表されないかも知れないが、彼ら自身は毎日、悪と戦い誘惑と不正に対して尊い勝利を得ているのである。厳粛な誓いを新

たにし、また熱心な祈りと、共に絶えず目を覚ましていることによつて得る力をもつてそれを守るのである。意気に燃えた熱情家には、これら物言わぬ人々の苦闘がわからないが、心の秘密を見られる神の御目は、謙虚で柔和な心をもつて、努力をしているすべての努力に注目されて、よしと認められるのである。品性の中の愛と信仰の純金を明らかにするためには、試験期間が必要である。教会に試練と混乱が訪れる時キリストの眞の信者の不動の熱意と、温かい愛情が啓発される。

彼「眞に信仰的な人」の感化の範囲内にはいつて来る者はみな、彼のクリスチャン生活の美しさやかぐわしさに気付くが、彼自身は、それを意識しない。それが彼の習慣や傾向と調和しているからである。彼は神の光を祈り求め、その光の中を歩くことを喜ぶ。彼の天の父の心を行うことは、彼の食物であり、飲み物である。彼の命はキリストと共に神のうちに隠されているが、彼は、それを誇らないし、意識すらしていないように見える。神は、主のみ足跡に、しっかりと行いく謙遜で心の低い人々にほほえみかけておられる。天使たちは、彼らに引き付けられ、彼らの周りに長くとどまることを好む。彼らは、高い目標を達成したことを主張したり、自分の善行を目立たせて喜ぶ人々によつては、注目に価しない者として無視されるかも知れないが、天使たちは、愛情をもつて彼らの上に身をかがめ、火の壁のようになって彼らの

周りをとり囲むのである。

（S L・一一 一五ページ）

## ダニエル きよめられた人生の模範

ダニエルの人生は、きよめられた人物とは何かを示す、神の靈感によって示された実例である。それは、すべての人、特に青年に教訓を示している。神の御要求に厳格に従うことは身心の健康に有益である。道徳的にも知的にも最高の標準に到達するためには、神からの知恵と力を求めて、すべての生活習慣において厳格な節制を守らなければならない。

（S L・二三ページ）

ダニエルの行動が非難の余地のないものであればあるだけ、彼の敵が彼に対して抱いた憎しみは大きかった。彼らは、ダニエルの人格にも、または職務の遂行においても、彼を訴える理由になるものを何一つ見出せなかった。「そこでその人々は言った、『われわれはダニエルの神の律法に関して、彼を訴える口実を得るのだから、ついに彼を訴えることはできまい』と」（ダニエル書六ノ五）。

ここにはなんとという大きな教訓が、すべてのクリスチャンに対して、提示されていることで

あろう。鋭い、嫉妬の眼が来る日も来る日もダニエルを見すえていた。彼らの監視は憎しみによって鋭くなったが、ダニエルの生活の中のどんな言葉や行動からも、不正を見いだすことはできなかった。しかもなお彼は、自分がきよめられた者であるとは主張しなかった。その代わりに、それよりもはるかに良いことをしたのである。すなわち、忠実な、献身的な日々を送ったのであった。

王からの命令が出された。ダニエルは、彼の敵が彼を破滅させようとしていることを知っていたが、自分の方針のただ一点でも変更しないのである。冷静さをもっていつもの職務を果たし、祈りの時間には、自分の室に行つて、エルサレムに面した窓を開けて、天の神に祈りをささげるのである。彼は自分の行動によつて、どんな世的な権力も、彼と彼の神の間に立ち入つて、だれに祈り、だれに祈つてはならないかを、彼に命令する権利のないことを恐れなく宣言している。主義原則に立つた高潔な人。彼は今日、クリスチャンの大胆さと忠誠の、称賛に価する模範を世界に示している。彼は、自分の信仰を守れば死刑になることを知っていたが、それでも、心のすべてを傾けて、神にたよるのである。

「そこで王は命令を下したので、ダニエルは引き出されて、ししの穴に投げ入れられた。王はダニエルに言った、『どうか、あなたの常に仕える神が、あなたを救われるように』」(同六

ノ一六節）。

朝早く、王は、ししの穴へ急いで行って、大声で「生ける神のしもべダニエルよ、あなたが常に仕えている神はあなたを救って、ししの害を免れさせることができたか」（同六ノ二〇節）と呼ばわった。すると預言者の声が答えるのを聞いたのである。「王よ、どうか、とこしえに生きながらえられますように。わたしの神はその使をおくって、ししの口を閉ざされたので、ししはわたしを害しませんでした。これはわたしに罪のないことが、神の前に認められたからです。王よ、わたしはあなたの前にも、何も悪い事をしなかったのです。」

「そこで王は大いに喜び、ダニエルを穴の中から出せと命じたので、ダニエルは穴の中から出されたが、その身になんの害をも受けていなかった。これは彼が自分の神を頼みとしていたからである」（同六ノ二二、二三節）。こうして神のしもべは救われ、彼の敵が、彼を滅ぼすためにかけたわなが、彼ら自身の破滅を来たすことになった。王の命により、彼らはその穴に投げ入れられ、即座に、野獣によって食べられてしまったのである。

時が七〇年の捕囚期間の終わりに近づいたころ、ダニエルは、エレミヤの預言について非常に心を悩ました。

ダニエルは、主のみ前に、自分自身の忠誠を主張しない。この栄誉を与えられた預言者は、



自分が汚れない、清い者であると自称するのではなく、謙遜に、自分をイスラエルの本当に罪深い人々と同一視している。神が彼に授けられた知恵は、世界の偉人たちの知恵に比較して、昼間、空に輝く太陽の光線が、最も弱い星よりも明るいように、はるかにすぐれていた。それなのに天の恵みを大いに受けたこの人のくちびるから出た祈りを熟考してごらんなさい。深く恥入って、涙を流し、心を裂いて彼は、自分自身のためと、彼の民のために嘆願するのである。彼は神のみ前に、心をさらけ出して、自分自身の無価値さを告白し、主の偉大さと威厳を認めている。

ダニエルの祈りがささげられている間に、天使ガブリエルは、天の宮廷から飛んで来て、彼の祈りが聞かれ、答えられたことを彼に告げるのである。この強力な天使は、彼に知恵と悟りを与えるため、きたるべき時代の奥義を彼の前に啓示するために派遣されたのであった。このように、真理を知り、悟ることを熱心に求めているうちに、ダニエルは、天の代表として遣わされたメッセンジャーとの交わりに導き入れられたのである。

彼の祈りの答えとして、ダニエルは、彼と彼の民が最も必要としていた光と真理だけでなく、この世の贖い主の来臨に至るまでの未来の重大事件の光景を見せられた。聖書を探索する欲求もなく、聖書の真理をもっと明白に悟るために、祈りによって神と苦闘することもなしに、きよ

められていると主張する人々は、真のきよめが何であるかを知らない。

ダニエルは神と語った。天は彼の前に開かれていた。しかし、彼に授けられた高い名誉は、謙遜と熱心に求めた結果であつた。神のみ言葉を、心で信じる者はすべて彼のみむねを知りた  
いと、飢え渴く。神は真理の創始者である。彼は悟りのない人々を啓発し、彼が表された真理  
を把握し、理解する力を、人間の知性に与えられる。

この世の贖い主によつて表された偉大な真理は、隠された宝を捜し求めるように、真理を探  
求している人々のためのものである。ダニエルは老人であつた。彼の人生は、魅惑的な異教の  
宮廷内で過ぎ、彼の心は、一大帝国の政務で煩わされていた。それでも彼は、これらすべての  
事をさしおき、神のみ前に心を悩まして、至高者のみ心を知ることを求めるのである。そして、  
彼の嘆願の応答として、後世に生きる人々のために、天の宮廷から光が伝達された。その事を  
思うと、われわれは、天からもたらされた真理を理解するために、彼がわれわれの悟りを開い  
てくださるよう、どんなに熱心に神に求めるべきであろう。

ダニエルは、いと高き神の献身的な、しもべであつた。彼の長い生涯は、彼の主に仕えたり  
っぱな行為で満ちている。彼の純潔な品性と確固とした忠誠心は同様に、ただ、彼の心の謙遜  
さと、神のみに罪を悔いる彼の気持ちによるものであつた。繰り返して言うが、ダニエルの

人生は、真にきよめられた人の靈感による実例である。

(S L・四二 五二ページ)

### 神は価値があると思う人々を試される

われわれが試練に耐えるように求められるということは、主イエスが、われわれの中に、発育させたいと望む何か非常に尊いものを、認めておられることを証明する。もし、彼のみ名の栄光になるものを何一つ、われわれの中にご覧にならなければ、われわれを精練するために時間を費やされることはないのである。われわれは、いばらを剪定するために特別な骨折りはしない。キリストは、無価値な鉱石をご自分の炉に投げ入れることはなさらない。キリストが試されるのは価値のある鉱石である。

(7 T・二一四ページ)

責任のある地位に着くように、神が計画しておられる人々に、神は、あわれみをもって、彼らの隠れた欠点を示されるが、それは、彼らが内省して、自分自身の心の複雑な感情や働きを厳しく調べ、間違っていることを発見し、それにより、自分の性癖を修正し、態度を精練するためである。主は摂理によつて、人々の道德的な力を試み、彼らの行動の動機が表れるように彼らを導かれるが、それは彼らが自分の中にある正しいものを上達させ、間違つたものを捨て

るためである。神はご自分のしもべたちが、自分自身の心の道徳的な働きを良く知るように望んでおられる。そうさせるために、神は、しばしば、苦難の火が彼らを襲うことをゆるされる。それは彼らがきよめられるためである。「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる」（マラキ書三ノ二、三）。

（４Ｔ・八五ページ）

神は彼の民を一步ずつ導かれる。彼は、心の中にあるものが外に表れるために彼らを、さまざまな所まで連れて行かれる。ある者は、一か所では耐えるが、次の箇所で失敗する。前進する各地点ごとに心がテストされるが、それは次第に厳しくなる。神の民であると公言する者が、この厳正な働きに自分の心が抵抗していることを発見する時、もしも主の口から吐き出されたくないなら、勝利するためにしなければならぬ事があることを自覚すべきである。

（１Ｔ・一八七ページ）

われわれが神のみ働きをするための自分の無力を認識し、彼の知恵によって導かれるように身を任せるや否や、主はわれわれと共に働くことがおできになるのである。われわれが、心の

中から自我を捨てるなら、神は、われわれに必要なすべてのものを供給して下さる。

(7 T・二一三ページ)

### 神に受け入れられたことの確証を求めている人々に対する勧告

あなたが神に受け入れられているということが、どうしてわかりますか。よく祈って、神のみ言葉を研究しなさい。他のどんな書物を読むためにも、それを止めてはならない。この書物は罪を悟らせるのである。それは救いの道を明らかにし、栄光に輝く報いを示し、あなたがたに完全な救い主を表示して、彼の限らない情けによつてのみ、あなたが救いを期待できることを教えるのである。

密室の祈りは信仰の生命であるから、怠ってはならない。真剣な、熱い祈りによつて心の清めを願い求めなさい。あなたの肉体の生命が危険にさらされている時にあなたがするように真剣に、熱心に願い求めなさい。救いに対する、言葉で表現できない切望感が、あなたの中に生まれ、罪がゆるされたといううれしい証拠が得られるまで、神の目前に留まりなさい。

(1 T・一六三ページ)

イエスは、あなたが遭遇する試練や困難に驚きあきれるような状態で放つてはおかれない。それらについてすべて話し、また、試練が来た時に、気落ちして圧倒されないようにと言われる。あなたの贖い主、イエスにより頼み、明るく、喜んでいなさい。一ばん耐え難い試練は、同信の兄弟たちや、自分の親しい友人たちから来るものであるが、これらの試練でさえも、忍耐をもって耐えることができるのである。イエスは、ヨセフの新しい墓に横たわってはおられない。彼はよみがえって天に昇り、そこで、あなたのためにとりなしをしておられるのである。われわれには、われわれを愛するがゆえに、われわれのために死に、その方によつて、われわれが希望と力と勇気を得、その王座に彼と共につくことができるようにして下さった救い主がある。あなたが主に願い求める時には、いつでも主は、あなたを助けることがおできになり、また、喜んでそうしてくださるのである。

あなたは、自分が立っている責任ある地位に対して自分の足りなさを感じますか。それならそのために神に感謝しなさい。自分の弱さを感じれば感じるだけ、助け手を求める気持ちになるからである。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいて下さるであらう」（ヤコブ四ノ八）。イエスは、あなたが幸福で、快活であることを望んでおられる。彼は、あなたが、神から与えられた能力をもって最善を尽くすこと、そして、主があなたを助け、重荷を

負うあなたの助け手となる人々をつかわしてくださる事を信じるように望んでおられる。

不親切な人の言葉に心を痛めてはならない。人はイエスについて冷酷なことを言わなかっただろうか。あなたは間違いをして、時には不親切なことを言ってしまう場合があるかもしれないが、イエスは決してそのようなことをなさらなかった。イエスは清く、しみなく、汚れがなかった。この人生で、栄光の君が会われたよりも良い事を期待しないようにしなさい。あなたの敵は、あなたの感情を害することができのを見ると喜び、サタンもまたそれを喜ぶ。イエスにたよりなさい。そして彼の栄光のために一意専心努力しなさい。あなたの心を神の御愛の内に留めておきなさい。

(8 T・一二八、一二九ページ)

感じだけでは、きよめのしるしではない

幸福感とか、喜びがないとかいうことは、人がきよめられているとか、いないとかの証拠ではない。即座のきよめなどというものはない。真のきよめは、日ごとの働きで、生命のある限り続く。日々の誘惑と戦い、自分自身の罪深い傾向に勝利し、心と生活のきよくなることを求めている者は、自分の清いことを高ぶって主張したりはしない。彼らは、義に飢え渴く。罪は、

彼らにとっては異常に罪深く見える。

（S L・一〇ページ）

神は、われわれの罪のゆえに、われわれを見放されない。われわれは間違いをして彼のみ霊を悲しませるかも知れないが、悔いて、罪を悲しむ心をもって、神のみもとに行くならば、神は、われわれを退けられないのである。ただし、妨げになるものは取り除かなければならない。悪い感情をいだいていたり、高慢、自負心、短気、つぶやき等があつたかも知れない。これらはすべて、神からわれわれを引き離す。罪を告白し、心の中に、もつと深く恵みの働きが起こらなければならぬ。弱さと失望を感じている人々は、強い神の人となり、主のためにりっぱな働きをすることが出来る。しかし、高い見地から働かなければならない。利己的な動機によつて動かされてはならないのである。

ある人々は、自分が試験期間中で、主の祝福を自分のものとして主張する以前に、自分が行いを改めたことを主に証明しなければならぬと、感じているようである。しかし、これらの愛する魂は、今すぐにでも、主の祝福を要求できるのである。彼らは、主の恵み、キリストの霊を、彼らの弱さを助けるために受けなければならない。さもなければ、彼らは、クリスチャンの品性を形成することができないのである。イエスは、われわれが、罪深い、無力な、依存的な、そのままの姿で彼のもとに来ることを愛される。



悔い改めは、ゆるしと同様、キリストによる神の賜物である。われわれが罪を悟って、ゆるしの必要を感じるのは聖霊の感化を通してである。罪を深く悔いる者以外は、だれもゆるされない。しかし心に罪を悔いるようにさせるのは、神の恵みである。彼は、われわれの弱さや欠点のすべてを、よく知っておられて、われわれを助けて下さるのである。

(2 T T・九一 九四ページ)

時には暗黒と失望が心を襲い、われわれを圧倒しそうになるが、われわれは自分の確信を放棄してはならない。われわれは、感じても感じなくても、イエスを見つめていなければならぬ。わかつている義務は、すべて忠実に果たすようにつとめ、そして神のみ約束に静かにいるのである。

時には自分に対する深い無価値感で恐怖に心がおののくことがあるかも知れないが、これは、神のわれわれに対する、あるいは、われわれの神に対する関係が変わったという証拠ではない。精神が、ある種の強烈な感情を抱くような努力はすべきではない。われわれは昨日感じた平安や喜びを今日は感じないかも知れないが、しかし、信仰によってキリストのみ手をつかみ、光の中にある時と同じように暗黒の中でも全く彼に信頼しなければならぬ。

勝利する者のために用意されている冠を信仰によってながめ、ほふられて、われわれを神に

贖い戻して下さった小羊こそ、さんびを受けるにふさわしい、ふさわしいと歌う、贖われた人の歡喜の歌に耳を傾けなさい。これらの光景を現実として見るように努力しなさい。

もしも、われわれの心にキリストと天国の事をもっと考えるようにさせるならば、主の戦いを戦うために有力な刺激と支えを発見するはずである。もう間もなくわれわれの住み家となるべき、よりよい国の栄光を默想する時、自尊心も世俗を愛する心も力を失う。キリストのすばらしさに比べると、この世の人を引きつけるすべてのものが無価値に見えるようになる。

パウロは、ついにローマの牢獄に監禁され、天の光と空気から閉め出され、福音の活動的な働きからは切り離されて、今か今かと死刑の宣告を待ちながらも、疑惑や失望に負けなかった。

あの陰うつな土牢から、後に続くすべての時代の聖徒や殉教者たちの心を鼓舞した、崇高な信仰と勇氣に溢れた、彼の臨終のあかしが送られたのである。彼の言葉は、われわれがこれらのページで示そうと努力してきたきよめ、の結果を適切に描写している。「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであらう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであらう」（テ

モテ第二・四ノ六八）。

（S L ・ 八九、九六ページ）



第二編  
教  
会



## 第一章 地上の教会

神は、ご自身の選ばれた民すなわち神の戒めを守る、一つの教会を地上に持つておられる。神は、ここに一人、あそこに一人というような、横道にそれた人々でなく、一つの民を導いておられるのである。真理は、清める力であるが、戦闘中の教会は、勝利を得た教会ではない。麦の中に毒麦がある。「では……それを抜き集めましょうか」というのが僕の質問であったが、主人は答えて「いや、毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない」（マタイ一三ノ二八、二九）と言った。福音の網は、良い魚だけでなく、悪い魚も引きよせるが、主だけがだれがご自分に属する者かを知っておられる。

へりくだって神とともに歩むことが、われわれ各個人の義務である。われわれは、決して風変わりな、耳新しいメッセージを求めてはならない。また、光の中を歩もうと努力をしている神に選ばれた者たちが、バビロンを構成していると考えるてはならない。

（2 T T ・ 三六二ページ）

教会の中にも悪が存在し、世の終わりまで続くであろうが、それでも、この最後の時代の教会が、罪によつて汚れ墮落した世界の光とならなければならないのである。弱くなり、不完全で、譴責や警告や勧告を与えられなければならない教会が、地上において、キリストがご自分の最高の関心を払われる唯一の対象なのである。この世界は、イエスが人間と神の働きの協力により、人の心に、ご自身の恵みと神のあわれみで実験をしておられる作業場なのである。

（2 T T ・ 三五五ページ）

神は、真理を教え、神の律法を擁護する手段において、だれよりもすぐれた唯一無二の独特な民である教会を地上に持つておられる。神には、ご自身が任命した代理者たち、すなわち神が導いておられる人々で、この時代の苦難や重荷に耐えて来た人々、われわれの世界に、キリストの王国を進展させるために天の働き手と協力をしている人々がいるのである。これらの選ばれた代理者たちと、みんなで一致協力をしよう。そして、最後には神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ち、聖徒の忍耐を持っている人々の中に加えられるようにしよう。

（2 T T ・ 三六一、三六二ページ）



## 天の教会と一致結合する

地上にある神の教会は、天にある神の教会と一体である。地上の信者と、墮落したことのない天の住民たちが一つの教会を構成している。天の知的存在者のすべてが、地上で神を礼拝するために集まる聖徒たちの集会に関心を持っている。彼らは、地上にある外庭で語られるキリストの証人たちのあかしを、天の内庭で聞き、下界の礼拝者たちの賛美や感謝をとらえて天の聖歌を歌うのである。そして、キリストが墮落したアダムの子孫のために死なれたことがむだにならなかったため、賛美と歓声が天国中に鳴り響くのである。天使たちは泉から飲んでいるが、地上の聖徒たちは、み座から流れ出て、われわれの神の都を喜ばせる清い流れから飲むのである。

われわれがみな、天が地に対して、どんなに近いかを認識することができたと思う。地上に生まれる子供たちが知らないうちに彼らは光の天使たちを自分に同伴する相手として与えられている。無言の証人は、生きているすべての魂を保護し、その魂をキリストに引き寄せようと努力している。希望のある間、すなわち、人々が聖霊に抵抗して永遠の滅びを招くにいたる

までは、彼らは天使たちによって守られるのである。地上にある聖徒たちのすべての集まりに神の天使たちがいて、あかしや歌や祈りに耳を傾けていることをみな覚えていよう。われわれの賛美は、天上の軍勢のコワイヤーによって、補われることを覚えよう。

であるから、あなたがたが安息日ごとに集まる時、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたに、賛美をささげなさい。「わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し……て下さったかたに」心から礼拝をしなさい。キリストの愛を説教者の話の主題にしなさい。賛美するすべての歌で単純にそれを表現しなさい。神の御霊に指図されるままに祈りなさい。命の言葉が語られる時、心から反応することによって、あなたがそのメッセージを天来のものとして受けていることを立証しなさい。

神は、われわれが完全な愛の性質を育てるために彼の家に集まるようにと教えておられる。このことは、キリストが、ご自分を愛するすべての者のために用意しに行かれたすまいに住むことができるように、地の住民たちを備えさせる。そこにおいて、彼らは、安息日ごとに、新月ごとに、聖所に集まり、声を合わせて高らかに歌い、み座にいますかたと小羊とに、世々限りなく賛美と、感謝とをささげるのである。

（6 T・三六六、三六八ページ）

## 教会に授けられた権威

キリストは教会の発言に権能を与えられる。「よく言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つなぐが、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう」(マタイ一八ノ一八)。一人の人間が、教会の判断に関係なく、自分自身の判断で事を始め、自分の選ぶ見解をとなえるというようなことは認められない。神は、ご自分の教会に地上最高の権能を授けられたのである。尊重しなければならぬのは、教会という形をとった、一致結合した神の民の内語られる神のみ声なのである。(3T・四五〇、四五一ページ)

神のみ言葉は、一人の人間が教会の判断に反対して自分の判断をかけることを許していないし、また、教会の意見に反対して自分の意見を主張することも許されないものである。もし、教会の規律や統制がなければ、教会は寸断されてしまい、一つの身体として団結しつづけることはできない。自分の正しいことを主張し、神が特に自分らを教え、印象を与え、導かれたと主張する独立的な精神の人々は、いつもいた。各自が自分自身の理論や自分独特の見解を持ち、自分の見解が神のみ言葉に合っていると主張する。一人びとりが違った理論と信仰を持ってい

ながら、しかも、各自が神から特別な光を受けたと主張するのである。これらの人々は、団体からはなれ、それぞれが、その人自身の別の教会になってしまっているのである。これらは、すべて正しいはずがないのに、彼らはみな、主に導かれているのだと主張する。

われわれの救い主は、彼の教訓を与えた後、二、三人の者が、一致して神に何でも求めるならば与えられると約束された。キリストは、ここに、神意によって定められた目的を達成しようという願いにおいてさえ、他の人々との一致がなければならないことを示しておられるのである。一致団結した祈り、目的の一致に非常な重要性が置かれている。神は、個人の祈りを聞かれるが、しかし、この場合、イエスは、地上に新しく組織されたご自分の教会に、特に意義を持つようになる特別で重要な教訓を与えておられたのであった。彼らが望み祈る事柄に、合意がなければならぬ。惑わしに陥りやすいのは単に一人の人間の思想や、精神の働きだけではなかったが、同じ目的に集中した何人かの熱心な願いをもって祈らなければならなかったのである。

（3 T・四二八、四二九ページ）

教会は、人類の救いのために神が定められた機関である。それは、奉仕のために組織されたものであつて、その使命は、福音を世界に伝えることである。神が満ちあふれる、十分なものであることを、ご自分の教会を通して、世に反映することが、初めから神の御計画であった。神

が、暗やみから驚くべき光に招き入れて下さった教会員たちは、神のご栄光を表わさなければならぬ。教会はキリストの恵みの富の宝庫であって、神の愛はついには、教会を通して、「天上にあるもろもろの支配や権威」に対してさえも完全に表わされるのである。

(A A・九ページ)

### パウロは指導を受けるため教会へ導かれた

多くの人々は、自分の受けた光や経験に関しては、キリストに対してだけ責任があつて、キリストが認めておられるこの世の信者たちには、関係がないように思っている。しかし、このような考え方はキリストの教えと、われわれの教訓のために彼が与えた実際の例によつて、キリストに非難されている。ここに、キリストが非常に重要な働きのために備えたもうた人、ご自身のために選ばれた器となるように定められていた人物、パウロがいて、直接キリストのみに導かれたのであるが、それでもキリストは彼に真理の教授をしてはおられないのである。キリストは、パウロの行動を阻止し、罪を悟らせ、そして彼が、「あなたは、わたしが何をする事を求めておられるのですか」とたずねた時、救い主は、直接彼にお告げにならず、ご自身の

教会に彼をゆだねられた。あなたのなすべきことは、彼らが告げるであろう。イエスは罪人の友であつて、彼の心は、いつも開かれていて、人の苦しみに対して心を動かされるのである。イエスは、天と地のすべての権威を持つておられるが、ご自分が人間の啓発と救済のために制定された手段を尊重されるのである。イエスはサウロを教会に向けられたが、そうすることによつてこの世に対する光の通路として教会に授けられた権威を認められたのである。教会は地上におけるキリストの組織体であり、キリストの命令には敬意を表することが要求されるのである。サウロの場合、アナニヤはキリストを代表し、また、キリストに代わつて行動するように任命された地上にあるキリストの牧者たちを代表している。

パウロの改心の中に、われわれが常に記憶していなければならない重要な原則が示されている。世のあがない主は、ご自分の教会のある所では、組織立てられ、認められた彼の教会に係なく持たれる宗教的な内容の経験や運動を認められない。

神のみ子は、組織された彼の教会の任務や権威を全くご自身と同一に見られる。神の祝福は、彼が任命された機関を通して与えられることになっているので、人間を、彼の祝福の流れる水路に接続させるのである。パウロが聖徒たちを迫害したことは、全く良心的であつたが、神の霊に感じて自分の残虐な行為を認識した時、彼は無罪にはされなかった。彼は弟子たちから学

ばなければならないのであった。

(3 T・四三二、四三三ページ)

教会員がみな神のむすこ、むすめであるならば、彼らが世の光となる前に、訓練の過程を経なければならぬ。神は、男女が、暗黒の中にいて、そのままに満足し、光の源泉に接続するための特別な努力を少しもしない間は、彼らを光の通路にはなさない。自分自身の必要を感じ、自ら覚醒して深く考え、非常に熱心に、忍耐強く祈って行動する者たちが神の助けを受けるのである。各自は、自分自身に関して、学ばなければならないことが多くあるが、捨てて行かなければならないことも多い。古い習慣や風習は、振り捨てなければならないが、これらの誤りを直すための熱心な戦いと、神の恵みによって真理を完全に受け入れ、その原則を実行することによってのみ勝利は得られるのである。(4 T・四八五、四八六ページ)

### 誤謬を流布する者への勧告

自分個人の責任において、あるメッセージを宣伝し始める人々、神によって教えられ、導かれていると主張しながら、神が長年の間、築いて来られたものを破壊することを特別な仕事にしている人々は、神のみ心を行ってはいない。これらの人々は大欺瞞者の味方をしているとい

うことを知りなさい。彼らを信じてはならない。

資力や才能の管理人とされて来た人々として、あなたがたは、誤びゅうを広めるために、あなたの主の財産を誤用して来たのである。全世界は、神の律法の拘束的な要求を宣べ伝える人に対する憎しみで満たされているから、エホバに忠義な教会は、並々ならぬ戦いに携わらなければならぬ。「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」（エペソ六ノ一二）。この戦いが何を意味するかを少しでも認識している者は、戦っている教会に対して武器を向けることはしない。かえって、神の民と共に、悪の連合軍に対して全力をもって戦うのである。

（2 T T・三五六、三五七ページ）



## 第二章 教会組織

だれかがキリストの任命を果たさなければならぬ。地上で彼が始められた働きを、だれかが続けて行かなければならない。そこで、教会に、この特権が与えられ、この目的のために、教会は組織されたのであった。

(6 T・二九五ページ)

牧師は秩序を愛し、自分自身を訓練すべきであって、そうするときにはじめて、神の教会を訓練することに成功することができ、十分に教練を受けた一団の兵士たちのように、彼らが調和をもって働くよう指導することができる。もしも、戦場で効果的な行動をとるために、訓練や秩序が必要だとすれば、われわれが加わっている戦争は、勝ちとらなければならない目的が、戦場で対立する軍隊が戦う目的にくらべて、価値が大きく、性質の高いものであるだけに、同じことが、はるかに強く要求される。われわれが参加している戦いには、永遠の利害問題がかかっているのである。

天使たちは調和を保って行動し、完全な秩序が彼らのすべての活動の特徴づけている。われわれが天使軍の調和と秩序をもつと厳密に模倣するならば、われわれのために働くこれらの天使たちの努力も、それだけ効果をもたらす。天からの油を注がれた人々は、彼らが努力するすべてのことに、秩序と訓練と行動の一致を奨励するが、そうする時に神の天使たちは彼らと協力することができるのである。しかし、これらの天の使者たちは絶対に、不規則や混乱や無秩序を認めはしない。すべてこれらの悪は、サタンがわれわれの力を弱め、勇気を失わせ、効果的な活動を妨げるための努力の結果である。

サタンは、成功が秩序と調和のとれた行動にだけ伴い得ることをよく知っている。彼は、天に関係したすべてのことが完全な秩序の中にあり、服従と徹底した規律が天軍の活動の特色であることをよく承知している。クリスチャンと公言する人々を天の配剤からできるだけ遠くにそらせることが彼の計画的な努力であるから、彼は、神の民と公言する人々でさえも欺き、秩序や規律は靈性に有害であると信じさせる。そして、彼らにとって唯一の安全は、各自が自分の道を進み、特に、一致結合して規律と調和のとれた行動を確立させようと骨折っているクリスチャンの団体から、明らかに離れていることであると信じさせる。秩序を確立するためになされる努力はすべて危険であり、正当な自由の束縛であると考えられているので、ローマ・カ

トリック教のように恐れられている。これらの欺かれた人々は、自分勝手に考え、行動する彼らの自由を誇ることを美德だと思っていて、だれの言うことも信じないし、だれにも従わない。彼らが自分自身で計画を立案し、兄弟たちと関係なく独自の道を選ぶことが、神の命令であると感じるように人々を導くのは、サタンの特別な働きであるとわたしは示された。

(1T・六四九、六五〇ページ)

神は、地上にある彼の教会を光の通路とし、これを通してご自分の目的や、み心を伝達される。神は、教会自体の経験に関係なく、あるいは、これに反した経験を彼のしもべの一人に与えになることはないし、また、教会全体のための彼のみ心について知識を一人の人間に与え、キリストのからだである教会が暗黒の中にとり残されるということはなさらないのである。神は摂理によつて、神のしもべたちを、彼の教会と密接な関係におかれるが、それは、彼らが自分自身に信頼する気持ちを減じ、神が、み事業の進展のために導いておられる他の人々に、もっと信頼するためである。

(A A・一六三ページ)

預言者たちによって組織された教会

エルサレムにおける教会の組織は、真理のメッセンジャーたちが、福音への入信者を獲得しなければならぬ他のすべての場所における教会組織の型として役立つためであった。教会の全般的な監督の責任を与えられた人々は、神にゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、賢明な牧者として、「神の羊の群れを牧し……群れの模範となるべきであり、……また執事は「御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち」でなければならなかった。これらの人たちは、一致団結して正義の側に立ち、堅固さと決意をもって、これを維持しなければならなかった。そうすることによって、彼らは群れ全体を一致団結させる感化を及ぼすのであった。

（A A・九一ページ）

新たに入信した人たちの霊的成長に重要な要素として、使徒たちは注意深く、彼らを守る福音の秩序をもって彼らを取り囲んだ。各教会に役員が任命され、信者の霊的福祉に関係したすべての事柄を処理するために正しい規律と組織が制定された。

これは、すべての信者をキリストのうちに一体として一致団結させる福音の計画に調和する

ものであつて、パウロはその宣教において、終始、注意深く、この計画に従つた。どこにおいても、彼の伝道によつて、キリストを救い主として受け入れるように導かれた人々は、適当な時期に教会として組織された。信者が少数しかない場合でも、これは実行された。こうしてクリスチャンは、「ふたりまたは三人が、わたしの名によつて集まっている所には、わたしもその中にいるのである」とのみ約束をおぼえて、互いに助け合うように教えられたのである。

(A A・一八五、一八六ページ)

### 教会内の紛争に対処する

エルサレムでは、アンテオケから行つた代議員たちが、総会に集まっていた各教会の兄弟たちと会い、異邦人の間の彼らの伝道で得た成功について話した。それから彼らは、パリサイ派から入信したある者たちが、アンテオケに来て、異邦人の入信者が救われるためには割礼を受けてモーセの律法を守らなければならないと言明したために起こつた混乱について、あらましを明確に宣べた。そして、この問題は、会議で熱心に討議されたのである。

聖霊は、異邦人の入信者に礼典律を守る義務を負わせないほうがよいとお認めになり、この

問題に関する使徒たちの考えも、神の御霊の思いと同じであったのである。ヤコブは、会議で議長をつとめたが、彼の最後の決断は、「そこで、わたしの意見では、異邦人の中から神に帰依している人たちに、わずらいをかけてはいけない」という事であった。これによって討議は終了した。

この場合、ヤコブは会議によって到達した決議を発表する者として選ばれていたようである。しかし、異邦人の入信者は、キリスト教の主義原則に矛盾する慣習は捨てなければならなかった。そこで使徒と長老たちは、偶像に供えた物と、不品行と、絞め殺したものと、血とを、避けるように、手紙で異邦人を教育することに同意した。彼らが十戒を守って清い生活をおくるように、熱心に勧告することにし、また、割礼を義務であると言明した人たちは、使徒たちによつて権限が与えられたものではなかったことを確認することにした。

（A A・一九〇 一九五ページ）

この問題を決定した会議は、ユダヤ人と異邦人のキリスト教会を設立する働きでもも立っていた使徒や教師たちと、各地から選出されて来た代議員たちで構成されていた。エルサレムからの長老たちや、アンテオケからの代表者たちが出席していて、彼らは有力な教会を代表していた。会議は、正しい理解に基づく判断と、神のみむねによつて教会に固くそなわった権威を

もって進行した。審議の結果、彼らは皆、神ご自身が、異邦人に聖霊を下すことによって、討議されている問題に答えて居られたことを悟り、御霊のご指導に従うことが彼らの本分であることを認識したのである。

クリスチャン全員が、問題について議決することは要求されなかった。「使徒たちや長老たち」、影響力と判断力のある人々が、宗令を構想して発布し、それをキリスト教会が一般に受け入れたのである。しかし、全員が、その決定で満足したのではなかった。それと意見を異にした、名誉心の強い、自信のある兄弟たちの党派があつて、自分勝手に出しゃばって事を行なつた。彼らは、よく不平を言い、あら探しをし、新しい計画を提案し、神が福音の使命を教えるように任命された人々の働きを取りこわそうとしたのである。教会は、最初から、そのような障害に会わなければならなかったが、時の終わるまで、常にそうなのである。

(A A・一九六、一九七ページ)

### 個人の判断を最高のものとする危険

自分個人の判断を最高のものであると考え、傾向のある人々は重大な危険にさらされている。

神が地上にある彼のみ事業を築き、拡張するために、お用いになった光の通路である人々から、そういう者たちを引き離すことがサタンの計画的な努力である。真理の進展に関係して指導の責任を負うように神が任命された人々を、おろそかにしたり、軽べつすることは、神が、ご自身の民を助け、励まし、力づけるために定められた手段を拒絶することである。主のみ事業に携わっているどんな働き人も、これらの人々を無視して、自分の光は、神から直接に与えられる以外に、どんな他の道からも来ないと考えるならば、自分を、敵に欺かれ、征服されやすい立場におくのである。

すべての信者が維持すべき密接な関係によつて、クリスチャンはクリスチャンに、教会は教会に結合するよう、主は、賢明に取り計らわれたのであつて、このようにして、人間であるうつわが、神と協力することができる。すべての機関が聖霊に従い、信者は皆一致団結して、神の恵みの福音を世界に伝えるために組織立つて、よく統制のとれた働きをするのである。

（A A ・ 一六四ページ）

人体組織の各器官が皆一体となつて全身を構成し、各々が全体を支配している知性に従つて、その任務を果たすように、キリストの教会の会員たちも一致団結して調和のとれた一つの団体となり、全体のために聖別された知性に従うべきである。

（1 T T ・ 四四三ページ）



### 地方教会の役員選出と按手礼

使徒パウロは、テトスに「わたしがあなたに命じておいたように、そこにし残してあることを整理してもらい、また、町々に長老を立ててもらいたい。」「長老は、責められる点がなく、ひとりの妻の夫であつて、その子たちも不品行のうわさをたてられず、親不孝をしない信者でなくてはならない。監督たる者は、神に仕える者として、責められる点がない人であればならない」(テトス一ノ五 九)。「軽々しく人に手をおいてはならない」(テモテ第一・五ノ二二)と書いている。

われわれの教会の中には、これを組織したり、長老に按手礼を施す事について未熟な所があり、聖書の規定が無視されていたので、その結果、悲しむべき問題が教会にもたらされたのであった。責任ある仕事に全く適していない人々、すなわち神のみ業のあらゆる立場において奉仕できるようになる以前に、悔い改め、向上し、高潔でかつ精練される必要のある人々に按手礼を施し指導者に選ぶというような早まったことをしてはならない。

(5 T・六一七、六一八ページ)

## 教会の所有地

どんな都市や町であっても、人々の関心が喚起された時には、その関心を追跡して働くべきである。質朴な礼拝所が神の安息日のしるしとなり、記念碑となり、道德的暗黒の中の光となるまで、その場所で徹底的に伝道すべきである。これらの記念碑は、真理の証人として多くの場所に立てられなければならない。

（6 T・一〇〇ページ）

教会に関する問題は、未決定の状態であつておいてはならない。み事業の進展が遅れることのないため、人々が神のみ働きにささげたいと望んでいる金銭が敵の手にすべり落ちることがないように、教会の資産を神のみ事業のためにまもる手段をとるべきである。

わたしは、神の民が賢明に行動し、教会の事務を安全な状態におくために、彼らの義務を完全に果たさなければならぬことを悟つた。そして、彼らにできることを全部果たした後、彼らは、サタンが神の残りの民を利用することがないように、主が彼らのために、これらのことを支配してくださると信頼すべきである。今はサタンの働く時である。波乱に富んだ将来が、われわれを待っているのであつて、教会は、サタンの計画に対して安全に立つことができるため

に、目をさまして前進しなければならない。今は何かをしなければならない時である。神は、彼の民が教会の問題を未解決のままに放っておいて、敵に全く有利なようにし、彼の好むままに事柄を支配させることを、お喜びにならない。

(1T・二一〇、二二一ページ)

## 年 会

神の民の集会に出席するためには特別な努力をなさい。兄弟がたよ、神が、あなたに与えようとしておられるメッセージを聞く機会をおろそかにするよりは、あなたの事業に損失を来たすほうが、あなたのために、はるかによいのである。得られる限りの霊的な特典を得ることを妨げるような言い訳はしないようにしなさい。あなたには、すべての光が必要なのである。あなたがたは、自分のうちにある望みの理由を、柔和とおそれをもって告げることができるように用意していなければならないのであって、そういう特典を一回でも失う余裕はないのである。

われわれのうちのだれも、出席する天幕集会(年会)が、自分たちにとって祝福となるよう牧師や婦人伝道師に頼って行ってはならない。神は、彼の民が、彼らの負担を牧師にかけこ

とを望まれない。彼らが人間の助けに頼ることによつて弱くなることは、お望みにならないのである。彼らは無力なこどもたちのように、ささえとして、だれか他の人に寄り掛かつてはならないのである。各教会員が、神の恵みの管理者として、自分自身の中に生命と根を持つ個人的な責任を感じなければならない。

集会の成功は、聖霊のご臨在と力に依存する。真理のみ業を愛する者は皆、御霊の降下を求めて祈るべきである。そして、われわれの力の及ぶ限り、御霊の働きに妨げとなるものをすべて取り除かなければならない。御霊は、教会員たちが互いに争い、苦々しい気持ちを抱いている間、決して、そそがれることはできないのである。せん望、しつと、さいぎ心、また悪口などは、サタンから来るものであつて、これらは聖霊の働きを効果的に阻止する。

この世界で、ご自分の教会ほど、神にとって大事なものは他にない。これほど熱心に心をかけて守られるものは何一つない。神のみ働きをしている人々の影響力をそこなう行動ほど、神を怒らせるものは何もないのである。批判したり、失望させたりするサタンの働きを助けるすべての者に、神は責任を問われる。

### 牧師は自分の説教を実行すべきである

あなたは、いつでも談話に慎重でなければならない。神は、地上でキリストの代表者となり、彼に代わって、罪人に神と和らぐよう求めるために、あなたを召されたのであるうか。これは厳粛な、崇高な働きである。あなたが講壇で説教を終わった時、その働きは始まったばかりなのである。あなたは、集会に出席していない時も、責任から解放されてはいないのであつて、救霊の働きに対するあなたの献身を、なお維持しなければならない。あなたは、すべての人に知られ、かつ読まれている生きた書簡でなければならないのである。

楽になることを考えるべきではない。快樂に思いをめぐらしてはならない。魂の救いは、全く重大な問題なのである。キリストの福音の牧師が召されているのは、この働きのためである。彼は、集会から出た時に、よい行動を続け、自分の信仰の告白を、信心深い談話と思慮深い行状によって飾らなければならない。

あなたは、他の人々に対する義務として説教することを、生活に実行しなければならない。そして、今までしたことがないほど働きの重荷、キリストのすべての牧師に課せられなければならない。

ならない重責を自分の上に負わなければならない。講壇から与えたものを、個人的努力をもつて追求することにより確かなものとしなさい。現代の真理について分別のある談話をし、そこにいる人々の心の状態を率直に確かめ、神を恐れつつ、重要な真理を、あなたが交わっている人たちの事情に当てはめて実際に役立つように教えなさい。

（2 T・七〇五、七〇六ページ）

## 第三章 神の家

地上にある神の家は、けんそんな、信仰の厚い魂にとって天の門である。賛美の歌、祈り、キリストの代表者たちによって語られる言葉は、汚すものがいつさい入ることのできない天の教会とそのより崇高な礼拝に、民を準備するため、神によって定められた力である。

家は家族のための聖所であり、密室や森は個人が礼拝をするためにいちばん人目を避けた場所であるが、教会は、会衆のための聖所である。礼拝の時と場所と方法について規則がなければならぬ。神聖な事物、神の礼拝に関係したことは、何であつてもすべて、不注意に、あるいは無とん着に取り扱つてはならない。人が、神への最高の賛美をささげるためには、思いにおいても、神聖な事柄を一般的なことから明確に区別しなければならない。広い見解を持ち、高潔な思想と抱負をいだいている人たちは、すべての神聖な考えを強めるような心を持つ人々である。階級の上下にかかわらず、町の中であつても、けわしい山岳の洞窟の中においても、

あるいは粗末な小屋の中や荒野においても聖所を持っている人々は幸いである。それが、主のために彼らの得られる最善のものであれば、主はご臨在によって、その場所を清めてくださり、それは万軍の主にとって神聖なものとなるのである。

### 神の家における祈りの態度

礼拝者たちが集会の場所に入る時は、礼儀正しい態度で入るべきであって、静かに進んで自分たちの席に着くべきである。室内にストープがある場合に、怠惰で不注意な態度で、その周囲に群がrogすることは正しいことではない。礼拝の前であっても、後であっても、礼拝所においては、一般の会話や、小声で話すことや、笑いを許すべきではなく、熱心で、積極的な敬神の念が礼拝者たちの特徴でなければならない。

もし、ある人たちが集会の始まる前、数分間待たなければならない時は、黙想して、真の祈りの精神を保ち、礼拝が自分自身の心に特別な恵みとなり、他の人々を罪の自覚と改心に導くよう、心を高く挙げて神に祈っていないさい。礼拝所の中には天使たちがおられることを記憶すべきである。われわれは皆、落ち着きがないため、また黙想と祈りの時間を奨励しないために、



神との美しい交わりの多くを失うのである。霊的な状態は、度々吟味され、頭と心が義の太陽に引き付けられなければならない。

人々が礼拝の家に、入って行く時、もしも彼らに主に対する真実な敬けんさがあって、主のご臨在の内にいることを心に留めているならば、沈黙の中にも美しい雄弁さがある。一般の仕事場では罪でないかも知れない、ささやきや、笑いや話も、神を礼拝する家においては、容認されてはならないのである。神のみ言葉が、十分な重みをもって、心にふさわしい印象を与えることができるように、精神は、これを聞くための準備がなされなければならない。

牧師が、入って来る時は、威厳のある、厳粛な態度でなければならない。登壇したら直ぐ腰をかがめ、頭を下げて黙祷し、熱心に神の助けを求めるべきである。これが、どんなに大きな印象を与えることであろう。厳粛さと畏敬の念に人々は打たれるのである。彼らの牧師は神と交わっているものであって、彼は勇気をもって人々の前に立つ前に、自分自身を神にゆだねているのである。厳粛さが全員に及び、神のみ使いたちは彼らの身邊に近寄られる。神を恐れる者は、一人残らず、頭を垂れて彼とともに黙祷をし、神がご臨在によって、集会に恵みを与え、人間のくちびるから語られる神の真理に力を添えられるよう祈るべきである。

相談会や祈祷会は飽きるほど長引かせてはならない。できるなら全員が遅れず定刻に集まるべきであるが、もし、おそい人たちがあって、三十分、あるいは十五分でも時間に遅れる場合、待っているべきではない。二人しか出席している者がいなくても、彼らは、約束通りはじめてよい。出席者が少なくても多くても、集会は、出来る限り定刻に始めるべきである。

（2T・五七七、五七八ページ）

### 目に見える神のみ前にあるように行動する

神が無限に偉大であられることを感じ、かつその御臨在を意識すれば、神に対する真の畏敬の念が起こる。だから、見えない神がそこに居られるという意識をもつて、すべての者の心に深い印象を与えなければならない。祈りの時と場所とは、その時、その場に神が臨在しておられるが故に神聖であって、謹厳な態度と動作とは敬虔の念を一層深めるのである。詩篇記者は、  
「そのみ名は聖にして、おそれおい」と述べている（詩篇一一ノ九）。

（福音宣伝者・二六三 二六四ページ参照）

集会在祈りによって始められる時、すべてのひざが聖なる者のみ前にかがめられ、すべての

心は、黙祷によつて神のみもとに昇つて行くべきである。忠実な礼拝者たちの祈りは聞かれ、言葉による伝道は功を奏するのである。神の家における礼拝者たちの活気のない態度は、伝道がなげもつと益をもたらさないかという、一つの大きな理由である。はつきりした、明瞭な言葉で、多くの人の心から、注ぎ出される賛美のメロディーは、救霊の働きにおける神の手段の一つである。礼拝はすべて、集会の支配者の面前にいるかのように、厳肅さと畏敬の念をもつて行われなければならない。

言葉が語られる時、兄弟がたよ、あなたは神の代表者として遣わされたしもべを通して、神のみ声を聞いていることを覚えなければならない。注意深く聞きなさい。一瞬も眠つてはならない。それは、まどろむことによつて、ちょうどあなたが一番必要としている言葉、すなわち、もし聞いて注意するなら、あなたの足を間違つた道に迷い込むことから救う言葉を聞き漏らすかも知れないからである。サタンと彼の使いたちは、注意や警告や、譴責が聞こえないように、あるいは、聞こえてもそれらが心に影響を及ぼして生活を改革することがないように、感覚を麻痺させるため忙しく働いている。時には、幼い子供が聴衆の注意を引き、そのために貴重な種が良い地に落ちないで、実を結ばないことがある。また時には若い男女が、神の家と礼拝に對してあまりにも敬けんの念に欠けているために、説教の間、互いに話し続ける。神のみ使い

たちが彼らを眺めて、彼らのしていることを記録しておられるのを、もし、これらの人たちが見ることができたら、彼らは恥と自分自身に対する嫌悪の念で満たされるに相違ない。神は注意深く聞く聴衆を求めておられる。サタンがその毒麦をまいたのは、人が眠っている間であった。

祝祷がのべられる時、会衆はなお、キリストの平安を失うことを恐れるかのように、静かにしているべきである。退場する時は、だれも押し合ったり、大声で話したりせず、自分たちは神の面前にあつて、神の御目が彼らにそそがれていること、神の面前にいるように行動しなければならぬことを感じつつ立ち去るべきである。雑談やうわさ話のために座席の間の通路に立ち止まり、他の人たちが外に出られないように道をふさいではならない。教会の周囲は、神聖で敬けんな空気を帯びていなければならない。それは、旧友と会って話をしたり、普通一般の思想を持ち出し、あるいは世的な事業の取り引きをする場所とされてはならないのであつて、これらは、教会の外に残しておくべきである。神と天使たちは、所々で聞かれる不注意な、騒ましい笑いや、引きずって歩く足音によって辱めを受けて来られたのである。

子供たちが敬けんでなければならないこと

両親たちよ、あなたの子女の考えるキリスト教の標準を高めなさい。彼らの体験の中にイエスを織り込むように助けなさい。彼らが神の家に対して最高の敬意を持つように、そして主の家に入る時は、「神が、ここにおられる。これは神の家である。わたしは汚れない思いと、最も清い動機を持たなければならない。わたしは、聖なる神のみ前に出ようとしているのであるから、高ぶりや、ねたみ、せんぼう、さい疑心や憎しみ、欺瞞を心にいだいてはならない。ここは、神がご自分の民と、お会いになって、彼らを祝福される場所である。いと高く、いと清き者、とこしえに住む者が、わたしをご覧になり、わたしの心を探り、最もひそかな考えや、わたしの生涯の行動を読み取られるのである」というような思いによって、穏やかになり、静まった心で、入って行かなければならないことを理解するよう教えなさい。

青年たちの繊細で敏感な頭脳は、神のしもべたちの働きを、自分たちの両親の扱いかたによって評価する。多くの家庭の主人が、教会の礼拝を、家庭において批判をする話題とし、二、三の点は是認して他は非難する。こうして、人々に対する神のメッセージは批判され、疑問を

持たれ、軽率に扱われている。これらの不注意な、不敬けんな言葉によって、青年たちに、どんな印象を与えたかは、天の書だけが明らかにするであろう。子供たちは、これらのことを、両親が、とかく考えるよりも、ずっと早く見て理解する。彼らの道徳的感覚に、偏見を持つようになり、時が経過しても決して完全に変わることがない。両親は、彼らの子供たちの心の無情さと、神のご要求に答えるために彼らの道徳的感覚を覚醒させることの困難さを嘆くのである。

（5 T・四九三 四九七ページ）

敬けんの念は、神のみ名に対しても、また表すべきである。そのみ名は、決して軽率に、あるいは無分別に語られてはならない。祈りの中でさえも、度々、あるいは不必要に、それを繰り返すことは避けるべきである。「そのみ名は聖にして、おそれおおい」（詩篇一一ノ九）。天使たちは、それをとなえる時は、自分たちの顔をおおうのである。墮落した罪深いわれわれは、どれほど敬けんな気持ちで、み名を口にすべきであろう。

（同二四三ページ）

わたしは、神の聖なるみ名は、尊敬と畏敬の念をもつて用いなければならないことを見た。全能と神という二つの言葉を一緒にして、それを祈りの中で、軽々しく、不注意に用いる人があるが、神は、それをお喜びにならない。このような人々は、神や真理について、ほんとうの事がわかっていない。さもなければ、彼らは、やがて最後の日に彼らをお裁きになる大いなる

恐るべき神について、このように不敬な言葉を用いないであろう。「神のみ名は、恐るべきものであるから、この言葉を一緒にしてはならない」と天使は言った。神の偉大さと威光とを自覚する者は、聖なる恐れをいだきつつ、その御名を口にするのである。神は、近づくことができない光の中に住んでおられる。彼を見たものは、だれでも生きていることはできない。わたしは、教会が繁栄するに先だって、こうしたことをよく理解して、それを正す必要があることを示された。

(初代文集二二七、二二八ページ)

われわれは神のみ言葉を敬うべきである。聖書に対して崇敬の念を示し、これを凡俗のことに用いたり、不注意に取り扱ったりしてはならない。聖句を冗談に引用したり、気のきいた言い方を強調するために言い換えたりしてはならない。「神の言葉はみな真実である」(箴言三〇ノ五)。「主のことは清き言葉である。地に設けた炉で練り、七たびきよめた銀のようである」(詩篇一二ノ六)とある。

とりわけ子供たちに教えなければならないことは、敬神の念は従順によって示されるということである。神は不要なことは何もお命じにはならない。敬神の念を表わし、神に喜ばれるには、神の仰せになることに従うよりほかに道はない。

神を代表する人々

神の代わりに語り行うべく召されている牧師や教師や親に対して尊敬

を示さなければならない。彼らに対する尊敬を通して、神のみ名はあがめられるのである。

（教育二八八ページ）

老人も若いものも、神が特に臨在しておられる場所は、いかに神聖視されたか、左の聖句を深く吟味しなければならない。

神は燃えるしばの中から、モーセに対して、「足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」（出エジプト記三ノ五）と命じられた。又ヤコブは、天使がはしごを登り降りする幻を示された後、「主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。……これは神の家である。これは天の門だ」（創世記二八ノ一六、一七）と叫んだ。

（福音宣伝者二六四ページ参照）

神聖な事物については敬けんな態度で語り、自分の信仰をあなたが尊んでいることを、教えとともに模範によって示さなければならない。聖句を引用する時、決して、あなたのくちびるから一言でも軽率で不まじめな表現を漏らしてはならない。手に聖書を取る時、あなたは神聖な地にいることを覚えなさい。天使たちは、あなたの回りにおり、もし、あなたの目が開かれるなら、あなたは彼らを見るはずである。純潔な清い雰囲気があるあなたを取りまいているという印象を、あなたが交わるすべての人に与えるような行いをしなさい。一言のむなしい言葉、一



回のくだらない笑いが、一人の人間を間違った方向に傾けるかも知れない。神と絶えずつながっていないことの結果は、おそろしいものである。  
(F E・一九四、一九五ページ)

### 神が思考の中心となっている服装

だれもみな清楚で清潔で、きちんとした服装をするように教え、聖所には全く不適当な外面の飾りで心を満たすことはしないように教えるべきである。服装をみせびらかすようなことがあつてはならない。なぜならば、それは不敬けんな態度を助長するからである。しばしば、人の注意が、あれこれと服飾品に引かれ、礼拝者たちの心にあつてはならない思いが侵入する。神が思考の主題であり、礼拝の対象であるべきであつて、厳粛で神聖な礼拝から精神を引き離すものは、何であつても神を侮辱するものである。

衣服の問題は、すべて厳格に注意し、聖書の規則に厳密に従わなければならない。流行は外部の社会を支配して来た女神であつたが、しばしば教会の中にも、巧みに入り込むのである。教会は神のみ言葉をその基準とすべきであり、両親は、この問題を賢明に考えるべきである。子供たちが、世の流行にならおうとするのを見る時、両親は、アブラハムのように、決意をも

って家族に命じ、自分たちに従わせなければならない。彼らをこの世とつなぐのではなく、神に結びつけなさい。だれも華美な服装によつて、神の聖所を侮辱してはならない。神と天使たちが、そこにおられるのである。イスラエルの聖なるお方は、ご自分の使徒を通じて次のように言っておられる。「あなたがたは、髪を編み、金の飾りをつけ、服装をととのえるような外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない飾りを、身につけるべきである。これこそ、神のみまえに、きわめて尊いものである」（ペテロ第一・三ノ三、四）。

（5 T・四九九、五〇〇ページ）

## 第四章 誤りに陥った者の取り扱い

キリストは、すべての人の手の届く所に救いをもたらすために来られた。彼は、失われた世界のために、カルバリーの十字架上で限らないあがないの代価を払われたのである。彼の克己と自己犠牲、私心のない働きと屈辱、そして何よりも、ご自身の生命をささげられたことが墮落した人類に対する彼の愛の深さを証明している。キリストが、この世に来られたのは、失われた者を尋ねて救うためであつた。キリストの使命は罪人、すなわち、あらゆる国語、民族の、あらゆる階級の罪人に対するものであつて、主は彼らを買ひ戻して、ご自分と一致結合させるために、すべての者の代価を支払われたのである。いちばん多く誤りに陥った者や最も罪深い者も、見過ごしにされなかつた。キリストの働きは特に彼がもたらされた救いをいちばん必要とした人々のためであつた。改革の必要性が大きければ大きいだけ、キリストの関心は深く、思いやりは厚く、主の働きは熱心であつた。その状態が最も絶望的で、心を変化させるキリス

トの恵みを最も必要としている人々に対して、主の大きな愛の心は真底から動かされた。

しかし、ひとつの民としてのわれわれの間には、誘惑を受けて誤りに陥っている人々に対する、深い、熱心な、人々の心を感動させる同情と愛が欠けている。最も助けを必要としている人々からできるだけ離れて反対側を通っているとキリストが表現された、ひどい冷淡さと、深い怠慢を、多くの者が表わしている。入信して間もない魂は、固く身についた習慣や、ある特殊な誘惑との間で、しばしば激しい戦いがあって、支配的なある情欲や性癖に負けると、不謹慎だとか罪を犯したとされるが、その時こそ、彼が靈的に健康状態に回復されるため、兄弟たちの力と気転と知恵が必要なのである。こういう場合に、「兄弟たちよ。もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、その人を正しなさい。それと同時に、もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと、反省しなさい」（ガラテヤ六ノ一）「わたしたち強い者は、強くない者たちの弱さをになうべきであつて、自分だけを喜ばせることをしてはならない」（ローマー五ノ一）という神のみ言葉の教えが当てはまるのである。

（5 T・六〇三 六〇五ページ）

厳しさや、あらあらしさよりも、温和な処置や、穏やかな答え、また感じのよい言葉のほうが、人を改革して救うためにはるかに適している。ほんのわずかでも不親切さが過ぎたために、

あなたの手の届かない所へ人々を追いやるかも知れないが、なだめる精神は、彼らをあなたに結びつける手段となり、またあなたは、彼らを正しく確立させることができるかも知れないのである。あなたは、また許しの精神で行動し、周囲の人々のすべてのよい意図や行為に信頼すべきである。

(4 T・六五ページ)

「わたしがあなたがたを愛したように

あなたがたも互に愛し合いなさい」

神は人類救済のための働きでご自分の役割を、お果たしになり、今日は教会の協力を求めておられる。一方には、キリストの血潮と真理の言葉と聖霊があり、他方には滅んで行く魂がいるのである。キリストを信じる者は皆、天が用意された祝福を受け入れるように人々を導く役目がある。自分自身をよく調べて、この働きをしたかどうかを確かめよう。自分の動機と、生活の中のすべての行動を調べてみよう。

記憶の部屋に不愉快な絵がたくさんかかっているだろうか。度々、あなたはイエスの許しを必要とし、彼のなさけと愛に絶えず頼って来たのに、キリストが、あなたに対して持たれた精神を、あなたは他の人々に表さなかったのではないだろうか。あなたは、だれかが禁じられ

た道に危険を冒して入って行くのを目撃し、その人に対して重荷を感じただろうか。親切に忠告しただろうか。彼のために泣き、彼とともに、また彼のために祈っただろうか。やさしい言葉と親切な行動で、あなたが彼を愛していて彼を救いたいと願っていることを示しただろうか。自分自身の弱い性質や悪い習慣の重荷の下で、つまずき、よろめいている人々と交わっていた時、あなたは助けを与えることもできたのに、彼らが一人で戦うままに放っておきはしなかっただろうか。社会が喜んで彼らに同情を寄せ、サタンの網の中に、おびき入れようと構えていた時、あなたは、反対側を通って、これらのはげしく誘惑されている人々を見過ぎさなかっただろうか。カインのように、「わたしが弟の番人でしょうか」（創世記四ノ九）と言いかねない態度ではなかっただろうか。

教会の偉大な頭（キリスト）は、あなたの生涯の働きを、どのように、お考えになるだろうか。ご自身の血をもってあがなったゆえに、すべての魂を尊んでおられるキリストは、正しい道から迷い去る人々に対するあなたの無関心を、どうぞ覧になるだろう。あなたが彼らを捨てておくように、キリストもあなたを捨てられることを、あなたは恐れないのか。主の家の真の番人であるキリストが、おろそかに扱ったすべての行為に注目しておられることは確かである。

過去の怠慢を償うのに、まだ時期は遅過ぎない。初めの愛、初めの熱心さを復活させなさい。あなたが追い払った人々を探し出し、あなたが与えた傷を、告白によっておおいなさい。あれみ深い大きな愛のみ心に近く接し、天来の慈愛の流れが、あなたの心に流れ込んで、あなたから他の人々の心に流れるようにしなさい。イエスが、ご自身の尊いご生涯に表されたやさしさ、情け深さを、人間同志、特にキリストにある、われわれの兄弟たちに対する接し方の模範としなさい。

人生の大きな苦闘の中で、多くの者が勇気を失い、失望落胆してしまっただが、彼らに対する一言の親切な励ましや元気づける言葉が、力を与えて勝利させたに相違ない。決して、決して、不人情や冷淡になり、同情心に欠け、口やかましくなってはならない。励ましを与え、希望を起こさせる言葉を語る機会を決して失ってはならない。われわれのやさしい親切な言葉、何かの重荷を軽くするためのキリストのような努力が、どれほど大きい影響を及ぼすか、わからないのである。誤りに陥っている者は、柔和で、穏やかな優しい愛の精神によらなければ、どんな他の方法によっても回復できない。

(5 T・六一〇 六一三ページ)

## 教会における懲戒の仕方

誤りに陥った教会員を取り扱う場合に、神の民は、マタイによる福音書一八章に救い主が与えておられる教えに、注意深く従わねばならない。

人類は、無限の代価をもってキリストによってあがなわれた彼の財産であって、キリストと、天父が彼らのために表された愛によつて、キリストに結ばれているのである。それだから、われわれは、お互いの接し方に、どれほど注意深くなければならぬことだろう。人は、他の人間について悪い憶測をする権利はない。教会員は、誤りに陥った教会員同志を、自分の衝動や気分にかかせて取り扱う権利はない。誤りに陥っている人について自分の偏見を表明すべきではない。それは、こうして、悪のパン種を他の人々の考えの中に入れるからである。教会の兄弟あるいは姉妹にとって不利なうわさが次から次へと教会員に伝えられる。主イエスによつて与えられた指示に、だれかが従おうとしないために、間違いが起こり、不正が行われるのである。

キリストは、「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行つて、彼とふたりだけの所で忠告しな



さい」(マタイ一八ノ一五)と言われた。その誤りについて人に話してはならない。一人が聞き、また次の人が聞き、更に次へと絶えず、うわさは広がって災いは増し、ついに教会全体が苦労をさせられるのである。「彼とふたりだけ」で、その問題を解決しなさい。これが神のご計画である。「あなたが目に見たことを、軽々しく法廷に出してはならない。あとになり、あなたが隣り人にはずかしめられるとき、あなたはどのようにするのか。隣り人と争うことがあるならば、ただその人と争え、他人の秘密をもらしてはならない」(箴言二五ノ八、九)。兄弟の罪を黙認してはならない。しかし、その罪を暴露して問題を大きくし、譴責が復しゅうに感じられるようにしてはならない。神のみ言葉に示されている方法で彼を正しなさい。

憤りが怨恨に発達していかないようにさせなさい。傷が化膿して、聞く人々の心を汚すような毒を持った言葉になって破れ出るようにさせてはならない。にがにがしい思いが自分と相手の心を満たし続けることがないようにしなさい。その兄弟の所に行き、謙遜とまごころをもって、彼とその問題について話し合いなさい。

その罪の性質がどうであろうと、誤解や個人的な傷害の解決のために神が定められた計画は変わらない。間違っている人に、キリストの精神をもって、一人だけで話すと困難が除かれることがよくある。誤りに陥っている人の所に、キリストの愛と同情で満ちた心で行って、問題

の調整に努めなさい。穏やかに、静かに道理を説きなさい。怒った言葉を漏らしてはならない。相手の、よりよい判断を促すように話しなさい。「かように罪人を迷いの道から引きもどす人は、そのたましいを死から救い出し、かつ、多くの罪をおおうものである」（ヤコブ五ノ二〇）とのみ言葉を覚えなさい。

不満な精神の病気をいやす薬を、兄弟に持つて行つてあげなさい。彼を助けるために、あなたのなすべき分を果たしなさい。教会の平和と一致のために、そうすることが義務であると同時に特権であると思いなさい。もし、彼があなたの言葉を聞き入れるなら、あなたは彼を友とすることができたのである。

傷つけられた者と誤りを犯している者との間の話し合いに、全天は注目している。誤りを犯した者が、キリストの愛をもつて与えられた譴責を受け入れて自分の間違いを認め、神と、その兄弟のゆるしを求める時、天来の光が彼の光を満たす。争いは終わり、友情と信頼が回復する。愛の油が、不当な行為によつて生じた痛みをとり除く。神の御霊は心と心を結び、もたらされた一致和合を喜んで天では音楽がかなでられる。

このように、クリスチャンの友情によつて結ばれた者たちが、神に祈りをささげ、正しく人に接し、いつくしみを愛し、へりくだつて神とともに歩むことを誓う時、大きな祝福が彼らに

与えられる。もし他の人々に対して、悪い事をしたことがあれば、悔い改めと告白と償いのわざを続け、互いに善をなすようにとのえられるのである。そしてこれがキリストの戒めを成就するのである。

「もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためである」(マタイ一八ノ一六)。霊的な人々を伴って行き、誤りに陥っている者と、その間違いについて話しなさい。彼は、兄弟たちの一致した訴えに聞き従うかも知れない。その問題について兄弟たちの意見が同じであるのを見て、彼の心の眼が開かれるかも知れない。

「もし聞いてくれないなら」その時は、どうすべきであろう。教会理事会の中の二、三人が、誤りに陥っている人間を除名する責任をとるべきだろうか。「もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい」(マタイ一八ノ一七)。教会員に関しては教会が処置をするようにさせなさい。

「もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい」(同一七節)。もし彼が教会の意見に心を留めず、彼を回心させるためになされるすべての努力を拒絶するならば、彼を交わりから切り離す責任が教会に負わされているのであって、彼の名前は、

その時、名簿から取り消すべきである。

（7 T・二六〇 二二六二ページ）

### 教会の勧告を拒む人々に対する教会の義務

キリストによって与えられた指示を忠実に果たすまでは、どの教会役員も、委員会も、また、どの教会も悪いことをしている人の名前を教会名簿から除くように助言したり、勧告したり、あるいは決議したりすべきではない。この指示を果たした時、教会は神の前に、責められる所のない者となるのである。それから、悪事を、ありのまま示して、取り除かなければならない。それは悪が、ますます広がらないためである。教会がキリストの義の衣を着て、神の前に汚れなく立つことができるように教会の健全さと純潔さが保たれなければならない。

もし、誤りを犯した人が悔い改めて、キリストの懲戒に服従するなら、彼に、もう一度やり直す機会を与えるべきである。しかし、たとえば彼が悔い改めず、教会から離れていても、神のしもべたちには、なお、彼のためにしなければならぬ働きがある。彼を悔い改めに導くよう熱心に努力しなければならない。たとえ彼の罪がどれほど重いものであつたにしても、もし彼が聖霊の働きに屈伏して、告白し、罪をすてて悔い改めの証拠を示すならば、彼はゆるされて

羊のおりの中にふたたび迎え入れられるべきである。兄弟たちは、自分もまた試みられるかも知れないということを考え、自分が彼の立場にいたならばしてほしいと思うように彼に接して、正しい道に進むよう彼を励まさなければならぬ。

キリストは続けて「よく言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つながら、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう」(マタイ一八ノ一八)と言われた。

このみ言葉は、どの時代にも力を持っている。教会には、キリストに代わって行動する権限が授けられている。教会は、神の民の間に、秩序と規律を保つための神の手段であって、これに主は、その繁栄と純潔と秩序に関するすべての問題を解決する権限を委任されたのである。教会員としてふさわしくない者、キリスト者らしくない行動によって真理を辱めるような者を、その交わりから除外する責任が、教会に負わされている。神のみ言葉の中に与えられている指示に従って教会がすることは、何であつても天において批准されるのである。

教会が非常に重要な問題を解決しなければならないことがある。神がその民の指導者として任命された牧師たちは、自分のなすべき分を果たした上で、その問題をすべて教会に提示すべきである。それは、とられる決議に一致があるためである。

主は、信者たちが、お互いの接し方に非常に心を配るよう望んでおられる。彼らは、引き上げ、回復させ、いやすことをしなければならないが、しかし教会は、正しい訓練を怠ってはならない。教会員は、学校の生徒のように自分を考えて、彼らの高い召しにふさわしい品性を形成することを学ばなければならない。この地上の教会で神の子らは、天の教会における大いなる再会のために準備されなければならない。この地上で、キリストと調和した人生を送る人々は、あがなわれた者の家族として、永遠の生涯を待ち望むことができる。

（7 T・二六二 二六四ページ）

### だれに告白をすべきか

罪の言いわけをしたり、隠したりして、それを告白せず、許されないまま、天の書に残しておく者は、みなサタンに負けてしまうのである。口でりっぱなことを言い、榮譽ある地位にあればあるほど、その人々の行動は、神の目には嘆かわしいものであり、大いなる敵サタンの勝利はいつそう確実なのである。神の日のための準備を遅らせる者は、悩みの時やそれ以後において、準備することができない。こうした人々は、すべて絶望である。

(各時代の大家争闘下巻三九四ページ)

あなたの罪や誤りを知らない人々に対して告白することは要求されていない。未信者に凱歌を奏させるような告白を公表することは、あなたの義務ではないが、告白する相手として正しい人で、あなたの誤りを利用しない人に、神のみ言葉に従って告白し、あなたのために、彼らに祈ってもらいなさい。神は、あなたの行為を受け入れて、あなたをいやして下さるであろう。あなたの魂のために、永遠に備えて周到に努めるようにとの懇願に耳を傾けなさい。自負心も虚栄心も捨てて、率直な行動をとりなさい。羊の群れに、もう一度お戻りなさい。羊飼いである主は、あなたを受け入れようと待っておられるのである。悔い改めて初めのわざを行いなさい、そして再び神の恵みの中に入りなさい。

(2 T・二九六ページ)

キリストは、あなたのあがない主であって、あなたの屈辱的な告白につけこむようなことはされない。もし、あなたに個人的な罪があるなら、神と人との間のただ一人の仲保者であるキリストに告白しなさい。「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(ヨハネ第一・一二)。もし、十分の一献金や、その他の献金で、神ご自身のものを彼にお返しせず、罪を犯していたなら、神と教会に、その罪を告白し、彼がお与えになった「十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい」

（マラキ書三ノ一〇）とのご命令に注意しなさい。

（C H・三七四ページ）

神の民はよく理解して行動しなければならない。示された罪は全部告白するまで満足してはならない。それから、イエスが彼らを受け入れて下さったと信じることが彼らの特権であり、義務なのである。他の人々が暗黒の中を通過して、自分たちの楽しむ勝利を獲得してくれるのを待つてはならない。そういう喜びは、集会の終わりまで続くだけである。神には感情でなく原則によつて仕えなければならない。朝に夕に、あなたの家庭において、あなた方自身のための勝利を得なさい。日常の仕事に追われて、これを怠つてはならない。時間をとつて祈りなさい。そして祈る時、神が、あなたの祈りを聞いて下さることを信じなさい。あなたの祈りに信仰を混ぜなさい。必ずしも、即時に応答を感じないかも知れない。しかしその時は信仰が試みられているのである。

（1 T・一六七ページ）

### キリストだけが人間をさばくことができる

キリストは、人類が直面し、耐えなければならない誘惑に会い、試練に耐えるために、おのれを低くして、人類の頭となられた。彼は、試練の中にある者たちを助ける方法を知るために、



人類が墮落した敵にどのように試みられるかを知らなければならなかった。

そしてキリストは、われわれの審判者と定められたのであった。父なる神が審判者ではなく、天使たちもそうではない。人性をとって、この世界で完全な生涯をおくられたキリストが、われわれを裁かれるのである。キリストだけがわれわれの審判者におなりになることができるのである。兄弟方よ、これを覚えていただけるだろうか。牧師方よ、それを記憶していただけるだろうか。父たち、母たちよ、あなた方は、それをおぼえて下さるだろうか。キリストは、われわれの審判者となられるために人性をおとりになったのである。あなた方のうちだれも、他の人々の審判者となるように定められてはいない。あなたたちは、自分自身を訓練するだけでいいのである。決して自分で、裁きの座についてはならないと、キリストが、あなたたちにお与えになった命令に心を留めるよう、わたしはキリストの名によって、あなたたちをお願いする。日々このメッセーじがわたしの耳に響いていたのである。「裁きの座から降りなさい、へりくだって降りなさい」と。

(9 T・一八五、一八六ページ)

神は、すべての罪を同等にご覧にならない。限りある人間の場合と同様、神の評価にも罪の度合がある。しかし、いろいろなあやまちが人間の目にどんなにささいに見えても、神の目には小さい罪というものはない。人間が小さいと見る傾向のあるその罪を、神は重大な犯罪と考

えられるかも知れないのである。大酒飲みは軽べつされて、彼の罪が彼を天国からしめだすと言われる。ところが高慢や利己主義や貪欲はとがめられない。しかし、これらは、特に神がきらわれる罪なのである。彼は「高ぶる者をしりぞけ」られる。そしてパウロは、貪欲は偶像礼拝だと言っている。神のみ言葉の中に記されている偶像礼拝に対する譴責をよく知っている者は、この罪がどれほど重大な罪であるか、ただちに気付くのである。

## 第五章 貧困や苦難に対する クリスチャンの態度

神は今日、人がその隣人を愛するかどうかを示す機会を与えておられる。神と人を真に愛する者は、貧しい人、苦しんでいる者、傷ついた人、死に近づいている人々に対してあわれみを示す人である。神は、おろそかにされていたそれぞれの働きを取り上げて、人間性の中に創造主のご品性の像を回復するために努力するよう、すべての人に呼びかけておられる。

(W M ・ 四九ページ)

他の人々のためにするこの働きは、努力と克己と自己犠牲が必要である。しかし、神がそのひとり子を与えることによってわれわれのために払われた犠牲に比較すれば、われわれにできるわずかな犠牲が何であろう。

(6 T ・ 二八三ページ)

永遠の生命を受ける条件は、救い主によって非常に単純な方法で明白にのべられている。傷つけられ、持ち物を奪われた人(ルカ一〇ノ三〇 三七)が、われわれの関心と同情と慈善的

行為を受ける人々を代表している。それがだれであろうと、われわれの目にとまった困っている人や不幸な人の問題をおろそかにするならば、永遠の命は保証されない。なぜならば神が求めておられる当然のご要求に、われわれが応じていないからである。知人や親族でなければ、われわれは人に対してあわれみ深く、情け深くはない。あなた方は、終わりの六つの戒めを含む第二の大きな律法を犯しているのである。だれでも、その一つの点で落ち度があれば、全体を犯したことになる。人々の貧困や苦難に対して心を開かない人々は、十戒の初めの四条の中で神が言っておられるご要求にも心を開かない。偶像に思いや愛情を奪われてしまい、神は尊ばれず、最高の地位についておられない。

（3 T・五二四ページ）

あわれみや同情や正義を無視する者、貧しい人をおろそかにし、苦しんでいる人々の必要を顧みない者、不親切で礼儀正しくない者は、品性を発育させるために神がその人と協力することができないように自分でしてしまっていることを、鉄筆で岩に刻むように良心に記すべきである。われわれが他の人々に対して同情を感じ、彼らの必要を満たすために自分の受ける恵みや特典を与える時、知性と感情の修養がよりたやすくなされる。自分のために得られるだけのものを獲得して握っていることは、魂の貧困をもたらしやすい。しかし、神が彼らに行うように指定されたその働きを、キリストの方針に沿って果たす者には、キリストのすべての特質が

与えられるように用意されている。

(6 T・二六二ページ)

救い主は地位も階級も、世的な名誉も富も無視される。主にとって高い価値があるのは、品性と目的に対する献身である。彼は強い者や、社会から好意を受けている人々の側にはつかれない。生ける神のみ子であるキリストは、墮落した者を引き上げるために身を低くされるのである。誓いと保証の言葉によつて、彼は、失われて滅び行く魂を、ご自分のもにかち取ろうと努力される。神のみ使いたちは、信徒のうちのだれがやさしいあわれみや同情心を働かせるかを知ろうと見守っている。神の民のだれがイエスの愛を表すか知ろうとして彼らは見守っているのである。

(6 T・二六八ページ)

神は、ただあなたの慈善行為だけでなく、あなたの快活な表情や希望に満ちた言葉や、あなたの温い握手を求めておられる。苦しみの中にある主の子供たちを訪れる時、希望を失ってしまった人々を見出すだろうが、彼らに太陽の光を再び与えなさい。生命のパンを必要としている人々がいる。彼らに神のみ言葉を読み聞かせなさい。この世の慰めの届かない、医者もいやすことができない心の病氣にかかった人々もいる。これらの人たちのために祈り、イエスのもとに連れて行きなさい。

(6 T・二七七ページ)

教会内の貧しい人々に対するわれわれの義務

われわれの間には常に二種類の貧しい人たちがいる。すなわち、自分勝手な行動をとって自分自身を滅ぼしその罪の生活を続けている者と、真理のために困難な事情に直面している人々である。われわれは、自分を愛するように、われわれの隣り人を愛さなければならない。そしてこれら両方の種類の人たちに対して、健全な知恵の導きと勧告に従って当を得た働きをするのである。

主に属する貧しい人々については疑問はない。それが彼らの益になるならば、どんな場合でも助けるべきである。

神は罪深い世界を滅びるままに放っておかれなかったことを、人々に示すようご自分の民に望んでおられる。真理のために家庭から追い出され、苦難を余儀なくされている者たちを助けるために特別な努力をすべきである。自己の欲望を制し、主が愛されるこれらの人々の問題を取り上げて、支えてあげる、心の広い寛大な人たちがますます多く必要になるであろう。神の民の中にいる貧しい人々の必要にこたえずに彼らを放っておいてはならない。彼らが生計を立

てられる何かの方法を見出さなければならぬ。ある者は働くように教えなければならぬであらう。また、家族を支えるためにひどく働き、彼らの能力の限度までからだを酷使している者は特別な援助が必要である。われわれは、これらの人々の問題に関心をいだいて彼らが職を得るように助けるべきである。神を愛してその戒めを守っている、こういう価値のある貧しい家族を助けるために資金があるべきである。

神を愛し、神に従っている人々が事情によつて貧しくなることがある。ある人たちは不注意であつて、生計のやり繰りを知らない。また他には病氣や災難によつて貧しくなった人々もいる。しかし原因が何であつても彼らは困っているのであつて、彼らを助けることは伝道の働きの一重要な部門である。

教会が設立された所ではどこでも、貧しい信徒たちのために、その会員は忠実な働きをしなければならぬ。しかし、それで終わってはならない。彼らは、またその人々の信仰に関係なく、他の人たちも助けなければならぬ。そういう努力の結果、そのうちのある者は現代の真理を受け入れるのである。

(6 T・二六九 二七一ページ)

## 貧しい人々を助ける方法

貧しい人々を助ける方法は注意深く、よく祈って考慮すべきである。神はご自分が創造されたものの世話の仕方を、先の見えない人間よりもよく知っておられるから、われわれは知恵を神に求めるべきである。助けを請うすべての者に、見さかしく与える人々もいるが、この点で彼らは間違っている。貧しい人々を助けようとする時、われわれは正しい種類の助けを与えよう注意しなければならない。助けられると引き続き自分を助けの必要な特別の対象に行く人々がいる。彼らは何でも自分が頼れると思うものがある間は頼るのである。これらの人たちに時間と手をかけ過ぎることによって、怠惰や無力さ、浪費、また不節制を助長するかも知れない。

貧しい人に与える時「自分は浪費を助長してはいないか。自分は彼らを助けているのか、害しているのか」考慮すべきである。自分自身の生計を立てられる人間は他の人々に依存する権利はない。

神を信じる男女で、識別と知恵のある人々が、同信のはらからを初めとして、貧しい者や助



けを必要とする者のめんどろを見るために任命されるべきである。これらの人たちは、状況を教会に報告し、何をなすべきかについて相談すべきである。

(6 T・二七七、二七八ページ)

神は、兄弟たちが、この使命を受け入れるすべての貧しい家族の責任を負うことは要求されない。もしそうであるなら、資金は尽きてしまうから牧師は新しい伝道地に入ることをやめなければならぬ。多くの者は、勤勉さに欠け、節約をしないために貧しいのであって、彼らは金銭の正しい使い方を知らない。もし彼らを助けるとそれはかえって彼らに害するのである。ある人々は、いつでも貧しいのである。たとえ彼らに最高の特典を与えたとしても彼らには役に立たない。彼らは計画的な頭がないから得られるだけの金銭を、多くても少なくとも全部使ってしまうのである。

こういう人々が使命を受け入れると、彼らよりも裕福な兄弟たちから助けを受ける権利があると思ひ、期待がはずれると、教会について不平を言い、彼らは信仰を實踐していないと非難する。こういう場合に、だれが苦しむべきだろうか。これらの貧困な大家族の世話をするため神のみ事業の力を消耗し、各地の資金を使い果たさなければならぬものだろうか。決してそうではない。親たちがその責任を負わなければならないのである。彼らは一般に、安息日を

受け入れてからは、受け入れる以前ほどに窮乏してはいないのである。

（1 T・二七二、二七三ページ）

神は、どの教会の区域内にもご自分の貧しい信徒のいることをお許しになる。彼らは常に、われわれの間に存在することになっているのであって、主は、彼らのめんどろを見る個人的な責任を、すべての教会の会員に負わせておられる。われわれは、自分たちの責任を他の人々に負わせてはならない。われわれの区域内にいるそれらの人たちに対して、われわれは、キリストがわれわれの立場におられたら表されるに相違ないと思われる同じ愛と同情を表さなければならぬ。このようにして、われわれは訓練されなければならない。それは、われわれがキリストの方針にならって働くことができるようになるためである。（6 T・二七二ページ）

## 孤児の世話

貧しいために、われわれの関心を必要としているすべての人々の中で、やもめと孤児が、われわれのやさしい同情を最も必要としている。彼らは、主の特別な配慮の対象であって、神のためにクリスチャンに委託された人たちである。「父なる神のみまえに清く汚れない信心と

は、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにはかならない」(ヤコブ一ノ二七)。

神の永遠のみ約束に信頼し、信仰をもって死んだ多くの父親は、主が自分の愛する者たちを守ってくださることを信じきって彼らを残して行ったのである。しかし主は、どのようにしてこれらの遺族たちを養われるのであろう。彼は天からマナを送って奇跡を行うことはされない。また、食物を運んで行くためにカラスをおくこともなさらないが、人間の心に奇跡を働いて、魂から利己的な精神を追い払い、慈悲の泉をお開きになるのである。主は、悩みの中にある者や親族に死にわかれた者たちを、主を信じる信仰を言い表す人々の情けに任せることによって彼らの愛を試みられる。

神の愛をうけている人々は、これらの子供たちを引き取るために心と家庭を開きなさい。大きい施設で孤児たちの世話をすることは、最上の方法ではない。もし彼らを育てられる親戚がなければ、われわれの教会員が、これらの子供たちを彼らの家庭に養子とするか、または他の家族で、彼らのために適当な家庭を見出すべきである。

これらの子供たちは、特別な意味において、キリストが目をかけられる人々であって、彼らをおろそかにすることはキリストに対する罪である。イエスの名によって彼らになされるすべ

ての行為はイエスご自身に対してなされたものとして主に受け入れられるのである。

（ 6 T ・ 二 八 ー ペ ー ジ ）

## 第六章 全世界のクリスチャンは キリストにあって一つとなる

（この章に記された勧告の多くは、異なった国語や風習を代表する数か国から、働き人たちが集まった集会で、ホワイト夫人によって与えられたものである。これらの働き人のうちの者は、主がE・G・ホワイト夫人を通して彼の民に与えられた勧告は、ホワイト夫人が属している国民にだけ当てはまると判断したが、それは誤りである。ホワイト著書委員会）

もし、われわれが、両親の所に行く子供のような単純さをもってキリストの所に行き、主が約束されたものを求め、それを与えられると信じるならば、与えられるのである。われわれがみな信仰を働かすべきほどに働かせていたならば、われわれの集会で今までに受けたよりもはるかに多く神の御霊をもって祝福されていたはずである。まだ集会の日の数日が残されていることはうれしいことと思う。さて問題は、われわれが水の源に行つて水を飲むか、真理を教え

る教師たちが模範を示すだろうかということである。もし、われわれが信仰によってみ言葉通りに彼を信じるならば、神はわれわれのために大きなことをしてくださる。ここで全員が神のみ前に心をへりくだらせることができたなら、どんなによいことであろう。

これらの集会が始まって以来、わたしは、愛と信仰について、より詳しく語るように、せき立てられた感じがしたのであるが、それは、あなたがたに、このあかしが必要だからである。これらの伝道地に入ったある人たちは「あなたはフランスの人々を理解していない。あなたはドイツ人を知らない。彼らには、これこれのように接しなければならぬ」と言った。

しかし「神は彼らを理解しておられないでしょうか」と、わたしはお尋ねする。人々のためのメッセージをご自分のしもべたちに、お与えになるのは神ではないのか。神は、彼らがちょうど必要としているものを知っておられるのであって、もしも、メッセージが神のしもべたちを通して神から人々に直接に伝わるならば、それはおくられた目的の働きを果たし、キリストにあつてすべての者を一致和合させる。ある人たちは典型的なフランス人であり、他の人は典型的なドイツ人であり、また他の者は典型的なアメリカ人であっても、彼らはみな同じようにキリストに似た人々になるのである。

ユダヤの神殿は、山から切り出された石で建てられたが、すべての石がエルサレムに運ばれ

る前に、神殿のそれぞれの場所に合うように切られ、みがかれ、ためされて、整えられた。そして全部が、建設場に運ばれた時、建物はおのや、つちの音なしに建てられたのである。この建物は神の霊的な宮を表すものであつて、それは、あらゆる国民、国語、あらゆる階級の人々、身分の高い人、低い人、富める者や貧しい者、学識のある人や無学な人々の中から集められた材料で構成されているのである。これらは、つちやのみで型に合わせられる無生物ではなく、真理によつて世の中から切り出された生きた石であつて、大建築師である宮の主が、今彼らを刻んでみがき、霊的な宮のそれぞれの場所に合うように整えておられるのである。この宮が完成する時にはすべての部分が完全になつて、天使たちと人々によつて賞賛される。なぜならば、それをもくろみ、また建てたのは、神だからである。だれ一人、自分は、打たれる必要がないと考えるはならない。

習慣や考えがすべて完全な人間もなければ国民もない。だれでも他から学ばなければならぬのである。であるから神は、異なつた国民が交わり合つて一致した意見を持ち、一つの目的を持つように望まれる。そうする時に、キリストにある一致結合の模範が示されるのである。

ヨーロッパの各国民が独特な気質を持っているから特定の方法でなければ心を捕らえることはできないと、相当多数の人が言うのを聞いたので、わたしは、この国に来ることを、恐れる

ほどであつた。しかし、神の知恵は、その必要を感じ、これを求める人々に約束されている。

神は、人々が真理を受け入れるような所に、彼らを導くことがおできになる。主に精神を捕らえていただき、これを陶器師の手の中で粘土が形造られるように形造ってもらいなさい。そうするならば、あらゆる違いは問題ではないのである。兄弟方よ、イエスにたより彼の態度と精神にならなさい。そうすれば、これらの違った種類の人々の心を捕らえるのに困難はない。

われわれには従わなければならない型が五つも六つもあるわけではなく、ただ一つであつて、それがキリスト・イエスなのである。もし、イタリアの兄弟たちとフランスの兄弟たちとドイツの兄弟たちが、キリストに似ようとするならば、彼らは同じ真理の土台の上に足を据えるのであつて、一人の中にあるものと同じ精神が他の兄弟の中にも存在する。すなわち栄光の望みであるキリストが彼らの中におられるのである。兄弟姉妹方よ、異なる国民の間に隔ての垣を作らないように、わたしはあなた方に警告する。反対に、そういうものが存在する所では、どこでもこれをこわすために努力しなさい。われわれは、すべての人をイエスによつて調和するように導き、人類を救済する一つの目的のために働くよう努めなければならない。

牧師の任務につく兄弟たちよ、あなた方は、神の豊かな約束をとらえているだろうか。自己を隠してイエスを現されるだろうか。神が、あなたを通して働くことができるように、自己は



砕かれなければならない。自己がここかしこで、次々に頭をもたげているのを見て、わたしは驚いている。ナザレのイエスの名によって、わたしは、あなた方に言うが、あなた方の意志は死ななければならない。そして神の意志とひとつにならなければならないのである。神は、あなたを全く溶かして、すべての汚れから清めたいと望んでおられる。あなたが神の力で満たされるため、あなたのためになされなければならない大仕事がある。この集会が終わらないうちに、あなたが神の豊かな祝福を実感することができするために、神のもとに近づかれるようわたしはお願いする。

(9 T・一七九 一八二ページ)

### 国籍に対するキリストの関係

キリストは、国籍や地位や信条の違いを、お認めにならなかった。学者やパリサイ人たちは、すべての天の賜物を地域また国家の利益にし、世界中の神の家族を除外しようと望んだが、キリストは隔ての壁をすべて破壊するために来られた。キリストは、彼のあわれみと愛の賜物が、空気や光や、大地をうるおす雨のように制限されないものであることを示すために来られたのである。

キリストの生涯は、階級制度のない宗教、ユダヤ人も異邦人も、自由人も奴隷も、神の前に同等で共通な兄弟の間柄で結ばれる宗教を確立した。政治に関する問題はキリストの行動を左右しなかった。彼は隣人と見知らぬ人、味方と敵の差別をされなかった。彼の心に訴えたものは、命の水に渴いている魂であったのである。

キリストは、どんな人間も無価値な者として見過ごすことなく、すべての魂に、いやしを与えようと努力された。どんな人々と交わっても彼はその中で、時と事情に適した教訓をお与えになった。人間が同じ人間同士に対して示すおろそかな取り扱いや侮辱は、みな、彼らが神であり人であるご自分の同情を必要としていることをキリストにもつと意識させた。彼は、最も粗暴で最も見込みのない者も責められるところのない純真な者となり、彼らを神の子とする品性に到達できるという確証を示して、彼らに希望を起こさせようと努力された。

（9 T・一九〇、一九一ページ）

神の子供たちはキリストによって一つであるなら、皮膚の色、人種、地位、財産、生まれ、あるいは才能によって生じる階級制度や社会的な差別や人間同士の分裂を、イエスはどのようにご覧になるだろう。一致結合の秘訣は、キリストにあって信徒たちが平等であることの中に見出される。

（一八九一年二月二二日レビュー誌）

一致をもたらす実例

何年も以前に、キリストの間近い再臨を信じる信者の集団が非常に小さかったころ、メイン州のトップシャムに住む安息日遵守者たちが、ストックブリッジ・ハウランド兄弟の家の大きな台所で礼拝をするために集まった。安息日の朝、ハウランド兄弟は出席していなかった。彼はいつでも時間を厳守していたので、われわれは驚いたが、間もなく彼は、その顔を神の栄光で輝かせて入って来た。「兄弟方よ、わたしは発見しました。われわれは神のみ言葉が『決してあやまちに陥ることはない』と保証しておられる行動を進めて行くことができることを発見しました。わたしは、それについて、みなさんにお話しします」と彼は言った。

そこで、貧しい漁師の一兄弟が自分は充分に重んじられず、ハウランド兄弟や他の人々は自分よりもえらいと思っているのだと感じていたことに、ハウランド兄弟が気付いたことを話したのであった。それは事実ではなかったが、彼にはそのように思えたのであって、数週間集会に出席していなかったのである。そこでハウランド兄弟は、彼の家に行って彼の前にひざまずき、「兄弟よ、わたしをゆるして下さい。わたしはどんなことをしたのでしょいか」と言った。

その人は彼の腕をとって彼を立たせようとしたがハウランド兄弟は「いいえ」と断って「あなたは、わたしに対して何を怒っておられるのですか」と尋ねた。「わたしは、あなたに対して何も怒ってはいません。」「しかし怒っておられるに相違ありません。なぜなら以前われわれは互いに話ができたのに今では、あなたは全然わたしに口をきかれないので、どうしたのか知りたいのです」とハウランド兄弟は言った。

「立ち上がって下さい、ハウランド兄弟」と彼は言った。「いいえ、わたしは立ち上がりません。」「それならわたしがひざまずかなければならない」と彼は言って、ひざまずき、彼がどんなに子供じみていて、どれだけ悪い憶測をしていたかを告白した。彼は「今わたしはこれまでのことを全部捨ててしまいます」と言った。

ハウランド兄弟が、この話をした時、彼の顔は主の栄光で輝いた。彼が話し終わった時、ちょうど、その漁師と彼の家族が入って来て、われわれは、すばらしい集まりを持ったのであった。

われわれのうちのだれかが、ハウランド兄弟のたった道に従ったならどうであろう。われわれの兄弟たちが悪い憶測をした時に、われわれが行って、「わたしが、あなたを害するようなことを何かしたのでしたらどうぞゆるして下さい」と言うならば、われわれはサタンの魔力を破

って兄弟たちを誘惑から解放するかも知れない。どんなことによっても、あなたと兄弟たちとの間を妨げられないようにしなさい。くだらない疑いを取り除くために、あなたの犠牲によってできることがあつたら何でもしなさい。神は、われわれが兄弟たちとして互いに愛し合うように望んでおられる。神は、われわれが情け深く礼儀正しくあるように望んでおられる。兄弟たちが自分を愛していること、そしてキリストが自分を愛しておられることを信じるように、自分自身を教育するよう、神は求めておられる。愛は愛を生むのである。

われわれは天で兄弟たちと会いたいと願っているだろうか。もしわれわれが、この地上で彼らと平和に仲よく住むことができれば、天でも一緒に住むことができる。しかしこの地上で彼らと絶えず争いや衝突なしに生活することができなければ、どうしても天で彼らとともに生活することができよう。自分を兄弟たちから離し、不和やあつれきを起こすような行動をとっている人々は、全き改心をする必要がある。われわれの心は、キリストの愛によつて溶かされ和らげられなければならない。われわれは、キリストがカルバリーの十字架上でわれわれのために死んで表して下さった愛を大切に育てなければならない。われわれは、救い主にますます近づいてゆかなければならない。祈りを多くし、信仰を働かせることを学ばねばならない。もっとやさしい心になり、もっと情け深く礼儀正しくなければならぬ。われわれは、この世をた

だ一度通るだけなのである。われわれが交わる人々にキリストのご品性を印象づけることができるよう努力しようではないか。

われわれの無情な心は砕かれなければならない。そして完全に一致和合し、自分はナザレのイエス・キリストの血によって買いとられたものであることを認識すべきである。「キリストはその命をわたしのために与えてくださったのである。そしてわたしのために彼ご自身を与えることによって表された愛を、わたしがこの世にいる間に表すよう、求めておられるのである。」と一人びとりが言うことにしよう。キリストは、十字架上でわれわれの罪を、彼ご自身の身に負われたが、それは、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる人々を義とされるためであった。キリストに身をゆだねる者すべてのために生命、すなわち永遠の生命が備えられているのである。

（9 T・一九一 一九三ページ）

### 一致結合には力がある

一致結合するために熱心に努めなさい。そのために祈り、努力しなさい。そうするならばあなたは、霊的に健康になり、思想は高められ、品性は高潔になり、心は常に天を思い、利己心

やさいぎ心に勝利することができて、あなたを愛し、あなたのために、ご自身を与えて下さったキリストにより勝ち得て余りある者となるのである。自己を十字架につけなさい。人を自分よりすぐれた者としなさい。そうすることによってあなたは、キリストと一致するようになるのである。あなたは宇宙の前と、教会や世間の前に、あなたが神のむすこ、むすめであるという明白な証拠を表す時、神はあなたが示す実例によって栄光を受けられるのである。

世の人々は、彼らの前で、神の民の心がクリスチャンの愛で一つに結ばれる奇跡の行われるのを見なければならぬ。主の民がキリストにあってともに天上で座についているのを見なければならぬのである。あなたは、神の真理が、神を愛し、神に仕える人々に何をなし得るかということ、あなたの生活によって立証してくださらないだろうか。神は、あなたがどんな者になれるかを知っておられる。もしも、あなたが神の性質にあずかる者となるならば、神の恵みはあなたのために何をすることができるかを神は知っておられるのである。

(9 T・一八八ページ)

「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることの一つにし、お互の間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほしい」(コリント第一・一ノ一〇)。

一致は力であり、分裂は弱さである。現代の真理を信じる人々が一致結合する時、いちじ  
しい影響を及ぼす。サタンは、よくこのことを知っているので、主の民の間に、にがにがしい  
気持ちや、あつれきを起こさせて、神の真理の効力を失わせようと、今日ほど決意を固めたこ  
とはないのである。

（5 T・二三六ページ）



## 第七章 人格をそなえた神に対する信仰

最後の決算の日に、神はすべての人間を名指しで知っておられたということがわかるであろう。人生のあらゆる行動に対して目に見えない証人がおられるのである。「七つの金の燭台の間を歩く」お方が、「わたしは、あなたのわざを知っている」(黙示録二ノ一、一二)と言われる。どのような機会が無視されたか、曲がった道にさ迷っていた者たちを探し出して安全で平安な道につれ戻す、よい羊飼いの努力が、どれほど不屈なものであったかわかっている。何回もくり返して神は、快樂を愛する者たちに呼びかけ、彼らが危険を見いだして逃れるように彼らの道に何度となく、み言葉の光を照らされた。しかし、彼らはどんどん、広い道を冗談を言ったり、ふざけたりしながら進んで行って、ついに彼らの恵みの期間が終わるのである。神の方法は正しく公平であつて、欠けた点が発見される人々に対し、判決が下される時、すべての口はふさがれるのである。

(5 T・四三五ページ)

自然界全体を通して働き、すべてのものを維持している偉大な力は、ある科学者たちの言うような単なる普遍的な原理、すなわち発動エネルギーではない。神は霊である。しかし人は神のかたちにかたどって造られたのであるから、神は人格を持った方である。

自然界に存在する神のみ手の業は、自然界の中の神ご自身ではない。自然の事物は神のご品性を表現するものであつて、それらによつて、われわれは彼の愛と力と栄光を理解することができるのであるが、しかし、自然界を神と見てはならない。人間の芸術的な技術は目を楽しませるような、非常に美しい作品を生み出す。それらの作品は作者の思想をある程度われわれに伝えるが、作品が人ではない。価値があると見なされるのは作品自体ではなく、作者である。であるから、自然界は神のみ心の表現であるが、ほめたたえられなければならないのは自然界ではなく自然界にあらわされている神ご自身なのである。

人間が創造された時、人格を持つ神のみ力が明示された。神が、ご自分のかたちに人を創造された時、人間の形はすべての点で完全であつたが、それには命がなかった。そこで人格をそなえた、自存する神が、その人体の中に命の息を吹き入れ、人は生きて、呼吸する知的な存在となつたのである。人体組織のすべての部分が活動を開始させられて、心臓、動脈、静脈、舌、手、足、感覚、知覚等、すべてが各々の働きを始め、すべてが法則の下におかれた。人は生き

た者となった。人格をそなえられた神は、イエス・キリストによって人を創造し、これに知性と能力を授けられた。

われわれが隠れた所で造られたとき、われわれの骨は神に隠れることがなかった。神の目は、まだできあがらないわれわれのからだを見られた。われわれのよわいの日がまだ一日もなかった時、その日はことごとく神の書にしるされたのである。

神は、ご自分の創造の最高の作品である人間が、人間より低いすべてのものにまさって神のみ心を示し、ご栄光を表すように計画された。しかし、人が自分自身を神のごとく高めるようにはなさらなかった。

### キリストの内に表された父なる神

神は人格をそなえた方として、ご自身をみ子の中に表された。父の栄光の輝きであり、「神の本質の真の姿」(ヘブル一ノ三)であるイエスは、この地上で人間の姿になられた。人格をそなえた救い主として彼は、この世界に生まれ、人格をそなえた救い主として昇天された。そして人格を持った救い主として彼は、天の法廷でとりなしておられる。神のみ座の前で「人の

子のような者」（黙示録一ノ二三）が、われわれのために奉仕をしておられるのである。

世の光であるキリストは、光輝さんらたるご自分の栄光をおおって、人々の間に人間として生活するために来られたが、それは彼らが焼き尽くされずに、彼らの創造主を親しく知るようになるためであつた。キリストを通して神が表された時以外、どんな場合においても神を見た者は一人もいないのである。

キリストは、神が人間に知らせたいとお望みになつて、ことを教えるために来られたのである。大空に、大地にまたは広い大海原に、われわれは神のみ手の業を見る。すべての被造物が神のみ力と知恵と愛を立証している。しかし、星や大海や大滝からは、キリストの中に表されているような神の人格を学ぶことはできない。

神は、ご自分の人格とご品性をともに表現するためには、自然界よりも明らかな啓示が必要であることを認め、人間の目に耐えられる限度で、見えない神のご性質や特性を表すため、み子をこの世につかわされたのである。

もし神が、花や木や草の葉のような自然界の物の中に実体をもって住んでおられる方であると教えることを望んでおられたならば、キリストがご在世当時、このことについて弟子たちに話されたはずではないだろうか。しかしキリストは神についてこのように教えられたことは決

してなかった。キリストと弟子たちは、人格をそなえた神が実在しておられるという真理を明白に教えたのである。

キリストは、罪深い人類が滅ばされないで耐えることができる程度に神のすべてを表された。彼は神性を持った教師であり、すべてを明らかにされる方である。もしキリストを通し、また聖書の中に示されていること以外に、われわれが啓示を必要とすると神がお考えになったならば、神はそれらをお与えになっただけである。

### 神の子となる力を与えたもうキリスト

十字架につかれる前夜、キリストが二階座敷で語られた言葉について考えて見よう。彼は、ご自分の試練の時が近づいていたので、激しく誘惑され試みられなければならないご自分の弟子たちを慰めようとされた。

弟子たちは、神とキリストの関係についてキリストが言われた言葉を、まだ理解していなかった。キリストの教えの多くが彼らにとって、なお不明であった。弟子たちは神が彼らに対し、また彼らの現在と将来とにどのようなにかかわっておられるかについて、いかに無知であるかを

示す多くの質問をしている。キリストは、彼らが神についてもっと明らかに確かな知識を持つように望まれた。

ペンテコステの日、聖霊が弟子たちの上にそそがれた時、彼らは、キリストがたとえばで話しておられた真理を理解した。彼らにとって、不可解に思っていた教えは明らかになった。聖霊の降下によつて、彼らが理解できるようになった時、自分たちの勝手気ままな理屈を恥じた。その時与えられた天国の事柄に関する知識にくらべると、彼らのしていた想像や解釈は愚かであつた。彼らは御霊によつて導かれ、光は、それまで暗黒に閉ざされていた彼らの理解を照らしたのである。

しかし弟子たちの内にはまだキリストのみ約束が完全に成就していなかった。神に関して彼らが把握できるすべての知識は受けたが、キリストが父なる神について明らかに示すと言われた約束の完全な成就是、まだ先のことであつた。今日においてもそうである。神についてのわれわれの知識は部分的で不完全である。戦いが終わつて、キリストのために罪の世界で真のあかしをして来た忠実な働き人たちを、人なるキリスト・イエスが、父の前で承認される時、彼らは、今日不可解に思っていることをはつきりと理解するのである。

キリストは、栄化した人性をもつて天に行かれた。キリストを受け入れた人々には、彼は神の

子となる力をお与えになるが、それは、最後に神が、それらの人々をご自分のものとして受け入れ、永遠を通じて神とともに住まわせることができるためである。地上の生涯で、もし彼らが神に忠誠であるならば、最後に彼らは「御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている」（黙示録二二ノ四）。神を仰ぎ見ること以上の幸福が天国にあるだろうか。キリストの恵みによって救われた罪人にとって、神のみ顔を仰ぎ、父として神を知ること以上に大きい喜びがあり得るだろうか。

### ご自分の子たちに対する神の個人的な関心

聖書は神とキリストとの関係を明らかに示し、両者各々の人格と個性をはっきり表している。神はキリストの父であり、キリストは神の子であられる。キリストには高い地位が与えられていて、彼は父と等しいものとされ、神のはかりごとはすべて、み子に打ち明けられるのである。

この一致はまた、ヨハネによる福音書の十七章で、弟子たちのためのキリストの祈りの中に表現されている。

「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」（ヨハネ一七ノ二〇 二三）。

なんとすばらしいお言葉であろう。キリストと彼の弟子たちとの間の一致は、どちらの人格をも損なわない。彼らは、目的において、考えにおいて、品性において一つであるが、人格は別なのである。神とキリストもそれと同じように一つなのである。

われわれの神は、天地を意のままに支配することがおできになり、われわれが必要とするものを正確に知っておられる。われわれにはすぐ先のことしか見られない。「しかし（英訳）すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされているのである。この神に対して、わたし



たちは言い開きをしなくてはならない」(ヘブル四ノ一三)。神は混乱したこの世界の上に王として君臨しておられる。万事が神の目には一目瞭然としていて、神は、その偉大で静寂な永遠のかなたから、ご自身が最善と思われることを命令されるのである。

一羽のすずめも父なる神のお許しなしに地に落ちることではない。神に対する憎しみからサタンは、口のきけない生きものさえ殺すことを喜ぶのである。神の保護によつて小鳥は、彼らの喜びの歌を歌つてわれわれを楽しませるために、守られているのである。すずめでさえも神はお忘れにならない。「それだから、恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である」(マタイ一〇ノ三一)。

(8 T・二六三 二七三ページ)



## 第八章 クリスマスは 神を代表すべきである

神の王国の原則をご自分の民を通して示すことが神の目的である。彼らが、これらの原則を生活と品性によつて表すために神は彼らを、この世の風俗、習慣、ならわしから離そうと望まれる。そのみむねを彼らに知らせるために彼らをご自分に近づけようとなさるのである。

今日神が、彼の民を通して遂行しようと求めておられる目的は、彼がイスラエル人をエジプトから導き出された時、彼らを通して果たしたいと望まれたことと同じである。

社会は、教会の中に表れた神の恵みとあわれみと正義と愛とを眺めることによつて、神の品性のあらわれを見なければならぬ。このように神の律法が生活の中で例示される時、社会の人々でさえ、神を愛し、恐れ、神に仕える人々が、地上の他のすべての人々にまさっていることを認めるであらう。

主はご自分の民を一人残らず見ておられて、その一人びとりについて計画を立てておられる。主の目的は、ご自分の神聖な戒めを実践する者たちが卓越した人々になることである。靈感によつてモーセが書いた言葉「あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた」（申命記七ノ六）は、古代イスラエル人に対するものであつたと同時に、今日の神の民に対するものでもある。

（6 T・九、一二ページ）

### キリストのような品性の形成

キリストの宗教は、これを受け入れる者の品位を落とすことは絶対にない。粗野にしたり乱暴にしたり、不作法にしたり尊大ぶらせたり、あるいは感情に走らせたり冷酷にしたりはしない。反対に、趣味を洗練し、判断を清め、思想を純粹にし高尚にして、それらをキリストに従わせるのである。神がその子らのために持つておられる理想は、人間の考えも及ばないほど高いものである。神はご自分の聖なる律法の中に、ご自身の品性を写し出された。

クリスチャンの品性の理想はキリストに似ることである。われわれの前には絶え間ない前進

の道が開かれていて、勝ち取らなければならない目的があり、到達しなければならない標準があるが、それには、善なるもの、純潔なもの、高貴なもののすべてを含んでいるのである。品性の完成に向かって、絶え間ない努力を続け常に前進し向上しなければならない。

(8 T・六三、六四ページ)

われわれは、現在もまた永遠に、自分の習慣によつて形作られて行くのである。正しい習慣を形成し、日常の義務を忠実に果たしている人々の人生は輝く光となつて他の人々の道を明るく照らす。不忠実な習慣にふけり、放縦や怠惰、怠慢な習慣が強くなつてゆくのをゆるすならば、この人生の前途は、深夜より更に暗い雲で閉ざされ、その人は来世から永久に締め出される。

(4 T・四五二ページ)

永遠の生命の言葉に心をとめる人は幸いである。その人は「真理の御霊」に指導されてあらゆる真理に導かれるのである。この世からは愛されたり、尊ばれたり、ほめられたりしなくても神の御目には尊いのである。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである」(ヨハネ第一・三ノ一)。

(5 T・四三九ページ)

# 今日を勇敢に生きる

心の中に受け入れられた神の真理は、救いに至る知恵をあなたに与えることができる。それを信じて、それに従う時に、今日の務めと試練に必要なだけの恵みをいただくのである。明日のための恵みは必要ではない。あなたがなすべきことをするのは今日だけだと思いなさい。今日の日のために勝利しなさい。今日のために克己し、今日のために目をさまして祈っていない。今日のために神によって勝利を獲得しなさい。われわれの事情や環境、自分の周囲に起っている毎日の変化、そしてすべてのことを識別して真偽を試す聖書、これらは、われわれの義務を教え、日々われわれのなすべきことが何であるかを正確に教えるのに十分である。少しも益にならないことを考えていないで、日々聖書を調べ、今はやっかいに思えても、だれがしなければならぬ日常生活の義務を果たして行くべきである。（3 T・三三三ページ）

多くの者は彼らの周囲に存在するひどい罪悪や、至る所に見られる背教と欠陥を見つめ、心が悲しみと疑惑に満たされるまで、これらのことについて語る。彼らは大炊瞬者の巧妙な働きをいつも第一に心に浮かべ、彼らの経験の失望的な点について思案したり、よく話をするが、

天の父の力や彼の比類ない愛は見失ってしまうようである。これは全くサタンの望むとおりである。神の愛と力についてはほとんど考えたり話したりしないで、正義の敵がそれほど偉大な力をもって武装しているかのように思うのは誤りである。われわれはキリストの偉大な力について話さなければならない。われわれは自分をサタンの手から救うためには完全に無力であるが、しかし神は逃れる道を定めておいて下さったのである。いと高き者のみ子は、われわれのために戦う力を持っておられるので、われわれは「わたしたちを愛して下さい下さったかたによって……勝ち得て余りがある」ものとなれるのである。

自分の欠点や背信について絶えずよくよ考え、サタンの力を嘆いていても霊的な力は得られない。この偉大な真理はわれわれの頭と心に生きた原則として定着しなければならない。それは、われわれのためにささげられたささげものの効力であって、すなわち神は、彼のみ言葉に明記された条件に従って彼の所に来るすべての者を、いつも救うことができ、また救って下さるということである。われわれの仕事は自分の意志を神の意志の側におくことである。そうする時に贖罪の血により、われわれは神の性質にあずかる者となるのである。われわれはキリストによって神の子なのであって、神はみ子を愛されたように、われわれを愛して下さいという保証があるのである。われわれはイエスと一体である。キリストが先に立って導いておられ

る道を、われわれは歩くのである。キリストは、サタンがわれわれの道に投げかける暗い影を払いのける力を持っておられるので、暗黒と失望の代わりに彼の栄光の光がわれわれの心の中にさし込むのである。

兄弟姉妹方よ、われわれは眺めることによって変えられて行くのである。神とわれわれの救い主の御愛をよく考え、完全な神のご品性を熟視し、キリストの義を信仰によって自分のものとして主張することによって、われわれは同じ姿に変えられて行くのである。それだからわれわれは、あらゆる不愉快な絵、サタンの力の証拠である不正や墮落や失望の絵を集めて、自分の記憶の間に掛け、自分の魂がすっかり勇気を失ってしまうまで、それについて話したり嘆いたりしないようにしよう。失望落胆した魂は暗黒のかたまりであって自分自身が神の光を受けられないだけでなく、他の人々にも届かないように、これをふさぐ。サタンは自分の勝利の絵の影響が人間を不信と落胆に陥れるのを見ることが好きである。

（5 T・七四一 七四五ページ）

私心のない生活によって神を表す



最も広くはびこり、われわれを神から離し、非常に多くの靈的伝染病を起こさせる罪は利己主義である。克己による以外に主に帰るということはあり得ない。われわれは自分では何もできないが、われわれを強くして下さる神によって他の人々に善をなすために生きることができ、そのようにして利己主義の悪を避けるのである。有益で私心のない人生によって神にすべてをささげたいとの願いを表すために異教の国々に行く必要はない。われわれは、家庭や教会の中で交わる人々や商業の取り引きをする人々の間で、それをすべきである。自己を制し服従させておかなければならないのは、日常生活においてである。パウロは「わたしは日々死んでいるのである」と言うことができた。われわれを勝利者にするのは生活の中の小さな業務や人との交渉において毎日自己に死ぬことである。他の人々に対して善いことをしたいという願いによって自分を忘れるべきである。多くの人は他の人々に対する愛が決定的に欠けている。彼らは自分の義務を忠実に果たす代わりに、むしろ自分自身の快樂を追求する。

天では、だれ一人自分のことを考えず、自分自身の楽しみを求めないで、すべての者が、純粹で真実な愛から、自分の周囲の者たちの幸福を求めるのである。もしわれわれが新しくされた世界で天の社会の交わりを楽しみたいと望むならば、この地上で天の原則によって支配されなければならない。

(2 T・一三二、一三三ページ)

われわれには、間違いのない確かな型があるのに、誤りに陥りやすい人間を型にして、自分たち同志で比較することがあまりにも多いことをわたしは示された。われわれは、この世によって自分を測るべきではないし、人々の見解や、真理を受け入れる前の自分の状態によって測るべきでもない。そうではなく、今日の自分の信仰と社会における地位を、われわれがキリストの信徒であると公表してからの歩みが絶えず前進し向上していたならば、なっていたはずの状態と、比較しなければならぬ。これが唯一の安全な比較である。他のどんな比較にも自己欺瞞がある。もし神の民の道徳的な品性と霊的な状態が彼らに授けられて来た祝福や特権や光に相当しなければ、彼らは量りにかけられて、天使たちが、「不充分」という報告書を作る。

（1 T・四〇六ページ）

### ゆるされない罪

何が聖霊に対する罪になるのだろうか。それは聖霊の働きを故意にサタンのせいにするのである。例えばだれかが神の御霊の特別な働きを見たとする。その人には、その働きが聖書と一致していることを確信し得る証拠があり、御霊も、それが神からのものであることをその人

の霊とともにあかししているのに、後になって誘惑に負け、高慢心や自負心あるいは他の悪い性質に支配されて、その神からの証拠をすべて拒否し、聖霊の力であると自分が以前認めたことは、実はサタンの力であったと言明するのである。神はご自分の御霊を通して人の心に働かれるのであって、人々が故意に聖霊を拒み、それがサタンからのものであると言明する時、神が彼らと連絡をとって下さる道を断ち切ることになるのである。神が彼らに喜んでお与えになった証拠を否定することによって、彼らの心を照らしていた光を閉め出し、その結果彼らは暗黒の中に放置される。こうして「だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう」（マタイ六ノ二三）というキリストのみ言葉が立証される。この罪を犯した人がしばらくは神の子らのように見えるかも知れないが、性格を引き出すような事情が起こると彼らは、どんな精神の人間であるかを示し、彼らが敵の陣地で、その黒い旗の下に立っていることがわかるのである。

（5 T・六三四ページ）

### キリストを受け入れること

社会や家庭において、範囲の広い狭いにかかわらず、われわれが置かれている人生のどんな

関係においても人との交際でわれわれが主を認める方法は多くあり、また彼を否定する方法も多い。他の人を悪く言ったり、くだらないことを話したり、冗談を言つてふざけたり、無益な言葉や不親切な言葉を出したり、事実に関することを言つてごまかしたりすることによつて、われわれは言葉でキリストを否定するかも知れない。言葉によつて、われわれはキリストが自分の中におられないことを告白するかも知れない。安逸を愛し、自分が負わなければ、だれかが負わなければならぬ人生の義務や重荷を忌避する事によつて、または罪に汚れた快楽を愛することにより、品性でキリストを否定するかも知れない。われわれはまた、服装を誇り、世俗に習い、あるいは不作法な行動によつて、キリストを否定することもできる。自分自身の意見に執着したり、自己を擁護し、正当化しようとする事によつて、彼を拒むことがあるかも知からない。あるいはまた恋わずらいの感傷にふけり、自分の想像によるつらい運命や試練を考えてくよくよすることによりキリストを否定するかも知れないのである。

キリストの精神と霊が、その人の中に生きていなければ、だれも社会の人たちの前で実際にキリストを言い表すことはできない。自分の持つていないものを伝えることは不可能である。会話や行状が、内にある恵みと真理の目に見える本当の表現でなければならない。もしも心が清められ、柔順で謙遜であれば、その実は外に表れ、最も効果的なキリストの告白となる。



## 第九章 教会へのあかし

終わりが近づき、世界に最後の警告を与える働きが進展するにつれて、神がみ摂理によって、第三天使の使命の働きの最初からこれと結び合わされたあかし、の性質と影響について、はっきり理解することが、現代の真理を受け入れる人々にとって更に重要になって来るのである。

昔神は預言者や使徒たちの口を通して人々に語られたが、今日は神の御霊のあかしを通して語っておられるのである。神がみ心に関し、またご自分の民に進ませたいと望まれる進路について、今日ほど熱心に神の民を教育されたことは今までに一度もなかった。

警告や譴責がセブンスデー・アドベンチストの中の誤りに陥っている人々に与えられるのは、彼らの生活が、名ばかりの教会のクリスチャンと公言する人々の生活に比較してもっと責められなければならないからではなく、……それは彼らが大きな光を与えられていて、その心に神の律法が記されている神の特別な選民としての立場を告白しているからである。

いろいろな人々のためにわたしに与えられたメッセージを、多くの場合彼らの熱心な要求によつて、わたしは彼らのために書き表した。わたしの働きが広がるにつれて、これはわたしの仕事の中で重要な、そして骨の折れる部分となった。

約二十年前（一八七一年）、わたしに示された光景の中で、わたしはその時、話をする場合も書く場合も、一般的な原則を明示し、同時に皆への警告、譴責、忠言として、ある人たちの危険や誤りや罪を明細に述べるよう指示された。他の人々がせめられている誤りと同じ誤りを犯していなかったか、他の人たちに与えられた警告が自分の場合に当てはまらないかどうかを知るために、だれでも自分自身の心と生活を厳密に探るべきだということをわたしは悟った。もしそのような点があるならば、助言や譴責は特に自分のために与えられたと思うべきであつて、それらが特別自分自身に対して言われたように実際に適用すべきである。

神はキリストの信徒であると主張するすべての者の信仰をためす計画をしておられる。自分の義務を知るところを熱心に求めていると主張するすべての者の祈りの真实性を、神は試みられる。彼は義務を明らかに示し、すべての者に彼らの心の中にあるものを發揮させる十分な機会をお与えになる。

主はご自分の戒めを守ると公言する人々を譴責し矯正される。主はすべての罪と悪とを彼ら

から切り離したいと望まれるので彼らの罪を指摘し、不義を暴露されるが、それは彼らが神をおそれて全く清くなるためである。神は彼らが精練され、清められ、高められてついには神ご自身の王座にまで上げられるために彼らを譴責し、戒め、矯正されるのである。

（5 T・六五四 六六二ページ）

### 人々の注意を聖書に向ける

あかしの書は新しい光を与えるためでなく、すでに啓示されている靈感による真理を心に鮮明に印象づけるためのものである。神に対し、また人間同志に対する人の義務は、神のみ言葉の中に明細に述べられているが、与えられた光に従順な者はあなた方のうちのほんのわずかなある。真理が追加して示されているのではなく、すでに与えられている偉大な真理を、あかしを通して神は単純にし、それらをもつて人々の精神を覚醒し感動を与えるため、彼ご自身のお選びになった方法で人々の前に示されたのであるが、それは、だれも弁解の余地がなくなるためであつた。あかしは神のみ言葉を軽視させるのではなく、美しい単純な真理がすべての者を感動させるように、これを高め、人々の心をこれに引きつけるためである。



(5 T・六六五ページ)

聖霊は、聖書にとって代わるために与えられたのではないし、また、そのようなものとして与えられるはずもないのである。なぜなら、神のみことばは、すべての教えとすべての経験を吟味する標準であると、はっきり聖書に述べられているからである。使徒ヨハネは言っている。「すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである」(ヨハネ第一・四ノ一)。そしてイザヤは、「ただ律法と証詞とを求むべし、彼らの言うところのことばにかなわずば、しのめあらし」と宣言している(イザヤ書八ノ二〇文語訳)。

(各時代の斗争闘まえがき四ページ)

「兄弟は、神があかしを通してわたしにお与えになった光を、神のみ言葉に追加されたものであると見せようとして人々の考えを混乱させているが、これによって彼は問題を誤って示している。神は、この方法で自分の民の心をみ言葉に導き、より明白な理解を与えることを至当であると考えられたのである。」神のみ言葉は、非常に鈍い頭脳も啓発するだけの力があり、これを理解したいという気持ちが少しでもある者には理解できるのである。しかしそれにもかかわらず、神のみ言葉を学んでいると公言するある人々は、その最も明白な教えと正反対な生

活をしている。そこで神は、男子も女子も弁解の余地がないようにするために、明らかで要点をついたあかしを与えて、彼らが従うことを怠っていたみ言葉に導き返されるのである。神のみ言葉には生活の正しい習慣を形成するための一般原則が多く記されているが、あかしは全体的なものも個人的なものも、これらの原則へと特別に彼らの注意を引くよう計画されたのであった。

わたしは尊い聖書を取り出して、神の民のために与えられた数冊の**教会へのあかし**で囲んだ。そしてわたしは、さあ、これでほとんどすべての問題に間に合うと言った。彼らが避けなければならぬ罪は指摘されている。それは彼らと同じような事情にあった他の人のために与えられたものではあるが彼らが求める助言もここに見出すことができる。神は着々と教訓に教訓を重ねて教えて来られたのである。

しかしあなたがたの中で、あかしの中に何が書いてあるかをほんとうに知っている人は多くはない。あなたがたは聖書をよく知っておられない。もしあなたがたが聖書の標準に達し、クリスチャンの完全さに到達したいと望んで神のみ言葉を学んでいたならば、あかしは必要でなかったはずである。あなたがたが、神の靈感によって与えられた聖書をよく知るための努力を怠ったので、神は単純で率直なあかしによって、あなたがたの心を動かし、あなたがたが従う

ことを怠った靈感のみ言葉にあなたがたの注意を引き、その純潔で崇高な教えに従ってあなたがたの人生を形づくるよう、すすめておられるのである。

(5 T・六六三 六六五ページ)

### 実によるあかしの評価

あかしは、その実によって評価しなさい。その教えの精神はどんなものであろうか。その影響がどんな結果をもたらしたであろうか。望む者はだれでも、これらの幻の結果を自分でよく知ることができる。神は、あかしがサタンの勢力と、サタンの働きをして彼を助けて来た人間的な力の影響に抵抗して、生き続け、力を増して行くようにとお考えになった。

神は、彼の教会を教育し、彼らの悪事を戒め、信仰を強めておられるか、あるいは、そうしておられないかのどちらかである。この働きは神のものであるか、あるいはそうでないかである。神はサタンと共同で何かをなさるということは決してない。わたしの働きには：神の印か、そうでなければサタンの印が押されているのであって、このことでは中途はんぱな働きはない。あかしは神の御霊によるものか、悪魔によるものかのいずれかである。

主が預言の霊によつてご自身を表示された時、過去、現在、未来がわたしの前に展開した。わたしは一度も見たことのない人々の顔を見せられたが、何年も後になって彼らに会った時、わたしは彼らを知っていた。わたしは眠りから目ざめさせられて、以前示された問題が鮮明に意識に上り、真夜中に手紙を書いたことがあるが、それらの手紙はアメリカ大陸を渡つて危急な場合に到着し、神のみ働きを大きな災難から救つたのである。これが長年にわたるわたしの仕事であつた。一つの力がわたしに迫つて、わたしが考えたこともない悪事を戒め、譴責するようにさせたのである。こういう働きは上からのものであるうか、下からのものだろうか。

（5 T・六七ページ）

### サタンのねらいは疑惑を起こさせることである

多くの場合、あかしは全面的に受け入れられて、罪と放縦はやみ、神から与えられた光に調和して改革が直ちに始まるが、他の場合は、罪に汚れた放縦な生活を愛し、あかしは拒絶される。そして多くの者はそれを受け入れることを拒む理由として、偽りの言い訳を他の人々にする。真実な理由は言わない。それは道徳的な勇氣の欠乏、すなわち、有害な習慣を捨てるため

に神の霊によつて強められ、支配された意志の欠乏である。

サタンは、神が送られる、要点をついたあかしに対して、疑いを暗示し反対をとねえるのにたけている。そして多くの者が不信をいただき、疑い、へりくつを言うことを長所だと考え、頭のよいしるしだと思っている。疑いたいと思う者には十分な余地があるであろう。神は不信の誘因をすべて除くことはご計画なさない。神はしるしをお与えになるのであつて、それをけんそんな心と、すなおな精神で注意深くしらべ、証拠の重要さによつて、すべて決定しなければならぬ。神は正直な人間が信じるために十分な証拠を与えられるが、理解力に限りがあるためはつきりとらえることができないわずかのことのゆえに、重要な証拠を拒む者は、寒氣のするような冷たい不信と疑惑の空氣の中に取り残されて信仰の破船を体験する。

あかしに対する神の民の信仰を弱めることはサタンの計画であつて、サタンは攻撃の方法を心得ている。彼は、働きの上に立っている者たちに対して、ねたみや不満な気持ちをかき立てるように人々の心に働きかける。次に賜物が疑われるようになり、すると必然的に、それらは、あまり重要性がなくなるので、幻を通して与えられる教訓は無視される。続いて、われわれの見解の柱である、われわれの信仰の重要な点について懐疑的になり、更に聖書を疑うようになり、それから、破滅へと下降線をたどるのである。一度信じたあかしを疑い、これを捨てると、

サタンは、欺かれた者たちがそこで止まらないことを知っていて、彼らが公然とした反逆を始めるまで努力を倍加する。そしてその反逆は収まらず、ついには滅亡に終わるのである。神のみ業に対する疑惑や不信に負け、疑惑と冷ややかなしつと心をいだくことによつて、彼らは完全な欺瞞へと自分自身を備えている。彼らは、勇気をもつて自分たちの誤りについて話し自分たちの罪を戒めてくれる人たちに対して、苦々しい気持ちで反抗する。

危険な立場に立っているのは、あかしを公然と拒絶する者、あるいはそれらについて疑いをいだいている者たちだけではない。光を無視することは、これを拒絶することである。

あかしに対する信頼を失うならば、あなたは聖書の真理から押し流されてしまう。わたしは、多くの者が怪しみ疑う態度をとるであろうと、非常に恐れているので、あなたがたの魂のために悩んで、警告を与えたいと思うのである。どれだけの人が警告に心を留めるであろう。

（5 T・六七二 六八〇ページ）

口実にはならないあかしに関する無知

多くの人々は、神がその民に与えられた光に対して正反対な行き方をしているが、それは彼

らが注意や譴責や警告の光と知識を含む書物を読まないからである。この世の心づかいや流行を愛する愛、そして宗教の欠乏は、神がこのように恵み深くお与えになった光から人々の注意をそらし、一方では間違いを載せた書籍や雑誌が国中を往来している。懐疑論や不信心は至る所にはびこっている。神のみ座から来ている、こんなに尊い光が、ますの下にかくされている。神は、この怠慢の責任を彼の民にお問いになる。神がわれわれの道に照らして下さったすべての光を、われわれが霊的な事柄において進歩するために活用して来たか、あるいは、気ままに生きるほうが好きなので、拒絶したかによって、神に申し開きをしなければならぬ。

あかしは安息日を守っているすべての家庭に取り入れられ、兄弟たちはその価値を知り、それを読むように熱心にすすめられるべきである。これらの書籍を安い値段にし、また一組だけ教会に置くことは、最善の策ではなかった。それらは、どの家庭の図書の中にもあつて、何回も繰り返して読まれるべきである。それらを多くの者が読むことのできる場所に置くようにしなさい。

(5 T・六八―ページ)

わたしは、警告や励ましや譴責のあかしに対する不信仰が、神の民から光を閉め出していることを示されている。不信仰が彼らの目をふさいでいるので彼らは自分たちの実状を知らない。彼らは、譴責をしている神の御霊のあかしは不必要だと思ふか、あるいは、それが彼らに当て

たものではないと考えるのである。そのような人々には、霊的な知識に欠けていることを悟るために、神の恵みと霊的な識別力が最も必要である。

真理から背信した多くの者が、あかしに対する不信を、彼らの行動の理由にしている。しかし、彼らに尋ねたいことは、神がおとがめになる偶像を彼らは捨てるだろうか。あるいは、彼らが誤りにふけり続けて、自分たちが楽しんでいるその事柄を戒める神からの光を拒むだろうかということである。彼らにとって解決しなければならぬ問題は、自己を否定して、自分の罪を戒めるあかしを神からのものとして受け入れるか、あるいはあかしが自分の罪を戒めるから、これを拒絶するかである。

（5 T・六七四、六七五ページ）

### あかしの間違った使い方

今までに出版されたあかしの中の第一号には、神の民にこのように与えられている光の無分別な使用に対する警告が出ている。ある人々は賢明でない行動を取っていたことを、わたしは述べたのである。彼らは、未信者に自分たちの信仰について話をし、その証拠を求められた時、聖書から証拠を得ようとしないうで、わたし著書の中から読んだのであった。わたしは、この



行動が矛盾していて、真理に対して未信者に偏見を持たせるということを示された。あかしは、その霊について知らない人々にとっては、少しの重要性もない。そういう場合には、あかしを引き合いに出すべきではない。

あかしの使用に関する他の警告が時折、次のように与えられて来た。

「ある説教者たちは、はるかにおくれている。彼らは与えられたあかしを信じると公言するが、ある者は、それらについて何の経験もない人々に対して、これを鉄則のようにして害を与え、しかも自分たちはそれを実行しない。彼らはくり返し与えられたあかしを完全に無視して来たのである。こういう行動は矛盾している。」

「他の人々の罪や悪事について、神がお示しになった事柄を、多くの者が利用していたことをわたしは悟った。彼らは、幻で示された事柄を極端な意味にとり、神のお示しになったことについて多くの者の信仰が弱められ、また、教会が失望落胆しそうになるまで、これを押しつけた。」

(5 T・六六九、六七〇ページ)

### あかしを非難することの危険

わたしは、最近みせられた夢の中で、人々の集まっているところへ連れて行かれたが、その中のある者たちは、わたしが彼らに以前与えた、最も厳粛な警告のあかしの印象を取り除こうと努力をしていた。彼らは「われわれは、ホワイト夫人のあかしを信じるが、考慮すべき特別な問題について、彼女が直接に幻で見なかったことをわれわれに語る時には、彼女の言葉はわれわれにとって、他の人々の言葉と同じ価値しかない」と言った。主の御霊がわたしに臨んだので、わたしは立ち上がって主の名によって彼らを譴責した。

ところでもしも、これらの厳粛な警告を与えられた人々が「それは単にホワイト夫人の個人的な意見に過ぎないから、わたしはやはり自分自身の判断に従う」と言って、彼らがしてはならないと警告されたそのことをし続けるならば、彼らは神の勧告を軽べつしていることを明らかにし、その結果は、神の御霊がそうになると、わたしに示された通り、神のみ事業を損ない、彼ら自身も破滅を招く。自分の立場を強めたいと願う、ある人々は自分の意見を支持すると思う説を、あかしの中から取り出し、これを強調して解釈する。しかし、彼らの行動に異議を唱えたり、彼らの見解と一致しない所は、ホワイト夫人の意見であるとして、それが天からのものであることを否定し、彼ら自身の判断と同じ水準に置くのである。

そこで兄弟たちよ、あなたがたがわたしと人々の間に立ち入って、神が彼らに届くように望

んでおられる光を追い払わないように、わたしは懇願する。あなたの非難によって、あかしから、すべての影響力や真意、権威を除いてはならない。神が、何が天からの光で、何が単なる人間の知恵の表現であるかを見分ける力をあなたにお与えになったと主張して、あなた自身を考えに合うようにこれを切り裂くことができると思ってはならない。もしも、あかしの言うところが神の言葉に合わなければ、それを拒絶しなさい。キリストとベリアルは一致できないのである。人間の詭弁や懐疑論で人々の考えを混乱させ、主がしたいと望まれる働きを無効にするようなことは、キリストのためにはならない。あなたの霊的識別力の欠乏によって、この神の働きをつまずきの岩とし、多くの者がこれにつまずき、かつ倒れ、「わなにかけられ、捕らえられる」ようにしてはならない。

(5 T・六八七 六九一ページ)

### どのようにに譴責を受けるか

神の御霊によって、譴責される人々は、卑しい器に対して反抗すべきではない。彼らを破滅から救うために語ったのは、神であって、誤りに陥りやすい人間ではない。譴責を受けることは、人間の性質にとって楽しいことではなく、また、神の御霊によって啓発されていない人間

の心は、譴責や、あるいは譴責がもたらすであろう祝福の必要を認めることができない。人が誘惑に負け、罪にふけると、精神は暗くなり、道徳的感覚はゆがめられる。良心の警告は無視され、その声はつきり聞こえなくなる。その人は、正、不正を区別する力を次第に失い、ついに、神の前での自分の立場についてよくわからなくなってしまう。宗教の形式は守り、教理は、その精神に欠けていながらも熱心に、これを維持するかも知れない。こういう人の状態が真の証人によつて描写されている。「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。」神の御霊が、譴責のメッセージによつて、彼の状態を示しても、彼は、そのメッセージが事実であることを悟れないのである。それだからといって、その人は警告を拒否すべきだろうか。そうではない。

あかしの性格については、望む者は皆、満足できる十分な証拠を、神が与えられている。だから、それが神からのものであると認めた時は、自分の行動の罪深さが自分には見えなくても、譴責を受け入れることが彼らの義務である。もしも彼らが、自分の状態を完全に認識したならば、譴責をする必要があるだろうか。彼らがそれを知らないのに、神は、おそくならない内に、彼らが悔い改め、改革するよう、あわれみをもって彼らに示しておられるのである。警告を侮

る者は無知のままに放っておかれ、自己欺瞞に陥るが、これに心を留め、必要な恵みを受けるために、自分の罪を除こうと熱心に努める者は、愛する救い主が入って、共に住んで下さるために心の戸を開くようになる。最も密接に神と結ばれている人々とは、神が彼らにお語りになる時、そのみ声がかかる人たちである。霊的な人々は霊的なことを見分ける。そういう人は、主が彼らの誤りを指摘して下さったことをありがたく思う。

ダビデは、自分に対する神の御取扱いから、知恵を学び、至高者の懲らしめの下でけんそんに、ひざをかがめた。預言者ナタンが、彼の真の状態を忠実に描写したことは、ダビデに自分の罪をよくわからせ、それを捨てるように彼を助けた。ダビデは従順に勧告を受け入れ、神のみ前に自分自身を低くしたのである。「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ」(詩篇一九ノ七)とダビデは叫んでいる。

「だれでも受ける訓練が、あなたがたに与えられないとすれば、それこそ、あなたがたは：ほんとうの子ではない」(ヘブル二ノ八)。われわれの主は「すべてわたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする」(黙示録三ノ一九)。「すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる」(ヘブル二ノ一一)と言われた。た

とえ訓練はつらくても、それはわれわれを「そのきよさにあずからせるために」父なる神のやさしい愛によって定められているのである。

（5 T・六八二、六八三ページ）

## 第十章 聖書

聖書の中には真理の宝石が、表面的な探求者から隠れて、無数に存在している。真理の鉱山は掘り尽くされることはない。けんそんな心で聖書を探索すればするだけ、興味が増し、パウロと共に「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ人への手紙一一ノ三三)と叫びたい気持ちになる。

(5 T・二六六ページ)

キリストと彼のみ言葉は完全に調和している。それらは、受けて従う時、キリストが光の中にいますように光の中を喜んで歩くすべての者のために、確かな道を開くのである。もし、神の民が、神のみ言葉の価値を認識するならば、この地上の教会が天国のようになるであろう。クリスチャンは、飢えたように熱心に、み言葉をしらべ、聖句と聖句を比較して、み言葉をめい想する時間を切望するであろう。彼らは、朝刊や雑誌や小説に対するよりも、み言葉の光に

対して、もっと熱心になるであろう。彼らの最大の欲求は、神のみ子の肉を食べ、血を飲むことであって、その結果、彼らの生活は、み言葉の原則と約束に順応し、その教えは彼らにとつて命の木の葉のようになるであろう。それは、彼らのうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。すがすがしい恵みの雨は、魂を活気づけ、生き返らせ、すべての苦労や疲れを忘れさせる。彼らは、靈感によるみ言葉をもつて力づけられ、励まされるであろう。

（8 T・一九三ページ）

聖書は広範な文体とテーマをもっているので、どんな人の心もひきつけ、どんな人の感情にも訴えるところがある。聖書のページには、最も古い時代の歴史や、最も真実な人生を送った人の伝記や、国家を支配する上に、また家族を治める上に必要な統治の原則、しかも人間の知恵の及びもつかないようないろいろな原則が見いだされる。聖書の中にはまた最も深遠な哲学、最も美しく崇高な、また最も感動にあふれた熱情的な詩がある。このような考え方をしただけでも、聖書はどんな人間の著作よりも、はるかにすぐれた価値をもっているが、しかしさらにその崇高な中心思想に関連してこれをおるとき、それは無限に広い範囲と、無限に大きな価値をもっている。この考え方によって、聖書を照らしてみると、その話題の一つ一つが新しい意義をもっている。最も単純に語られている真理の中に、天のように高くかつ永遠に限りな



い原則がふくまれている。

（教育・一三四ページ）

毎日聖書から何か新しいものを学ぶべきである。その中には永遠の命の言葉が入っているのであるから隠れた宝物を捜すように、それを探求しなさい。これらの聖なる書物を悟る知恵と理解力を求めて祈りなさい。もしそうするならば、あなたは神のみ言葉の中に新たな栄光を見いだすであろう。すなわち、真理に関する問題で新たに尊い光を受けたことを感じ、聖書について絶えず新たな価値を見いだすようになるであろう。

（5 T・二六六ページ）

聖書の真理を受けると、精神は世俗的な気持ちや墮落から高められる。もし神のみ言葉が、本来の価値を認められるならば、老若共に誘惑に抵抗し得るようにさせる、心の中の正しさ、主義原則の力を持つのである。

（8 T・三一九ページ）

### 勤勉にかつ組織的に学ぶ

両親たちよ、もしもあなたの子供たちを、神に仕えて、この世でよい事をするように教育したいと望むならば、聖書をあなたの教科書にしなさい。それはサタンの策略を暴露する。それは人類を高める偉大な力であり、道徳的な悪事を譴責し矯正し、われわれに真偽を見分ける力

を与えるものである。家庭や学校で、他の何を教えるにしても、聖書は偉大な教育者として第一位を占めるべきである。もしこの地位を与えるならば、神は崇められ、あなたの子供たちが改心するように、あなたのために働いてくださるのである。この神聖な書物の中には真理と美の豊かな宝庫があるのであるから、もしも両親が、それを子供たちにとって興味深いものになければ、両親自身が責められるべきである。

（5 T・三二二ページ）

誘惑者がキリストを惑わしに来た時、彼が使用された唯一の武器は、「こう書いてある」であつた。聖書の真理を教えることは、すべての両親がしなければならない非常に重要な働きである。神によつて語られた真理を、快活な楽しい気持ちで、子供たちに示しなさい。あなた方は日常生活において、父や母として、忍耐や親切や愛を実践し、子供たちをあなた方に結びつけることによつて、彼らへの実物教訓となることができるのである。子供たちに好きなようにさせてはならない。そうではなくて、あなたの仕事は、神のみ言葉を実行し、主の薫陶と訓戒によつて彼らを育てることであるということを彼らに示しなさい。

あなたの家庭で聖書を学ぶ場合は組織的に行いなさい。この世的なこととは何をおろそかにしても、……必ず魂は命のパンで養われるようにしなさい。楽しく、社交的な態度で、毎日一時間、あるいは半時間でも、神のみ言葉のために費やすことの成果は、はかり知れないのである。

ひとつの主題に関して、いろいろな時に様々な事情のもとで与えられているみ言葉を全部集めて、聖書をそれ自体の解説者にしなさい。あなたの家庭のクラスを訪問者や来客のために中断してはならない。もし彼らが勉強の途中に訪れた場合は、これに参加するように招きなさい。この世の利益や快樂を得るよりも、神のみ言葉の知識を得るほうがより重要だと、あなたが考えていることを表しなさい。

われわれが毎日、勤勉に、祈りながら聖書を研究するならば、すばらしい真理を、日々新しく、はっきりとした、力強い意味をもって見いだすであろう。

(C G・五一〇、五十一ページ)

もしもあなたの子供たちを主の薫陶と訓戒とによって育てたいと思うならば、聖書をあなたの道案内としなければならない。キリストのご生涯と品性を、彼らがならうべき型として示しなさい。彼らが誤りに陥る時は、同じような罪について主が言われたことを読んで聞かせなさい。こういう働きには絶え間ない注意と勤勉が必要である。両親によって黙認され、教師たちによって矯正されなかった一つの悪い性格が全人格をゆがめ、円満さを失わせるかも知れない。子供たちに、彼らが新しい心を持たなければならないこと、新しい品位が生まれ、新しい動機が吹き込まなければならないことを教えなさい。彼らはキリストから助けを得なければ

ならないのであって、み言葉の中に示されている神のご品性をよく知るようにならなければならないのである。

（C G ・ 五 一 五 ページ）

### 読者に約束されている神からの光

神のみ言葉は、その聖なる著者のご性格のように、有限な人知では決して完全には理解できない神秘を提示する。それは、われわれの思いを、「近づきたい光の中に」（テモテ第一・六ノ一六）住んでおられる創造主に向け、人類歴史の全時代を包含する神の御目的、限らない永遠の年月において初めて達成されるその御目的を、われわれに示すのである。それは、神のご支配と人間の運命に関し、無限に深みのある重要な問題に、われわれの注意を促すのである。この世界への罪の侵入、キリストの受肉、新生、復活、その他聖書に示されている多くの事柄は、人間の頭では説明するにも、あるいは完全に理解するのにも深過ぎる神秘なのである。しかし神は、それらの神聖な事柄の意味について聖書の中に十分な証拠を与えておられるのであるから、われわれは御摂理の神秘がすべて理解できないからと言って、み言葉を疑ってはならない。

もしも被造物にとって、神と神のみ業を完全に理解することが可能であつたとしたら、その状態に達した時、彼らには、それ以上真理の発見も、知識の発達もなく、知性や心が、更に發育するということもないであろう。神は、もはや、最高の権威者ではなくなり、人は知識と才能の限界に達したために、進歩も止まつてしまふであろう。しかしそうでないことを神に感謝しよう。神は無限であつて、神のうちには「知恵と知識との宝が、いっさい」存在するのである。そして、人は永遠に探究し、学び続けても、神の知恵、慈愛、力の宝を掘り尽くすことは決してできないのである。

聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりしがちである。聖書を多く読んでいながら益にならないことがあり、しかも多くの場合、明らかに害になっているのである。敬けんな心と祈りをもつて神のみ言葉を開くことをせず、思いも愛情も神に注がれておらず、あるいは、神のみ心に調和していないと、心は疑惑で曇り、聖書研究そのものによってより懷疑になる。敵が思想を支配し、正しくない解釈を暗示するのである。

(5 T・六九九 七〇五ページ)

聖書研究に対する愛好心は生来のものでない

老若ともに聖書をおろそかにしている。彼らは、それを自分で研究して、自分の生活の基準にすることをしない。特に若い人々が、この怠慢の罪を犯している。彼らの大部分が、他の書籍を読む時間は見出すが、永遠の命に至る道を指示する書物を毎日勉強していない。くだらない物語は注意深く読まれているが、聖書は放られている。しかし、この書物は、より高く、より清い人生へと導くわれわれの道案内なのである。架空の物語を読むことによつて青年たちの想像がゆがめられていなくなつたら、彼らは聖書を今まで読んだものの中で最も興味深い書物であると言うであろう。

（C T・一三八、一三九ページ）

われわれは、大きな光を与えられている民として、その習慣や言葉、家庭生活や交際において進歩向上して行くものでなければならぬ。聖書に、家庭の指導者としての名誉ある地位を与えなさい。それを、あらゆる困難な時の助言者、すべての行いの標準と考えなさい。義に就いての知恵である神の真理が統轄するのでなければ、家庭の中のだれにも真の繁栄は決してあり得ないということを、兄弟姉妹たちは悟るだろうか。父親や母親は、神に仕えることを重荷と考える怠惰な習慣から自分自身の精神を引き上げるために、あらゆる努力を払わなければならない。真理の力が家庭内で清める力とならなければならない。

（C G・五〇八、五〇九ページ）

子供たちは幼い時に、神の戒めの要求と、罪の汚れから清めて下さるあがない主、イエスに対する信仰を教えられなければならない。この信仰は教訓と模範によって毎日教えなければならないのである。

(5 T・三二九ページ)

### 聖書研究は知性を強める

もしも、聖書を充分に研究するならば、人は知的に強くなるのである。神のみ言葉の中で取り扱っているいろいろな主題、単純でかつ威厳のある表現、また、心に考えさせる崇高なテーマなどは、他の方法によつては啓発され得ない能力を、人間の中に啓発する。聖書の中には、想像力を働かせるために果てしのない分野が開かれている。学生は、くだらない読み物は言うまでもなく、たとえどんな書物でも、単に人間の書いたものを読むために時間を費やすよりは、聖書の偉大なテーマについて静かに考え、また、その高尚な連想によつて、思想も感情も、もっと純潔になり、高められる。若さにあふれた頭脳も、知恵の最高の源である神のみ言葉を、おろそかにするならば、最善の発育をとげることにはできない。われわれの間に、よい頭を持ち、着実に、実質的に価値のある人間が、こんなに少ない理由は、神を恐れず、愛さず、また宗教

の原則を充分に実行していないからである。

神は、われわれが、自分の知能力を養い強めるための、あらゆる手段を利用するように望んでおられる。……もし、聖書をもっと読み、その真理をもっとよく理解したならば、われわれは、はるかに、啓発された、そう明な人々となっているはずである。そのページを調べることによって、魂にエネルギーが与えられるのである。

（CG・五〇七ページ）

聖書の教訓は、この生涯のあらゆる関係における人間の繁栄に、重大な関連を持っている。それは、国家の繁栄の礎石である原則を提示している。それは社会の幸福と密接に結びつき、家庭を保護する原則である。この原則を度外視しては、だれひとり現世で有用な人物として幸福になり、栄誉を受けることはできない。また、将来永遠の生命を受けることを望むこともできない。人生のどんな地位、どんな経験であっても、聖書は、それに対する必要な準備を教えている。神の言葉を研究して服従するならば、人間哲学のあらゆる分野の周到な研究にまさって、もっと強力で知性の活発な人物が、世に送り出されることであろう。それは、力と強固な品性をもった人物、鋭い洞察力と正しい判断の人、神を敬い、世界の祝福となる人々を起こすであろう。

（人類のあけぼの下巻・二六〇ページ）



## 全聖書中に示されているキリスト

十字架にかけられた救い主キリストの、永遠の生命を与える力を、人々に紹介しなければならない。新約聖書が真に、福音を展開して行く力であると同時に、旧約聖書は正に福音の型であり影であることを、われわれは示さなければならない。新約聖書は新しい宗教を提示しているのではない。旧約聖書は新約聖書に取って代わられるべき無用な宗教を表しているのではない。新約聖書は単に旧約が進展し、展開したものである。

アベルはキリストを信じたのであって、ペテロやパウロと全く同様に、キリストの力によって救われたのである。エノクは、愛された弟子のヨハネと同じように、キリストの代表であった。エノクは神とともに歩み、神が彼を取られたので、いなくなった。彼にはキリストの再臨のメッセージが託されたのである。「アダムから七代目にあたるエノクも彼らについて預言したと言った、『見よ、主は無数の聖徒たちを率いてこられた。それは、すべての者にさばきを行うためであり、』」（ユダー四、一五）エノクによって伝えられたメッセージと彼が天に移されたことは、その時代に住んでいたすべての人々を信服させるに足るしるしであった。これらの

事は、義人が天に移されることができるといことを示すために、メトセラやノアが、力強く訴える根拠となった論証であったのである。

エノクとともに歩まれた神は、われわれの主、救い主イエス・キリストであった。彼は今日そうであるように、その時代にも世の光であられた。その時代に住んでいた人々は、彼らを生命の道に導く教師がなかったわけではなかった。なぜならば、ノアもエノクもクリスチャンであったからである。福音は、レビ記には、いましめとして与えられている。その時と同じように、今日も、絶対的な服従が要求されているのである。このみ言葉の重要性を理解する事が、どんなにか必要であろう。

「教会内の欠乏の原因は何か」という質問がなされたが、その答えは、こうである。「われわれは、自分の心が、み言葉から引き離されるままにしている。もしも、神のみ言葉が、魂のための食物として食されていたならば、そして、尊び敬う気持ちで取り扱われていたならば、くり返して伝えられた多くのあかしは、必要がなかったはずである。単純な聖書の宣言が受け入れられ、実行されたであろう」。

（6 T・三九二、三九三ページ）

## 第十一章 世にいるが世のものではない

一集団として、キリストの姿に同化するよりも、むしろ、世間に同化していくわれわれの危険を、わたしは示された。われわれは、今日、永遠の世界の、まさに境界に立っているが、われわれを惑わして、時の終わりを、ずっと遅らせることが、魂の敵の目的である。律法を守る神の民であり、われわれの救い主が、力と大いなる栄光をもって天の雲に乗って再び来られるのを待っていると公言する者たちを、サタンはありとあらゆる方法で攻撃する。サタンは、できる限り多くの人々を惑わして、彼らが災いの日をもっと先のように考え、世の精神を持ち、その風習にならうようにさせるのである。

わたしは、真理を強く主張する多くの者の心と頭を、この世の精神が支配しているのを見た時、驚いた。利己主義や、わがままな性質は大事に育てられているが、真の敬けん深さや、高潔さは養われていない。

(4 T・三〇六ページ)

## クリスチャンの正直さ

どんな商取り引きでも、かたく正直にきなさい。どのように誘惑されても、どんなに小さな問題においても、決して欺いたり、ごまかしたりしてはならない。時には、まっ正直な道から、それたいという衝動にかられるかも知れないが、みじんも道義を変えてはならない。こういう事柄においても、あなたが何かをしようと云った後で、それが、他の人々に益になり、自分が損をすることがわかって、道義から、たとえわずかでもそれではならない。あなたの契約を実行しなさい。

（C G ・ 一五四ページ）

聖書は、すべての虚偽、偽りの取引、不正直さを、最も強く非難している。正、不正は、はつきり述べられている。しかし、わたしは、神の民が自分自身を敵地に置いていることを示された。彼らは、サタンの誘惑に負け、その企てに従って、ついに、彼らの感覚は恐ろしいほど鈍ってしまったのである。金銭上の損得が関係すると、真実からわずかにそれることや、神のご要求を少しばかり変更することが、結局は、それほどひどい罪ではないと考えられている。しかし、百万長者が犯しても、道ばたのこじきが犯しても、罪は罪である。偽りの主張によっ

て財産を確保しようとするものは、自分の魂に罪の宣告を招いている。虚偽や不正によって手に入れたものはすべて、その人の災いになるだけである。

(4 T・三一一ページ)

偽りを言い、人を欺く者は、自分自身の自尊心を失う。その人は、神が彼を見ておられて、すべての商取引をよく知っておられること、聖天使たちが、彼の動機をはかり、彼の言葉に耳を傾けていること、そして、彼は自分の行いに従って報いを受けることなどを意識していないかも知れない。また、たとえ彼の悪い行いを人間と神の目から隠すことができたとしても、彼自身がそれを知っているという事実が、彼の精神と品性を墮落させる。一回の行動が人格を決定するのではないが、さくをこわし、次の誘惑によりたやすく応ずるようになり、ついには、商業上のごまかしや不正直な習慣が形成されて、その人は信頼されないようになってしまう。

(5 T・三九六ページ)

神は、ご自分の旗じるしのもとで神に仕えている人々が、本当に正直で、非難の余地のない品性を持ち、その舌は虚偽らしいことも言わないように望んでおられる。舌が真実であり、目が真実であって、行動は、すべて完全に神にほめられるようでなければならぬ。われわれは、「わたしはあなたのわざを知っている」と厳肅に宣言される聖なる神のみ前に生きているのである、神の御目は絶えずわれわれに注がれているのであって、ただ一回の不正な行為も、神からおお

い隠すことはできない。われわれのすべての行動を神が見ておられるということは、少数の人より他に認識していない事実である。

（C G ・ 一五二ページ）

### 信徒 実業における、より誠実な人間

キリストの評価による正直な人間とは、確かな誠実さを表す者である。世間で、多くの者が自分の利益を上げるために利用する不正なおもりや偽りのはかりは、神がご覧になって忌みきらわれるものである。にもかかわらず、神の律法を守ると公言する多くの人々が、偽りの目方や偽りのはかりで取り引きをしている。人が、真に神につらなり、本当に神の律法を守っているならば、生活がその事実を表すはずである。それは彼のすべての行動が、キリストの教えに調和するからである。彼は、利益のために自分の名誉を売るようなことはしない。彼の主義原則は確かな基礎の上に築かれていて、この世の事柄を扱う彼の行動は、その主義原則のあらわれである。確固とした誠実さが、この世のくずやがらくたの中で、金のように輝きを放つ。

欺きや偽りや不誠実さは、体裁よくうわべを取りつくるって人間の目から隠されるかも知れないが、神の御目からは隠れることはできない。品性の発育するのを見守り、道徳的な価値を

計る神のみ使いたちは、品性を表すこれらの小さな取り引きを、天の書に記録する。労働者が、毎日の仕事において、不誠実で、自分の仕事をなおざりにする場合に、社会が彼の宗教の標準を、実業の上の彼の標準に従って評価しても、その判断は間違っていないのである。

人の子が、天の雲に乗って間もなく来られるという信仰は、真のクリスチャンを、日常の務めに対して、怠慢にならせたり、不注意にさせたりはしない。キリストの間近い来臨を待っている人々は、怠惰ではなく、業務に勤勉である。彼らの仕事は、不注意になされたり、不正直に行われたりせず、忠実に、敏速に、徹底的になされる。この世の事柄に対して、不注意な無關心さは、彼らが霊的で、世俗から離れた証拠であると得意に思っている人々は、大いに欺かれている。彼らの真実性、忠実さ、また、誠実さは、この世の事で試され、明らかにされるのである。もし彼らが、小事に忠実であるならば、大事にも忠実である。

この点で多くの者が、失敗していることを、わたしは示されている。この世の事柄を取り扱う時に彼らの本当の性格が現れる。彼らは、同僚たちとの取り引きにおいて不誠実さ、ずる賢さ、不正直さを表す。未来、永遠の生命を得る可能性は、彼らが、この世の事柄で、どのように行動するかによって定まること、また、義なる品性を形成するためには、最も確かな誠実さが絶対に必要であることを、彼らは考えない。不正直が、∴真理を信じると公言している多

くの者の、なまぬるさの原因である。彼らはキリストにつながってはいないのに自分自身の魂を欺いている。わたしは、安息日を守っている者の間でさえも、驚くほど正直さが欠けていると言わなければならないので心が痛むのである。

（4 T・三〇九 三一一ページ）

### 世と結ぶ実業の同盟

ある人々は、この世の事柄を賢く取り扱うためのこつを知らない。彼らは、必要な資格に欠けているので、サタンは彼らを利用する。そのような場合に、こういう人は、自分の仕事について無知なままでいてはならない。彼らは、自分の計画を実行する前に、信頼できる判断力をもった兄弟たちに、相談をするだけのけんそんさがなければならない。わたしは、次の聖句を指摘された。「互に重荷を負い合いなさい」（ガラテヤ六ノ二）。ある人々は、けんそんでないために、自分で計画を実行し、困難に巻き込まれるまでは、判断力のある人の協力を求めない。困難に陥ると初めて、兄弟たちの助言や判断を受けることの必要性を悟るが、その時には事態は、最初に比べて、どんなにか深刻化していることだろう。避けられる限り、兄弟たちは、法律に訴えるべきではない。そうすることによって、敵が彼らを困難に巻き込み、困惑させるの



に、非常に有利な立場を与えるからである。多少の損をしても、示談で解決をつけたほうがよい。

わたしは、神の民が、未信者の保証人になるのを、神が、喜ばれないことを示された。わたしは、これらの聖句を指摘された。「あなたは人と手を打つ者となってはならない。人の負債の保証をしてはならない」(箴言二二ノ二六)。「他人のために保証をする者は苦しみをうけ、保証をきらう者は安全である」(箴言一一ノ一五)。不忠実な管理者たち！彼らは、他に属するもの、すなわち、天の父に属するものを抵当に入れるのである。そしてサタンは自分の子らが、それを、彼らの手からもぎ取るのを助けようと待ちかまえている。安息日遵守者は未信者と、共同経営者になるべきではない。神の民は、あまりにも、知らない人の言葉を信頼し過ぎる。そして、すべきでないのに、彼らの忠告や助言を求めるのである。するとサタンは、未信者たちを自分の道具にして、神の民を困らせ、財産を奪うために、彼らを通して働く。

(1 T・二〇〇、二〇一ページ)

## 第十二章 聖霊

われわれの主、イエス・キリストの来臨を待ち望むだけでなく、これを早めることが、すべてのクリスチャンの特権である。彼のみ名を公言するすべての者が、キリストの栄光となる実を結ぶならば、どんなに早く全世界に、福音の種がまかれるだろう。すみやかに、最後の収穫物は実り、キリストは、大切な穀物を集めるために来られるであろう。

兄弟姉妹たちよ、聖霊を願い求めなさい。神は、彼が約束されたすべての約束を見守っておられる。聖書を手に持って、「わたしは、あなたのおっしゃったとおりにいたしました。『求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう』と言われた、あなたの御約束を、ご覧下さい」と言いなさい。キリストは、「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう。」「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあ

げよう。父が子によって栄光をお受けになるためである」（マタイ七ノ七、マルコ一ノ二四、ヨハネ一四ノ一三）と宣言しておられるのである。

キリストは、ご自分のしもべたちに、そのみ心を伝えるため、使者たちを、彼の全領土に派遣しておられる。キリストは彼の教会の中を歩かれる。彼は信者たちを清め、高めて、尊くしたいと望んでおられるのである。彼を信じる人々の感化は、世の中で、命から命に至らせる香りとなる。キリストは、その右手に星を持っておられるが、それは彼らを通して世界に、ご自分の光を輝かせるためである。こうして、キリストは、ご自分の民を天にある教会での、更に高い奉仕のために準備したいと望んでおられる。彼は、われわれが果たすために大きな仕事を、お与えになった。われわれは、それを忠実に果たそう。神の恵みが人類のために、どんなことをなし得るかを、われわれの生涯で示そう。

（8 T・二二、二三ページ）

### 聖霊降下の前に一致がなければならない

聖霊が注がれたのは、弟子たちが、もはや、最高の地位を求めて争わなくなつて、完全に一致結合してからであつたことに注意しなさい。彼らは、一つになった。すべての相違は取り去

られた。であるから、聖霊が与えられた後、彼らが語ったあかしは相違していなかった。「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして」（使徒行伝四ノ三二）と書かれていることに注目しなさい。罪人が生きるために死なれたキリストの霊が、信徒の全会衆に生氣を与えた。弟子たちは、自分自身のために、祝福を求めなかった。彼らは他の魂に対して重荷を感じていたのであった。福音は地の果てまで宣べ伝えられなければならなかったので、彼らは、キリストの約束された力が授けられるように求めた。その時、聖霊がそそがれて、一日のうちに何千人も改心したのである。

今日も、そのような事が起こり得るのである。クリスチャンが、相違をすべて捨てて、失われた者の救いのために、神に自分をささげ、約束された祝福を信仰をもって求めるならば、与えられるのである。使徒たちの時代の聖霊降下は、「先の雨」であって、その結果はすばらしかった。しかし後の雨はもっと豊かに降るのである。この終わりの時代に住んでいる人々に対する約束は何であろう。「望みをいだく捕われ人よ、あなたの城に帰れ。わたしはきょうもなお告げて言う、必ず倍して、あなたをもとに返すことを。」「あなたがたは春の雨の時に、雨を主に請い求めよ。主はいなずまを造り、大雨を人々に賜い、野の青草をおのおのに賜わる」（ゼカリヤ九ノ一二、一〇ノ一）。

# 聖霊に対する服従が人の有用性を定める

神は、われわれの前にある働きを、われわれ自身の力でするようには求めておられない。神は、われわれの人間的な能力には耐えられないようなすべての非常事態に備えて、天来の助けを用意されたのである。神は、あらゆる困難に際して助け、われわれの希望や確信を強め、知性に光を与え、心を清めるために、聖霊をお与えになる。

キリストは、ご自分の教会が、変えられて、天来の光に照らされ、インマヌエルの栄光で輝くように備えをされた。すべてのクリスチャンが、霊的な光と平和なふん囲気に包まれていることが、キリストのみ心なのである。自我を捨てて、聖霊が心に働かれる余地をつくり、神に全く献身した生涯を送る者の有用さには限りがない。

ペンテコステの日の聖霊降下の結果は、どうであつたであらう。復活された救い主のよきおとずれは、世界の果てまでも、宣べ伝えられたのである。弟子たちの心は、非常に深く、豊かで、遠大な博愛心で、あふれるほどに満たされ、それにかり立てられて、彼らは、「わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあつては

ならない」（ガラテヤ六ノ一四）と証言しながら、地の果てまでも行つたのである。彼らが、イエスの中にある真理を宣べ伝えた時、人々の心は、メッセーシの力に降伏した。教会は、四方八方から改心者が群れをなして入って来るのを見たのである。背信者は再び信仰に戻り、罪人はクリスチャンと一つになって、高価な真珠を求めた。福音の最も痛烈な敵対者であつた人たちが、その擁護者となつた。預言は成就した。弱い者も、「ダビデのように」なり、ダビデの家は「主の使のよう」になる。クリスチャンは皆、その兄弟の中に、神のような愛と慈悲深さを見た。一つの関心がすべてに勝つた。競いあつていたいろいろな要素の一つが他をすべてのみ込んでしまった。信徒たちの唯一の大望は、キリストのような品性を表し、彼の王国の拡張のために働くことであつたのである。

御霊の約束は、最初の弟子たちに対して与えられたものであるのと同じように、事実、われわれに与えられたものである。神は、ペンテコステの日に、救いの言葉を聞いた人々に授けられたと同じように、今日の男女にも、天からの力を授けられる。

（8 T・一九、二〇ページ）

聖霊は終わりまでおられる

キリストは、聖なる御霊の感化が、最後まで、ご自分の信徒たちと共にあると宣言された。しかし、この約束は、十分に価値を認められていないので、その実現をそれほど見ていないのである。御霊の約束についてはほとんど考えられていないので、その結果は当然予測されるように、ただ霊的な渇き、霊的暗黒、霊的衰微と死があるだけである。より小さな問題が思いを占領し、教会の成長と繁栄のために必要で、他のすべての祝福を伴って来る神の力は、無限に豊かに提供されているにもかかわらず、欠乏している。

福音宣伝をこれほど無力にしているのは御霊の不在である。学識、能力、雄弁、あらゆる先天的、後天的な才能を持っても、神の御霊のご臨在なしには、だれの心をもとらえることはできないし、一人の罪人も、キリストにみちびかれることはない。しかし逆に、彼らがキリストにつらなり、霊の賜物を受けるならば、最も貧しい、最も無学な弟子であっても、人々の心を動かす力を持つのである。神は、彼らを宇宙の最高の感化力が流れ出る通路とされる。

神に対する熱心が弟子たちを動かし、非常な力で真理のあかしをさせた。この熱心さをもつて、キリストと、十字架にかけられたキリストのあがないの愛の物語りを伝えようという決意をわれわれの心に燃やすべきではないだろうか。今日、神の御霊が、熱心な忍耐強い祈りに答えて下り、人々に奉仕の力を満たすはずではないだろうか。それならば、なぜ、教会は、こん

なに弱く、熱意がないのだろう。

（8 T・二二、二二二ページ）

聖霊がわれわれの教会員の精神を支配する時、言葉においても、伝道においても、靈性においても、今日見られるよりはるかに高い標準が、教会の中に見られるであろう。教会員は、命の水で活気づき、一つの頭であるキリストの下で働いている働き人たちは、心と言葉と行いによつて、彼らの主を表し、互いに励まし合つて、われわれの従事しているこの広大な、最後の働きを押し進めて行くであろう。そこには健全な一致と愛が増し、それによつて、神が罪人のあがないのために、ご自身のみ子をおくり、死にわたされたことをあかしするのである。神聖な真理は高められる。そして、それが燃えるともし火として輝く時、われわれは、ますますそれを明瞭に理解するのである。

（8 T・二二二ページ）

もし、神の民が、自分で何の努力もせず、聖霊の雨が降つて、彼らの悪を除き、誤りを正して下さるのをただ待つならば、そしてもし聖霊が彼らを肉と靈との汚れから清めて、第三天使の大きいなる叫びに従事するよう準備して下さるとただ当てにしているだけならば、彼らは不適合であるともなされるであろう。聖霊や神の力は、神がお命じになつた働きをすることによつて、自分自身を準備した人々にだけ下るのである。すなわち、肉と靈とのいつさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなつた者にだけ下るのである。





## 第十三章 祈祷会

祈祷会は集会の中で最も興味深い集まりでなければならぬのに、へたに運営されることがよくある。多くの人が説教は聞きに行くが、祈祷会には出ない。この点を考えなければならぬ。神から知恵を求めて、集会を興味深く魅力的に行うため、計画を立てるべきである。人々は命のパンに飢えている。もし、彼らが祈祷会にそれを見いだすならば、それを得るために行くであろう。

長い退屈な話と祈祷はどんな場所にも不適當であるが、特に交わりの集会においてはそうである。ずうずうしく、いつでもすぐ口を開く人々は、内気で遠慮がちな人たちがあかしをする余地がないほど時間を取っている。一般に、浅薄な人々ほど多くしゃべる。彼らの祈りは長く機械的であつて、それを聞いている天使たちや人々を疲れさせる。われわれの祈りは短く、かつ要点をとらえたものでなければならない。長い人を疲れさせるような祈りは、ささげるなら、

密室でするようになっておきなさい。神の御霊を心の中に招き入れなさい。そうするならば、御霊がすべての冷たい形式を一掃するであろう。

(4 T・七〇、七ページ)

### 公衆の場でする祈りは長くしてはならない

キリストは弟子たちに、ただ求めることだけを祈って、祈りを短くするようにすべきだという考えを印象づけられた。キリストは何をどれくらい祈るかについて教えられたが、それは物質的・霊的な祝福に対する彼らの願いとそれらに対する感謝を表現することであつた。この祈りの見本はなんと包括的であろう。それは、あらゆる実際的な必要を言い尽くしている。普通の祈りであればどんな場合でも一、二分で十分である。祈りが特別に神の御霊によつて授けられ、御霊によつて嘆願がなされるということがある。熱望する魂は神を求めてもだえ苦しむめくのである。霊はヤコブのしたように格闘し、特別な神の力の表示を見るまでは落ち着かない。これは神が望まれる状態である。

しかし多くの者は、心のこもっていない説教のような祈りをささげる。これらの人々は神ではなく、人に祈っているのである。もしも、彼らが神にむかつて祈り、自分のしている事が

本当にわかつたら、自分の大胆不敵さに驚き恐れるであろう。なぜならば彼らは、宇宙の創造主が世界に起こっている事柄に関し、何か特別な知識を必要としておられるかのように、祈りの形式で、神に向かって講義をしているからである。こういう祈りは皆、やかましい鐘や騒がしい鑢鉢と同じであって、天では何の価値も認められないのである。それらに耳を傾けなければならぬ人間と同様に、神のみ使いたちもそれらに聞き飽きている。

人々はイエスが祈っておられるのをしばしば見た。彼はご自身の願いをみ父にお告げになるために人のいない森や山に行かれた。一日の仕事が終わって、疲れた者たちが休息を求めている時、イエスは祈りに時間を費やされた。われわれは祈る気持ちをくじこうとしている訳ではない。なぜなら、祈ることとそのために目をさましているということが、あまりに少な過ぎるからである。そしてまた、御霊と知性をもつて祈るということは更に少ないのである。熱と力のある祈りは、いつでも適切で決して人を疲れさせない。そういう祈りは、祈りを愛する気持ちのあるすべての者に関心を持たせ、彼らを元気づける。

密室の祈りがおろそかにされている。そして、そのために、多くの者は神を礼拝するために集まった時、あんなに長いあきあきする信仰的でない祈りをささげる。彼らは、その祈りの中で、一週間の怠った義務をふり返り、同じ事を何回も祈るが、それは自分の怠慢を補って、自

分を苦しめている良心のかしやくを静めようと思っ  
て神から好意を受けようと希望する。しかしこの  
ような祈りは、しばしば、他の人たちの精神を  
彼ら自身の低い靈的暗黒の水準に引き下げてし  
まう。もしクリスチャンが、目をさまして祈る  
ことに関するキリストの教えを、切実に感じ取  
るならば、神を礼拝することにおいてもっと  
聡明になるであろう。

(2 T・五八一、五八二ページ)

### 祈りの中でもっと賛美を

「息のあるすべてのものに主をほめたたえさせよ。」感謝すべき事がどれほどあるのかわれわれの中のだれが正しく考えたことがあるだろう。主のいつくしみは朝ごとに新しく、彼の眞実は尽きることがないことを、われわれは覚えているだろうか。われわれは、主に依存していることを認識し、そのすべてのご恩恵に対して感謝を表しているだろうか。反対に、われわれは「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る」ことをあまりにもしばしば忘れるのである。

健康な者は、毎日、毎年、彼らが受け続けて来た驚くべき恵みを、なんと簡単に忘れること

だろう。彼らは神のすべての恵みに対して、感謝と賛美をささげない。ところが病気になると神を思い出すのである。回復したいという強い望みが、熱心な祈りをさせるのであって、それは正しいことである。神は健康の時と同じく病気の時にも、われわれの避け所である。しかし多くの人は、自分の問題を神にお任せしない。自分自身について心配することによって弱さや病気を助長する。もしも彼らがぐちをこぼすことをやめて、ゆううつさを超越するならば、もっと確実に健康を回復するであろう。彼らはどんなに長く健康の祝福を楽しんで来たかを、感謝の念をもつて覚えるべきであり、もしこの貴い恩恵が再び与えられたならば、創造主に対して新たな義務があることを忘れてはならないのである。十人の癩病人がいやされた時、一人だけがイエスを賛美するために帰って来た。われわれは、神のなさけに心を動かさなかった思慮のない九人のようにならないようにしよう。

（5 T・三一五ページ）

災いを予想してくよくよと考える習慣は、愚かで非クリスチャン的である。そうすることに よつて、現在の祝福を楽しみ、今日ある機会を利用することに失敗する。主はわれわれに今日の義務を果たし、今日の試練に耐えるよう求めておられる。今日、言葉においても行いにおいても罪を犯さないよう注意していなければならぬ。今日、神を賛美し、あがめなければならぬ。生きた信仰を、今日働かせて、敵に勝利しなければならぬ。今日、神を求め、そのご

臨在を得なければ、満足して休むことはしないという決意を固めなければならない。これが、自分に与えられる最後の日であるかのように目をさまして働き、祈るべきである。そうするときわれわれの生活は、どんなにか真剣なものとなるであろう。言行すべてにおいて、どれほどイエスに近く従って行くことだろう。

### 小さい事柄に神は関心を持たれる

祈りの尊い特権を正しく評価し活用する者は少ない。われわれは、イエスの所に行つて、すべての必要を告げるべきである。大きい悩みと同様、小さい心配事や困ったことを彼に訴えることができる。何が起こつてわれわれの平安を乱しわれわれを苦しめても、それを祈りによつて主の所に持つて行くべきである。われわれがたえずキリストのご臨在の必要を感じる時、サタンは誘惑する機会をなくしてしまう。われわれの親友であり、最も同情に満ちたお方、イエスから、われわれを離しておこうと、サタンは絶えず働いている。われわれは、イエス以外のだれをも腹心の友とすべきではない。イエスには自分の心にある事を全部打ち明けても大丈夫なのである。

兄弟姉妹たちよ、皆と礼拝に集まる時、イエスがあなたにお会いになることを信じ、彼があなたを喜んで祝福しようとしておられることを信じなさい。自己から目を離して、イエスをながめ、比類のない彼の愛について話しなさい。イエスをながめることによって、あなたは彼の姿に変えられて行くのである。祈る時は短く祈り、要点を話しなさい。長い祈りで、主に向かってお説教をしてはならない。おなかのすいた子供が父親にパンを求めるように命のパンを求めなさい。単純に信仰をもつて神に求めるならば、神は必要な祝福をすべてわれわれに授けて下さるのである。

祈りは魂の最も神聖な修練である。それは真実でけんそんでなければならない。そして、それは聖なる神のみ前に、新たになった心の願いを言い表すことである。嘆願する者が神のみ前に自分のいることを感じる時、自己を忘れる。人間の能力を誇示しようとはせず、人々の耳を喜ばせようとはしない。ただ、魂の切望する祝福を得ようと努めるのである。

（5 T・二〇〇 二二二ページ）

神に祈りをささげる時は、公衆の前でも、私室においても、み前にひざまずくことはわれわれの特権である。われわれの模範であられるイエスは、「ひざまずいて、祈」られた（ルカ二二ノ四一）。また、弟子たちも、「ひざまずいて祈った」（使徒行伝九ノ四〇、二〇ノ三六、二



一ノ五」と記されている。パウロは、「わたしはひざをかがめて、天上にあり地上にあつて、『父』と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る」(エペソ三ノ一四、一五)と言った。またエズラは、神のみ前に、イスラエルの罪を告白してひざまずいた。ダニエルは、「一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り、かつ感謝した」(ダニエル六ノ一〇)。

(福音宣伝者二六三ページ)

## 第十四章 バプテスマ

バプテスマと聖さん式は二本の記念となる柱であつて、一本は教会の外に立ち、一本は教会の中に立っている。キリストはこれらの儀式に、真の神のみ名を刻まれたのである。

キリストはバプテスマを彼の靈的王国に入るしとされた。彼はこれを父と子と聖靈の權威の下にある者として承認されたいと望む者が皆従わなければならない明記された条件とされた。人は教会の一員となり、神の靈的王国の門を通過する前に、「主はわれわれの正義」（エレミヤ書二三ノ六）という神聖な名前の印を受けなければならない。

バプテスマは最も厳肅にこの世を捨てることである。父、み子、聖靈の三重のみ名によつて、バプテスマを受ける人々は、クリスチャン生涯に入るにあたって、サタンに仕えることをやめて、王の家族の一員となり、天の王の子供となったことを、公に宣言するのである。彼らは、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、……そして、汚れたものに触れてはならない」と

の命令に服従したのである。そこで彼らに対し、「わたしはあなたがたを受け入れよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」（コリント第二・六ノ一七、一八）とのみ約束が成就するのである。

バプテスマの時に、われわれがする誓約は多くのことを含んでいる。父と子と聖霊の名によって、われわれはキリストの死の様にひとしく葬られ、彼の復活の様にひとしくよみがえらされて、新しい命に生きるのである。われわれの生命はキリストの生命と結合しなければならぬ。そしてそれ以後、信者は自分が神とキリストと聖霊に身をささげた者であることを覚えなければならぬのである。この新しい関係を世のすべての問題に優先させなければならない。彼は、虚栄と放縦の生活はもはやしないことを公に宣言したのであって、不謹慎で無頓着な日々はもう送ってはならないのである。彼は神と契約を結び、この世に対しては死んだのである。彼は、自分が神のみ名を身につけていることと、自分がキリストの王国の臣民であり、神の性質にあずかる者であるという認識を決して失わないで、主のために生き、託されたすべての能力を主のために用いなければならない。彼は自分自身のすべてと、持っているものすべてを神に明け渡し、自分の才能をのこらず神のみ名の栄光のために用いなければならない。

志願者は十分に準備しなければならない

バプテスマの志願者についてはもっと十分な準備が必要である。彼らは、通常なされて来た以上にもっと忠実な指導を必要としている。新しく真理を知るようになった人々には、クリスチャン生活の原則を明白に示すべきである。彼らのする信仰の告白は、必ずしも救いをもたらすキリストとのつながりを彼らが持っている証拠とはならない。われわれは「わたしは信じます」と言うだけでなく、真理を実行しなければならない。われわれの言葉と行動と品性において神のみ心と一致することにより、神と結合していることを立証するのである。律法を犯す罪を捨てる時、生活は律法に一致し、完全に服従するようになるのであって、これは聖霊の働きである。み言葉の光を注意深く学ぶ時、良心の声と御霊の熱心な訴えは、肉体と心と霊の全人をあがなうために、全き犠牲としてご自身をお与え下さったキリストに対する真実な愛を心の中に起こさせる。そして愛は服従によって表されるのである。神を愛してその律法を守る者たちと、神を愛さないでその戒めを無視する人々との間の境界線は、明白である。

サタンは、神に全的に降伏することの必要性を、だれ一人悟らないように望んでいる。魂が

この降伏をしないと、罪は放棄されない。食欲と激情が支配しようとして争う。誘惑は良心を混乱させて、真実な改心は起こらない。わなにかけ、誘惑し、欺こうとしているサタンの使いたちと、一人びとりの魂が、戦わなければならないということをすべての人が認めていたなら、信仰を持って問もない人々のために、今までよりはるかに勤勉に努力するであろう。

### バプテスマのための子供たちの準備

バプテスマを受けたいと望んでいる子供たちの両親には、自己反省と子供たちを忠実に指導するということ二つの仕事がある。バプテスマは最も神聖で重要な儀式であるから、その意味について十分に理解していなければならない。それは罪の悔い改めと、キリスト・イエスにある新しい人生に入ることを意味する。この儀式を受けるために急ぎ過ぎてはならない。親子共に一切の事情を考慮しなさい。両親は子供たちのバプテスマに同意することによって、これらの子供たちの忠実な世話役になり、品性の向上のために彼らを教え導くことを、神聖に誓うべきである。彼らは群れの中のこれらの小羊が、自分たちの言い表す信仰をはずかしめることのないように、特別な関心をもって保護することを誓うのである。

宗教教育は最も幼い時から施すべきである。それは非難をするような精神でなく、快活な楽しい精神で行わなければならない。母親は子供たちの気付かないような形で、誘惑がおそうことがないように、絶えず警戒していなければならない。両親は賢明で感じのよい指導によつて、子供たちを守らなければならないのである。これらの未熟な者たちの最上の友として、両親は、誘惑に打ち勝つ助けをすべきである。なぜならば、勝利をすることは何事にも代えられない大切なことだからである。両親は、正しいことをしようと求めている愛する子供たちが、主の家族の年若い一員であることを考え、服従の大路をまっすぐ進んで行くよう彼らを助けることに強い関心を持つべきである。神の子供であることと意志を神に服従させることが、どういふことであるかを、愛情のこもった関心をもつて、毎日、彼らに教えるべきである。神への服従は、両親に対する服従を含むということを教えなさい。これは毎日の絶えざる努力でなければならぬ。両親たちよ、たえず見守りなさい、そして祈りなさい、また、子供たちを、あなたの友だちにしなさい。

子供たちの人生の最も幸福な時期が来て、彼らが心の中でイエスを愛し、バプテスマを受けることを望む時、誠実に彼らを扱いなさい。彼らが儀式にあずかる前に、神のために働くことを、人生における第一の目的にするつもりであるかどうかを尋ねなさい。それから、どのよう

に始めたらよいか話しなさい。最初のうちに教えることに非常に意義があるのである。神への最初の奉仕をどのようにするかを単純に教えなさい。することをできるだけわかりやすくしてやりなさい。クリスチャンの両親の忠告のもとで、主に自分をささげること、そのみ言葉の指示通りに行動するということが、どんなことであるかを説明しなさい。

忠実な努力の後、もしあなたの子供が改心とバプテスマの意味を理解しており、また、真実に改心していることを、あなたが得心するならば、バプテスマを受けさせなさい。しかしくり返して言うが、彼らの未経験な足を服従の細い道に導く忠実な羊飼いとなるために、あなた自身をまず準備しなさい。両親が子供たちに、愛と礼儀とクリスチャンとしてのけんそんさ、また、自己を全くキリストにささげることの正しい模範を与えるために、神が両親の心の中にお働きにならなければならない。あなたが、子供たちのバプテスマに同意した後、彼らが正しい道を歩み続けるように守るという特別な義務を感じることなしに、彼らのしたいようにさせておいて、もし、彼らが信仰と勇氣、また真理に対する興味を失ったら、それはあなた自身の責任なのである。

成人した男女のバプテスマ志願者は、年令の若い人々よりも自分の義務をよく理解すべきである。と言っても、教会の牧師にはこれらの魂のために果たさなければならない義務がある。

彼らには悪い癖や習慣がないだろうか。彼らと特別な集会を持つことが牧師の義務である。聖書研究をし、彼らと語り合い、共に祈り、彼らに対する主のご要求を、はっきり示しなさい。改心に関する聖書の教えを彼らに読んで聞かせなさい。改心の実が何であるか、彼らが神を愛する証拠が何かを示しなさい。真の改心とは、心も考えも目的も変わることを示しなさい。悪い習慣は捨てなければならぬ。悪口やしつとや不従順の罪は除かなければならぬ。品性の中のあらゆる悪に対して戦いをいどまなければならぬ。そうする時に信ずる者は「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」（マタイ七ノ七）というみ約束を、理解して自分のものとすることができる。

（6 T・九一 九九ページ）



## 第十五章 聖さん式

主の家の象徴は、単純であり、はっきりと理解されるものであり、それらが表す真理は、われわれにとって非常に深い意味のあるものである。（エバンジェリズム二七三ページ）

キリストは、二つの制度とその二大儀式の転換期に立っておられた。神のきずなき小羊であるキリストは、罪祭として、ご自分をささげようとしておられた。こうしてキリストは、四千年の間キリストの死をさし示してきた型と儀式の制度に終止符をうたれるのであった。弟子たちと過越の食事をされたとき、主は、過越節の代りに、主の大いなる犠牲の記念となる式をお定めになった。ユダヤ人の国民的祭典は永久に過ぎ去るのであった。そしてキリストがお定めになった式が、どの国どの時代においても弟子たちによって守られるのであった。

過越節は、イスラエルがエジプトの奴隷状態から救済された記念として定められた。毎年、子供たちがこの儀式の意味をたずねるときに、その歴史をくりかえして聞かせるようにと、神

は指示された。こうしてあのふしぎな救済がすべての人たちの心に生きつづけるのであった。聖さん式は、キリストの死の結果達成された大いなる救済を記念するために与えられたのであった。主が力と栄光のうちにふたたびおいでになるまで、この儀式は守られる。それは、われわれのためのキリストの大いなるみわざがわれわれの心のうちに生きつづけるための手段である。

キリストの模範は聖さん式における排他心を禁じている。公然たる罪がある場合には、その罪人を加えてはならないことは事実である。このことは聖霊によつてはつきり教えられている（コリント第一・五ノ一一参照）。しかしそれ以外には、だれも宣告をくだすべきではない。神は、このような式にだれを出席させるかを人が口にすることをおゆるしにならなかった。なぜなら、だれが心を読むことができるだろう。毒麦と麦の区別がだれにできるだろう。「だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである」。なぜなら「ふさわしくないまままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだを犯すのである。…主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによって自分にさばきを招くからである」（コリント第一・一一ノ二八、二七、二九）。

ふさわしくない人が出席しているからといって、聖さん式にあずからないようなことがあつ

てはならない。弟子たちはひとり残らず公然と参加し、そうすることによって、キリストを自分自身の救い主として受け入れているというあかしをたてるように求められている。

弟子たちといっしょにパンとぶどう酒にあずかることによって、キリストは、ご自分が彼らのあがない主となれることを彼らに契約された。主は彼らと新しい契約をされたが、その契約によって主を受け入れる者はみな神の子となり、キリストと共同の相続人となるのである。この契約によって、天がこの世と来世でお与えになることのできるあらゆる祝福が彼らのものであった。この契約書はキリストの血によって批准されるのであった。そしてこの聖さん式をとり行うことは、墮落した人類という大きな全体の一部として弟子たちひとりびとりのために個人的に払われた無限の犠牲をたえず彼らの目の前に示すことになった。

### しもべの中のしもべ

弟子たちが晩さんのへやにはいつて行った時、彼らの心は憤然とした気持ちで一ぱいだった。ユダはキリストのすぐ左側に割りこんだ。ヨハネは右側にいた。もし最高の位置というものがあるなら、ユダはそれを占めようと決心していたが、その位置はキリストの隣であるように思

われた。しかもユダは裏切り者であった。

不和の原因がほかにも起こっていた。食事の時には、しもべが客の足を洗うのが習慣だったので、この場合も足を洗う準備ができていた。足を洗うために水差しもたらいも手ぬぐいも用意されていた。ところがしもべがいなかったので、弟子たちがその役を果たす立場にあった。しかし弟子たちはそれぞれ誇りを傷つけられたという思いに負けて、だれもしもべの役割を果たすまいと決心していた。みんなは平然とした無関心さをよそおい、自分たちがすることによって、彼らは自分を低くすることをこばんだ。

弟子たちはお互いに仕えるために動こうとしなかった。イエスは彼らがどうするかを見るためにしばらく待っておられた。それから、天来の教師であられるイエスが、食卓から立ちあがられた。主は動作のじやまになる上着をぬぎ、タオルをとって腰にまかれた。弟子たちは、驚きと興味の念をもって、何事が起こるのかだまって見ていた。主は「それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた」（ヨハネ一三ノ五）。この行為が弟子たちの目を開いた。彼らの心は激しい恥ずかしさと不面目な思いに満たされた。彼らは無言の譴責を理解し、自分たちの姿をまったく新しい光のうちに見た。

このようにキリストは、弟子たちに対する愛をあらわされた。彼らの利己的な精神をあらわになって、主の心は悲しみに満たされたが、主は彼らの問題について議論されなかった。その代わりに、主は、彼らが決して忘れることのできない模範をお与えになった。弟子たちに対する主の愛は、簡単にさまたげられたり、消えたりしなかった。主は、「父がすべてのものを自分の手にお与えになったこと、また、自分は神から出てきて、神にかえろうとしていることを」わかっておられた(ヨハネ一三ノ三)。主はご自分の神性を十分に意識しておられた。しかし主は、王冠と王衣をぬいで、しもべの姿をとられたのであった。地上における主の最後の行為の一つは、しもべのしたくをして、しもべの役割を果たされることであった。

キリストは、ご自分が弟子たちの足を洗われたけれども、それは主の威厳をすこしもそこなうものではないということを彼らにわからせたいとお思いになった。「あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである」(ヨハネ一三ノ一三)。主は、無限にすぐれたおかたであられたが、この奉仕に恩恵と意義を与えられた。キリストほど高い地位にある者はだれもないのに、主は、身がかがめて最もいやしいつとめをされた。人の生まれつきの心に住みつき、自分自身に仕えることによってますます強くなる利己心のために、主の民が道をまちがえないようにキリストご自身が謙遜の模範を示されたのであ

る。主はこの大きな問題を人の責任にまかせておかれなかった。神と等しいおかたであるキリストご自身が、弟子たちに対してしもべとしてふるまわれたほど、主はこの問題を重視された。彼らが最高の地位を争っている間に、すべての人がひざまずく主、栄光の天使も使えることを名誉としている主が、ご自分を主と呼んでいるこれらの人たちの足を、ひざまずいて洗われた。主はご自分を裏切る者の足を洗われた。

いま、弟子たちの足を洗ってしまったと、主は、「わたしがあなたがたにしたとおり、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ」と言われた（ヨハネ一三ノ一五）。このことばによって、キリストはもてなしの慣習を命じられただけではなかった。旅のほこりを除くために客の足を洗うことよりもっと深い意味があった。キリストはここに一つの宗教的行事を制定しておられたのである。主の行為によって、この謙遜式は、聖別された儀式となった。それは、謙遜と奉仕についてのキリストの教訓をいつも心におぼえているように、弟子たちによつて守られるのであった。

## 準備の儀式

この儀式は、聖さん式のためにキリストがお定めになった準備である。高慢、不和、権力争いが宿っているあいだは、心はキリストとのまじわりにはいることができない。われわれは、キリストのからだと血との聖さんを受ける用意ができていない。そこでイエスは、ご自分の謙遜を記念するものを最初を守るようにお定めになったのである。

神の子らがこの儀式にあずかる時、彼らは生命と栄光の主のみことばを思い出さねばならない。「わたしがあなたがたにしたことがわかるか。あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである。しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。わたしがあなたがたにしたとおり、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。よくよくあなたがたに言うておく。僕はその主人にまさるものではなく、つかわされた者はつかわした者にまさるものではない。もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである」(ヨハネ一三ノ一二―一七)。

人のうちには、自分を兄弟よりも高く評価し、自我のために働き、最高の地位を求める傾向がある。そしてこのことから、しばしば悪い憶測と冷酷な精神が生じる。聖さん式に先立つ洗足式は、こうした誤解を一掃し、人を利己心から引き離し、高慢というたけうまからおろして、

兄弟に仕えるへりくだった心を与えるのである。

天の聖なる監視者であられる聖霊は、この式の間、臨在されて、これを魂をさぐる時、罪を自覚する時、罪がゆるされたというありがたい確証の時としてくださる。恵みに満ちておられるキリストはそこにおられて、利己的な水路を流れていた心の思いの流れを変えてくださる。

聖霊は、主の模範に従う者たちの感受性を鋭くしてくださる。われわれのための救い主の屈辱を思い出すとき、思いは思いとつながり、記憶の鎖、すなわち、神の大いなる恵みと地上の友の好意とやさしさの記憶が呼び起こされる。

この儀式が正しく守られるときにはいつでも、神の子らは、互いに助け祝福するために聖なる関係にはいる。彼らは一生を無我の奉仕にささげることと誓うのである。しかもそれは、お互いのためだけではない。彼らの働きの分野は主の働きの分野と同じように広いのである。世はわれわれの奉仕を必要としている人々で満ちている。貧しい人たち、無力な人たち、無知な人たちが四方にいる。二階の広間でキリストとまじわった人たちは、キリストと同じように奉仕するために出て行くのである。

すべての者から仕えられるおかたであつたイエスが、すべての者のしもべとなられるためにこられた。そして主はすべての者にお仕えになったので、またすべての者から仕えられ、あが



められるのである。だから、主の聖なるご性質にあずかり、魂があがなわれるのを見るよろこびに、主とともにあずかりたい者は、無我の奉仕という主の模範に従わねばならない。

### キリストの再臨を思い出させるもの

彼らが食卓のまわりに集まると、主は、心を動かされるような悲しい口調で言われた。「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた。あなたがたに言って置くが、神の国で過越が成就する時までには、わたしは二度と、この過越の食事をすることはしない」。そして杯を取り、感謝して言われた、「これを取って、互に分けて飲め。あなたがたに言っておくが、今からのち神の国が来るまでは、わたしはぶどうの実から造ったものを、いっさい飲まない」。(ルカ二二ノ一五―一八)。

しかし聖さん式は悲しみの時となるのではなかった。これはその目的ではなかった。主の弟子たちは、主の食卓に集まるとき、自分の欠点を思い出して、嘆き悲しむのではない。彼らは、過去の信仰経験が向上していようと低下していようと、それに思いを集中するのではない。兄弟たちとの間の不和を思い出すのではない。すべてこうしたことは洗足式に含まれていたので

ある。自分を吟味することや、罪を告白することや、不和を解消することはすべてもうすんだのである。

いまは彼らはキリストと会うために来ているのである。彼らは、十字架の影ではなくて、救いの光の中に立っている。彼らは、義なる太陽キリストの輝かしい光に向かって魂を開くのである。彼らはキリストのとうとい血潮によつてきよめられた心をもち、目に見えなくてもキリストの臨在を十分に意識して、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる」と言われる主のみことばを聞くのである（ヨハネ一四ノ二七）。

キリストの裂かれたからだと流された血潮を象徴するパンとぶどう酒をいただくときに、われわれは、想像を通して、あの二階座敷の聖さんの場面に加わるのである。われわれは、世の罪を負われたキリストの苦悩によつて神聖なものとされたあの園を通つて行くような気がする。神に対するわれわれの和解が達成されたあの戦いが目に見える。キリストはわれわれの中に十字架につけられた姿で示される。

十字架につけられたあがない主をみつめるときに、われわれは、天の大君によつて払われた犠牲の大きさと意味とをもつと十分に理解するようになる。救いの計画はわれわれの前に輝き、

カルバリーの思いはわれわれの心に生き生きとした聖なる感情をよびさます。神と小羊への賛美がわれわれの心とくちびるに宿る。なぜならカルバリーの光景をいつも生き生きと記憶している魂のうちには、高慢と自己崇拜の思いは栄えることができないからである。

信仰によつて主の大きいなる犠牲を瞑想するとき、魂はキリストの霊的生命に同化する。その魂は聖さん式のたびに霊的な力を受ける。この式は、信者をキリストにむすびつけ、さらに天父とむすびつける生きたつながりとなる。それは、特別な意味において、神とたよっている人間との間のつながりとなる。

聖さん式はキリストの再臨をさし示している。それはこの望みを弟子たちの心に生き生きと保つためであつた。キリストの死を記念するために共に集まつたときにはいつでも、彼らは、主が「杯を取り、感謝して彼らに与え……、みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。あなたがたに言っておく。

わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日まで、わたしは今後決して、ぶどうの実から造つたものを飲むことをしない』」と言われたあの時のことを語り合うのであつた（マタイ二六ノ二七 二九）。苦難のうちにあるとき、彼らは主の再臨という望みに慰めを見いだした。「だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むことに、それによつて、主がこら

れる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」との思いは、彼らにとって口に言い表わせないほどとういのであった（コリント第一・一一ノ二六）。

こうしたことは、決して忘れてならない事からである。迫る力をもったイエスの愛が、われわれの記憶の中にたえず新たにされなければならない。キリストは、この儀式が、われわれのためにあらわされた神の愛についてわれわれの感覚に語りかけるように、これをお定めになった。キリストによる以外には、われわれの魂と神とを結びつけるものはない。兄弟と兄弟との間の一致と愛は、イエスの愛によって固められ、永遠なものとされなければならない。キリストの死より以下のものでは、主の愛をわれわれのために効力のあるものとすることができない。われわれが主の再臨をよろこびをもって期待できるのは、キリストが死んでくださったからにほかならない。キリストの犠牲はわれわれの望みの中心である。この上に、われわれの信仰をすえなければならぬ。

（各時代の希望第三卷一一五 一四二ページ）

# 教会への勧告

## 上 卷

第一編 信 仰  
第二編 教 会

N D C 194 / 400 P / 22 c m

---

1977年2月20日 初版発行

著 者	エレン・ジ - ・ホワイト
発 行 者	広 田 実
印刷・製本	福 音 社

---

〒 2 4 1 横浜市旭区上川井町 1 9 6 6

発 行 所 福 音 社

振替 横浜 599番

---

転載複製を禁ず 製本所・関山製本所

PRINTED IN JAPAN